
ザ・タイプパニック

ATURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・タイプパニック

【Nコード】

N3472E

【作者名】

ATURA

【あらすじ】

学校の美少女四人組のパシリ生活をしていた狼。ところがほんの興味本位でひらいた黒魔術によって狼は二人になってしかも片方は女の子になってしまった！？性転換？というか分身？みたいな状態な狼と狼 女の子 の学校生活はマジパニック！

タイプ1「うん、日常」(前書き)

なんだか連載している小説が四つになったATURAです。大丈夫、全部更新して見せるから！

ちなみに性転換なのか分身なのかまじで微妙な線です。
あと主人公二人の絡みはありません。

タイプ1「うん、日常」

近所のかわいい幼馴染から「大好き」って言われたい。

メガネっ娘から「バカね・・・でも好き」って言われたい。

体育会系の女の子から「す、好きだよ・・・」って言われたい。

天然の娘から「ずっと！ずっと前から好きでした！」って言われたい。

生意気な年下から「お兄ちゃん・・・好き」って言われたい。

癒し系のお姉さんから「ふふ・・・好きよ」って言われたい。

ツンデレのお嬢様から「ば、バカね！・・・す、好きじゃないわよ！・・・嘘だけど」って言われたい。

引っ込み思案なかわいい娘から「愛して欲しいの」って言われたい。

学校のアイドルから「好きです！付き合ってください！」って言われたい。

まあ、つまりモテたい、でも、モテるわけない。

なぜなら俺には「悪魔」のような親友達がいるからだ。

質問しよう。

5人の高校生がいます。

一人目は背の高いスタイル抜群の男装が趣味の自称「不良狐」とかいうかつこいい奴。

二人目は無口でクールでワイルドの三拍子揃った低血圧な無関心ヤローです。

三人目はメガネをかけた短髪のうざいぐらい頭の良い頭脳派な奴で

す。

四人目はジャニーズ系のかawaii顔のアイドルみたいな奴です。
五人目は普通の体格に平凡な容姿の地味な奴です。

あなたなら誰と付き合いたい？

え？五人目の男以外？

……ですよね〜、

察しの良い人ならわかるでしょう、五人目は僕です。

更に察しの良い人ならわかるでしょう、

後の四人はみんな『女の子』です。

泣けますよ、何が悲しくて彼女を女に盗られてしまうのか……。

「ごめんね、本当はあなたと一緒にいるあの子が本命なの」

「いや、あんたじゃなくてこの人だから」

「やっぱあなたよりこっちの人のほうが良い」

「他に好きな人ができちゃった、だからバイバイ」

ハハハ・・・アハハハ、ハハハハハハハ、

笑えねえよ畜生、なんたつて俺は女より魅力がないんだよ、
なあ神様よう、このモテない男に慈悲をかけてくれよ、
ああ、彼女が欲しい、この「悪魔」達から解放されたい。

誰か助けて……。

朝の六時、

高校へ行く時間だ。

ああ、憂鬱だ、憂鬱すぎて鬱になりそうだ。

あゝあ、みんな死ねば良いのに。

いや、それはよくないな、前言撤回。

あゝあ、俺モテモテになればいいのに。

うん、これだ、これがいいな。

かみだしん
守多狼

名前だけは立派だが地味な男だ。

いや、彼にもチャンスがあれば人気者になれるだろう、

だが、チャンスがない、むしろピンチが多い、

そう、彼は不運の星に生まれた運の悪すぎる男なのだ。

一人で朝食を取る、

両親は海外を飛び回る企業家なので家には滅多に帰ってこない。

あと、妹がいるが不良なので家には帰ってこない。

つまり一人での生活……。

寂しいぜ、心の中で呟く狼、

そしてのんびりと身支度をしながら登校の用意をする。

いつてきますを言う相手はいない、だから無言で家を出る。

だがおはようを言う相手はいた。

「……今日も寝てるよ」

家の門の壁に寄りかかりながら寝る学生服を着た親友一人目、
体操座りで熟睡している。

まあ少し朝出るのが早い俺に合わせているのだろう。

そこは律儀で良いんだけどな、

幼馴染の「あかしろ ようじ赤城要弧」

小さい頃から男勝りだったとはいえ中学生の頃から男装の趣味が目覚め、

オナベになった。

正直俺よりかつこいい、過去に何度女を盗られたか……。だが寝ている顔はいつも見るガンとばす顔よりマシだ。

そう思っている狼、

だが要弧の寝顔はマシという表現どころではない、

女の子のかわいさがもろに出ているあどけない寝顔なのに、狼は鈍い故にその魅力に気づかなかった。

「おい、要弧、起きろよ」

「・・・ファ・・・狼か？・・・よう」

眠そうに体を起こす要弧、

「かつたりーな、学校休もうかな」

「休めば？」

「じ、じゃ、狼も一緒に」

「嫌だ」

即答する狼、そしてうつむいた要弧は何も言わず狼の頭を掴んで塀の壁に叩き付けた。

「バカいつてんじゃねえ、学校休むんなら一人で休んでろ！」

いや、休むって言ったのお前だろ

心の中でツツコミをする狼、要弧はさっさと先へ行ってしまう。

学校の校門

「要弧~~~~!!おはよ~~~~!!」

要弧と狼が門をくぐろうとした時、後ろから中性的な顔立ちの子が走ってよってきた。

佐崎雫ささきしずく

要弧と狼の友達である。

「あれ〜？狼もいたんだ〜」

「・・・」

「……じ、狼いないみたいだね」

「……」

「狼のアホ！バカ！弱虫！根暗！性悪！」

「……」

雫の言葉をことごとく無視をして先に進む狼、

「……要弧、狼を殺して」

「おや？おはよう雫、今日も良い天気だね」

要弧の殺気を背中に感じながら爽やかに返事をする狼、

「最低、女の子に脅されるなんて、かつこわるい」

にやにやしながら言う雫に狼は心底怒りを感じていた。

ただでさえ中性的な顔立ちで男とも女とも取れる顔なのだ、

ジャニーズのタレントみたいな顔で馬鹿にされるとイケメンな男から馬鹿にされている気がして怒りは倍増する。

女の子だと思えばかわいいのに男にしか見えなくなった狼にとって雫は最も嫌いなタイプの女の子だった。

教室へ入る、

すると狼の席に二人の女子が陣取っていた。

眼鏡をかけたほうは「鳥居奈絵美^{とりい なえみ}」

しかめ面で上の空の様子の奴は「丘臣^{おかおみ}」

どちらも要弧の友達だ。

「よう、奈絵美、臣」

「おはよう」

「……オス」

「おっはよー！」

「……どけ」

狼が奈絵美と臣にそう言うと、二人はそんな事も気にせず要弧達と話し始めた。

「昨日の心霊体験特集『目撃者がいる』見た？」

「見た見た！すっごく怖かった」

「・・・でも、おもしろい」

「そうだな、でも絶対やらせだぜアレは」

「・・・お願いです、座らせてください」

「写真に写っていたあのドクロ、生々しかったでしょ」

「だよねだよね！あれはきつと本物だよ！」

「・・・CGだと思う」

「ああ？そんなもんあったか？」

「・・・あの〜」

「のど渴いたな、サイダー欲しい」

「わたしイチゴミルク」

「・・・緑茶」

「俺はコーラな」

「・・・はい？オレ？」

全員からの言ってこいというアイコンタクトにしぶしぶパシリを受ける狼、

自動販売機の前で言われたものを買っていると一人の少女が近づいてきた。

「狼、またパシリ？」

「だまれオカマ」

すすきしん
鈴木慎

顔のかわいい女装が趣味の狼の友達、

意外と要弧と気が合うため仲は更に深まる。

「朝から機嫌悪いねえ、まあわかる気もするけど」

「じゃあ助けてくれ」

「無理無理、全校の人気アイドルグループの下っ端である君をどうすれば助けられるんだい？」

「何がアイドルグループだ」

「ファンクラブが男女関係なく作られているんだ、これはもう芸能人だよ」

「うぜえ、俺はこんなに惨めなのにあいつらは世間で言うアイドル
つか」

「まあルックスがね、狼も要弧達といなきやまあまあだよ？」

「引越してえ、あいつらの存在が知られていない所にいきてえ」

「ヒステリックだな」

「もう、いやだぜこんな生活」

「でもまあ、あれだよ、アイドルの一番近くにいろの君だけだよ、
登校もアイドルと一緒にでさ、親衛隊の奴らにとっちゃ嫉ましいぐら
いだよ」

「・・・でもよう、今までにファンクラブの奴にこれを要弧に渡し
てとか、いつもご苦労様ですとか言われるんだけど？嫉まれてはい
ないみたいだぞ？」

「じゃあ、周りからはマネージャーにしか見えてないんだよ」

「さらにとひどい事言うなお前」

「にしてもいいの？ボケツとしてると遅いつて怒られるよ？」

「・・・しまった」

「おせえ、何してた？」

怒りの形相で要弧は狼を睨んでいた。

「申し訳ございません、許してください」

怒っていないければ強気な態度でいられるが、ここでそんな事をした
ら殺される。

「本当ノロイわね、もつとさつさと行動しなよ」

うぜえ、まじうぜえ！！

「全く、こんなパシリもまともにできないのか？」

「るせえよ、いいから俺の席返せ！」

「・・・役立たず」

うおおおお！！言いたい放題言いやがって！！

「今度メシおこれよ、そうすれば許す」

ちくしょう、何だってこんな不良に絡まれたような学校生活を送らねばならないんだ？おかしいだろ！しかも相手は女かよ！男だつたらぶん殴れるのに！！

「返事は？」

「はい」

もう、俺だめだ。

帰り道、既にクタクタの狼は重い足を引きずりながら家に帰った。ドアを開けて家に入る。

「お、兄貴お帰り」

「・・・た、ただい・・・ま」

「また要弧さんに使われたの？だらしないな」
妹の栗鼠^{りす}が笑いながら言う。

「お前はどんなんだよ」

「しっかりしてるぜ？学校ズルしてダチとゲーセンいった」
どこがしっかりしてるんだよ

心の中で突っ込む狼だった。

タイプ1「うん、日常」(後書き)

いや、パシリってマジきついよbYじん

タイプ2「あれ？二人？」

妹の栗鼠のために夕食を作る狼、

そして風呂に入って自分の部屋に入る。

「・・・ハア」

唯一気の許せる場所、簡素な自分の部屋だが落ち着ける。

狼はイスに座って目の前のパソコンの電源を入れた。

最近ハマっているのは不思議な体験をした話の載っているホームペ
ージだ。

怖い話ではなくもつとメルヘンに近い話だ。

人生のどん底から這い上がって幸せになった話や、
九死に一生を得た話など、感動できる話ばかりだ。

どうやら狼はこれを読んでストレスを発散しているようだ。

「いいなあ、俺もこんな幸せな人生を歩みたいぜ」

いつものように読んでいると、ある話に狼は目が止まった。

『少女になったお話』

興味を持つて読んでみると、それはある日突然少年が少女になつて
しまったお話で、

その後幸せになるという良くあるパターンだった。

だが面白いのは、いじめられっこだった少年が少女になっただけで
周りの人間が優しくなってくれたのである。

最後の台詞は『自分が変われば、周りも変わる』というなんと無
茶苦茶なものだ。

性別まで変えねば周りは変わらないのか？
はなは

甚だおかしいこの物語に一人感銘をうける狼。

どうやら彼は普通の人より大分ピントがズレている様だ。

「そうか！俺も女になればこの最悪な状態から抜け出せるのか！？」
究極な結論に辿りついた狼、性転換でもする気なのだろうか？

「よし！まずはパソコンで検索だな！」

全く、一体なにに熱中しているのやら・・・。

だが、この行動が大きく彼の人生を変えた。

三時間、女になる方法で検索して真剣に探している狼、

だが出てくるのは性転換かニューハーフについてのものばかりだ。
だが、ある面白いページを見つけた。

『奇跡の黒魔術』

なんと胡散臭く怪しいページだ。

そこになると女になる方法が記されていた。

『汝、性を変えたくば次の術を使いたまえ、

一つ、横になれ。

二つ、魔方阵を頭に思い描け。

三つ、このページにアクセスしろ。

以上」

絶対にヤラセだ、というか嘘だ。

なんてアバウトな説明でしかも嘘っぽいんだ。

こんなので性別変わるのなら性転換の手術など誰もしないだろう！
だがそんな常識も、今の狼には気づけなかった。

「よし！横になって魔方阵を頭に描いた！後はこのページにアクセス！」

意気揚々とページにアクセスした狼、

「兄貴、朝だぜ？起きろよ」

ふと栗鼠の声が聞こえた。

狼はすぐに起きる、

どうやらいつの間にかベッドで寝ていたようだ、
確か何かしていたような気がするのだが？

昨日は何をしていた？

「……思い出せない。」

とりあえず今日は休日の朝だ。

狼が妹の為に朝食を作ろうと部屋を出ようとしたときだった。

「ちよつとちよつと」

誰かに呼び止められる、振り返ると、

自分がいた。

「……どなたですか？」

「狼です」

「……俺は誰だ？」

「恐らく狼です」

「……ここはどこだ？」

「狼の、もとい俺の部屋です」

「……なぜ俺の声は甲高い？」

「それはあなたが女性だからです」

「……」

「……」

「「だあああああああ！！！！！！！！！！」」

叫ぶ二人、どうやら昨日のアクセスがこんな事態を招いてしまった。

「うるせえよ！静かにしろバカ兄貴！」

下から栗鼠が怒鳴っている。

だがそんな事を気にしている場合ではない、

「なぜだ？なぜ俺が二人！？」

「それはこっちが聞きたい！しかも女だぞ俺！？」

「どうなってる！？どうなってる？」

「・・・とりあえず、落ち着こう」

『おう、そうしたほうがええで』

いきなりの第三者の声、

二人が同時に声のした上を見ると、死神が浮いていた。

「「だあああああああ！！！！！！！！！！」」

本日二度目の叫び声、

「うるせえよ兄貴！！」

また栗鼠が声を荒げる、だが骸骨の大釜をもった黒いローブのいかにも死神ですといった容姿の謎の生物が浮いているのだ、驚くなという方が無茶だ。

『あんたらさつきからうるさいなあ、もつと静かにせえや』

「なんで死神が大阪弁なんだよ！？」

「しかも怪しい大阪弁だな！？エセ大阪弁だぞ！？」

『ドウトウウォーリー「心配ない」』

「いきなり英語！？」

「つーかなぜここに死神がいる！？」

とりあえず落ち着いて、

『まず、オレは死神とちゃう、悪魔や』

「そっから違うのかよ」

「ややこしいなオイ」

『それで、あんたらがこうなってしもたのは、オレを呼び出したか

「らや」

「「いや、呼んでないから」」

『まあ聞け、ええか？昨日アクセスしたやろ？』

「どこに？」

『黒魔術のページにや』

「うん、アクセスした」

『あれはな、10億分の一の確立でひらくページなんや』

「物凄い確立だな」

『まあようするに、あんたらはそのページをひらいたさかい、黒魔術を発動させてオレを呼んだわけや』

「だが、俺の願いは女になる事だけで、分身を作るつもりはなかったが？」

『知らんのか？この方法の副作用は「自分が増える」やで？』

「「知らん」」

『ほな、もうゆったからな』

「つーか、これからどうすれば良い？」

『知らんわ』

「じゃあ元に戻してくれ」

『ほなもう一回ページひらいてーな』

「・・・は？」

『黒魔術は黒魔術でしか消せへんよ？』

「・・・10億分の一の確立でひらくページをまたひらけと？」

『せや』

「ふざけんな」

「そんなのできるかボケ！」

『そりやそれでしゃーない、あきらめえ』

「・・・なあ、マジでどうすれば良い」

「お願いです、教えてください」

とうとう頭を下げ始める二人、

『簡単や、今の生活に馴染めばええやん』

悪魔は気楽にそう言った。

『ええか？オレはあんたらのしもべやからてつどつたる』

「本当か！」

「なんか大阪弁はへんだが頼れそうだな」

『当たり前や！任しとき！』

「で、どうすればいい？」

『あんたらのとこの親は今おらへんやろ？なら妹はんには洗いざらい話して味方になってもらえばええねん』

「なるほど」

「確かに味方は作るべきだな、よし」

早速階段を下りる三人、

そしてまずは狼男バージョンが栗鼠のところへ行った。

「お、おはよう」

「なに？さっきまで叫んでいたのに？妙に落ち着いちゃって」

「なあ、栗鼠」

「なに？どうでもいいから朝ごはん作って」

「・・・それより、大事な話があるんだ」

「なに？どうしたの？」

「・・・実はな、いろいろあつてな、うん、どう言えばいいのか」

「・・・兄貴、彼女できたのか？」

「そんないいニュースじゃない、悪い知らせだ」

「ふん、あのバカ親が事故で死んだの？」

「それも違う、俺についてだ」

「・・・まさか、兄貴・・・病気？」

「い、いや、そうでない・・・と思う」

「嘘だろ・・・どういうことだよ！」

「はい？いえ、なに？何怒ってんの？」

いきなり声を上げる栗鼠、そしてビビる狼、

「病気だったなんて、早く言つてよ！妹に黙ってるなんて最低だよ！」

「違う違う！落ち着け！病気じゃないって！」

「な～んだ、じゃ何なの？もしかして兄貴が二人になったとか？」

「じつはそうなんだ」

真面目に真剣な顔で答える狼、

一時停止する妹、

それを見守る狼女バージョンと悪魔。

「・・・ふ～、兄貴、あんた病気だよ」

「俺も最初そう思ったが、現にいるんだ」

「はいはい、とりあえず精神科に電話だな、要弧さん達のいじめがこうなっちゃうなんて、迂闊だったわ、少しは止めるべきだったよ
うね」

「まあ待て、そして携帯を置け」

本当に電話しようとした妹を止める狼、

「とりあえず、見てもらえばわかる」

そう言つて狼女バージョンの方を見た。

「い、いくしかないな」

『おう、ばしつときめや！』

そして出てくる狼女バージョン、と悪魔、

固まる妹、下を向く兄貴。

「成る程、理解はできた」

栗鼠は努めて冷静にそう言った。

「いや、本当にすまない、俺の運が悪すぎて」

『なにゆーとんねん！メツチャ運ええやん！』

勇気を読まずに突っ込む悪魔、

「黙れ骸骨^{がいこつ}」

一言で黙らせる栗鼠。

「で、問題は、増えちゃった兄貴、もといこの姉貴を何とかする」

栗鼠はそう言つて狼女バージョンを見た。

「にしても本当に兄貴の分身？似ても似つかないほどかわいいんだけど？」

「うん、それ俺も思つた」

栗鼠と狼男バージョンが女バージョンを見て言う。

「おいおい、そんなわけないだろ？どうせ俺と似て地味なんだよ」

「まあそれは置いといて、まずは名前ね」

「そうか、このままだと狼が二人いる事になるからな」

「で？女になった俺の名前を変えるのか？」

「そのほうがいいわね、じゃあ・・・狼の反対で羊はどう？」

「ひつじ？・・・名前としてはおかしくないか？」

「私なんてりすよ、ひつじでいいでしょ」

「せめて読み方変えようぜ？狼でじんだから、羊でひじりって読んだらどうだ？」

「うん、それいいわね、じゃ、決定！」

『名字はどないすんねん？』

「そうね、従兄弟^{ひじり}って事にして同じ姓でいいでしょ」

「成る程、じゃ羊は従兄弟^{ひじり}でここに居候しているって設定だな」

「よし、わかった・・・親父とお袋にはなんて？」

『それなら大丈夫や、オレが記憶の偽造をしといたる』

「さすが骸骨、やるわね」

『お嬢ちゃんには負けるわ』

何気に意気投合する二人、
そしてそれを見て心配になる狼と羊だった。

タイプ3「危機到来！」

栗鼠は朝ごはんを食べるとさっさと遊びに行ってしまった。
しかしよく考えてみれば昨日帰ってきたのは珍しい事だった。
いつもなら二週間おきにしか帰ってこず、帰ってきたと思えば『お金頂戴』といって無駄にある親の貯金をもっていくのだ。

「さて、今日は一日暇だったよな？」

「おう、確かそのはずだ」

『そうなんか、じゃワイ外散歩してくるさかい』

「骸骨が外歩いて良いのか？」

羊が怪しいものを見るような目で悪魔を見る。

『心配ないて、姿消すさかい、ほな、なかよーな』

壁をすり抜けていってしまう悪魔、

「本当、変な奴だな」

狼が溜め息をついて言った。

「・・・なあ」

皿洗いを一緒にしている羊が狼に話しかけた。

「・・・これから、俺はどうやって生きれば良い？」

「は？・・・いや、別に普通に生きれば？」

狼は軽く返す。

「さてよ、じんは男だから今まで通りでいいが、オレは女になったんだぞ？」

「あゝ、それは確かに大変だな」

「他人事みたいだな、オレの事なのに」

「別に他人事じゃねえよ、本当に大変だっと思ってるって」

「ほう？・・・例えばどこが大変なんだ？」

「ええっ！？・・・そりゃあ、身だしなみを気にするのが大変だし」

「それぐらいやらない女だっているだろ？」

「あ！あとトイレの時は困るな、周りが女子だと気まずいだろ」

「女子トイレは全部個室だぞ？隔離されているだろうが」

「そうか・・・あ！ほら！・・・ないな」

「なんだその薄いリアクションは？」

「だってよく考えたら女になってもあんまかわんねんじゃねくの？」

「・・・ふう、オレがモテない理由が少しわかったよ」

「な、なんだよ唐突に？」

「いいか？女心がわからないやつに惚れる女がいると思うか？」

「・・・知らん」

「ダメだな、手の施しようがない」

「ひどいな、それより、結局、女になって大変な事ってなんだよ？」

「・・・女と結婚できない」

羊がそう言つと、狼は『そうか！』という派手なりアクションをとった。

しかも思い余つて皿を落とす、そしてあたかも時が止まったかのような空気、

口をあけて顔が黒くなった狼に羊は『真剣に聞け』とだけ言った。

「・・・女つて、すげえ大変だな」

「結婚できないって言った瞬間自分の考えをあつさり捨てるな貴様」

「だって、女と結婚できないって、つまり女の子と付き合えない、付き合えないって事はモテない、モテないってことは・・・それは人生の敗北」

「それは男の場合だろ？俺が言いたいのは、精神が男なのに体が女になつてしまったからこそ、もしかすると男と付き合う事になるかもしれないだろ？それを困ってるんだよ」

「・・・なに？」

「あ？いや、だから、中身は男のオレが外見が女になってしまった故に、男と結婚するかもしれないのが嫌なんだよ」

「・・・それって間接的にオレが男と付き合ってるって事になるよな？」

「うん・・・まあ、そうだな」

狼がまた皿を落とす。

「お前これで二枚目だぞ？割った分買いに行けよ」

羊が何か言っているが、狼には聞こえなかった。

「おゝい、どうした？」

狼はこの上ない衝撃を受けて、固まっていた。

「我ながら、情けない」

羊が固まった狼を自分のベッドに寝かせながら言った。

「ったく、何でオレが自分を運ばなきゃいけないーんだよ？」

そう言いつつも、狼を寝かせると、羊は洗濯物をしに下へ降りた。ふと、途中で壁にかけてある鏡をみる。

「・・・え？」

たしかにそこにある顔は、美しい顔だった。自分の顔とは思えない、まあ自分の顔ではないのだろうか、

「にしても、オレだけ女って、不公平だな」

鏡を見て文句を言う羊、だがすぐに洗濯物がある事を思い出し、下

へ降りた。

午後12時、その時間になって、羊はあることを思い出した。

「・・・たしか、ようこ達に飯をおごるんじゃ？」

血の気が引いていく、

「しまった！じんをおこさねえと！」

掃除中だった為、掃除機を持っていた羊だが、要弧の恐ろしさを知っているため掃除機を投げ捨て二階へ駆け上がった。

「おい！じん起きろ！」

「はい！起きてます先生！」

完全に寝ぼけている狼、だが意識はあるようだ。

「今日はようこ達に飯をおごる日だったろ！！」

「・・・ああああああ！！！！」

狼も青い顔をしてベッドから飛び出る。

「ようこはまだ来てないよな！？」

「おあ、まだ来ては」

「ピンポーン」

きたああああああ！！！！！！！！

心の中で叫ぶ二人、

「仕方ない、じん！お前は早く用意しろ！ようこはオレが何とかする！」

「わかった！頼んだぜひじり！」

さすが元一心団体、

ナイスなコンビネーションで自分の危機を脱しようとする。

「おい、じん？」

要弧が玄関で狼の名前を呼ぶ。

すると、ドアが空いた。

「遅いぞ、早くして・・・え？」

「あ、こ、こんにちわ」

羊が愛想笑いをする。

「・・・どなた・・・ですか？」

「はい、私はじんの従兄弟のひじりです、はじめまして」

精一杯の笑顔をする羊、すると、要弧はなんだか顔が赤くなっている、

それと同時に、なにか悲しそうな目をした。

「・・・え？ど、どどどどうかさされましたか？」

殺されるのではと怯えはじめる羊、だが要弧はすぐに笑顔になった。

「いえいえ！はじめまして、赤城ようこです、じんの友達です」

笑顔になった要弧、正直狼はそれを見たことがなかった、そして人格は狼なのだから、羊も見ることがない、だからそれを初めて見た羊は、かわいいと思った。

ようこにも、こんなにかわいいところがあったんだな

正直かわいい場面ならお前が常日頃要弧と接している時いくらでもあったよこの鈍感ヤローというツツコミがあるものだが、無論、本人は知る由もない。

「よし！サンキューひじり！」

後ろから遅れながら狼がやってきた。

よし！これでオレは開放される、よかった

と心の中で独り言をする羊、

だが、現実そんなに甘くなかった。

「え？どうせならひじりも来なよ」

要弧が羊にそう言う。

そして固まる二人、

「え！？いや？アハハ？なに？」

「え？いや、だから、一緒にご飯だべようよ」

要弧が普通に誘う、だが羊には『来い』と言っているように聞こえた。

「ちょ！ちょ、ちょちょ、ちよつと待て」

「なんだじん？」

あれ？なんか口調変えてませんかようこさん？

そう思いつつ、狼は言葉を続けた。

「じ、じつは、ひじりはオレの従兄弟なんだ」

「ああ、さつき聞いた」

「き、聞いたんなら察しろよ」

「何を？」

「え？・・・いや、その？・・・い、従兄弟と飯食うなんて変じゃないか！」

「え？まあ、そうですね？」

「いや、変じゃないだろ、それに一緒に食べないなら一緒に住んでご飯どうしてるんだよあんたら」

「「あ」」

「じゃ、決定、一人増えるからって困るなよ、情けないぜじん」

一人勝手に決めてしまった要弧、

そして『そうじゃねえんだよ！』と心の中で叫ぶ狼と羊だった。

「うつそ〜！こんなじんに美少女従兄弟がいたの〜！？」

雫が何気に狼をけなしながら羊を見て驚く。

「・・・・・・・・」

無反応の狼、それもそうだ、ただでさえ羊がついて来てしまったのと、何気に指定された店がお高いイタリア料理店なのだから。目が白くなっている。

「さ！今日はじんの奢りだから一番高いの選ぼうよ！」

雫がノリノリでふざける、

「ひじりは前はどこに住んでいたの？」

眼鏡の奈絵美が質問をしてきた。

ショートカットで今日はミニスカートをはいている。

いつもはあまり話さない、よく話すのは勉強のときだ、分からない部分を聞けばいやみを入れながらではあるが事細かく教えてくれる。

「え！？・・・ふ、フランスです」

適当に先日親が手紙を送ってきた時の内容を思い出してフランスで
仕事かなのを思い出し答えた羊。

「ほう、だったらフランス語が話せるのかい？」

「え？いや！あ、あの、じつは、に、日本人専用の学校でしたので、
フランス語は話せません」

「そうなのか、残念だな、フランス語なら私も知っていたからフラ
ンス語で会話をしたいと思っていたのに」

どれだけ勤勉なんだよあんたは

「・・・動物は・・・好き？」

今度は臣が話しかけてきた。

無口な性格ではあるが根暗ではない、

その証拠にスポーツがだいの得意である。

まあ男で例えるならクールといったかんじだ。

だが学校の男子の間では「ミステリアス美女」だのなんなので結構
人気がある。

服装もラフでジーンズにシャツを着ている。

まあ常日頃から無口なのだから話すことはない、
だが良くわからないがよく一緒に委員会をやる。

それでよく顔をあわせるがなかなか会話はしない。

正直ミステリアスなのは認める・・・。

「ど、動物で好きなのは、小さい小動物とかが」

「カメレオン？」

「ええ！？いや、爬虫類はちょっと・・・かわいいのが好きです」
必死に女の子っぽく振舞う羊、

さすがにここまでぶりっ子をしていると自分で自分が気持ち悪く感じられる。

だが、ここで変に目を付けられたくない、普通の人として生活しよう、そう羊は決めていた。

「・・・おいじん」

「ん？どうしたようこ？」

要弧が羊が雫たちと話しているうちに狼のほうへ話しかけた。

「お前に従兄弟っていたのか？」

「うん！・・・い、いたよ」

「何だその変な返事は？まあいい、だが従兄弟を見るのは初めてだぞ？幼馴染なのに」

「ああ、ああ、ああ！あれだ、フランスにいたからさひじりは、それで今回どうしても日本に来たいって言って、まあ来たわけよ」

「なんかさつきからお前変だぞ？・・・だが、事情はわかった、つまり、お前は昨日からひじりと一つ屋根の下で生活しているわけだな」

まあ、本当のこと言うといひじりは俺だから生まれた時から一緒なんだがな

「まあ、お前に限ってそんな事はないと思うが」

「ん？・・・なんだ？」

要弧が狼を睨みながら言った、

「夜中にひじりの叫び声が聞こえたらお前を真っ先に殺す」

いや、まあ、本当に従兄弟という関係でそんな事態になったら殺されても仕方がないが、アイツはオレだぞ？・・・いや、わかるわけ

ないか・

「バゝ力、変なことしねえよ、気にしすぎだ」

「わかった、お前の言葉、信じてやるう」

要弧がそう言うと、少し笑った。

安心したような笑みだった、かわいいその笑顔を、

ヤベエ！悪魔の笑みだよ！？オレを殺している場面でも想像して
るのか！？

この鈍感^{ばか}は勘違いしていた。

タイプ3「危機到来！」（後書き）

ぜひ感想評価待ってます！

タイプ4「学校っすね」

「えっ！？明日から学校行くの？」

羊が晩ご飯を食べている骸骨に向かってそう言った。

『イエス』

茶碗を片手に返事をする骸骨。

「散歩って、まさか学校に行ってたのか？」

狼がカニクリームコロッケを箸でつまんで言った。

『せやねん、そんで学校に行って親類のフリして手続きしたっちゅーわけや』

「骸骨の親類などいない！」

『安心せい、人間にちゃんと化けたさかい』

「そんなこと出来たのか？」

『ま、よーするに、明日から学校行きや』

「ええ〜」

しよぼくれる羊、

「折角学校が休めると思ったのに〜」

『にしてもひじりちゃん、女言葉もう習得したんか？』

「うんまあね、今日はいろいろあったから」

「確かに今日は疲れたな」

『ふ〜ん、それよりじんはん、おかわりいただけます？』

「お前骸骨なのによく食うな」

謎の多い骸骨だった。

翌朝、

『制服は昨日ワイが作つといたで〜』

「へえ〜、そんな事もできるんだ」

『ささ、着てみ着てみ』

ばっちり着こなす羊、

「おお、可愛く着れてる」

「おい、もう行くぞ」

一階から狼が呼んでいる。

「じゃ、骸骨、留守番頼んだぞ」

『任せとき!』

「「いつてきまゝす」

『きいつけてな』

狼と羊が玄関を出ると、丁度要弧が来たところだった。

「おはよう! ようこちゃん」

「うん、おはよう」

「ようようこ」

「ああ」

少し羊と態度に差がないか? と思った狼だが、要弧は気にせず羊を連れて先に行く。

「おはよう!」

「あ、ひじりじゃん! え? なんでここに?」

雫が羊に寄りながら質問を浴びせる。

「今日から転校する事になったの」

「そうなんだあゝ・・・え?・・・家は?」

「え? もちろんじんの家」

「・・・え! ? うそ! 危ないじゃん!」

さて、どうゆう意味だ

羊と狼が同時に心の中で突っ込む。

「じんに襲われてない!? こいつ名前の如く変態だからさ!」

「え、いや、何もないです」

羊がそう言っているうちに狼は先に進んで行く。

「ちよっとじん! ひじりちゃんがかわいいからって襲っちゃダメだからね!」

「・・・・・・・・」

雫の馬鹿にするセリフを無視して先へ進む狼、
羊もまあいつもの事だと思っていたら、
ふと雫の顔が見えた。

「え？」

今にも泣きそうな顔が、そこにはあった。

なぜ、雫は泣きそうな顔をしているのか・・・。

「ど、どうしたの？」

羊が声をかけると、振り返った顔は、いつもの雫の顔だった。

「え？なに？どうかしたのひじり？」

あれ？・・・見間違い、だったのかな？

疑問が残っていた羊だが、要弧も先に進んでいたので二人は走って
追いかけた。

うわー、まさかじん達と同じクラスになるとは・・・奇跡だ

狼や要弧に雫、奈絵美、臣は同じクラスだ、そこに編入されるとは、
確かに良くできている。

担任に案内され、いつも通いなれた教室に来る羊。

「今日から転校してきた、守多羊さんです」

「よろしく願います！」

羊が頭を下げる、そして教室内の知っているクラスメイトを見る。
まず一番に感じるのは男子の熱い視線、うん、すごい見てる。

女子からも結構見られてる、目立たなければ良いのだが。

「守多さんは名字の通り、実はじん君の従兄弟なんです」

「ええ ええええ えええええ！！？？」

なに！？その反応！？

狼と羊がまたもや同時に心の中で叫ぶ。

「てえめえじん！！羨ましいぞこの野郎！！」

「お前なんか敵だ！こんなかわいい従兄弟がいやがつて！」

「そうよ！マネージャーなんだから仕事を疎かにしたらどうするの
おろそ

!

野次を飛ばすクラスメイト、困り果てる羊、

ブチギレ寸前の狼、

「誰のマネージャーだ俺は！！」

「は？決まってるじゃん、ようこ達の」

「そんなの知らん！」

必死に言い返す狼だが、担任が静かにしろと注意したので、しぶしぶ黙る狼、

「じゃあ、ひじりさんは、慎君の隣に座ってね」

うわ、ここまでミラクルが起きるか！

あの女装が趣味のなんちゃってかわいい慎の隣に座った。

「よろしくね、ひじりさん」

「よ、よろしくお願いします」

「ビックリしてる？ 僕がオカマだから」

「いえ、じんから話は良く聞くので」

「へえ、仲良いんだね」

笑いながら目を細めて言う慎。

仲が良い以前に同一人物なのだが、ここでそんな事を言うわけには
 いかない。

とりあえず黙っている羊だった。

まあ学校はどうだったといわれても、別に久しぶりではないし、いつもと同じだ。

いや、羊だけはそうもいかない様だ。

「男子・・・うぜえ」

寄ってくる男子が多すぎる、

まあ要弧たちには近づきたくても要弧が騒がれるのが嫌いなため近寄れないよう睨みをきかしている、故に男子にとって新しい美少女の登場は嬉しいものだった。

だが数分後には羊も要弧たちのグループに入り結局近づけなくなっただけが・・・。

そして災難を被ったのは羊だけではなかった。

「じん、ちょっと顔かせ」

他のクラスでも美少女の転校生の話で持ちきりだったため、その美少女の従兄弟である狼はすぐに目を付けられた。

隣のクラスの不良のリーダーや上級生の不良まで狼に寄って来た。

「体育館裏まで来い」

「ああ？なんで行かなきゃなんなんだよ？」

ただでさえ機嫌の悪い狼はだいぶご立腹のようだ。

「いいから来い！」

集団で狼を囲む、仕方なく狼は連れてかれた。

「やばいね、じん連れていつちゃったよ」

慎がのんきに言った。

「全くだ、じんの恐ろしさを知らないな」

奈絵美が溜め息をついて言う。

「自慢じゃないけど私がいつも怒らせてるからストレスは相当ある

よ！」

ああ、そうだな、と羊は黙って雲に頷いた。

「ま、じんが強いとわかればひじりにも手を出そうなんて思わなくなるだろ」

「・・・だな」

要弧と臣は極めて冷静だった、というか気にしてない。

体育館裏

「じん、貴様はただのマネージャーなのだ、手を出したらどうなるかわかってるか」

「・・・」

「なんか言ったらどうだよ？ビビって何も言えないか？」

「・・・」

「お前みたいな底辺が要弧さんたちと対等なんて思うなよ！」

「・・・よし」

すでに30人ほどはいる集団の中心で座っていた狼はおもむろに立った。

「なんだ？なにかするのか？」

一人の不良がそう言っていると、狼はそいつの肩に手を置き言った。

「お前ら、言い残す言葉はそれで良いんだな、じゃ、死刑執行だ」

数分後、体育館裏では不良の屍が散乱していた。

「・・・やべえ、強い」

「地味だったのに、強かった」

とりあえず不良たちは昇天した。

タイプ4「学校っすね」(後書き)

感想、評価待ってるよー!byひじり

タイプ5「こ、告白？」

「なあ、オレと付き合おうぜ」

体育館裏に呼ばれたと思ったら・・・告白か？

「・・・ごめんなさい、他をあたって下さい」

こいつ頭おかしくねえか！？お前とは一応昨日会ったばかりだろ

！！

羊が頭に怒りマークを出しながらも笑顔で断る。

「あっちゃー、ガード固いねー、そんなんじゃ嫌われちゃうぞ」

うぜえうぜえうぜえ！！！！まだ地味でようこ達のパシリしてたほうがよくぼどマシだ！

羊はこんな所で要弧たちのありがたさを今更ながら痛感していた。

「残念ですけど、私にはようこちゃんたちがいますから、でわ」

「ちよつと待ってよ」

去ろうとする羊を捕まえる男子生徒。

「なんですか？」

「だからー、オレみたいな奴と付き合うなんてそうそうないだろ？」

「自信過剰の馬鹿がなめた口きいてんじゃねえ」

羊だつて姿は違えど狼なのだ。

相手が男ならビビらすことなどたわいもない。

固まっている男子生徒をほつといて羊は要弧たちの元へ戻った。

一方、羊が呼ばれて出て行った後の教室では、

「・・・じん、ひじりちゃんは惚れ易いのか？」

臣がいつもの無表情で聞く。

「いや、俺に限ってそんな事はねえ　いや、あいつはそんな奴じゃないぞ」

「・・・そうか」

終始無表情なため、心配しているのかどうかはいまいちわからない狼。

「おい！じん！それ本当だろうな！」

だが今度声を掛けて来たのはクラスの男子だった。

「我らのひじりちゃんが危ないのだ！ぜひ従兄弟である君の見解が聞きたい！」

「とりあえずひじりはお前らをうざがってる」

「なっ！！そんな事はどうでもいい！お前さっきひじりちゃんを呼んだ男みたか！」

「ああ？まあ顔はいい男だったな」

「うそ！じん知らないの？この学年で一番人気のあるイケメン！北崎くんよ！」

「へえ」

全く興味のない狼、だが明らかにクラス内は動揺していた。

「どうするんだ！あいつは少々強引な性格らしいぞ！」

「ええ！？じゃあまさか力ずくでひじりちゃんを襲ってたりして！？」

いや、考えすぎだろ、それに中身はオレだし

「・・・なあじん、ひじりちゃんは暗殺拳法使えるか？」

臣が今度は無表情ではあるが明らかに体が震えて動揺している様子で聞いてきた。

「いや、暗殺拳法は知らんが、俺と同じく空手は習っていた」

「ああああ！！もう我慢できない！じん！ひじりを助けに行くぞ！」

要弧が勢いよく立ち上がり走ろうとする、

「いつてらっしや〜い」

要弧に殴られてしぶしぶ付いて行く狼。

するとあっさり廊下の途中で羊が前から歩いてきた。

「ひじり〜、大丈夫だった！？変な事されてない？」

「うん、大丈夫！」

「ふむ、それはよかった」

「・・・うん、よかった」

「全く、帰りが遅いから心配したぜ、じゃ、戻るか」

「あ・・・ごめんじん、えっと・・・後片付けしといて」

羊がかわいい顔でさらりと怖い事を言った。

「・・・なんかしたのか？　おう、わかった」

狼と羊にとっては簡単な以心伝心だったが、

傍から見たら、羊があたかも告白して来た男をしつこいので従兄弟である狼に片付けさせる、つまりボコボコにするというイメージがこの会話を聞いた人達全員にインプットされた。
が、得に気にしない二人だった。

「あ、お前がひじりに告白した・・・イケメン崎か」

「北崎だ、変な呼び名は止めてくれ」

体育館の裏の隅で小さくなり黒いオーラを出していた北崎。

「・・・はあ、初めてフラれたよ」

「オレはいつもフラれる」

「いや、そんな事言わないでくれよ、すごく気まずくなるじゃないか」

「ま、とりあえずさ」

狼が北崎の近くによりながら言った。

「自分が一方的に好きな相手なら、フラれて当然だろ、たまには周

りに目を向けてさ、自分を好きな子にも、目を向けてやれば？」

「……マネージャーくん」

一瞬感動的な場面になるかと思っただがあっさりそれは崩れた。

「……誰がマネージャーだコラ？」

「いや、すまない、赤城さん達のマネージャーとしてしか知らないくて」

「……守多じん、覚えとけ」

「ふむ、じん君だな、早速だが、君、顔はかっこいいね」

唐突に立ち上がった北崎は狼を見ながらそう言った。

「はあ？なんかの勧誘か？」

「まあそう思っても良いだろう、今週の土曜、空いてるかい？」

「気分的に多分空いてない」

「気分ってなんだい？じん君、確か君はいつもフラれるとか言ってたな」

「ああ、事実フラれてる」

「それは君の性格に問題があるからだと思う」

お前はどうかんだよ？

「君はあれだ、女の子で例えるなら『鈍感天然ツ娘』だな」

いや、なんだか二つ混ざってないか？

「鈍感で天然なのは男として大分不利な属性だ」

「いや、俺は鈍感でも天然でもねえ」

「ふむ、自覚がないところを見ると間違いないようだ」

いや、勝手に決めるなよ

「女子大生ならその性格で攻めれば落とせるが、残念ながら君の顔はかわいくはない」

「なあ、馬鹿にしてるだろ？」

「さて、オレが言いたいのは、君がモテない理由は顔と性格の不一致だといっているんだ」

「はあ？……つまり顔に似合わず鈍感ってわけか？」

「そうだ、磨かない宝石の原石はただの石にしか見えない、そう
だ」

「・・・わかった、とりあえず性格を直せば良いんだろ、簡単な事
だ」

「簡単かどうかはわからんが、今度コンパに来てくれ」

「コンパ？おれ行った事ねえな」

「他校の女の子と食事をして遊ぶだけだ、難しくはない」

「ああ、ようこ達と遊んでいる感覚か」

「何気に羨ましいな、まあいい、今週の土曜、いいかな？」

「」「」「」「だめ」「」「」

二人が夢中になって話していると、いつの間にか後ろには要弧達が
立っていた。

「おせえと思つたらなにしてるんだ？じん」

要弧が怖い顔で狼を睨む。

「いや、べつに、なんでもないです」

「コンパとか聞こえたんだけど」

心なしか雫も怒った顔をしている、何を怒っているんだ？

「そ、そんな話してませんよ、なあ！・・・イケメン崎」

「だからオレは北崎だって、相談なんですが今度の土曜じん君を」
「却下」

要弧が言い終わる前に断った。

北崎はその鋭い眼光をもろに浴びて真っ白になる。

「じん、今週の土曜は買い物の予定のはずだが、忘れたのかい？」
奈絵美が眼鏡を取って本気の顔になった。怒っている。

「わ、忘れてました、すみません」

「・・・じん、コンパなんて行かないよね？」

臣は相変わらず無表情だが、後ろに炎が燃えている。

「・・・あ、あたりまえですよ！誰が行きますか！あははは！」

やべえ、ちょう怖ええ、ひじり！フオロー頼む！

狼が羊に目で助けを求めるが。

「じん、これはカりにしとくから」

ニツコリ笑みで返す羊、

ええええ！！？お前はオレだろ！？助けるよオイ！

いや、雰囲気的に乗らなきゃダメじゃん、てか、コンパなんて聞
いてないぞ

「・・・すみませんでした」

狼のその一言で一応事は収まった。

その夜

「オレだつてたまには自由を満喫してえんだよ！！」

「うるせえ、ようこ達と一緒にいれることに感謝しろこの鈍感お
かみ！！」

「お前は女だから待遇も良くと一緒にいて良いかもしれんが俺は違
うだろ！思い出せあの辛かった日々を！！」

「はっ！そんなの忘れたね！」

「この野郎！女にモテたい気持ちは一緒じゃねえのか！？」

「オレも女だからそんな感情すら忘れたね！いいからようこ達の
気持ちに気づけよ！」

「気持ち？何を言っている！俺はあいつらの気持ちは手に取るよう
にわかるぞ！便利君だ！あいつらはオレの事を便利なパシリとして
しか見てないんだよ！！」

「この大バカ野郎！！パシリならあんなかわいい表情の数々と一緒
にいれる権利があるわけないだろ！気づけつつってんだよ！！」

初めての二人のケンカに、骸骨は特に気にせずテレビを見ていた。

骸骨日記

『今日はじんはんとひじりちゃんがうるさかったわ、せやけど悪い
んわじんはんやな、会話の内容でだいたいわかったわ、乙女心がわ

からんちゅ - のは大変やでじんはん。
『

北崎です、イケメン崎ではないです（前書き）

我らイケメンズ

北崎です、イケメン崎ではないです

どうも皆さん、学年で一番モテる北崎淳きたざあつしです。

昨日オレは初めてフラれました。

まあレベルはかなり高い子でしたし、それに新しい親友もできたので特に気にしてません。

え？新しい親友は誰かって？

決まってるだろ？狼くんさ、

彼は確かに赤城さんたちのマネージャーをしていたから全く目立たなかったが、

あのワイルド系の顔はなかなかだと思う。

だが残念な事に彼は性格が『鈍感天然ツ娘』タイプなためモテない、更に言うならば赤城さんたちのマネージャーをしているが為に自由がないのだ。

四六時中赤城さんの様な美形に囲まれていたらそりゃ魅力は半減するに決まっている。

まあ要するに彼は運の悪い男なのだ。

だが、彼には人を元氣付けてくれる魅力がある！

彼を仲間にするば！赤城さんたちに負けにくいぐらいのアイドルグループが誕生する！

そうすれば芸能界入りも夢ではない！

そうだ！そうなればオレはモテモテだ！

「完璧だ・・・」

北崎は一人でそう呟いていた。

「おい、あつし、今度のコンパの後一人決まったか？」

「ん？ああ、一応決めたんだが、ちよっと問題がな」

「早くしてくれよ」

そう言つて腕を組む男子生徒、「黒羽音恩^{くろはねおん}」北崎の友達で美形、その笑顔は女の子を虜^{とりこ}にできるのだが、女^{おんな}つたらしで浮気男である。

「なあ、お前が呼ぼうと思つてる男つて誰だよ？」

そう言つてイスに座つた男子生徒、長い髪を後ろでしばり眼鏡をかけている。「古道修介^{こうどうしゅうけい}」周りからはしゅうと呼ばれて男女関係なく人気者だ。美形でありながらフレンドリーな性格という一見なんの欠点もない人間に見えるが、カメラオタクでいつもカメラを持ち歩き気に入つたものはどんな事をしても撮影する困つた男だ。

「じん君を呼ぼうと思つている」

「・・・誰だよそいつ？」

「うゝん、顔の広いオレでも知らない奴だな」

「ぼ、僕知つてます、かみだじん君、赤城さん達と一緒にいる人ですよね？」

弱々しく声を出す男子生徒、「大和将騎^{おおわしやうき}」狼と似て立派な名前だが本人は気が小さく泣き虫である。だがその顔は雫と同じ感じのジャニーズ系であり、これまた人気者である。

「ああ、マナージャーか」

「さすがのオレも、赤城たちとは友達じゃないからな」

「ぼ、僕じん君に助けてもらった事があつて、不良に絡まれた時、不良を倒してくれたんです」

「へえ、そりやかなりの善人だな、赤城達にこき使われている理由はそれか」

「まあ、とりあえず、彼のようなイケメンにぜひ、今回のコンパには来て貰いたいのだ」

「イケメンなのか？地味でよく見た事ないが」

「か、かつこよかったですよ、顔はとても凛々しかったです」
「ふーん、ま、あつしもしょうきもそう言うつて事はかつこいいんだろ」

「で、問題があるんだ」

改めて北崎が机に肘をついて組んだ指の上に顎を乗せて言う。

「赤城さんたちとじん君をどうやってはがそうか・・・」

「別に当日じんがドタキャンしてこっちに来れば良いじゃねえか」

「多分翌日じん君は死体となってそこら辺に転がっているだろう」

怖いなオイとツツコミをいれる音恩を無視して北崎は話を進める。

「いいか、重要なのはいかにして安全に赤城さんからじん君を連れ出すかだ、どんな方法でも良い、意見を言ってくれ」

「赤城さんを説得すればいいんじゃないでしょうか？」

「しろうき、君はあまりにも外の世界を知らなさ過ぎる、赤城さんの武勇伝を聞いた事がないのか？」

「ええ！？そんなに怖い人なんですか！？」

「オレの友達で赤城に告白した奴は十日後に謎の失踪を遂げた」

「ええええ！！」

涙目になる将騎、だがその話は本当であつた。

「それだけじゃないぞ、一緒にいるなえみという子にナンパした大學生が数日後大学を退学させられたそうだ」

「ええええ！！」

「しかもしづくというかわいい子に話しかけた他校の生徒はその夜何者かに襲われて今でも病院生活を余儀なくされているそうだ」

「話しかけただけで！？」

「だが一番恐ろしいのは、おみ！彼女の怒りに触れた者は精神崩壊を起こし幻覚を見るようにまでなるといわれている！！」

「・・・ヒック・・・怖いです・・・うー」

とうとう泣き出す将騎、ゴメンゴメンと謝るしゅう。

でもそれ全部実話なんだよなって心の中で思った音恩だった。

「全く、お前らはすぐに話がそれる、本来の議題を思い出せ」

「ま、とりあえず、オレに良い考えがある」

さっきまでふざけていたしゅうが真面目な顔をして言った。

「
　　ってのはどうだ？」

それを聞いた残りの三人は親指を立てて言った。

「ナイスアイデア！」

「で、今に至るわけだよじん君」

土曜日のショッピングモールで北崎が狼に説明をする。

そう、彼らの作戦とは、直接狼の元に行く事だった。

現地で無理やり狼についていく、それが狙いである。

「君がじんか、おれねお！」

「オレはしゅうすけ、しゅうと呼んでくれ」

「お、覚えてますか？しゅうきです」

「・・・帰れ」

一言で片付ける狼だった。

タイプ6「ザ・ショッピング」

「おいじん、お前が呼んだのか？」

要弧がそりやもつめつちや怖い顔で狼を睨んだ。

「身に覚えがございません」

膝を付いて弁解する狼。

とりあえず北崎が説明を始めた。

「じつは今日来る女の子たちは我ら『華円高校』^{かえん}の姉妹校、『翠円高校』^{すいえん}の美少女グループでね、ぜひともこの機に二校の交流を深めるために」

「帰れって言つたよな？」

狼が北崎の首を絞めながら黒い顔で言う。

「ぐがああ！待ってくれ！首はダメ！息！息！」

昇天の一步手前で放してくれた狼、

息を切らしている北崎を無視して狼は音恩たちを見る。

「悪いが今日は無理だからまた今度誘ってくれ」

「・・・また今度？」

臣が過敏に反応して狼に聞き返す。

「・・・俺以外を呼んでくれ、悪いな」

何気に涙を見せる狼、不憫だと思つた三人。

「まあ、確かに無理そうだから・・・諦めるか」

音恩がそう言うと、北崎の携帯が鳴る。

「はい、北崎・・・あ、りおちゃん！・・・ん？そつなの？いいいいよ！じゃあ、また今度ね！」

そこで会話は終わり、北崎は平然とこう言つた。

「ドタキャンされたぜ」

固まる一同、特に狼と羊。

「なんか相手のほうが今日用事できたらしくて来れないだって、まあ仕方ないね、てことでじんくん君らと一緒にショッピングを」

「しない！帰れ！消えろ！」

即答する狼、だが結局北崎たちはついて来るのであった。

「今日は夏に向けての夏服を買おうと思っているんだ」

奈絵美が今日はコンタクトをつけて来ていた。

「どんな服があるかな？」

雫は明るい感じのワンピースと重ね着をしている、実に女の子らしいかわいいセンスだ。

「……めんどくさい」

臣はそう言いながら頭をかく、服装はボーイッシュなジーパンにTシャツ、

要弧も同じ服装をしていた。

……ついて来ちゃったな、北崎

どうすんのよ！ようこたちの機嫌が損なわれて八つ当たりされるよ！

そうだよ、それが問題なんだよ

とりあえず、ようこたちの機嫌をとらなきゃ！

よ、よし

狼と羊はすでにテレパシーを会得しているようだが今は気にしない。

「うーん」

奈絵美が半袖の上着を二つ見比べながら悩んでいた。

む、悩んでいるのか、ここで気の利いたセリフを言えば機嫌よくなるだろう

狼がそうしようとした時、しゅうが肩に手を置いてきた。

「じん、今アドバイスしようとしたな？」

「あ？・うん、まあな」

「なんてアドバイスしようとした？」

「安い方を買った方が経済的にはいいよって」

それを言っただけに喜んで思っていたのだろうか？

やはり狼はかなりの鈍感だ。

「ちょ、それ自ら死に行く行為と一緒にしろ！」

珍しくしゅうが正論だった。

「いいか、どっちがかわいいか自分で考えてみる！それでかわいいと思った服を推奨すれば良い」

「そ、そうか」

しゅうのアドバイスを聞き、奈絵美に近寄る狼、

「どっちか悩んでいるのか？」

「え？・・・うむ、そうなんだ」

心なしか奈絵美の顔が赤くなった気がしたが、狼は気づかない。

「ど、どっちが良いと思う？」

奈絵美が聞いてくる、狼はとりあえずそのシャツをみた。

片方はダークなデザインの黒を基調としたもの、

片方は水色で白いハートが模様として描かれている。

うーん、なえみに合うシャツは・・・

狼が奈絵美を見つめる、そしてシャツをみる、

それを繰り返す狼、

「なにやってんだよじん！直感で選べ直感で！」

しゅうが物陰から見守っている、

そうだな、なえみに合いそうなのは・・・物静かで暗いイメー

ジの黒かな？

狼がそう言おうとした時、

「青の方がお似合いですよお客様」

店員が空気を読めず乱入、

え！？青の方が良いの！？

それを聞いた狼は動揺する。

いや、でも第三者から見て青がいいなら・・・青か！

「あ、ああ、青の方が良いと思うぞ」

店員に続いて言ってしまった狼、

「あのバカ！それじゃあ店員の意見に流されているじゃないか！」
物陰から叫ぶしゅうだが結局遅かった。

「・・・そうか、君はどっちでもいいと思うのだな」

完全にお怒りモードの奈絵美、結局服を元に戻して行ってしまった。

・・・やっちまった

落ち込む狼、そして物陰から見ていたしゅうは壁に拳を突きながら
苛立っていた。

明らかに機嫌の悪い奈絵美を見つけた羊、

「ど、どうしたの？ あのバカ！何か失敗したな！」

「ああ、ひじりか・・・いや、何もない」

明らかに何かあった顔をする奈絵美を見て後で狼をしばらくと決めた
羊、

「ね、ねえ、あっちの服を見ようよ！」

とりあえず羊は奈絵美の機嫌をとる事にした。

雫がサングラスを見ていた。

それを見つける狼。

しずくか・・・まああいつは俺を嫌ってるし別に良いか

そのまま素通りしようとしたら、

雫に近寄る二人組みがいた。

「かわいいね君、高校生？」

ガラの悪い金髪の恐らく高校生の不良だ。

「一人？だったら俺らと遊ばない？」

「いや、友達がいいますから」

雫が離れようとした時、一人が雫の手を掴む、

「いいじゃん、どうせ一人なんだろう？」

「放してください！」

「俺らと遊んだ方が絶対いい」

「わけないだろ」

狼が不良の手を払って後ろから雫を受け止めた。

「じ、じん」

「悪いがこいつは一人じゃないんだ、他を当たってくれ」

狼がそう言っていると、バツが悪そうに二人組みの不良は逃げるように去って行った。

「大丈夫か？」

不良が消えてから狼は雫を見る。

「……？、熱でもあるのか？赤いな？」

雫は目線を下に向けながらも顔を赤くしていた。

「……はは〜ん、なるほどね」

ちやつかり遠くの方から狼と雫を見ていた音恩と将騎、

「なにが成る程なんですか？」

「鈍感だな〜しよুকきは、しずくちゃんはじんに助けられて赤くなってる、つまり嬉しくて照れてるんだよ」

「……ああ！それってつまりしずくさんはじん君をす」

「おっと、そこから先は言わなくても、わかってるって」

二人はそう会話をしながらもその先の展開を楽しみにしていた。

「……おい」

狼が雫に声をかける。

「あ……あ、」

「ん？」

「放して」

そう言つて肩に置いてある狼の手を払う雫、すると雫は『しまった』という表情をした。

「おお！ツンデレ特有の嬉しいのに冷たい態度をとってしまう行為！」

「しずくさんはツンデレなんですか？」

音恩と将騎が無駄な会話をしている間、狼はずっと考えていた。

あれ？・・・怒ってる？・・・そうか！助けたのは良いが言い方が彼氏みたいで怒っているのか！！

究極の勘違いをしていた。

そうだな、ただでさえこいつはオレの事が嫌いなのに彼氏みたいな行動をとられるとこいつのプライドが許さないよな、くそ！ここは落ち着いてようこを呼ぶべきだったか？

ここまで鈍感だと無性に殺意が湧いてくるが、狼の性格なのだ仕方ない。

「・・・すまなかった」

狼は気まづくなつてその場を離れてしまった。

「あああ！あのバカ！謝つて行つちまったよ！！」

「や、やはり怒っているんでしょうか？」

「全く、女心がわかつてやれないなんて、よくマナージャーがつとまるな」

音恩がぶつぶつと文句を言っているのを仕方なく聞いていた将騎が雫の方を見る。

明らかに黒いオーラを身にまとう雫、

落ち込んでるの！？怒っているの！？全然わっかんない！？

雫の威圧感に泣きそうな将騎だったが、雫はすぐにその場を離れた。

い、行っちゃった・・・怖かった
狼に負けないぐらい鈍感な将騎だった。

「・・・どうしたしずく」

暗い雫を見つける臣、雫はベンチに座りながらうつむいていた。

「・・・別に」

「・・・サングラス、いいのか？」

「・・・もういい」

実は雫は今日欲しいサングラスを買うつもりだったが、
今はそんな気分ではない。

「・・・はあ」

溜め息だけが漏れる。

「・・・そろそろ帰る時間だな」

「・・・そう、わかった」

渋々と雫は集合場所に向かった。

「お、しずくも着たか、これではじんだけだな」

要弧がそう言つと、丁度向こうから狼が走ってきた。

「おせーぞじん！」

「わりいわりい」

狼は片手に紙袋と小さな小包を持ちながら言った。

「おや、何か買ったのかい？」

北崎が狼に聞く。

「まあな」

「じゃ、帰るとするか」

要弧が先頭でショッピングモールを出ようと前に進む。

「なあなえみ」

「ん？」

狼が奈絵美を呼ぶ、奈絵美はやはりまだ機嫌悪いようだ、返事が荒い。

「やっぱ、お前には黒が似合う、だからこれ」

狼が差し出した紙袋、奈絵美が受け取って中身を見ると、あの悩んでいた半袖の上着の黒い方だった。

「やるよ」

「・・・い、いいのか？」

「そのために買ってきたんだからよ」

「・・・あ、ありがとな」

顔を赤くして、嬉しそうに奈絵美は言った。

そしてその様子をちゃっかり見ていたしようと羊。

おお！鈍感に見えてすっかりしてるじゃないかじん！
よっし！やるじゃないじん！

そしてもう一つの小包は、もちろん、

「しずく」

狼が呼びかける、雫は無視をしようかと思ったが、とりあえず振り返る、

「わるかった、だからこれで機嫌を直してくれ」

渡された小包、意外に思った雫はとりあえず受け取る、

「中身を見てくれ」

狼がそう言うので雫は箱を開ける。

「あ」

正直、雫は驚いた、なぜなら雫の欲しかったデザインのサングラスだったからだ。

「・・・え、え？」

「わりい、どれが欲しいかわからなかったが・・・お前に似合うものを選んだ」

「・・・そうなの？」

「ああ、気に入ってくれるか？」

「・・・いいサングラスね、気に入った」

雫はそう言って最高の笑みを見せた。

そしてそれを見ていた音恩、将騎、そして羊、

おお！ちゃんと気配りできてんじゃん！

かつこいい、やっぱりじん君は良い人だな
やればできるじゃない！さすが私！

その夜

「じん！見直したよ！女心もわかってきたじゃない！」

羊が機嫌よく狼に言う。

「は？何のことだ？」

「もう！このこの！なえみとしずくに最後プレゼントしてたじゃん！」

「ああ、あれか」

「さっすが！女心わかってる！」

「え？別に、ただ機嫌をとろうと・・・」

「・・・はい？」

固まる羊、

「・・・え？・・・二人の欲しかったもの、わかってあげたんじゃ？」

「いや、ただなんとなく、ないよりはマシかと」

「・・・二人の為に・・・買ったんでしょ？」

「ああ、機嫌をよくしてもらう為に」

「・・・」

「え？なに？なんでバットを掴むの？え？なに振り上げてるの？振り下ろしたら俺に当たるだろ？え？え？なに？」

「じんの！バカーーーーー！！！！」

骸骨日記

『今日はじんはんの魂を見つけたな、まあ蘇生はしといたけど、先が思いやられるわあ』

タイプ6「ザ・ショッペンダ」(後書き)

感想待ってるぞb y ようこ

タイプ7「マジラブレター、まじ!？」

「・・・さすがに、今日は入ってないでしょう」

羊がそう言いながら、恐る恐る手を差し出す。

そして、下駄箱の、自分の靴入れの扉を掴む、

「大丈夫、きつとない、今日はない!」

勢いよく、扉をひらく。

「ザー」

雪崩なだれの様に落ちていく、ラブレター、

「・・・もういや」

「ああ、あ、毎朝毎朝、ラブレターを下駄箱に入れるなんて迷惑だよ」

「すごい嫌味だなこのやろっ」

狼が頭に怒りマークを出しながら言う。

「だってラブレター全部どうしろって言っの？」

「捨てろ」

あっさり吐き捨てる狼、

「もらったこともないからそんなことが言えるんだよ、全く」

落ちているラブレターを拾う羊、

その間に狼も下駄箱を開けた。

「ん?・・・なんか入ってる？」

上靴の上に置かれた手紙、取り出して狼がその裏を見ると、ハートのシールが貼られてあった。

・・・きた！俺の時代！！

有頂天になる狼、そしてその手紙を懐に入れてそそくさと先に進む。

「え？どうしたのじん？」

「なんでもねえ、先行ってるからな」

羊を置いて、狼は屋上へ上がった。

『じん先輩へ、

入学した時から先輩の事が好きでした。

私の学校に来る楽しみは、先輩に会う事です。

先輩とは話したこともありまし、たぶん先輩は私の事を知りません、

ですが、私は決心して告白する事にしました。

今日の下校時間、美術室で待ってます。

佐咲みゆうより』

「・・・おっし！おっしおっしおっしおっし！！」

声を抑えながら喜ぶ狼、彼は今、幸せの絶頂にいた。

そして、下校時刻、

要弧達には先に帰るように言った、

邪魔しに来る可能性はない、髪形も変じゃない、後は、相手次第！

緊張しながら美術室へ向かう狼、

そして、美術室の前に来た。

一体どんな子だろう、かわいい子だと良いな

そう思いながら、扉を開けると・・・。

窓に寄りかかっている、長い金髪をカールにした、ハーフ。

青い瞳に、日本人とは少し違う顔立ち。

「……みゆう……ちゃん？」

「……じん先輩！」

名前を呼ぶと、かわいい笑顔で寄ってくるみゆう。

ああ、ハーフだからみゆうって名前なのか、にしてもかなりかわいい！これはラッキー！

もう嬉しすぎて気がだらけまくっている狼、

だが、これは罠だった……。

抱きついてくるみゆう、普通に喜んで抱きしめる狼、

「カシャ」

そして聞こえたシャッター音。

「これでばっちり」

「はい？」

ふと、空気が変わる。

「写真はばっちり取れた？」

「もちろんよ」

みゆうが声をかけると、なんと美術室の隅にカメラを持った女子生徒がいた。

「……はい？」

混乱する狼に、みゆうが微笑んだ。

「これでじん先輩は私のものね」

どこことなく、その不敵な笑みは要弧と似ていた。

翌日

「はぁ？じんの野郎先に行ったのか？」

要弧が狼の家の前で声を上げる。

「う、うん、なんでも用事があるとか言って」

「ったく、しかたねーなあ」

要弧は特に気にしない様子だが、羊は心配だった。

あいつ・・・なにしてんだよ？

ただの気苦労であって欲しいと思ったが・・・そうもいかなかった・・・。

「・・・じんなら、まだ来てない」

教室ではいつものメンバーが顔をそろえていたが、狼だけはいなかった。

「全く、なにか良からぬ事をしでかしたんじゃないだろうな？」

「もう、今日は今度行く予定の映画の話をするって言ったのに」

「ったく、めんどくせえやつだな」

要弧たちは口々に文句を言っていたが、羊だけは黙っていた。

・・・絶対嫌な予感がする

今まで何度もあったこの気持ち、そう、不幸が振りかかる予兆だ！
なにか災いが襲ってくる感じに、羊は顔を青くした。

そして、その予感は的中する。

「ようこちゃん達、もしかしてじん捨てた？」

そう言ったのは、ニューハーフの慎だった。

「・・・え」？

羊が声を出す、後の四人は声すら出していない。

「いやさあ、じんが一年の美少女グループのマネージャーしてたか

らさ」

「……なんじゃそりゃあああ！！何してんだオレ！？
パニックに陥る羊をよそに、

四人がすごい剣幕で怒りの形相になる。

「ねえ、みゆうちゃん達のマネージャー見た？」

「うん、見た見た！あの人って確か、二年のようこ先輩のマネージャーじゃあ？」

「噂だと、捨てられたらしいよ」

「えー！マジ！」

一年の女子生徒の会話が聞こえる。
それをばっちり聞いた羊は事の重大さを確認する。

まず、じんはなぜか一年生の美少女グループのマネージャーをしている、そして、ようこ達はかなり怒っている……って所か
何とか要弧達を説得して狼を連れ戻してくるからと言って一年の教室に来た羊。

「たたくあのバカおおかみは何してんだオレの癖によう！！」

一年の教室を見回る羊、なかなか狼は見当たらない。

仕方ない、適当な奴に聞くか

そう考えた羊は、近くにいた女子生徒に声をかける。

「ねえ、一年生の美少女グループのマネージャーってどこにいるかわかる？」

「はい、たしか、Fクラスにいましたよ」

「ありがとう」

Fクラスは一番端っこの教室だ。

羊は少し早足で教室の前に来る。

既に開けてあったドアの中を覗くと・・・。

「じん先輩、この缶ジュース開けてください」

「・・・はい」

「じん先輩、この問題がわかりませうん」

「・・・はい」

「じん先輩！まだ私とオセロの途中ですよ！」

「・・・はい、すみません」

「ちよつと待つてよ、じん先輩は私に問題を教えてる途中なんだから」

「だめ！じん先輩は私とオセロするの！」

「はいはいはい、ケンカはダメ、どっちもちゃんとするから」

「じん先輩？あのドアの前に立っているのはお知り合いですか？」

狼が顔を上げると、顔をうつむけた羊がそこにはいた。

ひじり！助けに来てくれたのか！？

このどあほうが！！情けなくてガツクリしてたんだよ！！

文句なら後で何度でも聞くからまずは助けてくれ！！

四人のかわいい後輩のいいなりになる狼は本当に情けなかった。

とりあえず、羊は教室へ入り、みゆうの前に立った。

「悪いけど、そのバカを引き取りにきたの、返してもらえる？」

「いやです」

ニツコリと笑顔で答えるみゆう、対照的に羊は怖い笑みになる。

「あのね、そのバカの所有権はこっちにあるの、わかる？」

「ひどい！じん先輩は物じゃないです！」

勉強を見てもらっていた青い髪の少女がじんの腕を掴んで言う。

「好き勝手にこき使つという物じゃないって言えるのかな？あなた達？」

「とにかく、じん先輩がここに居たいって言っているんだから、それで良いはずですよ?」

みゆうのそのセリフに、羊は反応して狼を睨む。

ああ? 貴様このガキどもに惚れたのか? このロリコンが!

違う! 誤解だ! それと、オレ今弱み握られてて・・・逆らえないんです

弱み?・・・なんだよそれ?

・・・いや、その・・・誤解を招く写真がありました
・・・はあ?

羊はとりあえず、みゆうを見る。

みゆうは不敵な笑みを浮かべて、勝ち誇った様子だ。

「・・・どうすればじんを開放してくれるの?」

「じん先輩は私たちのものですから、開放はできませんね」

「・・・それはじんを気に入ってるってことかしら?」

「もちろんです」

自信満々のみゆうの後ろでは、青い髪の少女と長髪の少女とツインテールの少女が狼に抱きついて放す様子はない。
そして困り果てて涙を流す狼がいる。

「仕方ないわね、ここは一つ、ゲームで決めましょう」

羊はそう言っ、かわいい笑みを浮かべた。

タイプ8「ザ・バトル写真集」

「・・・じんをゲームで取り返す？」

要弧が厳しい顔で言う。

「じんめ、とうとうあつちの世界に行つてしまたか」

「いやいやいやいやいや、大丈夫だよきつと！」

奈絵美のセリフに必死になつて弁解する羊、

「まあ、とりあえず！あのバカはこつちのものだし？取り返す権利はあるわよね！」

笑つてはいるがその笑みが完全にどす黒い雲、

羊は作り笑いでそうだねと言つた。

「・・・で、ゲームの内容は？」

臣が真剣な顔で聞く。

「写真集売り上げ競争ゲーム・・・です」

一瞬、時が止まつた。

写真集売り上げ競争ゲーム！

その名の通り要弧チームとみゅうチームが写真部協力の下写真集を作成。

内容は自由、販売時間は一日。

その後販売数を競い、多いほうが勝利、そして狼をマネージャーにできる。

「・・・発案者は誰だ？」

臣が目を見せつけて言う。

「相手チームです」

羊が即答する。

「写真集だと？変な勝負だな」

要弧が溜め息をつきながら言う。

「でも、売られた喧嘩は買うわよ！」

異様にやる気満々の雫、一人だけ燃えていた。

「いい？写真集で重要なのは！被写体よ！！」

はつきりと断言する雫。

「丁度よく！私たちのルックスは人を惹きつけるのに十分な効果がある！でもそれは相手も同じ！そこで更に重要なポイントは……・色気よ！」

「いや、無理です隊長！」

羊が反論をする。

冗談じゃねえ！！俺は男だぞ！！

「ふ、甘いわねひじりちゃん、でもね、」

雫は羊に近寄り、肩に手を置いて真面目な顔をして言った。

「あなたは『白衣の天使』『ひじりナースの初々しい看護編』をやってもらったの」

なんじゃそりゃあああああ！！？？なんともけつたいなタイトルだなおい！！

「む、無理無理無理無理無理無理無理無理！！！！」

「だめよ！女を捨てなきゃ！」

俺の場合男を捨てる事になるんだよおおおお！！！！

結局押し切られた羊、ちなみに、

「なえみは『可憐な図書委員長』『本とあなたがお友達』をお願い」「めがねだからといって安直に決めただろ」

「おみは『勇敢な女性消防士さん』『恋火はけせないもん』をお願い

い」

「・・・わかった」

「私は『お嬢様だもん』優雅な貴族の一日』を担当するわね!」
「なんか一番無難なやつを選んでないか？」

「そして、ようこはこれ」

「なぜかこそそして内容を教える雫、

「よし、わかった」

「ようこが切り札なんだからね!」

「ようこが・・・切り札？」

そんな疑問を残しながら、いよいよ決戦の日が近づく。

撮影日

ピンクのナース服を着た羊。

物凄く短いスカートに慣れない様で手をひざに置いている。

「ひじりちや〜ん、スタンバイお願いしま〜ス」

「は、はい できるかばかやるおお!!」

心の叫びとは正反対の行動しかできず、悲しみに暮れる羊だった。

「じゃ!まずは体温計をもってポーズ」

「ま、まあ、たかがナースだからな

写真部が用意したセットの病室で写真を撮られる。

写真部には女子部員もいるので変な事にはならないだろうと安心した羊。

「じゃ、次は食事を食べさせてあげる設定ね」

カメラに向けてスプーンにのせたご飯を差し出す羊。

「なんかへんな感じだな

「ほら!笑って笑って!笑顔笑顔!」

「そう言われて仕方なく笑う羊。」

「う〜ん、もつと楽しい事を思い出してみて」

「楽しい事?最近は大変な事ばかりで楽しくないかねえよ!!」

苛立ちが募るばかりだった。

「じゃー、休憩入りまーす」

まだ続くのか？

羊が散々な顔でイスに座る。

「大丈夫ひじりさん？」

写真部の女子部員がお茶を渡してくれる。

「さ、撮影って大変なんですねー」

「そうでしょー、緊張するもんね」

ペットボトルを口につけ飲んでいる羊を見ながら、女子部員が言った。

「ようこ達にとって、じんはやっぱり必要な存在なんだね」

「ぶはっ！ー」

何気ない一言のようだが、驚く羊。

「な、何ですかいきなり？」

「ん？・・・正直な感想、だよ」

意味深な笑顔をする女子部員、

「ど、どうしてそう思うんです？」

羊はゆっくりと聞いた。

「だって、真剣なんだもん、ようこ達」

それを聞いた羊は、また驚く。

「いつもなら、クールに決めているようこ達があんなに真剣な姿、初めてみたかも」

「・・・そう、なんですか」

「やっぱり、じんが大切な存在ってことね」

・・・やっぱり、そうなのか

おれは、長い間ずっとそばにいたのに、気付かなかったんだな。
あいつらの、気持ち・・・。

家にて

「な、なあ、ひじり」

「ん？」

狼が言い辛そうに寄ってくる。

「・・・その、ようこ達、怒っているか？」

「・・・そう、思うのか？」

逆に質問で返す羊、正直狼は面食らっている。

「・・・まあ、怒っていないとは、思っていないな」

「・・・どうしてそう思うんだ？」

「・・・どうして自分にそんな事聞くんだよ？」

「たしかに、元々俺たちは一つだった、でも今はじんとひじり、別々の人間のはずだ」

「・・・それもそうか」

溜め息をつく狼、そして、放し始める。

「・・・やっぱ、かなり怒ってるんだな」

「まあな」

「・・・全く、俺は悪くないのによ」

軽く笑いながら話す狼、

「・・・でも、心配、してくれてるのは、意外と嬉しいな」

羊は少し驚く。

まさか、そう思っているとは思わなかったからだ。

「・・・やっぱ、今のお前と俺は、違うんだな」

「はあ？」

羊の意味深な言葉に、疑問の声を上げる狼。

「安心しろ、ようこ達の人気の高さを一番よく知っているのは俺達だろ？」

「・・・そうだな」

骸骨日記

今日はじんはんとひじりちゃんが深刻な顔して話しとったな。
にあわへんかったけど、大事な話やったみたいや。
まあ、どうせ明日にはケロッとしてそうやけどな。

タイプ8「ザ・バトル写真集」(後書き)

今テスト週間、やばいです。特に留年とか・・・とりあえず頑張ります。

タイプ9「写真集対決終」(前書き)

遅くなつてすみません疲れた・・・

タイプ9「写真集対決終」

写真集発売日

学校の体育館を借り切って写真部が主となって会場が作られた。

北側に要弧チーム、南側にみゆうチームの写真集が置かれている。

被写体である要弧達はステージから販売の様子を見れるようセッティングされた。

「・・・なんか大掛かりだね」

「当然よ、生徒会にも声をかけて大々的に宣伝までしたんだから！」
雫は自信満々の表情だが、羊は顔を引きつっている。

「ちなみに、混雑を予想しているため、時間ごとに個人の写真集を販売するの、つまり！これはある意味個人戦でもあるの！より多く売れた方が勝ち！それはつまり！相手よりよく売れて部数で勝つ人数が多いチームが優勢になるのよ！」

ああ、そう

羊がどうしても言いように心の中で呟いた。

「ごきげんよう、先輩方」

かわいらしい声で声をかけてきたのは、敵陣、みゆうチーム。

「あら、ごきげんよう」

雫が冷ややかな笑みで答える。

「この人怖い、睨んでくる」

ショートカットの少女が涙目で雫を指差しながら言う。

「先輩、人を怯えさせるような表情は最低ですわ、止めていただけないでしょうか？」

みゆうがわざとらしく大きな声で言った。

すると会場の何人かがこちらを振り向く、

やばい！ここで高感度を下げると売れ行きに問題が生じる！

羊が心配して雫をみる、すると、

「怖がらせちゃったかしら？ごめんなさい、ほんのお茶目なのよ」

そう言って天使の微笑で返す。

そのあまりにも美しい微笑みはまわりを光らせている気がする、ていうか光っている！

しかも注目していた何人かがその微笑の虜になったようだ、顔を赤くさせて雫を見つめている。これは高感度が更にアップしたと思っ
ていいだろう。

・・・やっぱこいつ、アイドル並みに計算高いな・・・
羊が静かにそう思った。

第一時、鳥居奈絵美vs華藤レナ

「では！販売開始！」

生徒会の執行委員の合図と共に、体育館に人が溢れるほど入ってきた。

「どうも、生徒会長の本堂です、今日は我校の特別イベントと言う事で、司会を勤めさせていただきます、にしても、すごい盛り上がりです、やはり我が校自慢の美少女グループの写真集だけあって男子にとってはそこら辺の無名グラビアアイドルより魅力的なのでしょうね」

「当然ですわ、被写体の完璧さもさることながら、男心をくすぐる内容ですもの、思春期真盛りの健全な男子生徒なら買って当たり前ですよ」

雫が当然と言わんばかりに胸をはって言った。

「ちなみに、うちのなみえの写真のタイトルは『可憐な図書委員長』本とあなたがお友達」『よ、メガネキャラと言えば図書室というお約束、それに恋する男子生徒も多いはず、図書室で本を読む美少女、その表情はどれも愛しいものよ』

「なるほど、確かに男子としてはそんな素晴らしいシュチュエーシ

ヨン（妄想）は誰もが憧れてきたものですからね、得点は高いでしょう、代わってレナちゃんはどう？」

「はい！私のタイトルは！『お兄ちゃん！水泳教えて！の巻き』です！」

なにいいいい！！؟؟？

羊が、いいのかそんなタイトル！？てか大丈夫！？いろんな意味で！と言った。

「水泳って事は水着写真ってことかい？これはセクシー路線で攻めたねえ」

「えへへ、今回はスク水なの！学校のプールでね！一生懸命泳いだから！あ・・・でも、ちよつと途中でハプニングがね、ちよつとだけ」

「は、ハプニング！一体どんなハプニングなんだ！？気になる！非常に気になる！！これはもしかして、男子として期待していいのか！！」

「もちろんだよ、お兄ちゃん」

『うおおおおお！！！！！！』

会場が更にヒートアップする、そして更に羊はドン引きする。

そんなんで興奮するって・・・お前ら全員ロリコンかコラ？

販売終了、総部数結果、奈絵美、324冊、レナ、339冊。

「やられたわ、あの小娘・・・思ったより計算高いわね」
雫が険悪なムードを出しながら苛立った様子でいる。

「おみの販売結果出たわよ」

奈絵美が結果を伝えにきた。

販売結果、総部数結果、臣、0冊、ナミ、362冊。

「・・・どういうこと？」

雫が黒い顔で奈絵美に問いかける。

「畏にはまったのよ、相手がおみに『写真集を出すのって、気になる男子からだと軽率に思われるかもしれないですよ？』と言われて、おみは販売を断念した」

「おゝみ？」

後ろで固まっている臣に声をかける雫、

「・・・すまない」

「そんな言葉じゃ許されないわよ」

「・・・ほんと、ゴメン」

そう言くと、臣は泣き始めた。

「ちょ！な！泣いてる！？あのクールなおみが！？」

羊は今までのイメージと大幅に違うため驚愕する、が。

「もう、本当おみは泣き虫なんだから」

「見た目によらず繊細なんだ、仕方ないだろ」

要弧がよしと臣を慰める、

・・・慣れてるって事は、いつもの事なんだ・・・

羊は黙って見過ごす事にした。

「いよいよ、ひじりの出番ね」

「は、はい　くそ！男どもに自分の写真を売るのは気が進まないが、仕方ない」

ステージに出る雫と羊、

相手はショートカットのあの泣き虫な少女だった。

「さあ！今度はどんな写真集なんですか？楽しみでたまりません！」生徒会長が泣き虫な少女にマイクを向ける。

「サナは、『お兄ちゃん！一緒に運動会編』だよ！一生懸命がんばってるサナを見てね！あと、ちょっとサナ泣き虫だから、泣き顔の写真もあるよ」

ロリコンを重視しつつ、Sな性格の奴も虜にする作戦か、面白い
雫がそう考えていると、ふといい事を思いついたようだ。

「さあ！今度は期待の新人！ひじりちゃん！一体どんな写真集なん
だい？」

「タイトルは『白衣の天使』ひじりナースの初々しい看護編』ひ
じりが大胆にもナース服を着て看護をしてくれる、天使の笑顔も満
載だが・・・なにより、注目すべきはミニスカート！ひじりの生足
が見放題だ」

『おおおおおおおおお！！！！』

「ええ！？ちょ！恥ずかしいですよ！」

その反応がよかったのか、会場がまた一気に盛り上がる。
な、なんなんだ・・・こいつら

販売結果、総部数結果、羊、421冊、サナ、398冊。

「よっし！400部数突破よ！さすがひじり！」

・・・ああ・・・俺の写真集が400冊も・・・男のものに・・・

続いて行った雫戦は、雫が巧みな話術で高感度を上げ、
販売結果、総部数結果、雫、412冊、ナナ、372冊。

そしていよいよ、最後の要弧vsみゆうの闘いとなった。

「さあ！いよいよ残すは大将戦！勝つのはどっちだあ！！」

ふん、知れたこと、そっちには300冊近く出遅れているのよ、
勝てるわけないわ

みゆうは余裕の笑顔ですましていた。

一方要弧も別に負ける気などないと言わんばかりの自信満々な様子
だった。

「さあ！みゆうちゃんはどうな写真集なんだい？」

「私は、『教えて先輩！～保健室で一緒～』です、すっごい内容だからね」

「おお！これまた会場は熱気で溢れかえる！このままだとみゆうチームの勝利が決まってしまう！対するようこさんは！」

「・・・『ボーイッシュ・ガール～禁断の恋～』・・・」

「・・・はい？」

「私はボーイッシュな性格だからな、なかなか面白い写真ではあるぞ、私が日ごろ見せない表情とかな」

「な！なんと！この写真集さえ買えばようこさんの日ごろは見れない表情が見れるとは！これもレベルが高いぞ！！」

ふふ、やはり強敵ですねようこ先輩、でも、いくらあなたでも、せいぜい500冊が限界・・・勝負はもらいましたわ

みゆうが微笑む、そして、いよいよ結果が発表された。

販売結果、総部数結果、要弧、782冊、みゆう、435冊。

「な！700冊！！！」

みゆうが驚いて結果を見る。

会場も予想外の結果に驚きを隠せない。

「おお～？これは予想外！いくら魅力的だとはいえ、なぜ700冊も売れたのかあ！」

生徒会長がマイクに向かって叫ぶ、すると、ステージの横から雫が出てきた。

「いいかしら？会長」

「ん？どうぞ」

「この結果に驚いている人も多いことでしょうが・・・からくりとしてはいたって単純、ようこの魅力は男子だけには止まらず！女子達も虜にしたのです！」

「そ、そうか！男子だけでは400冊がいいところ！だが女子も入れば700冊！いってもおかしくない！何てことだ！ここに来て一気に逆転！勝利チームは

要弧チーム！！！」

そして、会場は片付けられ、狼もようやく開放される。

「・・・先輩」

みゆうが悲しい顔をしながら別れを惜しんでる。

「・・・どうしても行っちゃうんですか？」

他の女子も狼に離れたくない様子・・・だが。

「・・・ごめんね、俺はやっぱ、ようこ達の隣にいるのが似合ってるから」

「・・・わかりました」

みゆう達はそう言って、その場を去った。

「・・・えーっと」

狼が振り返って、要弧達に向き合う。

「・・・わかった、ごめん・・・あと、ありがとな」

素直に言う狼、

要弧たちは意外に思ったようだが、

「ったく、今回だけだからな」

「あああ！迷惑の掛かる奴だよ本当！」

「埋め合わせはきっちりしてもらっからな」

「・・・よかった」

「まあ！これで一件落着ですね！」
羊が元気にそう言う。

ふと、羊が地面に写真が落ちているのを見つける。

「なんだろう？」

拾って見ると、

そこには狼とみゆうが抱き合っている姿が映っていた。

なんじゃこのやばすぎる写真はああああ！！！！！！

「どうしたひじり？」

ハッ！！！！

後ろから要弧が覗き込んで、写真を見てしまう。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・よ、ようこ、ちゃん？」

「・・・・・・・・じん、ぶっ殺す」

その後、狼の悲鳴が聞こえたそうなの。。。

夏祭り、イエス！ナツマツリ！！（前書き）

さあ、待ってましたヒロイン視点！夏祭りVr

夏祭り、イエス！ナツマツリ！！

今日は夏祭りの日、そう、それは特別な日を意味する。
というわけで、今回は狼、羊視点ではなく、ヒロインの要弧視点で
お送りします。

デパートの浴衣コーナーでたたずむ要弧。
見ているのはもちろん浴衣。

「・・・・・・・・」

無言で真剣に見ている。

「ねえ、あそこの人かっこいいね！」

「本当！浴衣の前にいる人でしょ！かっこいい！」

「でもなんで女物の浴衣の前にいるのかな？」

「バカねえ、彼女さんへのプレゼントに決まってるでしょ！」

「そっか」

通りすがりの女子高校生が大きな声でそんな会話をする、
もちろん要弧にまる聞こえだ。

「・・・・・・・・帰ろ」

心なしに暗くなった要弧は大人しく帰った。

要弧の家

「ただいま」

要弧が玄関に入ってくる。

「おかえり兄貴！」

するとかわいい顔をしたまいち性別のわからない子が出迎えた。
そして要弧は何も言わず殴る。

「兄貴じゃないお姉ちゃん！！」

「ご、ごめんお姉ちゃん」

「つたく、この女顔の弟が」

機嫌悪く二階に上がる要弧、それを弟の辰来^{たつき}が追いかける。

「浴衣買ったの？見せて見せて！」

「買ってない！」

「えゝなんで？皆さんに自慢するんじゃないの？」

「どうせ似合わないからいい」

「またまたゝ、そんな事言ってるから男の子っぽくなっちゃうんだよゝ」

「・・・」

「ご、ごめん、言い過ぎた」

「いいよ、どうせ本当のことだし」

「・・・どうするの、今夜の夏祭り？」

辰来の問いかけに、要弧はうつむきながら答える。

「・・・いつもどりの服装で行く」

「それじゃあ、他のお姉さん方には勝てないね」

辰来がわざと嫌味っぽく言う。

「・・・仕方ないじゃん、私外出たら男っぽくなっちゃうし、短髪だし、行動は完璧男だし、女らしくないし、愛嬌ないし、胸はいまいちだし、もう女の魅力ってやつがほとんどないし」

「でもかつこいいていう魅力があるじゃん！」

「・・・それでもじんは振り向いてくれないもん」

そう言つて要弧は部屋に入ってしまった。

「・・・あゝあ、お姉ちゃんも勇気を出してメイクすりゃいいのに」
辰来は仕方なく下の階へ降りていった。

・・・はあゝ

ぬいぐるみでいっぱい^の要弧の部屋、
大抵の人間には裏と表があるというが、ここまではつきりとした裏表のある者も少ないだろう、外では気の強い男勝りな性格だが、家

では極普通の女の子である。

……どうすればいいのかな？

思いつめる要弧、どうやら狼のことで頭がいっぱいのようだ。

……あゝあ、大体、じんのためにこんな性格になったのに

そう、要弧がこんな性格になったのは、狼と初めて会った幼稚園の時、

『じんくん！あそぼ！』

幼い日の要弧が狼に声をかける。

『うん！いいよ！』

初めて会ったとき、そりやもう二人は仲良かった。

恐らくこのままうまく行っていれば、この二人の恋物語はシリアスな物になっていただろう、

問題はこの次、

『おいじん！女の子とばかり遊んでかつこ悪いぞ！』

出ました、よくいる見栄っ張りな悪がきです。

『そんなことないもん！ようこちゃんはかつこいいから僕もかつこよく見えるはずだもん！』

何気に要弧を利用している魂胆が見えた氣もしますが、

特に要弧は気にしていない様子、だが、ここからが問題なのだ。

『うるせー！この！』

『いたいいたい！殴らないでよ！助けてようこちゃん』

はいでたー！女の子に助け求めちゃったよ。

『じんくんをいじめるな！』

てなわけで、弱かった狼を助けていたら、自然とこんな性格に、

しかも・・・じんが中学生の時、じんが他の女に取られるのが嫌で邪魔ばかりしたから、なんだか嫌われちゃったからなあ、今はただの友達としてしか見てないよね
悲しい顔をする要弧、

正直、ここまで一途に思ってくれる女の子が近くにいなから狼は何も思っていないどころか一時は恨んですらいたのだから、これはもう最低な男としか思えない・・・。

・・・あゝあ、どうしよう

そう思いながら、思考にふけっていると、

「ようこ、お友達がきたわよ」

母が声をかける。

「ん？あ、わかった」

階段を下りる要弧、すると、玄関にいたのは羊だった。

「ああ、ひじりか」

「うん、じつはある届け物をね・・・あれ？寝てた？」

要弧がいまいちさえない顔をしていたので羊がそう思った、

「ん、うん、まあね」

じんの事考えてたなんて・・・言えないな

「さ、あがつてあがつて」

「あ、ありがとう、おじゃまします」

そして要弧の部屋へ、

「・・・ここ、ようこちゃんの・・・部屋？」

「うん、あ、ギャップがありすぎて驚いてる？そりゃそうだよね」

まあ、普通の女の子ならギャップ程度ですむが、

何せこいつは狼なのだから・・・通常の人の何倍と驚いている。

「で、届け物って？」

「あ、これこれ」

そういつて取り出したのは、淡い青色のかわいい浴衣だった。

「・・・え？」

「いや、ようこちゃんはいつも浴衣着ないってじんから聞いてね、だから、着て欲しいなって思ってた」

「・・・いやいやいやいや、似合わないからイイよあ」

そういつつも着たくてたまらないという表情の要弧、

「いいからいいから！ほら、着てみて！」

「う、うん」

そういつて要弧は上着を脱ぎ始める、

「ひゃ！ごめん！」

「え？」

顔を赤くして背を向ける羊、

ああ、恥ずかしがっているのか、かわいいなあ、これが女の子らしいっていうんだ

要弧は完全に羊を女だと思っているようだが、まさか自分の思い人狼だとは、想像すらしていないだろう。

にしても、確かに反応は完璧女である、

むしろ、ここまで完璧に女だと思わせるとは、狼も只者ではないと思われる。

とにかく試着

「うわ・・・かわいい」

羊が要弧を見て素直にそう言う、

「ほ、本当？」

「うん！すつごくかわいいよ！」

確かに、いつもの要弧とは全く違ってかわいかった。

・・・これなら・・・じんも、振り向いてくれるかな？

そんな淡い期待を持ちながら、要弧は静かに笑った。

夏祭り

「ええ、じんはバイトで来れない？」

雫が声を上げる、

「本当ごめん！マジでゴメン！！あのバカ！本当にごめんなさい！」

「いや、ひじりがそこまで謝んなくてもいいよ」

辺りが暗くなつて雰囲気が出てきたのに、要弧の気持ちは下がり気味だった。

「全く、折角ようこが別人になつてかわいくなつたのに」

奈絵美が要弧をからかうように言う、

「・・・ま、仕方ないさ、じゃ、帰る」

「ええ、ようこ遊ばないの？」

「浴衣だと動きにくくて遊べないから帰る！」

そう言つて要弧はみんなと別れた。

・・・あ、つまんない

要弧はむくれながら一人寂しく帰っていた。

お祭り騒ぎの場所から一気に寂しい場所へ来たので、なんだか不気味に感じる夜道、

そこへ、ヤンキーの二人組みがたむろつていた。

うわ・・・めんどうな事になりそう

案の定、二人が寄つてくる。

「かゝのじよ、一人？俺らと遊ばない？」

「いや、いい」

「あれ？冷たいなあ、でもこんな夜道、他に誰もいないからね」

「だからなんだ？」

「何されても、誰も助けしてくれないってことだよ」

そう言つて手を掴んでくるヤンキー、

やばい！浴衣だから！うまく動けない！
初めて、恐怖を感じた、いつも強気だが、今回はそうも行かなかった。

「じん！！！」

無意識に呼んだ名前、よくわからないが、助けてくれそうな気がしたから……。

「プロオオオオン！！！！」

突如聞こえたバイクの音、
そして配達用のバイクがヤンキー達に突っ込んだ。

「ぐおっ！！」

「あぶなっ！！なにすんだよ！！」

「邪魔だ、消えろ、死ねカスが！」

狼がめっちゃ怖い顔でヤンキーを一睨みして追っ払った。

「大丈夫か？ようこ」

「……え？」

要弧はいきなりの展開に固まっていた。

え？なんでじんがここに？……てか私だってなんですぐわかったの？

混乱している要弧を狼はじっと見て、そして笑う。

「どうした？そんなにヤンキーを追っ払えなかったのが悔しいのか？」

「ち！違う！！」

「そうか、にしても、浴衣、似合ってるぜ」

「……む」

顔を赤くする要弧、

「こ、こんなもの、動きづらくて適わない」

「ひでえなあ、折角俺が選んだのに」

「え？」

「・・・似合うぜ、とりあえず俺はそう思う」

その後、狼に家まで送ってもらった要弧、

「じゃあ、また明日な」

「お、おう」

バイクで走っていく狼、

それを見ながら、要弧は堪えきれず笑顔になった。

・・・今年は、特別な夏祭りになったな・・・

タイプ10「夏＋仕事」図書」（前書き）

今日はヒロインが臣です。

タイプ10「夏＋仕事」図書」

夏休み、とは言っても、学校が消えたわけじゃなく、特に、委員会などという労働機関にいたっては、休み中の出勤を言い渡すわけで、

まあ、ようするに、図書委員会の図書当番の日が今日なのである。

夏らしく、セミの声が聞こえる、

冷房の効いた図書室でなら、セミの声も苦ではない、

むしろ夏を改めて実感させてくれる意味では、悪くはない。

図書室には自由研究で調べ物に来る生徒や、純粹に本を読みに来た者、

それを除いては、俺と臣と羊の三人である図書委員しかない。

「・・・ひま」

羊がだらけながら言う、

こうしてみると元オレだったとは到底思えない、

だらけて机の上に頭を乗せて天然系をもろにアピールしているようだ。

まあどうせ女子の中にいて変貌でもしたのだろう、

見た目も中身も女の子の羊になったのだ、それはそれで良し。

「・・・これ読む？」

さり気なく臣が羊に本を手渡す、

「ん？ありがとう、どんな本？」

羊がタイトルを見て固まった。

『DNAの進化の過程と仮定』

「・・・おもしろいよ」

どこがつつつ！！！！！

ふ、羊の心のツツコミが聞こえたぜ。

「じんもひまか？・・・これなんかどうだ？」

「ん？」

『本当は寂しがり屋さんのあの娘のハートの掴み方』

・・・なんだこれは？

はっ！それはおみからのアピールだな！！

・・・なんだか、顔赤いなおみ・・・

気づけおれ！！それは決定的な好意があるという信号！主張だ！

・・・寂しがり屋の娘・・・

そうだ！その着眼点は間違いない！おみの事だ！クールを気取っているが本当はシャイで

俺の周りに寂しがり屋な奴はいない！！

こんの鈍感ばかがああああああ！！！！

なぜか重要な時だけ狼には羊からの心の声は聞こえず羊は狼の心の声が聞こえる様だ。

なぜおみはこの本をセレクトしたんだ？

わからんな、いや、まてよ、これは臣なりのオレへの気遣い？

そうか、彼女のできない俺を気遣ってこの本で女の子ってものを理解して彼女をゲットしろよって言う信号！主張だったのか！！

「違うわボケエエエエエエ！！！！！」

羊がとうとうキレて狼にローキックをくらわせた。

「・・・どうしたひじり？」

「ん？ごめんこのバカがね、いや本当バカでさあもう死んじゃえみたいな？」

「おい、全く攻撃した理由が分からないぞ？」

「うん、そこがそもそもバカってわけで？いい加減にしろってやつ？」

本気でキレている様子の羊に仕方なく狼は黙る事にした。

全く・・・こんなにも思ってくれる娘が周りにいるっていうのに、
なんで気づかねえんだよ、オレ・・・
要弧だって臣だって雫だって奈絵美だって俺の事思っているのに・・・。

・・・さてよ、四人もいるんだよな？

・・・あれ、そう言えば・・・

・・・オレは、誰を好きになればいいんだ？

羊がふと深刻な顔になった。

全員を選ぶなんて当然だが無理だ、だったら、四人の中から一人を選ぶという事になる。

・・・オレは、誰を選ぶんだ？

ふと、大きな問題に気付いた羊だった。

図書委員の仕事も終わり、夏の暑い道を歩いて帰っている三人、

「あちくく、図書室はあんなに涼しかったのによお」

「・・・アイス買う？」

狼の文句の後、臣がコンビ二を指差しながら言った。

コンビ二の前で日陰に集まりアイスを食べる三人、

狼と羊はチョコバーを、羊も元は狼なので好みも一緒なのである。

ただ臣だけはソフトクリームが好きなのでそれを食べていた。

・・・やっぱり、おみはアイス食べてる時は笑顔だな

ん？おかしいな、ようこ達と一緒にの時はそうでもなかったのに？

臣がかわいい笑顔でアイスをなめているのを見る二人。

やっぱソフトクリームが好きなのか

いやいや、だから他の時はそうじゃなかったって

でも今は笑顔だろ？

・・・ハッ！もしや！

狼と一緒にだから喜んでいいのか！！

ふふふ、成る程ね

一人納得する羊。

「なあおみ」

「・・・ん？」

狼が唐突に臣に話しかけた。

「お前って、好きな食べ物何？」

「・・・辛い料理なら何でも」

アイスじゃねえのかよ！！

「い、意外だな」

「ねえねえ、辛い料理がすきって事は、辛いのが平気なんだ？」

「いや・・・得意ではない、ただ、辛くて・・・痛くて痺れる感じが、好き」

・・・ちよつとMだったんだ

「・・・そうか、驚いたよ」

「うん、かなり驚いたよ」

狼と羊が困惑した顔で言った。

まだまだ、夏は暑くて長続きしそうだ・・・。

タイプ10「夏＋仕事」図書」（後書き）

臣はミステリアスですよ、クールですよ、でも天然度なら狼といい勝負です。

タイプ11「子供の時って何でも言えるよね」（前書き）

新キャラ登場、子供の時の口約束で狼はまあいろいろと大変な事になりそうで・・・でも一度約束したことは守ろうね、できるだけ。

タイプ11「子供の時って何でも言えるよね」

夏休み中、偶然にも、

要弧と臣と雫はバスケ部なのでその強化合宿に、
奈絵美は羊と文化祭実行委員として学校へ登校、

つまり、今日は自由の日なのである!!

何日ぶりだろう、自由を満喫するのは、

好きなマンガを読み、好きなアニメやドラマを見て、
パソコンで遊んだり、自分の時間を過ごせている・・・、

あの電話が来るまでは・・・

「ピロロロ」

携帯になる、お笑い番組を見て昼飯を食っていた狼はめんどくさそうに携帯に出る、

「もしもし？」

「じんくん、今日ヒマかい？」

「おう、イケメン崎か」

「いや、北崎だよ」

「で？なんのようだ？今日は珍しく要弧達から開放された自由の日、
オレはめっちゃくちゃ忙しいんだ」

「矛盾してるよ、自由の日ならヒマなんだろう？」

「そのヒマがオレにとっての休息なんだよ」

「だったらとびっきりの休息を教えてやる、コンパだ」

「・・・なぬ？」

「丁度一人探していたんだ、メンバーはオレとねおとしゅうとしょ
うき、そして君だ」

「場所はどこだ」

『うお、変わり身はやっ！・・・場所はテレビ局、ぜひ今すぐ来てくれ』

「よし」

フフフ、要弧達とは別の女子と遊ぶのもいいな、狼は新しい場所への期待で胸が膨らんでいた。

で、現地に行くと・・・。

「アイドルグループ『ニヤンニヤン』のミヤです」

「エミです、女優をしています」

「アミーリユ、職業ミュージシャン」

「コロロなの！タレントなの！」

「ナツキです・・・グラビアやっています」

・・・なに？有名人ばっかじゃん！？しかもカメラ回ってるし！！

驚愕する狼、そう、これが悪夢の始まりだった。

「おい、イケメン崎、どういうことだ？」

「だからオレは北崎だって、これはコンパだよ」

「コンパの相手は有名人と決まっているのか？」

「いや、今回は偶然だ」

「何が偶然だ？テレビ局で、有名人相手に、カメラが回っているこの状況で、コンパ？」

「まあまあ、そしてその振り上げた拳を下げる」

「なんだあつし、お前肝心な事説明しないで連れてきたのか」

音恩が溜め息をついて言う、

「仕方ないだろ、本当の事を言うと面倒だといって来ないかもしれ

ないからな」

「おい、肝心な事ってなんだよ？」

「『ドリームパーティー』という番組を知っているか？」

「・・・ああ、有名人と一般の人とで食事したり遊んだりして恋が芽生えるかどうかの内容のバラエティー番組だろ？」

「まあ、要するにオレがそれに応募して見事当選したわけだ」

「・・・なに？」

「いや、だからな、オレはこの番組の募集に写真付きで送って当選したといっているのだ、だがまさか相手が5人だとは知らず一人足りないのでピンチヒッターとして君を呼んだわけだ」

「・・・なるほどな、まあカメラで撮られる事以外では相手がすごい有名人ってだけの話だ、むしろそんな人達とコンパができるのは運がいい、今日はようこ達はいないのだからこれぐらい羽目を外してもいいはずだ、よし、オレは出るぜ、イケ崎」

「いや、北崎だ、略して呼ばないでくれ、まあ承諾してくれた事は実にうれしい、よろしく頼むよ」

そして二人は堅く握手をした。

・
じんくん・・・ようこさん達がこの番組を見ないことを祈るよ・・・

あえてその事については触れなかった北崎だった。

そして、本番が始まる。

「どうも、今週も始まりました『ドリームパーティー』！今日の女性陣はこちらー！」

ふむ、いよいよ始まったな

セットは長いテーブルの両側に一列ずつで男性陣と女性陣が座っている。

どの娘も容姿はトップクラス、そして同じ高校生、さて、どの娘

を狙おうか

狼がそう思い彼女たちを見ている間に、女性陣もそれぞれ考えをめぐらしていた。

アイドルグループ「ニャンニャン」のミヤ

うっん、北崎君か・・・守多くんかな

女優のエミ

・・・あの黒羽さん、いいかも・・・あと、守多さんも

ミュージシャンのアミーリュ

タイプなのは、古道・・・と、守多

タレントのコロロ

しょうきくんかわいいの！・・・あとじんも何だかかわいいの！

グラビアのナツキ

・・・あ！・・・じんくん！・・・覚えてるかな？・・・私のこと

何気に全員が狼をセレクトしているが、ナツキだけはもっと特別な感情を抱いていた。

・・・懐かしいな、あの頃の私と・・・じんくん

「さあ！紹介が終わったところで、この後はあなた方で進行してください！では！」

司会者がセットから出る、

そして、いよいよ恋のサバイバルが始まった。

目の前にはジュースとお菓子、

そして向かい合う男女、

無言

だれか話しかけるよー！

狼が心の中で叫ぶ。

「・・・じゃあ！俺たち男性陣からおもしろトークをしまゝす」

しゅうが慣れた様子で進行役をかつてでる。

「まずはこのクールを気取っている北崎から」

「む、オレか、よし、とっておきの話をしてやる」

「ええ！楽しみ！話して話して」

ミヤが期待を込めた眼差しで耳を傾ける。

「先週、昼食にイタリアンを食べたいと思ってね、いきつけのイタリア料理店に行ったんだ、そしてスパゲッティーを頼む、そして出されたスパゲッティーを食べたのだが、これが非常に不味かった、いつもの味でない上にこの不味さは異常だったのでウェイトレスを呼んだんだ、なぜこんなに不味いんだ、いつもの味ではないって言ったら、ウェイトレスは涙ながらにこう言った、『申し訳ございません！・・・実は、シェフは今緊急でいないのです、ですが、店を閉めるわけにもいかず、私達従業員が料理をしているのです、ですが、やはりダメですね、本当に申し訳ございませんでした！すぐに作り直します！』ウェイトレスはすぐに料理を持って厨房へ向かった、だが正直食べる気も失せて帰ろうと思っていた、そして出口に向かおうかと思ったが、ふと厨房が目に入っってね、驚いたよ、あのウェイトレスが一人で料理をしていたよ、しかも一生懸命に、とても大変そうだったが、健気けなげだと感じた、涙を流しながら諦めることなくがんばる姿を見て、無理やり帰る事が失礼だと感じてね、結局うまくはなかったが、彼女の料理を美味しくいただいたよ、それはオレの父が大学生の時の話だそうだ、そして、そのウェイトレスは、今はオレの母だ、料理もうまくはないが、愛情はこもっていると、父はいつも言っている、これがオレのとおっておきの話だ」

「・・・いや、あの、ここで話すにはおかしくないか、その話しゅうが困った顔で言う、だが、

「とんでもない、オレの両親はこんな運命的な出会いをしたんだ、俺も、こんな素晴らしい出会いをしたいと純粹に思っただけだ」

女性陣に笑顔を見せながらこの台詞、
とりあえずミヤはもう北崎にくぎづけの様だ。

「つーかおもしろトークじゃねえのかよ？」

狼が疑問の目を向ける。

「じゃ、次はねお」

「パス、おれそんな話できないから」

「じゃあしようき」

「うん、僕の飼っているパウロの話をしたい？」

「犬の話は結構だ、つまらないし、次、じん」

「早いな、もうオレかよ」

面白い話なんぞないな・・・そうだ、適当な怪談話でも

「よし、夏にぴったりの怪談話を」

「ええ！！無理！！」

ここで大声を出す者が一人、

「・・・ナツキちゃん？」

しゅうがビックリして声を出したナツキを見る。

「え？あ、ご、ごめんなさい、でも意地悪だなあじんくん、よりに
よって私の苦手な怪談話するなんてえ」

・・・はい？

「でも、やっぱり覚えていたんだ、結構昔なのに」

「おいじん、お前売れっ子グラビアアイドルと知り合いだったのか
？」

小声で音恩が聞いてくる。

「・・・ナツキ・・・なつき・・・夏・・・生・・・？」

「・・・どうした？」

「いや、はるか昔沖縄へ遊びに行ったときそんな名前の子と知り合ったような・・・」

「はるか昔って・・・ナツキは確かに沖縄出身だな」

「・・・たしか夜に怪談話したら泣かせちゃったから親に怒られたという記憶が・・・」

「つじつまが合っているな、恐らく間違いないだろ」

「・・・なんか、その時、重大な失敗をしたような・・・？」

「失敗？」

「どんどん小さくなる狼、

そしてある禁断の記憶がひらかれた。

「・・・一生、守ってあげるよ・・・」

「は？」

音恩がとぼけて返事をする。

「・・・オレは、ナツキにそんな約束をしたような気がする」

「まだまだ、カメラはまわっていた・・・。」

タイプ11「子供の時って何でも言えるよね」(後書き)

さあ、まだまだ続く。

タイプ12「あ、言っとくけど狼はモテキャラじゃないから」(前書き)

どこまでも不幸で不条理な環境に生きているのが狼です。

タイプ12「あ、言っとくけど狼はモテキャラじゃないから」

前回の要約

いや、ほんまじんはんはついてまへんなあ、

ありえへんで、こんな運の悪い男そうはいないで、

にしてもまさかこの番組が生放送スペシャルで今まさに放送されて、

しかもワイのセンサーによれば羊さん達5人がばっちりこの映像を見てる気がしますわ、

まあ、かわいそうやけど・・・ファイト！

by 骸骨

「さあ、次は気に入った相手と話をする、『ワンterワン』をしてもらいまゝす」

司会者が戻ってきてそんな不吉なことを指示した。

・・・どうする、このままの流れだと100%ナツキと俺のペアになる、だが！それはかなりまずい！今回のことがきっかけで・・・ナツキが・・・オレにマジ惚れしたら・・・多分ヤバイ、少なくともようこ達はオレを抹殺してナツキを奪うつもりだ！！せつかくの友達だ、黒い思い出など作って欲しくはない・・・ここは他の女性とうまく

「じんくん、他のペアは行っちゃったよ？早く私たちも行こー！」

超しまったああああああ！！！！

頭を抱える狼、だが対照的にナツキは笑顔で狼を引っ張って次のセツトへ進んだ。

そしてその頃のあの人達は・・・。

・・・学校の帰り・・・たまたま見てしまったビルについている大画面のテレビ、そして映っているオレ！！・・・なにしているんだよおおおお！！！！

羊は体を震わせながら既に狼へのお仕置きの方法を考えている。そして隣にいる奈絵美は、かけていた眼鏡をとり、その眼鏡を握りつぶす。

「・・・ダメだなあじん・・・おいたが過ぎるぞ？」

鋭い目と薄ら笑いの口、手には無残に潰された眼鏡、

怖い・・・背筋が凍ったよ・・・俺死んだなこりゃ

涙目で羊はテレビの画面を見た。

歩道の真ん中で、かなり冷たい冷気のオーラが漂っていた。

合宿の宿、

そこにはロビーにしかテレビがない、

そして女子バスケット部一同がその一台のテレビにくぎづけ、

まあほとんどに人は自分のクラスメイトが出演しているという簡単な理由で見ているのだが、

その中の三人は異常な行動をとっていた。

「・・・ね、ねえおみ、さっきから誰に電話をかけようとしてるの？」

バスケット部の仲間が臣に声をかける、

だが、聞こえないのか、携帯に何度もリダイヤルプッシュをして、

そして繋がりませんの台詞を聞いたら、またリダイヤルを押す、

その行動を無表情で、しかも心なしに黒いオーラをまといながらしている。

ていうか目がめっちゃ見開いている、怖い、正直すごく怖い、

しかも、その後ろでは、雫が何か呟いていた。

「ジン・・・ケス・・・マツサツスル・・・ユルサナイ・・・ヒドイ・・・」

瞳孔が開いた虚ろな目で呪いをかけるように呟いている、青いオーラが見える、悲しみなのか恨みなのかわからない色である。だが、一番ひどいのは・・・要弧だ。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

笑顔でテレビを見ながら言う、その笑顔はもうビクリするぐらい爽やかだ、なぜかその爽やかな表情の中に諦めとゆうか覚悟のような心情が見える。

ていうか周りの女子がひいてる、ドンびきしてる。

まあ、どっちにしろ、どうも狼が逃げれるような状態でないのはよくわかった。

・・・なんだこの寒気？

「まさかこんな所でじんくんと会えるなんて」

個室に入れられる二人、その狭さから更に距離が縮む、

「あ、ああ、オレはナツキがグラビアアイドルになっていた事の方が驚いたがな」

「へへー、そうでしょ、東京に来たときスカウトされたんだ」

「そ、そうなのか、いや、すごいな、うん、ホント、すごいよ」

「・・・大丈夫？顔色悪いよ？」

まあ悪くもなるだろう、いろいろと恨まれてるし、

「・・・私が変わり過ぎて、逆にへこんでいるの？」

「ん？そ、そんな事はないさ、お前は自慢の友達だよ、誇りに思っ

ているぜ」

「・・・友達・・・だけ？」

ふと、ナツキが真剣な顔になる。

「・・・は、はい？」

「・・・私は、じんくんにとって・・・ただの友達？」

いや、そうだろ？違うの？

この男はどこまでバカで鈍感なのだろう、

もう要弧たちにボコボコにされればいいと思う。

で、次は天然の性格が出てしまった。

「いや、特別な友達・・・だな」

真剣な顔で言う狼、真っ赤になるナツキ、

と、特別な・・・友達・・・／／／／

まあ、グラビアアイドルだから、特別な友達だろ

見事なお互いの思い違い、

狼は更なる墓穴を掘った、もう20メートルは掘ったと思う。

たぶん地獄だな、こいつは地獄まで墓穴を掘るぞきつと！

「・・・懐かしいな、沖縄で初めて会った時の事」

ナツキが、グラビアの顔ではなく、夏生の顔になった。

「・・・ああ、確かに、懐かしいな」

そう、暑い夏の、海で、初めて出会った。

小学6年生の時だ、両親が海外出張から珍しく帰ってきて、連れてきてくれた旅行、

だが、旅行とは言ったものの、実質、両親は仕事で来たのだ。二人で遊んできなさいとほったらかしにされ、

しかも栗鼠は一人で遊ぶと言って何処か行ってしまった。

「あゝあ、ようこ達という方がまだまだよ・・・ひまだ」

海岸で一人歩いている狼、ふと、海を見ていると、

「・・・ん？」

サーフィンをしている同じくらいの少女、

「ほう、うまいな」

ジーっと見つめていたら、少女がその目線に気付いたようだ。

すると、集中力が解けたのか、少女がバランスを崩し、海に落ちた。

「・・・あ やべえ、これって俺の所為かな？・・・逃げようか？」

「

そう思っていると、少女が海から頭を出した。

「あ、ごめんごめん、大丈夫？」

狼が声をかけると、少女は笑顔で返した。

「うん、大丈夫」

「しかも、実は私の宿に泊まりに来たお客さんだったなんてね」

「そうそう、海で別れた後また宿であつたんだから、その時は驚いたよ」

何気に思い出話にひたる二人、かなりいい雰囲気である、

だが、テレビの前の一部の人間はかなり悪い雰囲気になっている。

「ね、ねえ、じんくん」

「ん？」

「あ、あの時の約束、覚えてる？」

「・・・しまった！・・・覚えていたか・・・」

冷や汗をかく狼、だが、夏生は気にせず話を進めた。

「こ、子供の口約束かも知れないけど・・・私、覚えているんだ」

「・・・できれば忘れてくれ・・・」

「あ、あの、それで・・・さ」

「・・・なあ、なつき」

「え？・・・なに？」

狼のいきなりの呼びかけに少し驚く夏生、そして、

「・・・オレ、確か、一生守ってあげるって・・・約束したんだよな？」

「・・・うん」

顔の赤くなる夏生、だが、狼は気まずそうに言った。

「・・・なつきは、大きく変わったよな」

「・・・え？」

「俺の思い出の中のなつきは、本当、泣き虫で、弱い部分もあったけど、今は違う」

「・・・」

「立派に生きてるよな、強くなったし、オレとは違う世界にいる」

「・・・うん」

「・・・この約束さ、俺達だけの、思い出にしようぜ」

「・・・思い出？」

「そ、二人だけの、思い出、だからさ、なつきは今を生きろよ」

「……………」

「昔にとらわれず、今を生きて……な」

「……ハハハ、面白い事言うね、じんくん、でも、そうだね」

夏生は、なにか吹っ切れた表情で、狼を見た。

「私は、あの頃と変わった、あの約束は、二人の思い出！」

「そうそう」

「……ありがとう、久しぶりに話したら、決心が付いた！」

「……………なんの？」

「……今を生きる決心、だよ、やっぱりじんくんは、私の特別な友達だね！」

「……ん？……よくわからないが、うまく切り抜けたのか？」

適当にかつこいい事を言っていた狼、だがうまく切り抜けたようなので安心したようだ。

かくして、とりあえず撮影は終わった。

最後に、カップリングができたかどうかを問われたが、

私たちは友達同士ですと言って終わった。

だが、驚いた事に、翌日、新聞やニュースではある話題でもちきりだった。

『グラビアアイドルナツキ、彼氏を発表！』

……なるほど、元々なつきは俺に惚れてなかったってことか……でも、オレを見た時、昔の約束を思い出したんだろう、そして子供の頃の口約束を気にしていたわけか……ま、これでなつきも自由になれたし、よかったな……だが

「じ……………ん……………」

なぜ、ひじりは怒っている？

機嫌があからさまに悪い様子。

「何もなかったからって……何もないと思うなよ？」

「いや、矛盾してるぞ？……何を言ってるんだ？」

「お前の罪は『乙女心傷害罪』とりあえず体罰を与える」

「いや、意味わかんねえよ、しかもなんだよその罪？」

「ピンポーン」

「……もしかして」

狼があせる、そして窓へ走り出した。

こりゃあ、逃げねば！！

だが、遅かった。

「……どこへいくつもり？」

はっ！おみ！？……なに！！動けない！

「乙女ブラックおみ……硬直の眼差し」

まあ要するに睨んで狼の動きを止めたのである。

「乙女イエローなえみ、アッパーアタック！」

今度は奈絵美が狼の顎に拳を打ち込み、上へ高く上げた。

「ぐばああ！！」

「乙女ブルー、しずく、涙の回し蹴り」

今度は雫が狼の顔面に器用に回し蹴りで羊の方へ飛ばす。

「ぶべらっ！！」

「乙女ピンク、ひじり、ホームランバット！」

どこからか取り出した金属バットで狼にフルスイングする羊、多分一番えげつない攻撃だ。

「がふっ！！」

「乙女レッド、ようこ……永遠の誓約」

「……は？」

頭から血を出す狼に紙を差し出す要弧、

「誓約壺、二度とコンパをしない。」

誓約弐、私達の奴隸として絶対の忠誠を誓う事。

誓約参、今度私たちを夏の旅行へ連れて行くこと。

誓約四、この誓約を破ったら・・・わかってるわよね？」

要弧が笑顔で狼を見る。

もちろん後ろには怒りの炎があがっている。

「誓う？」

「・・・誓います・・・」

狼はうなだれながら涙ながらにそう言った。

タイプ12「あ、言っとくけど狼はモテキャラじゃないから」(後書き)

やった〜旅行だ旅行だ〜by羊

お前の攻撃が一番痛かったぞ?by狼

タイプ13「海もいいけどプールもいいぜ」(前書き)

今日はナンパ師音恩がいるぜby狼
誰がナンパ師だ!!by音恩

タイプ13「海もいいけどプールもいいぜ」

夏といえば、海とか言うけどさ、

まあほとんどの庶民の者どもは近くのプールに行ってるだろ？

てなわけで、今回はプールに来ている狼たち。

ちなみに誘ってきたのは音恩。

「まあ前回のコンパについては本当悪かったな、あつしが勝手に決めた事とはいえオレにも非はある、今日はオレが金払うからそれでチャラにしてくれ」

「いや、できないな」

「ああできない」

「そもそも庶民のプールなんて安いわねえ」

「……小さい」

「そんなんでチャラにできるわけないよね？じん」

なんでお前らが文句をつける？

要弧たちが文句を言いながら泳ぐ気満々で柔軟体操をしている。

「ここのプールには約60個のアトラクションプールがあつて、全部をまわるのは2日かかると言われているんだ」

「じゃあ明日も行かなきゃ」

「そうね、その軽い男、明日の分も払っとけよ」

「ま、庶民のプールにしては上出来ね」

「……さて、泳ぐか」

「じゃあじん、先に行ってるから」

そう言つて要弧たちは一つ目のプールへ向かった。

「……大変だな」

音恩がげんなりとした顔で言った。

「何を言ってる、今日なんかはようこ達ははしゃいで遊びに行った、

付き合わされるよりよっぽどマシだ」

そう言つて狼は備え付けのビーチチェアに寝転んだ。

「行かないのか？」

「バカかお前？ようこ達は見た目は美少女集団だが言い寄れば命はないぞ？特に遊んでいる時にナンパをしたら・・・良くて記憶喪失で済むな」

「いや、ようこ達じゃなくて・・・他の娘に」

「前回コンパで殺されかけたんだぞ？こんな所でナンパして死ぬなんて嫌だね」

「そうか・・・じゃここににいるのか？」

「ああ、ここで寝させてもらうよ」

「ふむ・・・わかった、じゃ、オレだけナンパしに行くよ」

「はいはい、いつてらっしょい」

仕方ない様子で音恩は近くの美少女グループに声をかけに行った、そして狼は目を閉じて眠りに入った。

が、誰かがすぐにその眠りを邪魔した。

「おい！じん！やばいぞ・・・すげえビッグイベントだ！」

音恩が興奮したように狼をゆらしながら言う。

「な、なんだよ、なんかシヨ〜でもあるのか？」

「美少女水着シヨ〜だとよ！可愛い子がきつといっぱいいるぜ！見るだけならいいだろ？」

「・・・そうかもな」

下心の出る狼、

で、結局音恩にそそのかされて水着シヨ〜を見に行つた。

『美少女集まれ！水着ファッションシヨ〜！』

「さあ皆さん！美少女の水着が見たいかあああ！！！！」

『見たああああああいい！！！！！！』

「それじゃあ！一人目！どうぞお〜」

ノリノリの司会者に圧倒的に男性が多い観客、
そして出てくる美少女もなかなかのものだった。

「やつべえ、あの24番の娘すっげえタイプ」

「ほ〜、お前は長髪の子がタイプなのか」

「じんはどうなんだよ？」

「断然、あの31番のショートカットの大人しそうな娘だな」

「ん〜？ちよつと地味じゃないか？」

「おいおい、ああいうタイプは心は優しくて守ってあげたくなる様な娘なんだよ」

「ふ〜ん、オレにはMっぽい娘にしか見えないな」

「おいおい、Mって・・・ おみじゃあるまい」

すると、狼の頭の中に臣の顔が浮かんだ。

・・・ん？・・・なぜおみを思い出す？・・・てか・・・ん！！

よく見れば見るほど臣に似ている少女、

だがどう見ても臣より背は低いし髪の色が違う。

「・・・変だなあ？」

「ん？なんだよ？何が変なんだ？」

「いや・・・なんでもない」

・・・そういえば、ねおが可愛いとか言っていた奴・・・あの子も・・・

「・・・ように似てる！？」

「は？誰が？」

「だから！さっきお前が可愛いとか言ってた娘！」

「はあ？・・・そんなわけ・・・あれ？」

「に、似てるだろ？」

「・・・さて、おかしい、あんなに女の子らしいのかようこは？」

「バカ、ようこに限ってそんな事はない、つーかありえない」

「だよな・・・あれ？・・・なんか寒いな？」

「はあ？お前バカだろ？今は夏だろ？寒いわけないだろ」

笑う狼、だが、音恩は気付いていた、後ろに猛烈な殺気を浴びせてくる人物がいることを、

「・・・なあ、じん」

「本当に似てるなあ、確かあいつには弟しかいなかったはずだが？」

「・・・おい、じん」

「確かその弟、すっげ〜可愛い顔してたな、正直妹だと最初は思ってたぜ」

「・・・じん、後ろ」

「にしても皮肉なもんだな、弟の方が可愛くて姉の方は男らしいなんて」

「じん！いいかげんに」

「お前もそう思うだろねお？」

「もちろんだ、って違う！今の嘘！」

「はあ？」

「・・・お前ら二人・・・死刑」

後ろに立っていた悪魔、

「・・・よ、ようこ？」

「・・・ほら・・・い、いいいわんこっちゃんない、おおおれは知らないからなじん」

そそくさと去ろうとする音恩の首を掴む要弧、

「・・・逃がしてもらえらとでも思ったのか？」

「そ、そそうだぞねお、もとはお前があの子可愛いとか言い始めたのが原因で」

「ちょ！待てよ！似てるとか言い出したのお前だろ！！」

「はあ？なに？なにそれ？ごめん、記憶にないなあ」

「てめえええ！！しらはつくれる気か！！」

「ワッツ？ソーリー、アイキャントスピークジャパニーズへなに？ごめん、僕日本語話せない」

羊が冷静に係員を呼んで二人を医務室へ連れて行ってもらった。

今日の教訓

・・・とりあえず、下心は捨てようと思います　　狼

・・・あれだな、じん達と遊ぶ時は無邪気になるべきだな、ナンパはせめてようこ達がいらない時こっそりやろう　どこまでも女たらしな音恩

ちよ！なんでオレだけ女たらしとか書かれてるんだ！？

はっ、そのまんまだからだろ

こいつ・・・さっさとようこと付き合っちゃえばいいのによぉん？なんか言ったか？

うるせえ・・・この鈍感野郎、あゝあ、こりゃ一緒に住んでいる

ひじりちゃんも大変だな

・・・ひじりは元オレだぞ？

ん？なんか言ったか？

なんでもねえ、にしても・・・あの二人は一体？

・・・あゝあ、最高の夏休みだなチクショウ

ん？お前バカか？なんで最高なんだよ？最悪だろ？

・・・お前もついいよ、どこまで鈍感で天然なんだよ、ワイルド系のくせに

はあ？鈍感でも天然でもねえよ！

もういいよ！うせえしよ！少しは乙女心勉強しろ！！

いつの間にかテレパシー仲間が増えました。

タイプ13「海もいいけどプールもいいぜ」(後書き)

辰来です、要弧の弟です。好きな子?・・・み・・・み・・・//

美緒とかいてみおです、おみ姉の妹です!・・・どうしたのたつき
君?顔赤いよ?

な、なんでもない。

タイプ14「夏の旅行だ！恋のバトル其の二」(前書き)

さあ！長くなるぞ！！

タイプ14「夏の旅行だ！恋のバトル其の一」

夏も中盤、ギラギラ光っている太陽、
そんな時期に最高に気分がハイになれる場所はどこだ知ってる？
海だよ海！！しかも温泉付きの！！

バスが高速道路を緩やかに走っている。

もちろん狼がチャーターしたバス。

「はあく、じん君は金持ちだったんだね」

北崎が感心しながら言う。

「ふ、これごときで驚くとは・・・庶民だな」

奈絵美が不敵な笑みを浮かべる。

「ほう？まだ何か大掛かりな金のかかっているイベントが？」

しゅうがニツコリしながら狼を見る。

「いや、とくにねえよ」

「またまた、豪華料理の付いた温泉付きの近場にきれいな海がある最高の旅館のセレクトブルームを5部屋も取ったんでしょう？」

慎が可愛い笑みを浮かべて言った。ふあれ？覚えてる？最初の方にいたじんの親友だよ！」

「ああ・・・まさか15人も来るとは思ってもいなかったからな」

狼に羊に要弧、雫、奈絵美、臣はいつものメンバー、

それに、慎、北崎、しゅう、音恩、将騎の男子メンバー、

んでもって、栗鼠、辰来、美緒の弟妹メンバー、

そして運転手をしている今回の保護者役、

「さあ皆さん、もうすぐ海が見えますよ」

銀髪で優しそうな顔のスリムな体系をした自称羊の従兄弟、

あずみ ようすけ
阿隅鎧乞

まあ、要するに、

骸骨の人間Vr

まあ、もちろんうまく騙せている。

「……きれい」

「そうだな、本当きれいだよ」

臣と要弧は海を見入っている。

「……ふ、実に美しい」

「ああ、あそこのお姉さんも可愛い水着を着てるぜ」

音恩としゅうは海に来ている女性に見入っていた。

そして要弧の気分を害したとしてバスの窓から放り出された。

「ふう、うるさいのが減ってくれたか」

「いやいやいやいやいや、死んじゃうって」

狼の発言に北崎がつっこむ。

まあ二人は窓にしがみついていたから自力で生還した。

「本当に海きれいだね！こんな所について来てよかったのかなあ？」

「いいって、どうせうちの無駄な金なんだから」

「ちよ、りすちゃん、女の子はそんな事言っちゃダメだよ」

辰来がやんわりと注意する。

「ああ？なに？文句ある？」

だが不良少女の睨みには勝てなかった。

「……まだ、着かないの？」

顔を真っ青にした雫、乗り物酔いのような顔。

「僕の薬分けてあげますよ」

同じく顔を青くさせた将騎が雫にアメを渡す。

「……あんた、これは薬じゃなくてアメよ」

「……はい？……ああ、すみません、これです」

そして今度は胃薬を渡してきた。

「いや・・・それ胃薬、あんた頭大丈夫？」

「・・・え？・・・頭痛薬ですか？・・・これです」

そして風邪薬を出す将騎、

「あんた・・・ただけ薬持つてんのよ？・・・病弱すぎるでしょ？」

「・・・え？・・・病気？・・・大丈夫ですか？」

「あんたこそ大丈夫か心配よ」

「お前ら死にかけの会話は止めるって」

狼が酔い止め薬を渡しながら言った。

「さあ、もうすぐ着きますよ」

骸骨がそう言うのと、バスは海に近い立派な造りをした旅館の大きな駐車場に入った。

「さて、バスを降りる前に、部屋割りを決めましょうか」

骸骨が全員を見渡しながら言った。

「それなら俺が決めた、オレとねおとしゅう、ようすけさんとイケ崎としょうき、ようことおみとしずく、なえみとひじりとみお、後はりすとしんとたつき、完璧だろ」

自信満々に狼が言った。

「ええ？男同士かよ？」

「女がいっぱいいるのになんで分けるんだよ！！お前は先生か！！」
早速音恩としゅうが文句を出す。

「・・・兄貴・・・なんで私だけ男に囲まれてんのよ？」

栗鼠が目を光らせた黒い顔で聞いてきた。

「安心しろ、しんはオカマだから女は襲わない、たつきも女顔だから大丈夫、第一襲い掛かったってお前ならこの二人をひねり潰せる、完璧だろ？」

「すつごくム力つく正論ね、却下」

「なんだよ、だったらどうすればいいのか言ってみるよ」

「じゃあオレが案を出す、俺とみおちゃんとしずくちゃん！後は適当！」

しゅうが自殺行為の言葉を口走った、案の定、臣と雫がしゅうの後ろに立って目を光らせた。

10分後、しゅうは頭から血を流しながらそこら辺の木に逆さ吊りにされていた。

「自分の欲求を第一優先にするのは最低よ、ここは論理的に、まずはようすけさんとねおとあの吊るされているバカ、あつしとしょうきとしん、みおちゃんとりすちゃんとおみ、なえみととたつきくん、そしてようことひじりと私！どう？」

雫がおや指を立てて決める、

「おい、俺が入ってないぞ」

狼が明らかに怒った様子で言う、

「あ、あ、あんたなんて外で寝てなさい！！」

「・・・ほう？・・・今回は誰のお陰で来れたのか分かってるのかな？」

「いひやいいひやいいひやい！！！」

狼が雫のほっぺをつねる。

「今回はなんだか強気だなじん」

「ああ、ま、原因は・・・あれだろ」

北崎が目線を向けた先は、上の空の要弧、

「バスに乗っている時から思っていたんだが、ようこはなんだか今日はいつもの調子ではない」

「そうだな、なんか、別のことで頭いっぱいみたいだな？」

音恩がしゅうをサンドバックにしてパンチを言った。

「なにか・・・悩み事か？」

「はっ、なわけないだろ？どうせ海で泳げないんだよ」

その言葉と共に今度は音恩が要弧のサンドバックにされた。

「まったく、部屋割り俺の言った通りにするぞ！」

「いやーだー！あんな男たちと同じ部屋なんて絶対やだ！」

栗鼠がダダをこねていると、骸骨がここぞとばかりに目を光らせた。

「こうなったら、クジで決めましょう」

骸骨はもう既に用意したアミダクジを取り出した。

「この決定には絶対従う事、いいですね？」

そう言うと、全員も納得したようだ。

そして、不敵に笑うものが二人……。

それは、羊と骸骨、

ふふふ……わかつてるわね？がいこつ

任せときひじりちゃん！言われた通り細工は施したで、
なんかいつの間にかダークになった羊だった。

「じゃ！発表するよ……まずは、ねおくとしゅうくとあつし
くん、しょうきくとしんくんと僕、みおちゃんとたつきくんとな
えみちゃん、りすちゃんとおみちゃんとひじりちゃん、そして、し
ずくちゃんじんくん……ようこちゃん、で、決定！」

「なに！？」

「「うそー！！」」

「え？」

「……え？」

狼に始まり、音恩と復活したしゅうが声を合わせて驚き、雫が顔を
赤くして、最後に、要弧が上の空からやっと戻ってきた。

「じゃあ、この決定は覆せない、みんな仲良くね」

ニッコリ微笑む骸骨、対照的に、ほとんどの人は困った顔をしてい
た。

困る狼、そして、満足な笑みの羊、

「ごめんなオレ、かなり危ない賭けだが・・・しずくとうまくやれよ

どうやら羊は雲とうまく行って欲しいと思ったようだ、

あいつは・・・たしかに、いつも悪口ばかりだが、本当はいい奴だよ、お前の事も真剣に好きはずだ、初めて、しずくが見せたあの時の悲しそうな顔、俺は忘れねえ、オレは、あの表情を、あいつを、守らなきゃならねえと思う・・・うまくやれよ！じん！！

羊の固い決心、はたして、羊の考えは・・・うまく行くのだろうか。

そして、さつきからどうも元氣のない要弧、

・・・お姉ちゃん、元氣ないな

辰来が心配して声をかける。

「・・・お姉ちゃん・・・大丈夫？」

「・・・ああ、たつき・・・大丈夫だ・・・よ」

「・・・どうしたの？」

「・・・別に」

「何でもないなら・・・そんな顔しないだろ？」

「・・・まあ・・・な」

「・・・じんさんの事、意識してるんだ？」

そう言くと、要弧は体をビクツと震わせ、真っ赤になった。

「べ、べ、べべ、別に」

「・・・お姉ちゃん」

・・・やっぱ、お姉ちゃんは、じんさんが好きなんだ・・・でも、じんさんは鈍感だし、お姉ちゃんはかなりシャイだし・・・ここは、オレが恋のキューピットにでもなつてやるか！・・・お姉ちゃんには、本当に世話になってるから・・・いじめられっこだったオレを、いつも守ってくれた・・・せめてものお返しだ！・・・がんば

るぞ！

「……なんだか、ややこしい事になりそうな予感がする、だが、それでも、

物語の歯車は止まらない。

「……おみ姉、元気ないよ？」

「……そう？」

あらか様に暗いオーラを出す臣、

どうやら狼が要弧達と同じ部屋なのがショックのようだ。

「……やつぱり……じんさんと同じ部屋がいいんだ？」

「……え？あ、いや……それは」

顔を赤くさせる臣、そしてそっぽを向いてしまう。

「……おみ姉は私の自慢のお姉ちゃん、かつこよくて私の憧れ……
・なにより、大切なお姉ちゃんだもん、おみ姉が困っているなら、
私助ける！……おみ姉！きつとその恋！実らせてあげるから！

やる気満々で背中に炎を上げる美緒、かなりガッツがあるようだ。

「……なえみちゃん……どうしたの？」

慎がボーっとしている奈絵美の肩を叩く。

「……え？」

眼鏡の奥に見えた悲しい瞳、それを見た慎は驚いた声を上げる。

「……なんでもない」

凜々しく言い放つ奈絵美だが、かなりショックを受けたと見える。

「……ふむ、同じ乙女心を持っているもの同士、君の気持ちはわかるよ……」

「……じんのことが気になる？」

「な！……バカを言うな！」

「素直じゃないと・・・損するよ？」

「く・・・」

「・・・手助けしてあげる」

「い、いらん！」

「意地張つてると、本当の愛のある恋人はできない、素直が一番、ね！」

眼鏡を奪う慎、

「コンタクトしてるでしょ？眼鏡はいらない」

「・・・ふむ」

・・・本当、あの四人の中でまさかじんを好きになる娘がいるなんて、驚いたけど、じんのよさを理解してるって事だね・・・よかったなじん、お前が好きな娘、ここにいたぞ

親友のため、恋のエキスパートのニューハーフが動き出した。

恋をする者、その者に手を貸す者、果たして、この恋はどうなるのか・・・。

「・・・なあ、なんか、あいつら顔赤くなってるぞ」

「本当だ・・・どうしたのだろう？」

音恩と北崎が真っ赤になっっている要弧達と、何か覚悟を決めたような羊達を見て、

ああ・・・じん関連か

うん、じん関連だな

暑い太陽、だが、それすらを超える熱い恋が、今更に熱くなるうとしている。

タイプ14「夏の旅行だ！恋のバトル其の二」（後書き）

感想評価待ってますよ〜！

あとアンケートしま〜す。

狼とお似合いなのは誰？と言う事で、

狼とお似合いの娘を感想に書いてください！

まあ別にこれでエンディングが決まるわけじゃないけど・・・とい

うかエンディングはかなり先ですが、知りたいので教えてください！

本当！評価よりアンケートを求める勢いですから！

ぜひ、待ってます。

タイプ15「夏の旅行だ！恋のバトル其の二」(前書き)

要弧がツンデレなのよね？じゃあ私は？by寧々

タイプ15「夏の旅行だ！恋のバトル其の二」

羊が不敵に笑う。

絶対に・・・

辰来が真剣な顔になる。

絶対に・・・

美緒が優しい眼差しをする。

絶対に・・・

慎が微笑む。

絶対に・・・

負けない！！

5人の自称キューピットがやる気の炎を燃やす。

「ま、決まったものはしょうがない、とりあえず部屋に入るか」

狼が荷物を持って旅館に入っていく、

他のみんなもそれに続く。

「じゃあ、まずはそれぞれの部屋で荷物を置いて、海に行く準備をする、できた奴から外に出てバスに乗れよ」

狼が指示をして全員は部屋に分かれた。

「暑い太陽・・・白い砂浜・・・そして！！美女のみずグハッ！！」

「黙れヘンタイ」

音恩の暴走を拳で止める狼、

「ったく、お前は5人もの美女に囲まれるから羨ましいぜ」

「5人の美女？そんなのどこにいる？」

鈍感だ

かなりの鈍感だ

スペシャルマックスオブグレイト鈍感だ

将騎と北崎としゅうが心の中で呟いた。

女子更衣室

「あれ？ひじり？どうしたの？」

雫が隅で小さくなっている羊に声をかける。

くわっ！いくらオレが完璧な女だからって精神は元男！そう簡単に女の着替えるところ見れるわけないだろ！！しかも・・・好きな女の子に声までかけられるなんて・・・

真っ赤になる羊、

「あれ？もしかして、恥ずかしがってる？」

雫が面白そうにニヤニヤする。

「い、いや、わ、私は一人で着替えますから」

「えゝい！そんなに恥ずかしいなら私が着替えさせてやる！」

「いや！いいから、って・・・！！！！！！／／／／／」

「ん？どうしたの？」

ふ！服を着ろふくを！！！！

「ん？まあいいや、ほら！脱いで脱いで！」

「わっわっわっちょっ！！！」

「・・・なんか・・・ひじり大丈夫・・・かな？」

「ま、シャイなだけだろ、可愛い奴だ」

臣と奈絵美は軽く流す事にした。

「にしても楽しみだな」

「何を期待しているヘンタイ？」

「じん・・・お前毒舌だろ？・・・楽しみなのはようこ達の水着に

決まってるだろ！」

「あ、オレもそうだな、ぜひともこのカメラにその姿を写したい」

「しゅくん、たぶん殺されるよ？」

「全く、お前らは下心丸見えだな・・・かく言う俺も期待はしているが」

「全く、興奮しすぎて鼻血出すなよ！先輩方！」

「たつき君、君はみおちゃんを見てぶっ倒れないようにね」

慎が笑いながら言う。辰来は赤くなった。

「おゝ、来た来た、こっちだこっち」

狼が手を振って呼ぶ。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・ワオ」

狼と慎以外の男性陣が顔を真っ赤にして大人しくなっている。

「結構待ったか？」

要弧が恥ずかしそうに声をかける、

赤いビキニの水着で腰にスカーフを巻いている。

「いや、そんなに待ってない」

「へっへん、どうよじん？私とひじりの悩殺水着は！」

「ちょ、しずく」

黄色のヒモの帯であるビキニの雫と青いリボンビキニの羊、

「はいはい、よく似合ってますよ」

「・・・どう？」

「ふっふっふ、我々の水着もいいだろ？」

臣は白色の模様が入ったビキニ、奈絵美は黒と白のハイレグ。

「おお、さすがだな、毎年の事ながら完璧に着こなすよな」

「ちょっと、妹様だつて負けてないぜ兄貴！」

「に、似合つてますか？」

栗鼠は緑のカエルのキャラクターが描いてあるハイレグで、美緒はロゴの入ったビキニである。

「ハハッ、かわいいかわいい」

終始冷静だった狼。

すげえ、オレでも水着は見慣れているのに、こんなにドキツとするとは

レベル高いな・・・カメラで撮ろうとした自分が情けない・・・

・・・じん君が羨ましくもかわいそうに思えてきたよ

・・・じんさん、笑つていられるあなたがすごいです

みお・・・かわいい・・・あああ！なに考えてるんだ俺！！

それぞれ心の中で葛藤する男性陣、

「じゃ、泳ぐとするか」

そんな事も気にせず、狼は泳ごうとした。

くっ！やっぱり毎年しずくの水着姿は見ているから免疫はついてるか・・・だが！今回はそれだけじゃないぞ！

「じん、私泳ぎ方わからないから教えて」

羊が急に甘い声を出しながら狼に声をかける。

は？オレが泳げるならお前も泳げるだろ？

黙れ、話し合わせろ！

一睨みして狼を黙らせる羊、

「あ！しずくつて泳ぎ上手なんだよね！一緒に教えて！」

「うん、いいわよ」

よっし！これで邪魔者はいれない！後はうまく

一人でガッツポーズをする羊、だが、

くっ！お姉ちゃんが入り損ねちゃう！ここは・・・

「じんさん！僕にも泳ぎ教えてください！」

「え？たつきも泳げないのか？」

「はいそうなんですよ！そうだ！姉さんも一緒に教えてよ！」

「なっ！？」

「いいでしょ？ね！」

「し、仕方ないな」

よっし！ぎりぎり喰らい付いた！！

辰来がガッツポーズをとる。

やばい、これだとおみ姉が出遅れる！でも、私が泳げるのはみんな知ってるし・・・よし！

「皆さん！おみ姉は泳ぎが得意だから一緒に教える側に立ってもいいですか？」

「え？ああ、別にいいが？」

「え？・・・ちよつと、みお？」

「いいよね！おみ姉！」

「え？・・・うん」

よっし！

美緒もガッツポーズをする。

・・・ふむ、こりや、なえみが無理して参加しても・・・意味がないな

落ち着いて冷静に判断する慎、

今ここでじんと無理やり一緒にしても他の人がいるから恋の発展は望めないな、逆にここはチャンスを見て行動した方がいい・・・にしても、じん、君はどうやらモテモテのようだね
クスクス笑う慎、かなりの策士タイプと思われる。

「・・・じん、なんでこんなに教える人が多いの？」

羊が不満そうな顔で言う。

「泳げないから教えてといったのはお前だろ？みんなお前の為に教えているんだ、喜べ」

喜べるかボケエエエ！！！！

怒りの表情を海中で隠す羊。

く、思ったより恋の進展は期待できそうにないな・・・

辰来も苦い顔をしながら泳ぎを練習する。

むむむ、お邪魔虫が多いわねえ

遠くから狼達の様子を見る美緒、

「おみもしくも教えるのうまいなあ」

「ふん、当然」

「・・・得意、だから」

「じゃ、後は頼んだ、ようこそ、ジュースでも買いに行こうぜ」

な！！しまった！こいつ教えるのをしずくに任せてようこと二人になるつもりか！？

羊が警戒の色を見せる、

うわぁ！おみ姉と離れちゃう！それじゃあ意味無いよう！

美緒もあせりの色を見せる。

よっし！お姉ちゃん！チャンスだ！！

辰来は逆にテンションをあげる、が、

「べ、別に！ジュースぐらい自分で買って来い！」

しまった！ツンデレだった！！

よっしや！！ツンデレだった！！

三人がいちいちリアクションをとる。

「はいはい、ちえ」

渋々買いに行った狼だった。

ん？じんが出てきた、チャンスだな

慎が奈絵美に指示を出す。

「え？・・・それはちよつと」

「いいからいいから」

コソコソ話をした二人、そこへ狼が来る。

「どうだ？ジュース飲む？」

「う、うむ、今はいい」

「そう?」

「じんくん、僕は欲しいな」

「そうか、ホレ」

慎はジューズを受け取ってどこかへ去っていく。

「ん?どこ行くんだあいつ?」

「じ、じん」

「ん?」

背中を向ける奈絵美。

「ひ、日焼け止め塗ってくれ」

「はいはい」

背中に塗ってあげる狼、

「これでいいか?」

「あの・・・ここも」

そう言つて肩ヒモをおろす奈絵美、

「ちょ!・・・だ、大胆だな」

さすがに赤くなる狼、

「い、いいから、早く塗ってくれ」

奈絵美も同じく赤くなる。

そして、それを遠くから見ていた慎、

フッフ、いくら鈍感なじんでも、ここまでされれば悩殺できる、

そしてこれを機に少し意識し始めて・・・フッフッフ

「・・・はい、できた」

「あ、ありがとう」

まだ顔の赤い二人、

「・・・そういえば、いつも海の際は浜辺でパラソルの下にいるよな」

「う、うむ」

「なんで?泳げないわけじゃないだろ?」

「う・・・海は、なんか怖い」

いつも眼鏡をかけた強気な表情ではない奈絵美、

むしろかわいいパツチリとした瞳が可愛い。

へえ、あんま意識しなかったけど、メガネ無い方がかわいいな
はじめてかわいいと思った狼、

「そっか、泳げないって訳か」

「う、うむ」

更に赤くなる奈絵美を見て、つい狼は気が緩んだ。

「なえみってかわいいな」

言った後、言って恥かしくなった狼、言われて恥ずかしくなった奈
絵美、

・・・やべ、何言ってた俺？

「・・・ありがとう」

狼が驚く、奈絵美のその台詞に、

二人は真っ赤になりながらも、少し笑っていた。

・・・めちゃくちや良い雰囲気じゃん！！

慎があまりの進展ぶりに逆に驚いていた。

ふむ、ここまで進めれるとは、恋愛ゲームだったらもうヒロイ
ンがこの子って確信するぐらいの域だよ

感心して見ている慎、その更に後ろで、3人が見ていた・・・。

やばいやばいやばい！！なえみとくっ付きちゃうよ！！

羊が動揺を隠せず慌てていた。

お姉ちゃんが・・・あのチャンスをボウに振っていなければ・・・

完璧クールダウンしている辰来。

．．．まだよ！．．．起死回生の余地は．．．ある！！
美緒は次なる計画のために頭を働かせていた。

タイプ15「夏の旅行だ！恋のバトル其の二」(後書き)

アンケート募集中！

感想も募集中！評価も募集中！

漫画化してくれる人募集中！

アニメ化してくれる人募集中！

映画化してくれる人募集中！

出版本にしてくれる人募集中！

いや！まじで！

タイプ16「夏の旅行だ！恋のバトル其三」(前書き)

季節無視していきますぜ！そう！まだ夏だ！そう思っていこうぜ！

タイプ16「夏の旅行だ！恋のバトル其の三」

海での戦いも終わり、一行は旅館へ戻ってきた。

そして・・・戦いは二回戦目（お風呂バトル）に持ち越された。

羊&臣&栗鼠の部屋

・・・さて、海ではなえみちゃんにいい所を取られちゃったけど・・・まだしずくが挽回できる可能性はいくらであるわ！

羊は一人で思考にふけていた。

「ひじりちゃん・・・なんか考え事しているみたいだね」
臣が心配そうに羊を見る。

「いや、まあ、別に気にしないでいいと思いますよ」

苦笑いで元兄貴の羊を見る栗鼠だった。

辰来&奈絵美&美緒

部屋の隅で固まる辰来。

「やっぱり女の子二人と一緒にの部屋は気まずいのかな？」

奈絵美が美緒にそう言った。

「そんな事ないですよ！だってたつき君かわいいしいつも私の側にいてくれますから、女の子には慣れていきますよ」

そう言っただけにしないように言った美緒だったが・・・。

ど、ど、どどどどうしよう、み、みおちゃんと・・・同じ・・・

部屋・・・ああもう！じんさんみたいに鈍感にいられないよ僕は！
てか鈍感とかそんなものでこの興奮は抑えれないって！・・・うゝ、
緊張しすぎて・・・疲れる

辰来は美緒と一緒にの部屋という事で頭が一杯の様だ。

慎&将騎&骸骨

「いや、本当にきれいな部屋ですね」

将騎がセブルームに感動しながらそんな感想を洩らした。

「本当だ、僕こんな所に泊まるの初めてですよ」

かわいいワンピースをひらひらさせながら慎が言った。　　「ニュー
ハーフです」

「・・・いや、ほんますごいわ」

骸骨もセレブ体験は初めてなのでつい素が出た。

「あれ？今変な声が」

「気のせいでしょう、さっき泳いで疲れたかもしれないですね、二人とも休んでいいですよ、お風呂に入る時は起こしますから」

「そうですか？ありがとうございますようすけさん」

将騎は素直にお礼を言って押入れから布団を出して敷いた。

「僕は旅館を探検でもして見ます、でわ」

そう言っつて慎はそそくさと部屋を出た。

・・・あやしいで、あの子、要注意やな

骸骨は静かにそう思っていた。

北崎&音恩&しゅう

「海では結局かわいい子をゲットできなかったな」

北崎が真剣な顔でそんな事を言う。

「だが、俺たちには大きなイベントがまだ残っている」

今度はしゅうが眼鏡を光らせながら言った。

「ふふふ、かわいい美少女グループと一緒に温泉付きの旅館に来たという設定なら、男達はやらなければならぬ事がある！それは！」

音恩が力強くそう言う。

「「「のぞき！！」」」　　「　　当たり前だけど、犯罪だから！」

男共はきれいなバラには棘がある事を知らず、狂喜していた。

狼&要弧&雫

「……………」

「……………」

「……………これだあ！」

雫が要弧の手札からトランプのカードを引く。

「あ……………」

「ふっふっふ、しずくもまだまだ未熟だな」

要弧が悪戯な笑みを浮かべる。

「ふ、こんなの作戦のうち、さあてじん……………あなたの番よ」

「よし、いいだろう」

狼が冷静にカードを見極めるようにして見る。

「……………これだな」

狼がカードを引く。

「……………ハートの3、あつたぜ」

「……………運のいい奴め」

何やってんのあんたら？というツツコミがふってくる感じがしたが
残念ながらこの部屋につっこみはいなかった。

ていうか他の人はある意味あんた達のために動いているというのに
当事者達がのんきにトランプってなんだよおい？というつっこみは
言つべきなのだが言う人がいない。

てか狼どんだけ鈍感なんだよ！つかそれって鈍感なのか！？とい
うつっこみく以下同文

結局、最も焦り悩み困惑すべき人間達がのんきに遊んでいるようで、
なんか報われない四人がかわいそうに思えてきたのであった。

で、お風呂の時間です。

脱衣所に集まった美少女達、他のお客は偶然にも誰もいないようです。

まあ・・・さすがに、しずくとじんをドッキリで一緒にお風呂・
・何てことできるわけないしなあ

羊が浮かない顔でそんな事を考える、これから自分の身に起きる究極の試練などあるとも知らずに・・・。

男子の脱衣所

いいか？のぞく方法は二通りある、ここの露天風呂は壁で男湯と女湯が仕切られている、それはつまり・・・壁を乗り越えれば・・・いくらでも見れる！という事だ

音恩が不敵な笑みを浮かべながらそうテレパシーを送った。

そして、もう一つの方法は・・・女湯に忍び込む事だろ？

しゅうが防水カメラをしつかりと持ちながらそうテレパシーした。

だが、それはあまりにもリスクが高いな、ここは壁を超える方法で行こう

北崎が真剣な顔でそうテレパシーした。

「あれ？みんななんで黙っているのですか？」

将騎が北崎達に声をかける。

「しゅうき君、あの危険な集団には近づかない方がいいよ」

慎が優しく将騎にそう言った。

「そ、そうですね・・・あの、しんさん」

「なに？」

「そ、その、その格好でお風呂に入るんですか？」

バスタオルを体に巻いている慎を見てそう言った将騎。

「な？に？似合わないともいうのかな？」

「いや・・・似合いますぎて・・・誤解してしまうと言つか・・・」

顔を赤くする将騎。

「・・・しょうき君かわいい」

「え！？ちょ、ちよっと」

将騎に抱きつく慎。

「・・・じんはん、なんかこここっつ危険な感じがするねんけど・・・」

「気にしたら負けだぞ」

骸骨と狼は危険なオーラを出す男達を無視してお風呂に向かった。

女湯

「・・・忘れていたぜ・・・俺は元男なんだ・・・なのに・・・
「気持ちいいねひじり、やっぱり温泉はいいなあ」

雫が羊のすぐ隣でお風呂につかっている。

「ここは美肌効果もあるそうだ」

「へえ、気が利くじゃん」

奈絵美も要弧も密着するほどすぐ近くにいる。

「おみ姉、おみ姉！お月様がきれいだよ！」

「・・・そうだね」

美緒と臣もすぐ側にいる・・・。

つまり、羊は今美少女達に囲まれてお風呂に入っているのです。

「・・・いや、やばいつて・・・本当

すでに顔は真っ赤で目が回りそうな羊。

う・・・もうだめ・・・かも

「どうしたのひじり？顔赤いよ？」

雫がフラフラの羊を見て心配する。

「れ、れんれんらしいりょうふらよ」へぜ、全然大丈夫だよ
「ちよっと、もうのぼせたの？早く出たほうがいいわよ？」

「そ、そゝするゝ」

羊はフラフラで温泉から出て脱衣所へ向かう。
すると開けようとしたドアから別の人間が出てきた。

「あ」

「ん？」

妹の栗鼠だった、ちなみに何も着てないしタオルは手で持っています。
す。

「!!!!!!!!!!!!!!」

羊の限界が今越えました。
そのままぶっ倒れて気を失いました。

え？てかどうなるのこれ？という羊の心の声も虚しく、羊、ここで
リタイア。

タイプ16「夏の旅行だ！恋のバトル其の三」(後書き)

アンケートまだまだ募集中だぜ！

感想評価もどんどんくださいだぜ！

アンケート終了は夏の旅行編が終わったらそこで終了だぜ！
ちなみに今のところ要弧と羊が一番人気だぜ！

タイプ17「夏の旅行だ！恋のバトル其の四」

黒い夜空に月が浮かんで、遠くの方には海が見える。

真つ黒な海はある意味恐ろしい気もしたが、その壮大な光景は、自分達がいかにかちっぱけなのかを実感させた。

今、男湯のバカ3トリオは絶望に打ちひしがれていた。

「・・・壁が・・・たけえ」

「想定外だ・・・壁がまさか・・・こんなに高いなんて・・・」

「・・・終わった・・・何もかも」

約9メートルはありそうな巨大な壁を見て、三人は悔し涙を流していた。

「いや、バカだろお前ら」

狼が軽蔑の眼差しを向けてそう言った。

「ふ・・・鈍感な君には到底わかりえない男の夢があるのだよ」

北崎が真つ白になりながら温泉につかった。

「・・・俺は、諦めない！」

「・・・だな、諦めたら・・・それは死を意味するかな！」

音恩《ナンパ師》と、しゅう《オタク》の大バカコンビは今だ諦めなかった。

・・・哀れだな、どうせ見れたって、消されるのがオチだ

何気に怖い事をサラツと言った狼だった。

「ねえじん、ここ露天風呂って意外と広いんだって」

慎が何気なく狼にそう耳打ちする。

「へえ、まあ、確かに広いな」

「それでさ、向こうの茂みを越えるとき、そこから見る景色は絶景

らしいよ」

「ほー、そりや楽しみだな、気が向いたら行くよ」

「うん、でも、できれば後10分ぐらいしたら絶対に行つて欲しいな」

「はあ？・・・うん、まあ、わかったよ」

「うん、絶対に行つてよ」

慎が念を押して言った。狼はなぜそんな事を言うのか理解できなかったが、とりあえず承諾した。

「なあなあじんはん、ちよつとええか？」

「あ？なんだよ骸骨？」

「実はな、あの前の方に見える茂みあるやろ、あそこを超えてるとな、きれいな景色が見えるねん、行つてみるとええで」

「・・・ああ、わかった、まあ気が向いたら行くよ」

「いや、絶対行つて欲しいねん、絶対やで！頼んだで！」

なぜか必死に頼んで言う骸骨、とりあえずわかったと返事をした狼だった。

「あ、あの、じんさん、ちよつといいですか？」

今度は辰来が話しかけてきた。

「いや、もうわかつてるつて、あの茂みの向こうのきれいな景色見にいけつて言うんだろ？」

「え？何で知っているんですか？」

「ああ！もう！わかったから！行くから！行けばいいんだろ！」

狼は怒りながら前方の茂みに向かった。

本当にここの温泉は広いようで、温泉のお湯から出る蒸気の霧に紛れながらも、狼は奥に進んで行った。

「ったく、何がきれいな景色だよ、どうせ海が見える夜景つてだけだろうが！あいつらしつこいにも程があるぞ！」

口で文句を言いながら温泉のお湯をかき分けながら進む狼、そして
「……ん？なんか看板があるな？」

だが、既に古くなっていて読めないようだ。

「ま、どうせいい景色が見れるとかそう書いてあるんだろ」

更に進むと、細かった幅が広くなった。

「お？着いたか？」

そして目を堪えると、遠くに人影が見えた。

「他の客か、てことはあっちにいけば景色が見れるんだな」

ずんずん進む狼、まさか、これが最悪のシナリオの序章だとは思って
いなかった。

ちなみに、男湯では。

「あのー、ようすけさん、あっちに行けばきれいな景色が見れるっ
て本当なんですか？」

辰来が骸骨にそんな事を聞いていた。

「ええ、そのはずですよ」

なんてな、本当かどうかは知らんけど、あのしんとかいう子がそ
う仕向けたって事は、恐らく女の子とロマンチックなムードになれ
る場所につながっているはずや、後はうまくひじりちゃんに伝えて、
完璧やな

不敵に笑う骸骨、もちろん辰来もその話を聞いて骸骨と同じ考えに
至る。

お姉ちゃん、今度こそチャンス掴んでよ！

そして、事の発端である慎の考えはというと。

さて、なえみちゃんにはすぐにでも温泉を出てと言つといたし、
あとはじんが女湯に迷い込んで他の子に見つかって袋叩きにでもさ
れれば、その後、なえみちゃん以外とはギクシャクした関係になり・
・・ジエンド

やっぱりこいつ策士だったよ、しかも腹黒い、そして狼に絶体絶命のピンチが襲い掛かってきそうだったのであった。

女湯

「さて、俺もそのきれいな景色とやらを拝むとするかな」

ぐいぐい進む狼、だが、かなり近づいたところで、気付いた。

・・・あれ？

よく耳を澄ますと、聞きなれた声。

そして見たことのある髪形。

何となく心の底からわきあがる焦りと不安。

「なんかなえみもうでちゃったね」

「全く、ひじりもなえみもこんなに早くのぼせるなんて、まだまだだな」

「・・・そういう、ようこも、顔、赤いよ」

「ほんとだ、ようこさんあかい」

「そ、そんなことねえって」

・・・なるほど、俺は今・・・デンジャラス・ゾーンに足を踏み入れてしまったようだ

珍しく冷静な狼、

・・・しまった！あまりの展開に体が硬直してしまって動けない！！

なわけがなかった。

「あれ？あそこに人影があるよ？」

美緒の声がする。

やば！ヤバイ！ちょ！え！？ど、どうする！？どうすんの俺！？
てか助けて！？誰か助けて！！！

「おゝい、あんた誰だよ？」

やっべー！！よりによってようこが近づいてきちゃったよ！？死ぬ
！！殺される！！ヘルプ！！マジで助けて！！ちょ！動けオレの体
！！

少しずつ近づいてくる要弧、そして少しずつ寿命が減っていく狼。
そして、とうとう要弧の視界に、狼が捕らえられた。

「・・・・ん？」

「・・・・は、ははは、こ、こんばんは」

あまりの恐怖に声が裏返り甲高い声を出してしまった狼。

終わった・・・・俺死んだよ、間違いなく・・・・グッバイマイライ

フ

「あにやゝ、こんばんは」

・・・・あにやゝ？

一時停止する狼。

「はにやゝ、他にもおひやふさんいたんれすね」　「ひいやゝ、他にも
お客さんがいたんですね」

・・・・はにやゝって

「あ、あの、のぼせていませんか？あなた」

よく見ると真っ赤な顔の要弧をみて狼はうまく騙しながらそう言った。

こいつ・・・・のぼせているよ、まあお陰で勘違いしてくれている
から、それはそれでいいか

「むゝ、のぼせてないもん！全然平気だもん！」

いや、もう、あんた誰だよってゆうぐらいおかしくなっているか
らあんた

「よしよし、誰かいるの？」

「あ、うん、他のお客さんだった。」

「ま、ほどほどにしないよ」

狼はそう言ってうまく霧に隠れて行った。

「あれ？さっきの人は？・・・どこ行っただろ？」

男湯

「ん？女湯から悲鳴が聞こえてこないな」

慎がのんきにそんな事を言っていた。

「何言っているんですか？悲鳴が聞こえたら大変でしょう」

辰来が笑いながらつつこんだ。

「いやさあ、さつきじんに女湯への行き方を教えたからね、そろそろ着いているころだと思うんだけどな。」

「……え？」

「ほら、あつちの茂みを越えとね、女湯につながっているんだよ、あ、でも、よい子が入っちゃダメだからね」

「ええええええ！！！」

慌て始める辰来。

「ど、ど、ど、ど、ど、うしゅう！ じんさん行っちゃったよ！」

「いいのいいの、彼だって喜んでいるはずだよ今頃」

「……喜んでるわけないだろ？この変態が」

歸つてきた狼。

「
・
・
・
あれ？」

「あれ？じゃねえよ、よくもオレをはめやがったな？」

「……ぼ、ぼ、暴力反対……です」

「男が女々（めめ）しいこと言ってんじゃねえええ！！！」

慎、ここでリタイヤ。

結局、その後みんなは普通にお風呂から上がりました。

タイプ17「夏の旅行だ！恋のバトル其の四」(後書き)

温泉の次は・・・肝試しで。

タイプ18「夏の旅行だ！恋のバトル其の五」

夜も更けたところで、夏の真夜中のスペシャルイベント……。『肝試し』が、幕を開けることとなった……。

夜の林に集まった一行。

「さて……。皆さん、夜のお楽しみイベント……。肝試しの始まりですよ」

骸骨がさも嬉しそうににやにやしながらそう言った。

「……。なあひじり、お前の従兄弟は肝試しが好きなのか？」

奈絵美が不審な目を骸骨に注ぎながら羊に聞く。

「……。うん、まあ、ね 悪魔だからこういうの好きなんだろうな。……」

羊は静かに心の中でそう思っていた。

「では、今度はこのくじ引きで二人組みを作りましょう」

骸骨が部屋割りの時使用した物と同様のやれせクジを取り出した。

ふふふ、今度こそしずくとじんが二人つきりになれるチャンス……

・しずくが怖がってじんに抱きつく、え？お前怖いのが苦手なんだ？、

バカ！……。だから何よ、いや、かわいいなって思ってたさ、え？……

・・みたいなみたいないな！！

妄想にふける羊、一人でかなり盛り上がっているようだ。

だが、やらせクジが二度もうまく行くはずがなかった……。。

「あゝ、いちいちくじ引きだと面倒じゃないですか、ジャイケンで決めませんか？」

策士家、慎の登場。

な、なぬ！あのオカマやろう！何を言い出すか！？

「あ、それ僕も賛成です」

今度は辰来が賛成の意を表明した。

「私も、こんなに暗かったらくじ引きなんてできないと思います」
そして、もちろん美緒も賛同する。

え？え？えええ！！？なんで？何でみんな！？

思い通りにはさせない

結局、羊の作戦は潰れたのであった。

ジャイケンでの決め方。飛ばしてもいいですよ

まずは骸骨を抜いた14人でグーとパーにみのジャイケンを行う。

そしてグー同士、パー同士に別れる。

これを何度も行い、二人のペアができるまでやり続ける。

ちなみに、奇数グループが現れた時、残ってしまった人間が他の残りの人間とペアになる。

くじ引きがだめになった今・・・頼れるのは奇跡のみ・・・お願い！神様！じんとしずくを同じペアに！！

お姉ちゃんのジャイケンの癖はもう既に見切っている、一番多い手はグーだ！後はじんさんに同じくグーを出すように言えば、一緒になれる確率が高いはずだ！

なえみちゃんには後出しの技術を完璧に覚え込みました・・・後は常にじん君の手を見て後出しをすればいい・・・完璧だね

おみ姉は勘が鋭いから心配しなくても絶対じんさんと一緒になれるわ、でも、他のお姉様方がどんな方法で来るのかは要注意すべきね・・・

四人が背中に炎を背負いながらジャイケンに挑む。

果たして・・・結果は！！

雫&羊 要弧&辰来 臣&美緒 奈絵美&慎 栗鼠&狼 北崎&しゅう 音恩&将騎

逆ミラクル!?

まさかのミラクルペアに四人が同時に心の悲鳴を上げた。

雫&羊

暗い森の中を歩く二人、支給されたのは懐中電灯二つのみ。

一人ずつ手に持ってゴールである神社を目指した。

なんでじんじゃなくて私なの？そりゃ私は元じんだけどさあ、

神様ももうちょっと空気読んで欲しいな

愚痴を心の中で吐いている羊、ちなみに、雫は先へどんどん進んでいる。

・・・な〜んだ、しずくって別に怖いのが平気なんだ・・・まあ気が強いし・・・でもちよつとがっかりな気も・・・

羊が一人でそんな事を思っていたら、いきなり木の枝が揺れた音がした。

羊がその音のした枝に目を向けると、フクロウが一匹いた。

「な〜んだ、ただの鳥か」

精神が男であるため驚かない羊。

だが、目の前の雫が動きを止めてじっと立っているのを見て怪訝な思いをした。

「・・・ど、どうしたの？」

「・・・怖い・・・」

雫はそう言つと、いきなり振り返つて羊に抱きついた。

「え？ちよ！し、しずく？」

「怖いのがダメなのよ私！！怖い！本当怖い！！無理だつて、もう進めないよ、帰ろうよあ〜！」

泣き始める雫、戸惑いながらも少し嬉しい羊。

・・・こ、これはこれでいいかも

「大丈夫だよしずく、私がいるから、ね？」

「帰る〜！絶対かえるうう！！もうむりだつてええ！！」

・・・あゝあ、なんでこんなにかわいい子をほったらかしにしてたんだろ、俺って本当・・・バカだな・・・
温泉からも見えていた月を見ながら、羊はそう思っていた。

要弧&辰来

しまった・・・姉弟はよく似るとはいうけど・・・まさか僕もジヤイケンの癖がお姉ちゃんと一緒にだったなんて・・・てか、気付くべきだった

後悔を胸いっぱい満たしながら、辰来は周りの様子を極力見ないようにした。

「ギャシャアアア！！！」

突如、鳥が奇怪な鳴き声をあげた。

「ノワアアーーーー！！！！怖くない！怖くない！全然怖くない！！」
「たつき、うるさい」

要弧が冷たくそう言った。

「い、いや、ほら、その、別に怖くはないけどさ、うん、怖くないけどさ、声出せばほら、元気になるかなって」

足を震わせながら辰来は必死の弁解を試みた、だが、またもやうるさいと怒られた。

・・・はあゝ、普通こういう時は演技でも怖がるのが女の子なのに・・・

どこまでも男らしい姉貴に困る弟だった。

いや、でも、暗いな・・・ちょ、怖いかも！？いや！怖くない！怖くないぞ！

震える体を前に進める辰来、だが、周りの木々がどうも薄気味悪く不安になる辰来。

・・・だめかも、怖くて・・・ああもう！帰ろうかな？
そう思うと、足が不思議と止まってしまった。

・・・あゝ、もう・・・どうでもいいや

「・・・たく、仕方なえなあ」

止まった辰来を振り返って、要弧はそう言いながら、辰来の手を握った。

「・・・いや、面目ない」

「たく、さつさと終わらせるぞ」

・・・はあく、結局、僕はいつもお姉ちゃんに頼っちゃうな・・・
本当、情けない・・・

そう思っていたら、手が少し震えている事に気付く。

あれ？この震えは僕じゃない・・・

そして、辰来は気付いた、目の前の要弧が、震えているということに。

・・・そっか、僕を気遣って・・・怖い我慢していたんだ・・・
・なんだよ、もう・・・そんなに女の子らしい所があるなら・・・
・じんさんの前でも素直になればいいのに・・・もったいないな
やはり、自分がしつかりせねば・・・。

辰来は、夜空に浮かんでいた月を見ながら、心にそう刻んだ。

臣&美緒

・・・まあ、でも、じんさんの相手はりすちゃんだし・・・
じんさんが他の人に取りられる心配はないからそれはそれでよしによつと

美緒はそう思いながら、姉である臣とくっ付きながら歩いた。

でもまあ、退屈だわ・・・全然怖くないし、私もおみ姉も肝試しとか平気だからな・・・まあそう考えると逆にじんさんとペアを組まなくてよかったかも、怖がらない女の子なんてかわいくない印象を受けるかもしれないからな

のんきにそんな事を考える美緒。

臣もいつもの無表情でのんびりと歩いていた。

・・・でも、いつかじんさんと付き合う事になったとき・・・お

み姉がお化け屋敷とかで一切怖がらなかつたら・・・それはそれでドン引きされるかも！？それじゃ危ないわ！

「おみ姉！」

「え？・・・どうしたの？」

「おみ姉怖がつたことつてある？」

「・・・ない」

「じゃあさ！少しは怖がる練習した方がいいよ！」

「・・・なんで？」

「だって！例えば文化祭とかでお化け屋敷の出し物の時、お友達が脅かす役だつたらさ、全然怖がらなかつたら相手がかawaiiそうじゃん！ね？お友達には親切にしないと」

「・・・そつか」

「うんうん！じゃあさ、まずは驚いたふりをしてみて」

「・・・きやく・・・？」

棒読みな上に顔の表情を一切変えず怖がるマネをした臣。

・・・いや、どうしよう・・・え？これどうすればいいの？

戸惑う美緒、だが、何も言わないわけにはいかない。

「・・・ほら、なんか、もっと、本当に怖がつているように」

「・・・きやく」

「・・・おみ姉、やる気、ある？」

少し怒り出す美緒。

「ご、ごめん・・・本当・・・ごめん・・・」

不安な表情になり涙目になる臣。

・・・それよ！！！！

「そつだよ！おみ姉泣けばいいんだよ！」

「・・・え？」

「女の涙は武器！特におみ姉の涙を見た日には世界が変わるぐらいだから効果は抜群！」

「・・・何を言ってるの？」

月の下で、二人の姉妹が仲良くそんな話をしていた。

奈絵美&慎

「・・・ことごとく失敗しているね」

「・・・そうだな」

「海ではじん君を悩殺できた、温泉の時はいまいちだったけど、それでも他の子よりはリードしていたはずだ！」

「他の子？誰だそれは？そんなの知らんな」

「・・・あの、その軽い男口調止めてもらえるかなえみちゃん？」

「お前こそ、男の癖に甲高い声まで出して、情けない」

「これは地声ですー！全く、なえみちゃんにはもうちょっと女の子らしさが必要だよ」

「お前には男らしさが必要だな」

「はあ、生意気な態度が許されるのは中学生までのお子様か幼馴染だけだよ、高校生の女の子なら、かわいく！可憐で！優しい性格！この三拍子を守らなきゃ」

「お前は男である条件を守っているのか？」

口答えをする奈絵美に、慎は鋭い目を向けた。

「・・・素直じゃないと、その折角のかわいさが無駄になるよ」

怒気を含ませたその視線に、奈絵美は少し不安になる。

「・・・私だって、別に、男口調が好きなのでもないし、素直になりたいけど・・・この性格のほうが、じんは好きはずだもん」

「・・・はい？」

「・・・だって、だって！じんはようこにだけは優しいもん！私見てたんだから！小さい頃からじんはようこと一緒にさ！小学生の時に私もじんと友達になったけど、じんはいつもようこの側にいたもん！・・・私も、ようこみたいになれば・・・じんは、振り向いてくれるかもしれないから・・・だから、好かれる女の子になろう」

と」

「・・・素直な自分を出さない子に、なびく男なんて・・・カスバ
っかりだぜ？」

慎ははにかみながら、奈絵美にそう言った。

・・・つたく、じんも罪な男だな・・・一人の女の子をここまで
夢中にさせるなんて・・・まあ、僕も・・・君に惚れた人間の一人
だけだね

月は全員に、平等に降り注いでいた。

そんな感じで、夏休みの思い出は作られていく。

タイプ18「夏の旅行だ！恋のバトル其の五」(後書き)

感想評価ランキング投票をぜひお願いします！

夏の旅行だ！恋のバトル終結！

よい子は寝る時間、がやってきました。

みんなの部屋も一応電気は消して眠ったふりをしています。

え？なんでそんな事するかって？

あれだ、寝込み襲うためだよ。もちろん禁止行為ですよ

北崎&音恩&しゅう

「海、温泉、そして肝試しですら女の子とイチャイチャできなかった今！」

「立ち上がるべきだよなあ！」

「無論だ！女子の部屋へどつきり登場こそ男のロマンだ！」

北崎と音恩としゅうはすでに思考回路が麻痺して自殺行為に入ろうとしていた。

「でだ、まずは手ごろなひじり&おみ&りすちゃんの部屋に侵入しようと思うのだが」

「てめえ！あつし！まだひじりちゃんに未練があるのか！？バカだろ！おみがいる部屋なんて入ったら最後屍として発見されるぞ！！ここはみおちゃんのいる部屋に侵入すべきだ！」

「こらねお！お前こそみおちゃん狙いだろ！このロリコンが！！お前の場合本当に犯罪に走りそうだからここはしずくちゃんのいる部屋に！」

「「ようこがいるじゃねえかあ！！」」

北崎と音恩のダブルツツコミが決まった。

「ふう、お前らの事はバカだと分かっていたつもりだが・・・ここまでバカだとはな」

北崎が眉間を押さえながらそう言った。

「それはこつちの台詞だぜ？一番安全な部屋を指定してやっているのによろ？バカだろお前ら」
音恩はガンを飛ばしながら言う。

「どうやら貴様らには鉄拳で分からせるしかないようだな、殺す勢いでやるから死ぬなよ？」

しゅうが本気の顔でそう言いながら指の関節を鳴らし始めた。

「『死ぬなよバカどもがああ！！！！』」

ここに、本物のバカ達が本当に馬鹿らしいことでバカな事をした。

骸骨&慎&将騎

この部屋では三人が既に布団を敷いて寝ていた、様に見えるが、本当に寝ているのは将騎のみである。

さて・・・そろそろなえみちゃんの助太刀にでも慎がゆらりと体を起こして布団から出る。

「どこへ行くのですか？」

骸骨が起き上がって慎に声をかけた。

「・・・ちよつと、夜の旅館を探検に」

「夜更かしは体に悪いですよ、それに夜なんですから他のお客さんに迷惑がかかりますよ」

「・・・それ以外に、理由があるんでしょう？ようすけさん」

振り返って不敵な笑みを浮かべる慎。

「・・・なんやこいつ・・・やつぱ危険人物やな」

「他の理由？私にはわかりませんねえ」

「あなたは恐らく従兄弟であるひじりちゃんの味方なんですよ？いくらなんでもわかりますよ、この部屋割りだって、仕組んだのはあなただ」

「・・・お見通し・・・ってわけか」

「そうそう、あなた、関西弁なんですよ？」

「な！何でそないなことまで！？」

「どんなにうまく隠したつもりでも、時折見せるちょっとした発音のなまりで、わかつちやいますよ」

「・・・一本取られたわ、あんた、只者とちゃうで」

「誉め言葉として受け取っておきましょう」

不敵な笑みの慎と、苦笑いの骸骨。

「行くつちゆうんなら、邪魔させてもらうで」

「そうでしょうね、では、一手交えましょうか」

二人はお互いに構えながら、静かに戦いは始まった。

奈絵美&美緒&辰来

電気の消された暗闇、そして畳十五畳ほどの空間で、三人はお互いの気配を探り合っていた。

うゝん、みおちゃんとたつき君に気付かれないでどうやって部屋を出ようかな・・・

奈絵美は確かに感じる二人の視線を受け止めながら困っていた。

なえみさん、申し訳ありませんが、今夜はぜひとも我が姉にチャンスを譲ってください！

辰来が罪悪感を必死に胸の中に抑えてそう心に呟いた。

なえみさん・・・お願い！今はじつとして！おみ姉のために！美緒も心の中でそう懇願しながら奈絵美を見つめていた。

数分後

・・・ね・・・眠い！！

辰来が襲い来る睡魔と激しく争っていた。

くっ！・・・こんなところで・・・負けてたまるか！お姉ちゃんのために！！少しでも恩返しするために！！僕は！僕はああ！！・・・

既に思考回路が半分眠っている最中、辰来は視線を美緒に向けた。

「・・・ス・・・ス・・・ス・・・」

ね・・・寝てる！？みおちゃん寝てるよ！！・・・いや、寝顔がすごくかわいい・・・っは！何を考えているんだ僕は！！しっかりしろ！今はなえみさんを監視しなきゃ！

寝そつな自分の顔面に拳をぶつけながら必死に起きようとする辰来。

死ぬ気でがんばれ！！俺！！ファイトだ！！僕！！

一人称がこんがらがってきた辰来、それでも必死に起きていた。

既に奈絵美も寝てしまっていることに気付かずに・・・。

哀れな弟の切なる願いは届くのだろうか？

羊&臣&栗鼠

この部屋では、栗鼠が既に眠っており、一見静かに見えた。

だが、臣と羊の戦いは、既に始まっていた。

「・・・ひじり・・・どうした？寝れないのか？」

臣が目の下にクマを作りながら布団に横たわっていた。

「お、おみこそ・・・寝たほうがいいんじゃない？」

羊は起き上がって既に10杯目を超えるブラックコーヒーを飲んでいた。

うう、まさかおみがこんなに長く起きているなんて・・・でも、私には『無糖ブラックコーヒー』『カフェイン80%増量』があるんだから、寝るわけ無いわ

絶対体に悪い危険な飲料物を大量に摂取した羊は勝ち誇った顔をしていた。

もちろん、体に害なので多分救急車を呼ぶはめになると思う。

．．．．．ひじり寝ないな．．．このままだと、じんの部屋にいけない．．．どうしよう

睡魔を必死に払いのけながら臣は目を開けていた。

．．．．．苦しい．．．でも、悪くない感じ．．．まだがんばれそう．．．

Mの性格がかなり役に立っているようだ。

小一時間経過

．．．．．なんだろっ、コーヒーを飲む度に．．．頭痛と吐き気が．．．きもぢわるい

顔を悪くしながら羊が20杯を越えるコーヒーを飲みきった。

すでに眠いとかそんな甘い状況ではない、多分死の一手手前だと思われる。

．．．．．ふらふらする．．．なんか、息も荒い．．．でも気持ちいいかも．．．苦しいけれど．．．あれ？目の前が．．．揺れてる．．．なんか．．．耳鳴りが．．．

二人がいよいよ限界を超えそうになってきた、そして．．．。

「「ボタン！」」

二人は仲良く夜空のお星様になりました。いや、死んでないけどね。

狼&要弧&雫

いよいよ、重要人物たちの部屋に入ります。
果たして．．．一体どうなっているのか？

暗い部屋、畳に敷かれた三つの布団。

その三つの布団は隣に幅をあけずに密着していた。

・・・俺、ただいま究極な状況に陥っております

狼が誰に言うわけでもなく一人で心の言葉を実況した。

密着した布団の真ん中はもちろん狼、

右手に寝ておられる要弧殿は狼の右腕を腕枕にして密着して寝ておられます。狼と要弧の顔の距離、約5センチ程。

代わって左手に寝ておられる雫殿は狼の腰に手を回して抱きついて寝ておられます。体はもちろんぴったりと密着。

てか要するに三人で仲良くくっ付きあいながら寝ています。

しかも近距離であどけない寝顔がばっちり見える。

おいおい狼！さすがにここまでされたらお前も鈍感ではいられないだろ？

さあどうだ！なんか言ってみろ！！

・・・暑苦しい・・・

どうやらこいつは人類史上最強の鈍感最低狼の称号を神より授与される程の鈍感力どんかんりよくを持っているようだ。

まったく、今は夏だぞ？こんなに近づかれたら暑くて寝れねえだろうが！・・・と言っても、まさかここで俺が下手に動いてこいつらの目を覚まさせたら・・・絶対怒るぞこの二人は！！いかん！それだけは避けねば・・・だが・・・寝たい・・・でも、暑くて寝れない・・・だが・・・二人をへたに退かせば目を覚まされて殺される・・・やべえ、俺どうすりゃいいんだよ！？

狼が心の中で葛藤していると、要弧が動き始めた。

「・・・」

ウェイト！待ってくれ！ちょ！これ以上近づいたら！！

要弧が寝ぼけているのかわざとなのか、更に狼の顔に顔を近づけた。

・・・ち、近い・・・

さすがに赤くなる狼。

そして要弧の寝顔を見つめる。

・・・まったく、なんだよ・・・いつもガン飛ばした表情の癖に・・・
・寝顔は・・・かわいいじゃねえか

そう思ってから、更に赤くなる狼。

な、何考えてんだ俺？しっかりしろ！変な気を起こしたら殺されるぞ！！冷静だ、冷静になれ！深呼吸深呼吸

気を落ち着かせようとする狼、一先ずこれ以上要弧と近距離で向かい合っていたら身が持たないので優しく要弧を動かす狼。

まあ・・・ここぐらいでいいだろ

要弧を離して、安堵した狼。だが次なる試練が訪れる。

「・・・じ・・・ん・・・」

ジュワッ！？

雫がいきなり名前を呼んだので一時的にウルトラジンになった狼。だが、それが寝言だと言う事に気付き胸を撫で下ろす。

まったく、寿命が半分になっただけ

「・・・じ・・・ん・・・きらいに・・・ならないで・・・」

その台詞に、狼は本当に驚愕した。

・・・ジュワッ？

ウルトラジンが再発。

な、なに言ってたんだこいつ？嫌いにならないでって・・・そもそもお前が俺を嫌ってるんじゃないかよ・・・なに？もしかしてわざ

と！？今の寝言わざと！？？
完璧動揺する狼。

目がまだウルトラジンになっている。

「……………じ……………ん……………」

だが、雫の表情は、何処か悲しげだった。
今にも泣きそうな、いつもふざけている雫の表情ではなかった。
それに気付いた狼は、少し困った顔をしたが、雫を見て言った。

「……………別に、お前の事……………嫌いじゃねえよ……………」

……………って、聞こえるわけねえか

狼はそう思いながらも、少し微笑んだ。
そのまま目を閉じて寝ようとする。

狼は気付かなかったが、狼の台詞の後、雫も……………。

うれしそうに笑っていた。

翌朝

バスに集合する一行。

「んだよ、遅刻者が多いな？朝の集合時間はきちんと伝えたはずだろ？」

狼が苛立ちをあらわにしながらそう言った。

「す、すみません……………遅くなりました」

辰来がフラフラの状態で現れた。後ろには奈絵美と美緒もいる。

「ちよっと、たつき君すごいクマだよ？どうしたの？」

「いや……………その……………ちよっと、いろいろありまして」

栗が心配そうに辰来をみて言った。

「全く、どうせはしゃいでろくに寝なかつたんだろ？これだから子供は」

要弧が、よもや辰来が一晩中あんなのために睡魔と戦っていた事を知るはずも無く、辰来に説教をした。

「・・・お姉ちゃん・・・なんか、元気になったね

気絶寸前の最中、辰来はそう思っていた。

続いて、なぜか慎と骸骨が殴りあつた後のようにボロボロの状態でやってきた。その後ろには元気いっぱいの将騎。

「・・・どうしたんだ二人は？」

「さあ、何を聞いても答えてくれないので何が起きたのかわかりません」

将騎は正直に狼にそう言った。

今度はバカ三人組が体中に包帯を巻いて出て来た。

「・・・いや、聞くだけ無駄だから喋らなくていい、乗れ」

狼が冷たく三人にそう言った。

そして、フラフラの羊と臣が栗鼠に支えられながらやっと来た。

「・・・一応聞くが・・・どうした？」

「お姉ちゃんはカフェインの取り過ぎで体調不良、おみさんは完璧寝不足、正直重症よ」

栗鼠が淡々と状況を説明した。

一同がバスに乗車する。

「・・・なんだよ、昨日の夜戦争でもあつたのか？」

狼の問いかけに、全員が声をそろえて言った。

『なんでもない・・・』

この最後のバス乗車の時、なんだか全員の心が一つになった気がし

た夏の旅行であつた。

夏の旅行だ！恋のバトル終結！（後書き）

さあ、今度は文化祭だな。

ちなみにアンケートも終了いたします！投票してください！皆様、本当にありがとうございました！

タイプ19「文化祭は準備期間がやっぱ楽しいよな、うん」(前書き)

今回は前もって言うておきますが、非常に短くもしかすると手抜きの内容に見えるかもしれません、ですが決してそういうわけではないので広い心で受け止めてください。

タイプ19「文化祭は準備期間がやっぱ楽しいよな、うん」

季節はすっかり夏から脱却しましたね。皆様いかがお過ごしでしょうか？

秋に近づくといろいろと面倒な事があります、テストとかテストとか、後・・・テストとか。

まあそんなものは無視して、とりあえず・・・。

狼と羊と奈絵美は三人で文化祭について話し合っています。

「まったく、なんでたった三人しかいないんだよ？おかしいだろ？」
狼が文句を言いながら教室のイスに座っていた。

「仕方がないだろう、今ここにいる三名を除いては全員テスト赤点、強制補習に駆り出されているのだからな」

奈絵美が黒板の前に立ってそう言った。

てか、どれだけ馬鹿ばかりなのようちのクラスは？

羊が机に足をのせて偉そうに座りながらそう思っていた。

「っておい！お前なんで偉そうに座っているんだよ！てか行儀悪いぞ！」

そんな堅いこと言わないでよ、リラックスリラックス」

「ひじり、女の子なのにはしたないぞ、パンツ見えてる」

「え？ちょ、まじ！？ってキャ！」

慌てたため体制を崩し床にこけた羊。

「いたたた」

「・・・どんくさいな

ってるさい！

「で、本題に入るが・・・ズバリ、文化祭の内容は何にするか」
「はい！」

羊が勢いよく手を上げた。

「ひじりくん、どうぞ」

「定番のメイド喫茶！これしかないでしょ！　ふふふ、じん&じずくのラブラブ計画はまだ続いているのよ！」

「残念だが却下」

奈絵美はあつさりとそう言った。

「ええ！なんで!？」

「去年あまりにもメイド喫茶をやるクラスが多くてね、つまらないという事で三年生のクラスのみメイド喫茶を許されている」

・・・終わった

絶望に打ちひしがれる羊をよそに、今度は狼が手を上げた。

「いいかな？」

「じんくん、どうぞ」

「一年に一度の大イベント、それが文化祭だ。なのに、メイド喫茶などのようなありふれた茶番で終わっていいはずがない！そうだろう！」

「う、うむ、そうかもしれんな」

「更に！お化け屋敷だの映画作りだの、そんなもの所詮素人が行うおままごと！どうせやるなら完璧かつインパクトのある最高の内容にしようではないか！」

「ほう、それで？完璧かつインパクトのある最高の内容とは？」

「コスプレ喫茶！これしかないだろ！」

「散々もったいぶっておいて結局それかああああ！！！」

奈絵美の強烈膝蹴りが狼の顎にクリーンヒットした。

「メイド喫茶と何が違う！一緒だろ！」

「す、すびばせん」

顎が外れかけながらも狼は一応謝った。

「全く、何でそんなメイドだのコスプレなどというものにこだわる？単純な喫茶店ではダメなのか？」

「男のロマンと夢を叶えてくれるのがメイド、またはコスプレなの

よ」

「お前は女だろうが」

いや、男だけだな

「とにかく、喫茶店なんてものは在り来たりすぎる、三日間も文化祭はあるのだから長続きのするものを考えた方が利口だろう」

「長続きするもの？写真展とか絵画出展？」

「準備に時間がかかる、それに今から絵など描いても間に合わないだろう？」

「じゃあアレだ、研究レポートとかならさつさと調べて簡単にまとめれば出展できる」

「それこそ大イベントである文化祭にしては味気のなさ過ぎる内容だろう？」

「文句が多いな」

「そうだそうだ、お前も考えたらどうだよ？」

羊と狼がブーイングをする、すると、奈絵美は余裕の笑みを見せた。

「ふっ、私の案が聞きたいのだな？」

「おお！何かいいアイデアが！？」

羊が期待の眼差しで奈絵美を見た。

「劇・・・なんてどうだ？」

それこそ在り来たりじゃねえかああああ！！！！

狼と羊は固まった。

「・・・どうした？」

「・・・いや、どうしたって言うか・・・その」

「いやさあ、まあ、劇なんて・・・ちょっとワンパターンじゃないか？」

「ふふふ、私がただの劇を考えるとでも思っただか？」

「え？どういうこと？」

羊がそう聞くと、奈絵美は自信満々に答えた。

「誰も舞台の上で劇をするとは言っていない、野外ステージとしてお客さんと同じ目線でアクションステージを繰り広げるのだよ」

悪戯な笑みを浮かべながら、奈絵美がそう言うのを二人はただ見ていただけだった。

すごい！すごいよなえみちゃん！！

いや、ちよつと無茶だろ？

そんな事ないよ！完璧かつインパクトのある最高の内容だよ！

俺はやっぱり女子達がコスプレをしてウェイトレスをしてくれる光景を見るほうがいいな

あ？てめえなんか言ったか？

・・・いいえ、何もないです

羊の剣幕に、顔を背けた狼だった。

タイプ19「文化祭は準備期間がやっぱ楽しいよな、うん」(後書き)

次回予告！

最近しずくにストーキングの被害が出たそうだ、要するにストーリーに狙われているらしい。それをひじりが尋常じゃないほど心配しているのだが、俺はどっちかと言うとストーリーカーの奴が死体で発見されるのではないかと心配している。

まあとにかく、次回

「ストーリーカーと追っかけの違いって何？」

お楽しみに。

てかこれあるアニメを意識した次回予告だよな？

b y 狼

てか文化祭はどうなったのよ？

b y 羊

タイプ20「ストーカーと追っかけの違いって何？」

恋をする人間には二種類ある。

純粹に犯罪手前のジョークで終わらせられる『追っかけ』と、いや、ちょ、お前それ犯罪だから？みたいな『ストーカー』の二種類である。

「私さあ、最近誰かに四六時中見られている感じがするの」

雫がいつものメンバーで弁当を食べている時ふとそう言った。

「・・・それっていつもの事だろ？」

要弧が特に気にせずそう言った。

「いや、そりや学校で注目を浴びているのはいつもの事なんだけど、家の中でも視線を感じるのよ・・・気のせいかな？」

「気のせい気のせい、しずくの家に侵入なんて無理に決まってるだろ？」

要弧がサンドイッチをほう張りながらそう言った。

・・・心配だ・・・

そう心に呟いたのは、もちろん羊。

この御時世、ストーカーの手口もますます凶悪かつハイテクになってきている。しずくは特にかわいいもんだからそれに群がる害虫だってわんさかというはずだし・・・しかもしずくはこのメンバーの中では一番か弱い！　へそう思っているのは羊だけです！　こういうときこそ守らなきゃ！　よし！

「じん！折り入って相談が！」

そう言って羊は狼の方を振り向いた。

「へえ、おみって料理上手いな、このたまご焼きうまいよ」

「・・・そ、そうか・・・こ、今度また、作って・・・いいか？」
「まじ！そりゃ助かるぜ！」

二人で仲良くお食事中。

「この誤解だけはそこらじゅうに振りまくバカおおかみがあああ
！！！！！」

出た！羊の得意技！クロスバスター！！

説明しよう、クロスバスターとは要するに自分の腕を交差させて相手の首を絞める技である！まあつまりは首絞め技みたいな？

「グフツ！ヘルプ！ヘルプ！ガハツ！！ちょ！死ぬって！！」

「当然の制裁よ！てか死ぬ！この際だから地獄見て来い！！」

「・・・ひじりとじんって仲いいね」

「まあな、だがそろそろ止めないとじんが死ぬぞ？」

臣と奈絵美がのんきにそんな会話をしていた。

「はあ？しずくのボディーガード？」

「そう！か弱いしずくを守るために一役買っってわけ！」

狼が露骨に嫌な顔をした。

「なによ？何か不満でもあるの？言いたい事があるなら言いなさいよ！」

「じゃあこの際だから言わせてもらおうが！」

「ただし『やりたくない』という選択肢はないから」

終わった・・・

「はい、言いたい事はないのね！決定！」

「いや！ある！オレよりもようこのほうが適役だと思います！」

「は？やだよ、お前がやれ」

要弧はあっさり狼を見捨てた。

「だ、だったら！警察行け警察！」

「馬鹿だな君は、警察は実害がなければ動いてくれないんだよ、それぐらい常識だ」

今度は奈絵美が冷たく言い放った。

「・・・ほら、別にみんなで帰ればいいじゃん」

「・・・しずくは・・・部活の掃除当番だから・・・いつも帰るの遅い」

「それぐらい待ってやれよ」

「・・・暗い夜道を、女子だけのグループで帰っていたら・・・それこそ狙われる」

「・・・じゃあ・・・適当な男捕まえて」

「・・・それがお前」

「ああ！なるほど、っておい！！」

狼が頑なに拒絶していると、雫がポツリと言った。

「いいわよ・・・そんなに私と一緒に帰るのがいやなら・・・無理には頼まないわ」

場の空気が凍る。

え？やばいぞこの空気、オレだよな？オレがなんだかんだ言っただけ拒否しているからこんな気まずい空気になっちゃったんだよな？やばいって！重いよ！空気が重過ぎるよ！あと四人の視線が痛いよ！みんなオレを睨んでいるよ！あの目には殺意がこもっているよおおお！！

「・・・一緒に帰ろうぜ！」

狼はそりやもう爽やかにそう言った。

帰り道

日は既に沈んでおり、本当に真っ暗な夜道を、狼と羊と雫が三人で帰っていた。

「本当に暗いね・・・掃除当番ってしずくだけなの？」

「他にもいるけど、みんな私と別方向だから」

「ほお、お前も大変なんだな」

「そうそう、暇人のじんとは全然違って忙しいのよ」

「へいへい、そうですか」

三人がゆつくり歩いていると、狼が後ろに気配を感じた。

「・・・さつきからずっと付いて来ているな」

「え！？どこにいるのよ!？」

「シッ!しずく、後ろを振り向かないで、気付かないふりをしてて」

「え?・・・う、うん」

「次、右に曲がってみろ」

三人は右に曲がる、すると、後ろの気配も右についてきた。

「もう一度右に行って」

やはり、後ろの気配は三人の後を追いかけている。

「間違いないな・・・すぐにでも捕まえたいが・・・もしかすると

武器を持っているかもしれない、迂闊には近づけないな」

「人通りの多いところに行った方が安全だけど・・・そうになるとス

トーカーが人ごみに紛れて識別できなくなるなっちゃうし」

「一番いいのは交番に駆け込むことだな、実際に尾行されているわ

けだからさすがの警察もこれですずくを無視することはできない、

だが生憎、近くに交番はない」

「そうなると・・・逃げた方がいいかしら?」

「そうだな、恐らくストーカーはしずくの家を知っている、だから

逆にしずくの家で待ち伏せをして捕まえた方が利口だな」

「そうね、そうしましょう」

・・・あなた達・・・一体何者よ?

雫が二人の会話を聞きながら少しひいていた。

「いいか?オレの合図でお前ら先に走れ、俺は後ろのストーカーに

注意しながら追いかける」

「了解！」

「・・・別に心配は特にしてないけど・・・気をつけてよ」

「わかってるって・・・今だ！」

狼の声に反応して、羊と雫は一斉に走った。

「しずくもひじりも運動神経抜群だ、追いつかれることはまずない・
・問題は、後ろの奴をどうするかだな

狼が後ろを少し振り返った。

すると白いブレザーを着た人間が猛スピードで走ってきていた。

「ウソオオオ!!? ストーカー足速ええええ!!!!」

「いや! つつこむ所がおかしいぞオレ! 正しくは『なんで追いかけてきてるんだよ!』だった! くそ! やられた!!」

「そんな無駄な事を考えていたら、みるみる後ろのストーカーが狼に近づいてきた。」

「ちっ! こうなったら攻撃あるのみだ!」

狼が意を決してストーカーにタックルを決めた。

「きゃ!!」

「・・・『きゃ』?・・・」

狼がストーカーを押し倒す、だがそのストーカーがやけに細身なのに気がついた。

「・・・あれ?」

「ご、ごめんなさい! 私怪しいものじゃないです! 陸上部所属の力スミです!」

「・・・いや、知らない」

「すみませんマネージャーさん! 私! どうしてもしずくちゃんの近

くにいたくて・・・つい『追っかけ』をしちゃいました！・・・やっぱり、迷惑ですか？」

「マネージャーって言われたの久しぶりだな あ、いや、なんかしずくが最近誰かに見られてるって言ってたからさ、ストーカーだと思っただけど・・・まあ追っかけなら別に気にするほどの事じゃないな」

「ほ、本当ですか！追っかけてもいいんですか！」

「いや、まあ節度を守っていればいいさ・・・でも、夜道の追っかけは誤解を生むから止めてね？」

「わかりました！じゃあ朝の追っかけと休日のお出かけの追っかけしかない事にします！」

「いや・・・本人のプライベートを考えると・・・朝の追っかけだけにした方が」

「そ、そうですか・・・わかりました！」

「他は特にしてないよね？」

「はい！盗聴、盗撮、ゴミチェック、住宅侵入、所持品の盗難、毎日メール&電話以外はやってません！」

「うん、それならいいよ・・・っておい！」

「はい？」

「全部犯罪じゃん！？やってることがプロのストーカーと一緒にだよ！！」

「そ、そんなぁ・・・これは、好きだからこそやってしまうことで」

「・・・あのなぁ、好きな相手を知ることとは悪いことじゃない・・・でも一方的にお前がいくら雲の事が好きでしずくの事を何でも知っていても・・・しずくがお前の事を一切知らなかったら・・・意味ないんだぞ・・・相手を知る前に、相手に知ってもらえ」

狼がそう優しく説き伏せる。

「・・・わかり・・・ました」

女子生徒はゆつくりと、そう言った。

「じん！！大丈夫！？まさかストーカーに襲われたの！？」

そこへ雫登場。

「え？」

「あ」

「・・・は！」

雫とストーカーと狼の三人が固まる。

「・・・じん・・・なに女の子を襲っているの？」

「いや、違う！こいつがお前を追いかけていた奴であって！」

「・・・その体勢は何？」

女の子の上に馬乗り。

「・・・いや、これには深いわけが」

「・・・言い訳があるのなら聞こう」

「いやじつはコイツ足がくそ速くてさ、なんでも陸上」

「だが！聞くだけだぁぁぁあ！！」

雫はそう言つと狼に強烈なかかと落としを決めた。

「だはっ！！！！結局俺はこうなるんだな・・・」

タイプ20「ストーカーと追っかけの違いって何？」（後書き）

感想評価まってるZe！

後キャラクターへの質問開始だ！

コイツ誰だヨ！みたいな質問から！

好きな食べ物は？とかなんでもいいぜ！

キャラの名前がわからなけりゃ何とか自分で表現してね！では！待
つてます！

ショートストーリーズ：秋ってどうよ？（前書き）

ショートストーリーズってのはあれだ、
短いお話が複数あるお話なんだよ。

ショートストーリーズ：秋ってどうよ？

秋ですか？今、秋なんですか？

紅葉してますか？秋風吹いてますか？落ち葉ありますか？

まあ正直そんな事はどうでもいいのですが一応季節は秋ってことで、本日は秋を満喫しちゃおう！なんてテーマでやっていきます。はい。

ファイル1：スポーツの秋

「ああ？テニス？」

狼はめんどくさそうな表情で北崎にそう言った。

「そうそう、ほら？今はスポーツの秋、ぜひともスポーツがしたい気分なんだ」

「唐突だな、第一そんなのナンパ野郎とか変態とかしょうきとやれよ」

「しょうき以外はひどい呼び名だな・・・いや、それに三人はそれぞれ別の秋を満喫するとか言ってどこかへ行ってしまうて・・・まあそんな事より、テニスしようぜ？」

「ったく、オレテニスした事ないぞ？」

「奇遇だな、オレもだ」

「ケンカ売ってるのかてめえは？」

「まてまて、テニスを知っている人間とダブルスを組めばいいじゃないか？簡単だろ？」

「なるほど、それなら確かにできるな」

「秋はスポーツで汗を流すのが一番！誰を呼ぶかは君に任せよう」

「そうか、わかった」

「うん、では！オレは道具とテニスコートの整備をしているからそこで落ち合おう」

十分後

「イケメン崎く、呼んできたぜ」

「おおそうか、オレも準備がで・き・た・．．．」

狼の後ろには臣と要弧がいた。

「．．．．え？」

「なんだよ？誰でもいいからできる奴呼んできたぜ？」

「．．．．ふう、どうやらオレはなにやら幻覚が見えているようだ、ここは深呼吸だな」

「テニスか、丁度先週テニス部女子の助っ人をしたから正直飽きているんだけどな」

要弧がマイラケットを手に持ちながらそう言った。

「．．．．私は、好きだな．．．テニス」

「ほらイケメン崎、どっちとタッグを組む？」

「いや、お前今の状況わかってる？これやばいよ、やばいって、目の前にいつ爆発するかわからない核弾頭があるのにそれと一緒にテニスするのと一緒に位やばいぞ？」

「わけわかんねえよ、遊びたいんならさっさとはじめようぜ？」

じんに頼んだオレが浅はかだった．．．

北崎はとりあえず現実を受け止める事にした。

ダブルス 狼&臣ペア - 北崎&要弧ペア

「よし、まずはサーブだな？」

「．．．．頼むぞ、じん」

狼がボールを高く上げてラケットを勢いよく振る。

そしてボールは見事な弧を描きながら北崎の下へ。

「ふむ、これを打ち返せばいいんだな」

「おう、失敗したら死刑な」

「ちょ！罪が重すぎる！！」

「当然だ、このゲームで負けた敗者チームには勝者チームにパフェをおごるといふバツゲームがあるんだ、負ければ死あるのみ、勝てばパフェだ！」

「命の代償がパフェとはな・・・悲しすぎる」

「ほら！ぼさつとしてる場合か影薄男！打ち返せ！」

「か！影薄とはなんだ！オレはツツコミ役だ！」

そんな事を言いながらもボールを打ち返すためにラケットを振り上げた北崎。

「おりゃああああ！！！！」

「スカッ」

「・・・あ」

見事空振り。

「・・・ほう？死刑を選んだか？」

「・・・ふう、テニスなんて・・・人間のすることじゃないな」
とりあえず北崎は永眠する事となった。

ファイル2：読書の秋

「じんさん！読書しましよようよ！」

将騎が本を片手に狼にそう言った。

「いや、別にいい」

「・・・そ、そうですか」

終

ファイル3：芸術の秋

「じん！オレと共に美の探索をしないか？」

しゅうがカメラを片手に狼に近寄ってきた。

「気持ち悪いな、くねくねしてないでしゃきつとしろよ」

「おいおい、今のオレは優雅なんだ、だからくねくねしても仕方ないんだぜ！」

「わけのわからん奴だな」

「それより！オレと美の鑑賞をしようぜ！」

「美の探索じゃないのか？」

「小さいことは気にせず！女子のベリーグッドナイスシャッターショットフォトを集めるんだ！」

「英語おかしいぞお前？」

とりあえずグランドに来た二人。

「見たまえ、ラクロス部女子だ」

「それがどうした？」

「彼女達のプレーはまさに芸術、シャッターを押すオレの指を誰も止める事はできない！」

「悪いが変態と行動を共にする気はない、オレは帰る」

「実はこの後美少女ばかりで有名な『茶道部』にお邪魔しようと思うんだ、君も来ないかい？」

「戦友よ！」

変わり身早いなじん・・・

二人がグランドで撮影を終えるといよいよ茶道部の和室へ。

「茶道部で要チェックなのは部長の香川さんと二年の水島さん、二人とも温和な性格で守ってあげたくなる女の子上位にランクインされている」

「なんだ？一位じゃないのか？」

「一位はひじりちゃんに決まってるだろ！」

「……へー」

「どうした？なんか心なしか目が白いよ？」

「なんでもねえ」

狼がそう言つと、いきなり強い風が吹いた。

「うわ！冷た！」

「うわっ！シャッターチャンス！」

「は？なにわけわかんねえ事言つてんだ？しゅっ？」

「ほら！あそこに女子がいてさっき風でスカートが！」

「なに！？」

そして振り返る狼、だが……そこにいたのは……。

「……あゝんゝたゝちゝ？」

やつべ！しずくじゃん！？

二人が茶道部にたどり着くことはなかった……。

続ファイル2：読書の秋

「あゝあ、じんさんに断られちゃったな、まあ一人で読んでいよつと」

将騎が図書室に入る。

「ん？」

「あ」

中では奈絵美がたった一人で本を読んでいた。

「……図書室では静かにな」

「……はい」

うわゝ、怖い人と一緒になっちゃったけど、すぐに帰るのも変に思われるしなあゝ

将騎は仕方なく席に座った。

なえみさんは何を読んでいるんだろ？

ふと奈絵美の本を何気なく見てみた。

へえゝ、『医療ミス』か、確か最近流行のミステリーだ、ってあの本逆さだよ！？

見事に逆さまの本を奈絵美は平然と読んでいた。

おかしいよ！絶対おかしい！

将騎はそう思っておもむろに立った。

「違う本を探そつと」

そう言いながら奈絵美の後ろへまわった。

・・・なにになに？『鈍感な彼への究極アプローチのレッスン』・・・

「ブツ！」

将騎は思わず吹いてしまった。

ちなみに将騎の意識も次の瞬間吹っ飛んだ。

ファイルファイナル：食欲の秋

「やっぱさあ、今の季節ってうまいもんが多いだろ？」

「だからなんだよ？」

音恩が狼とそんなやり取りをしていた。

「食欲の秋って要するに男が女の子を誘って食事をするシーズンってことなんだよ」

「究極の取り違いだな、思い込み激しいぞお前？」

「いいからいいから、お前の飯もおごるから！頼みがあるんだ！」
「はあ？」

レストラン

「・・・なんで私なのかなあ？」

羊がこわばった笑顔を浮かべながらそう言った。

「可愛い娘と食事をするのは男の夢だからさ」

音恩がかっこつけながらそう言った。

「だそうだ、すみませーん、国産最高和牛ステーキ一つお願いします」

狼がすました顔で注文をした。

「だそうだ、って・・・無責任に言わないでよ」

「いや、事実オレに責任はない」

「なによ、他人事みたいに」

「・・・例え他人じゃなくとも俺に責任はない」

「え？なに？君達他人同士だろ？」

元一心団体だよ

二人は暗い顔をしながらそう思った。

「ま、僕にやましい気持ちはないから、とりあえず食べて食べて」

「僕って一人称を使うようなキャラだったかお前？」

「じん、お代わりもしていいから黙っててくれ」

狼は黙る代わりに店員に追加注文をした。

「でだ、ひじりちゃん、君も好きな料理を頼んでいいんだよ？」

「まずはあなたの用件を聞いてからね、後でお金の代わりに変なものを請求されたらまったものじゃないから」

「・・・じんと違ってしっかり者なんだねひじりちゃんは」

いや、同一人物だけどね

「実は・・・僕としくちゃんのデート計画を練ってもらおうと」

「断る」

羊は露骨に怒りをあらわにしながらそう言った。

「え？・・・いや、別にいつものような軽い気持ちじゃなく、僕は真剣で」

「一度でも女を軽く扱ったような男に、しずくは渡さない！」

羊はすぐにその場で立ち上がり、さつさと店を出てしまった。

「・・・あちゃー、オレなにか地雷でも踏んだのかな？じん・・・」

「さあな、だがお前がやっぱり軽い奴だから、ひじりは怒ったのかもな」

「・・・別にオレだって、どんな女の子とでも軽く付き合うわけじゃねえよ」

「・・・ほう？」

「しずくにだけは・・・本気なんだよ」

狼は音恩の真剣な表情を見て、本気の顔だと言うことに気付いた。

「・・・別に、本気だって言うなら・・・自分でそれを伝えればいいじゃねえか」

「・・・人間、本気の恋になると多少臆病になるんだよ」

「あつそう」

狼はそう言いながら、運ばれてくる料理をドンドン食べていた。

「・・・なあ、それ全部俺が払うのか？」

「お前がおごると言ったんだろ？お前の『ひじりを連れてきて』という条件はちゃんとクリアしたぞ」

「・・・ああ、そうだな」

帰り際、音恩は携帯で親を呼ぶはめになった。

我が家

「ただいま」

「おかえり、ところでじんはん、ひじりちゃんめっちゃ怒ってたで？」

「……あれだ、害虫から友達を守ったのさ」

「……じんはん……例えば下手やな」

「な、なんだよ？」

「ひじりちゃんに何があったかぐらい、オレは悪魔なんやからわかるっちゅうねん」

「そうか、だったらあえて聞くなよ」

「せやけど……男に告白されたひじりちゃんをほっとけ言っんか！？」

「……お前何もしらねえじゃねえかよ」

「……すまん、勘でもの言うとな」

「だったら、ひじりに気を使うためにも、何があったか調べとけよ」
狼はそう言って自分の部屋に行った。

結構久しぶりの骸骨日記

『まあ、言いたい事はぎょーさんあるけど、その中から一つだけ選ぶとしたら……オレ、最近気が付いたんだけど大阪弁で日記書くのって大変なんだな、今度から標準語で書こうつと』

ショートストーリーズ：秋ってどうよ？（後書き）

空気よめ骸骨！ by 狼

さあさあ！

感想評価！投票クリック！登場人物への質問！
物語を読んだ人は絶対にしてね！

タイプ21」とりあえずバイトをやろうと思うんだが」(前書き)

小説ランキング恋愛コメディ部門ベスト10入り!!!!!!祝

これも皆様読者様のお陰です!!

これからもザ・タイプパニックをよろしく願います!!

タイプ21「とりあえずバイトをやるうと思っただが」

昨日の事、

秋かあ、涼しくなる季節に入っただな。

「……最近、出費が多すぎたな。」

「てか、食費がめちゃくちゃ増えたな……。」

「何で一ヶ月の食費がこんなにも多くなったんだ？」

「親は毎月今までと同じ金額を口座に振り込んでいる、」

「なのに……なぜか雑貨代も増えた気がする……。」

「……なあ、ひじり」

「な〜に〜？」

「羊がマンガを読みながらだらしなく返事をした。」

「……今月の貯金がもうすぐ底をつくのだが……。」

「はあ！そんな！……お金がないって事！？」

「その通りだ」

「うそでしょ！？だって……今までそんな事あった！？」

「いや、前例がない……今まで通りなのに……なぜ？」

「わからないわよ、どうするの？親に電話してすぐ振り込んでもらう？」

「おいおい、各国を飛び回っている育児放棄をしたあの二人にどうやって連絡をしろと？あの親は携帯を持っていながら仕事用であるためお前達には教えれんとはき捨てた最低な親に……どう連絡しろと？」

「う〜ん、じゃあどうすりゃいいのよ！」

「どないしたん？二人して？」

「骸骨か、いやな、今月貯金が底をつきそうぞさ」

「え？どないしたん？」

「それが原因がわからないのよ」

「……主に何の出費が増えたんな？」

「食費、及び雑貨」

狼が溜め息を洩らしながら言うと、骸骨は手を叩いて言った。

「そら増えてるに決まってるやん、オレとひじりちゃんが増えたんやから」

狼と羊が硬直した。

「……え？気付かんかったん？」

その台詞に更に気を沈める二人だった。

翌日の学校

「はあ？アルバイト？」

要弧が狼から話を聞いていた。そして返ってきた言葉。

「だから使い過ぎには気をつけるって言っただろうが！」

「いや、ひじりが増えたからさ」

「は？従兄弟が増えたからなんだよ？」

しまった！ひじりは従兄弟という設定だった！！

「……いや、ひ、ひじりがああ見えて浪費家でさ」

「ふ〜ん……それでバイトってわけか……」

「なんか短期間で高収入の奴ないか？」

「……いや、あるけど……お前じゃ無理だな」

「あるのか！頼む！紹介してくれ！」

「ばっ！絶対嫌だ！」

「なんでだよ！そんなに難しい仕事なのか！それとも危険なのか！？」

「だってあの仕事はお前にやらせたく……いや、なんでもない赤くなる要弧、だが、狼はそれでもしつこく聞いた。

「教えてくれ！紹介してくれ！頼むからさ〜」

「うるさい！うるさい！うるさい！絶対教えない！」
そう言つて要弧はそつぽを向いてしまった。

「……アルバイト？」

今度は羊が臣に相談をしていた。

「そうなの、なにかお金になりそうなのあるかな？」

「……飲食店とか？」

「ゴメン無理、私接客は向いてないの」

「……いや、それじゃあ全部ダメになっちゃうよ」

「そつか、でもやっぱり飲食店はやだな、忙しいのは好きじゃないから」

「……いや、それって仕事をする気が無いのと一緒にだよ？」

「うん、それもそうか……でもホラ！本屋のアルバイトならできそう！特に人が来ない書店とか」

「……ひじりは基本働きたくないんだね？」

「うん、まあね」

臣は困つたように苦笑いをした。

「……しずくなら、いいバイト知つてると思う」

「手間がかからなくて簡単で楽でお金がたくさんもらえるバイト？」

「……ひじりは少し苦労したほうが身の為だと思うな」

いや、苦労ならじんの頃散々かけられましたから

でも今はむしろ優遇されているよね君？

そんなツツコミが聞こえた気がしたが誰も気付かなかった。

「アルバイト？珍しいわねあんたが」

雫が意外だという顔をしながら狼にそう言つた。

「いやさあ、できればようこが隠している秘密のバイトを教えて欲しい」

「はあ？なにによ？ようこが隠している秘密のバイトって？」

「さっきようこにいいバイトがないか聞いたら、あるにはあるが
前じゃ無理だといって教えてくれなかったんだよ」

「……もしや」

「ん？なにか心当たりがあるのか？」

「……多分それって……ホストだと思う」

狼が『何ですと？』という表情で固まった。

「……おとつと、騙される所だったぜ」

「いや、騙そうなんて思ってたから」

「ようこがホスト？ありえないな、そもそもあいつは女だろ？」

「でも少なくともあんたよりはかつこいいでしょ？」

狼は心の底から傷付いた。

「……まあ、一億歩譲って、ようこがホストのバイトをしていた
なら……確かに、オレには不向きだな」

「でしょ？あんたにホストは向いてないのよ」

「うん、だが……ウェイターならできる」

「あら、それは名案ね、ウェイターならじんでも確かにできそうね」

「よし、じゃあようこに相談して紹介してもらおうか」

「あら、それなら私がしてあげるわよ？」

「ん？そうなのか？じゃあ、頼んだ！」

狼はバイトが決まった事で既に有頂天になってしまっていた。

そこへ羊も来る。

「あれ？じん、いいバイト見つけた？」

「見つけた見つけた、ウェイターの仕事だから簡単だろ」

「ふーん、じゃあ、差し詰め私はウェイトレス？」

「ひじりもやるの？だったら二人ね、早速、今日の帰りに寄るわよ」

「はやっ！今日かよ！？」

「人気のアルバイトだからなく、下手すれば定員オーバーかも」

「よし、今からでも行こう」

お前、変わり身早いぞ……

羊は黙ってそう思った。

だ^がまあ、この後これまためんどくさい事になるのだ^が・・・も
ちろん狼達はそんな事一切知らないのであつた・・・。

タイプ21「とりあえずバイトをやろうと思うんだが」(後書き)

質問返答コーナーアアアアアアアア!!!

質問にお答えします!!

ペンネームりすこ様より

『部活と成績とスタイルは?』

栗鼠「なるほど、じゃあ私が説明するね」

守多 狼

「私のバカ兄貴だ、部活は入ってない、帰宅部だ、そのくせ帰るのが遅い、なぜならようこさん達の帰りを待っているから・・・だったら自分も部活しろよ?成績は上の下、まあム力つくけど頭は悪くないって事だ、スタイルは地味!170センチで普通!黒髪で普通!見た目も普通!以上よ、まあある一部からはワイルドだのなんだのって言われているけど・・・私にはよくわからないわ」

赤城 要弧

「忘れているかもしれないけど学校では学ラン着用をしているようこさん、部活はバスケ、あと運動神経がいいから他の部活から助っ人を頼まれるわ、成績は中の下、本人いわく本気を出せばじんには勝てるらしい、スタイルはもちろんバツグン!兄貴と同じ位の身長に茶髪でストレートの肩にかかる程度の髪型、いつも怖い顔をしているらしいけど笑うとかわいいらしい・・・」

守多 羊

「最近本当に兄貴の分身なのか疑問な姉貴、部活は兄貴と一緒に帰宅部、成績も兄貴と一緒に、だけどスタイルはまったく別、身長は165くらい、髪型はようこさんより長い長髪、それで黒髪、しかも

顔はめちゃくちゃかわいくて守ってあげたい娘ナンバー1、いつも笑顔なので癒し系だと称されている・・・元男だけどね」

ちよつと多くなりそうなのでつづきは次のお話で。

タイプ22「きれいなお姉さんは好きですか？」（前書き）

ホストクラブのオーナーといえば美人なお姉さんだよな？ってこととで。

吉田 みさ 25歳 ナイトタンスिंगの若きオーナー

おい、誰だ今ダサイ名前のホストクラブって言った奴

タイプ22「きれいなお姉さんは好きですか？」

陽が昇っている時には、その時の世界つてもんがあるものだ。

それはつまり、日の沈んだ夜・・・そう、闇が支配する夜は、昼間の世界とは違うのである。

『ナイト・ダンシング』

青と黄色のネオンで光る看板に書かれた文字。夜と同じ闇を思わせる色使いをした建物。

モダンな喫茶店とは違うまさに夜の遊び場・・・ホストクラブだ。

「・・・はじめて見るが・・・予想以上に入りづらいな」

狼がホストクラブを前にビビっていた。

「・・・ようこはここでバイトしているのか？」

「厳密に言えば私もおみだけどね、ああ、あと変態と軽男」

「ねおとしゅうか・・・って知り合い多いな」

「まあ・・・知り合いが多ければその分馴染めていいと思うよ」

羊が明らかに顔を引きつらせながら無理して言った。

「・・・ひじりは止めといたほうがいいんじゃない？」

「え？な、なんで？」

「・・・お客さんはみんな女の人だけど・・・だからといって夜の世界に変わりは無いからね」

「そうか、じゃあオレ帰る」

狼が回れ右をして帰ろうとしたところを羊は回し蹴りをして止めた。

「大丈夫だもん！みんながやっているっていう仕事なら・・・私平気！」

「ぼく全然平気じゃないんですけど・・・」

頭から血を流しながら狼は精一杯の主張をしたがもちろん無視された。

「まあ、ウェイターとウェイトレスみたいな雑用をオーナー欲しがっていたし、ここは時給も高くて夜の時間帯なら好きな時間にシフト入れれるから、高校生のバイトとしてならこれ以上のものはないでしょ？」

「むしろ揃いすぎていて逆に怖いぐらいだぜ」

「そりゃあ、未成年なのにこんなお店で働いているんだから、警察や学校にばれたら・・・人生破滅ね」

「やっぱ帰る！オレにはまだ明るい未来作りをしなければならないという使命が！」

「はいはいはい、文句言わないで入るよじん！」

羊は狼を引きずる様にして店に入って行った。

暗い照明のわりには、きらびやかな感じのする店内。聞こえてくる音楽は夜の雰囲気をもっと高めるジャズ。そして・・・。

「ようこそ、ナイトダンシングへ」

出迎える本物のホスト。

右側の男は金髪のイケメン、スーツがまさに高級感溢れている。

代わって左の男は眼鏡をかけている、知的な感じのするホストだ。

「あ、シグレさんでしたか」

「うん、今日は雑用係を連れてきたの」

「雑用係とはなんだ雑用係とは」

狼が緊張しながらも律儀につつこんだ。

「へえ、シグレさんの知り合いですか？」

「ふむ、どっちもホストとしては合格だな」

「いや、ホストじゃなくてウェイターを志願します」

狼が勇ましくも意見を言った。

「ウェイター？もったいないなあ、ホストの方がいいよ絶対！」

先程から金髪の男がなぜか強く狼を誘う。

「いや、オレ極度の上がり性ですのでホストとかは荷が重いですハイ」

「そう？でも、君ならオーナーにも薦められると思うよ」

「ひろ、お喋るが過ぎるぞ？こいつはオレのダチだ、手を出すなよ？」

いつの間にか雫が男口調で強くそう言った。

「わ、わかってますよシグレさん」

おお！？明らかに年上のホストを黙らせた！ってお前何もんだよ！？

しずく・・・かつこいい

「さ、二人とも、オーナーに紹介するから付いてきて」

雫はそう言って店内の奥に進んだ。

「入って、ここがオーナーの部屋」

雫は一言そう言っているとノックもせずドアを開けた。

「オーナー？いる？」

三人がドアをくぐって中に入るが、返事がなかった。

「オーナー？」

雫が電気のスイッチを探す、その間に狼も羊も暗い部屋をゆつくりと歩く。

「えっと・・・オーナーさん？」

「おい、オーナー」

「ちよつとじん、いきなり呼び捨てはよくないよ？」

「おいおい、オーナーっていうのは名前じゃなくて職業だろ？」

「そ、そうだけど」

二人がそんな話をしていると、狼がふいに何かにつまずいた。

「な！？あぶな！！」

こけそうになるが何とか体制を整える。

「え！？どうしたのじん！」

羊がふいに動いて狼にぶつかった。

「ばかつ！倒れる！！」

バランスを完全に崩した狼は顔から地面にぶつかりそうになった。だが反射的に手を前に出して地面につけた、お陰で顔面が床に叩きつけられる事はなかった。

「あ、スイッチやつとあったよ」

雫がのんきにそう言つて電気をつける。そして明るくなる部屋。

「ふう、ようやく明るくなったか」

「・・・あら？君誰？」

狼は下からそんな声が聞こえた気がした。

おいおい、オレは今床によつんばになっているんだぜ？その更に下に人がいるつていうのかい？

狼が悪い予感を感じながらも下を向くと。

めちゃくちや美人なお姉さまに乗っかっている事に気付いた。

「・・・のわああああ！！！」

「ええ？人を押し倒しておいてそのリアクションはひどいな」

「だれ！？あんた誰！！」

狼が後ろに下がって動揺しながらそうわめく。

「あ、オーナー」

雫がポツンとそう言った。

「オーナーでしたか、バイトでウェ이터希望のじんです」

鈍感のワリには最近変り身の早いキャラになった。

「ん？シグレが連れてきたの？」

「はい、後ろの女の子はひじりつていう子で、同じくウェイトレスを希望です」

「・・・ざんねん、どっちもウェイトがしたいんだ、ホストのほうがいいのに」

「オーナー、一応私とユウとオキの大切な人なので、ホストはダメ

ですよ」

「うん、最近ライバル店が多いから期待の人材なのにな」

「い、いや、オレなんてそんなホストができるような男じゃないですよ?」

狼が言い訳のためにそう言ったが、お姉さんはにっと笑って狼に近づいた。

「……もつとよく顔を見せて？」

「え？ いや・・・あの？」

急接近するお姉さん、髪の色は金髪、ウェーブのかかったヘアー、かすかに香る甘い香り。

狼は珍しく顔を赤くさせた。

「……かわいい、お姉さんのタイプだな、君は」

え？なにこの展開？どうすればいいの？

羊は焦りながらも動く事ができなかった。

だが、雫は慣れた様子で狼の髪を掴んで後ろに引っ張った。

「いでデデええええええ!!!!」

「オーナー、こいつは精神が子供なんですから本気にしちゃうんですよ?」

「あら？本気になってくれたわお姉さんも本気だしちゃうな」

ところで俺に攻撃を加えたんだ？

狼は喋る気力もなく真つ白になりながらそう思っていた。

．．．私、気付いちやっ たな．．．きつとこの後もつとめんどくさい事になるわ！！

羊の予想はもちろん大当たりする事になるのであった。

タイプ22「きれいなお姉さんは好きですか？」（後書き）

前回のつづきいいいいいい！！！！

佐崎 雫

「姉貴が好意を抱いている&兄貴と犬猿の仲である微妙な立場のしずくさん、部活はバスケ、あと兼部として美術部、理由は絵を描くのが好きだかららしい、成績は見た目によらず下の上で毎回テストが危ない、本人いわく勉強で人生は決まらないとか、スタイルは6人の中では一番背の低い159センチ、金髪の首までしかないほどの女の子としては短い短髪、でも顔立ちはよくて男女共に人気がある、中性的な顔も特徴的」

鳥居 奈絵美

「メガネキアラにはよくメガネを外す人、しかも心なしか影が薄い・・・がんばれ、部活は特に入ってはいない、委員会があるから、まあ優等生だし、成績はもちろん上の上、頂点、めっちゃ頭いい、スタイルは164センチでしずくさんの次くらい、肩まで伸ばした黒髪がチャームポイント、雰囲気はメガネの有無で変わる、メガネ有りだと優等生でクール、メガネ無しだと姉貴に匹敵するほどかわいい・・・だったらコンタクトに代えればいいのに？」

岡 臣

「謎が多いミステリアスな美女という設定が最近Mっ娘こに変えられそうなおみさん、大丈夫か？部活はバスケ、助っ人もようこさんと同じくらいよくやる、成績は中の下でこれまたあやふや、本人いわく勉強は嫌いらしい、スタイルは173センチという女性としては長身、てか兄貴より少し高い、髪型は長髪、腰まである、え？そんなの初耳だって？だって今はじめて言ったから、すみませんby

作者 で、色は黒髪、いつもボーっとしている表情だけど、泣く時の顔は破壊力バツグンなほどドキッと来るらしい、でも笑った顔はあまり見たことないらしい・・・笑ったらどうなるんだろ？」

栗鼠「てなわけで、一応レギュラーメンバーの部活、成績、スタイルはこんな感じです、他にも疑問に思ったこと、知りたい事、または『私のイメージだったらこのキャラこうなのよ!』という質問をいつでも募集しています、他にも、感想評価、投票クリック、ぜひ読んでらしてください、まってまゝす」

タイプ23「バイトを甘く見るなよ、うん本当」(前書き)

台詞時にはキャラ達の名前をひらがな表記していましたが、自分でも薄々気付いていた読みにくさを解消するため漢字表記にしました。でもそうなると名前読めねえよ、狼でじん？羊でひじり？ざけんなよ、というコメントが来るかもしれないのでとりあえず次回はカタカナ表記でやってみてどれがいいか比べようかと思います。

あれ？まわりくどくね？

タイプ23「バイトを甘く見るなよ、うん本当」

「で？オーナー、なんで地べたで寝ていたんですか？」
雫が呆れながら聞いた。

「てへ、がんばりすぎたら倒れちゃった」

なんかめっちゃ軽く言っちゃってるけど、それって要するに貧血？

狼がとりあえずソファーに座りながらそう思った。

「さてと、とりあえず源氏名を教えて」

「ゲンジナ？」

「店で使う名前の事よ、それぐらい知っててよね」
雫が呆れるようにそう言った。

「じゃ、私着替えてくるから」

「ええ！雫行っちゃうの！」

羊がさも残念そうに言う。

「いや、仕事だから当然でしょ？また後で」
そう言って雫は出て行った。

「さてと・・・で？ホストをする気はない？」

早速オーナーが問題発言をした。

「いいですから、丁重にお断りさせていただきます」

「うーん、じゃあせめて接客の仕方はこっちの指示通りにしてよ」

「すつごく嫌な予感がするんですけど」

「ちなみに、貴女は男装してね」

「・・・はい？私？」

「うん、一応男の子が働くお店だから」

まあ・・・元男だから問題は一切ない

「で？源氏名は？」

源氏名か・・・おれはオオカミっていう漢字だし・・・それになぞらえるなら・・・ウルフ？かな？

めんどくさいなあ、羊・・・ひじり・・・セイント・・・あ、セイトでいいや

「決まった？」

「オレはウルフで」

「え！？・・・それはちよつと・・・」

「じゃあホワイトウルフで」

「そんなに狼を使いたいのならジンって言うのはどう？」

「それ俺の名前です」

「・・・じゃあ、シンにしましょう、うん、決定！」

「ちょ！よりによってあいつの名前かよ！？」

「あなたは？」

「セイト！」

「うん、それでいいや」

嫌にあっさりだな

こうして、二人の初仕事がいよいよ始まる・・・。

「夜になると、心に傷を負ったエンジェル達が舞い降りてくる・・・彼女達の翼を癒す事こそが我らホストの務め・・・さあ、夜はこれからだよ」

「音恩、気色悪いからやめろ、本当やめろ、てかお前人間やめろ」

狼が軽蔑の眼差しで音恩を見ながらそう言った。

「ひどいな、というか源氏名で呼んでくれ」

「そういえばお前の源氏名は？」

「オンオンだ」

「それは冗談か？それともお前人間やめたのか？」

「いやさあ、オーナーがさあ、勝手にさあ、決めちゃってさあ、俺

もさあ、最初はさあ、反対だったんだがさあ・・・意外とお客さんに受けたからさあ」

すねた顔で音恩は言った。

「そうか、あとその喋り方止めろ、聞き取りにくい」

『オンオン、ご指名だよ』

「早速エンジェル達がオレを呼んでるぜ、じゃ、狼、もといシン！がんばれよ！」

そう言つて音恩は休憩室から出て行つた。

「さて、オレも掃除さつさと済みますか」

狼は一人で黙々と掃除をしていた。

「にしても・・・要弧や雫に臣は今のところ見かけないが・・・あいつら働いているのか？」

のんきにそんな事を言う狼だった。

『七番テーブルドンペリ追加です』

「了解、新人！ドンペリを厨房から貰ってきてくれ」

「わかりました、おいおい・・・これでドンペリ何本目だよ？」

羊はウェイターとして上手く働いていた。

このホストクラブでは他にはない大きな厨房を用意しており、お酒の種類はかなり豊富である。

しかも専属料理人を雇つていて、食に関してはホストに並ぶほどの一級品を兼ね備えているのである。

「チャウさん、ドンペリ一本！」

「アイヨー！ドンペリダネ？すぐモツテクカラー」

その料理人が中国人であるのはもちろん企業秘密である。

てか、どうみても中華料理専門にしか見えないのにあれでフレンチシェフなんて・・・信じれないな
とことん謎の多いホストクラブだった。

「ドンペリもって来ました」

「おう新人、お前名前は？」

「ひ・・・セイトです あぶね、本名乗るところだった」

「セイトか、お前、接客は心得ているな？」

「まあ・・・はい、オーナーから教わったので」

「よし、では、七番テーブルヘッドンペリをお届けするのだ！」

「・・・わかりました うわゝ、なんか嫌な予感がするが・・・
行くしかないな」

渋々ドンペリを運ぶ羊。

七番テーブル

金髪で派手な大人のお姉さんが見事に酔っ払いながら音恩に絡んでいる。

「オンオンゝ、本当さあ、私の彼氏になってくれない？」

「オレに恋すると火傷するぜ？」

「キヤー！もう真っ白に焼かれない！！」

うわあ、むちゃくちゃ古い口説き文句だな

羊は内心ドン引きしながらもドンペリを持ってくる。

そしてテーブルに近づいて、まずは片膝を付く。

「ん？」

そしてお客様の目を見て。

「お客様」

喋り方は優しく、けどはつきりと。

「ドンペリお持ちいたしました」

最後は最高の笑顔で！ by オーナー

「・・・素敵！」

大人のお姉さんが顔を真っ赤にさせて羊を見た。

「では、失礼します」

羊がやばくなる前に立ち去ろうとする。

「あの子指名した〜い」

「はいご氏名入りました〜！」

・・・オンオン、二度と陽の目を浴びれなくしてやろうか？
やっぱり悪い予感が的中した羊だった。

タイプ23「バイトを甘く見るなよ、うん本当」(後書き)

感想評価もちろん待ってます。

投票クリックも面倒かもしれませんが月に一回お願いします。

キャラへの質問まだまだ募集中ですよ。

他なんかあったらとりあえずコメントだ。

タイプ24「その気になればナンバーワン」(前書き)

そうだよ！誰だってその気になればナンバーワンなんだよ！

いや、無理か

タイプ24「その気になればナンバーワン」

狼がようやく休憩室の掃除を終えて次の仕事を聞くためオーナーの部屋へ向かっている。

「・・・おかしいな、ホストの人と一切会わない・・・みんな働いているのか？」

狼がそんな疑問を口に出していると、右側のドアがいきなり開いた。

「ドゴッ！」

予想通り狼の顔面に当たる扉。

「・・・え？」

ドアを開けた主は情けない声を出していた。

「・・・つてええええええ！！！！誰だゴラアア！！！！ケンカ売ってんのかおい！！！」

あまりの痛さに我を忘れて怒る狼。

「ご、ごめんなさい・・・い、急いでいたので・・・本当・・・すみま」

「バタリ」

狼が鼻を押さえていた手をどけると、通路に倒れ込んでいる一人の少年。

「・・・いや、なに？なんだよ？」

狼が少年をつつくが、反応がない。

「・・・んだよ、変な奴だな」

狼は不満がかなりありつつもその少年を起こし、少年が出てきた部屋に運ぶことにした。

かなり細身だったので簡単に抱き上げる事ができた。

そして部屋に入ると、そこはベッドしかない個室だった。

「なんだ？従業員の緊急用寝室か？」

そんな事を言いながら、狼は少年をベッドに寝かせる。

「ったく、世話の焼ける坊主だ」

そう言つて狼は部屋を出ようとした。

「あの・・・待って・・・くれませんか」

いきなり呼び止められる。

「・・・なんだよ？」

狼が振り返ると、少年は上体を起こして、狼に乞うような目をした。

「・・・なんだよ？」

非常に嫌な予感のした狼だったが、一応聞いてみる。

「・・・僕の変わりに、ホストしてくれませんか？」

か細い声で言う少年、そして捨て犬の様な乞う眼差し。

「いや、断る、無理だし」

意外と狼は血も涙もない冷血漢だった。

「お、おねがいします・・・僕、なんだか貧血みたいで」

「みたいじゃなくて貧血なんだろ、大人しく寝ている」

「で、でも・・・お客様が待っているから」

「仕事優先ってか？子供らしくない事はするな」

「・・・こう見えても、一応高校生です」

「知らないのかい？高校生はまだまだお子様なんだよ、わかったか坊主？」

「・・・あなただって高校生でしょ？」

「・・・こ、こうみえても二十歳だ、ざ、残念だったな」

「見え透いた嘘は止めてください、あなたは新顔でしょ？」

「なんだよ、まるで偉いさんみたいな態度だな？お前こそ下っ端だろ？」

「このクラブのナンバー1ホスト、キリです、ホストの中では一番偉いんですよ？」

「はじめまして、ウェイターのシンです」

こいつ・・・意外と野心家だな。

「こんな所でNo.1に会えるなんて光栄ですキリさん」

「さっきまで小僧とか言ってますでしたっけ？」

「記憶がありません」

「便利な頭ですね・・・それで、ホストの代役を」

「え？なに？お水が欲しい？はい！今すぐ持ってきます！」

「・・・いい加減にしないと・・・怒りますよ？」

怖いなオイ、その黒い瞳が更に怖さを倍増させているよオイ
とりあえず狼はふざけるのを止めた。

「でもよう、やっぱオレには無理だって、そもそもホストに向いていない」

「・・・あなたは・・・外見で、ホストになれると思っているんですか？」

「うん、まあ、100%」

「はつきり言わないでください・・・ホストになるだけなら、外見がよければ確かに誰でもなれますけど・・・本当のホストは・・・気持ちだって・・・必要なんですから」

「ふーん、で？オレのような外見もダメで気持ちも無いような男はどうすりゃいいの？」

「・・・もういいですよ・・・そこまで、ホストをしたくありませんか？」

「うん、したくないね」

「・・・それは差別ですか？」

キリは怒った表情で、狼に聞いた。

「水商売が・・・底辺の人間がすることだから・・・馬鹿にしているんですか？」

悔しい顔をするキリに、狼は言った。

「底辺の人間ができる事なら・・・オレだってやってやるさ・・・でもな、人を相手とした仕事っていうのはさ、簡単じゃないだろ？・・・オレは、世間の考えには流されない、だから、この仕事に対して差別なんかしていない、ただ純粹に、オレには無理だって言っ

るだけだよ」

「・・・そうですか、それを聞いて・・・少し安心しましたよ」
少し笑ったキリは、上体をベッドに戻した。

「・・・今の仕事に、誇りを持っているんだな」
「プライドですよ、母親が苦心して開いたこのお店を、守るためにも、もっと大きくするために、姉と一緒に、がんばるって決めたんですから」

「そうか・・・だったら、今は休んで、明日またがんばればいいだろ？今無理をして体を壊したら、元も子もないだろ？」

「そうも、いかないですよ」

苦笑いのキリは、真剣な目で、狼に言った。

「今夜、大財閥のお嬢様が遊びに来ます、ここでお嬢様が気に入ってくれば、このお店の未来も切り開けますが・・・もし、気に入ってもらえず、更に他のお店に盗られたら・・・このクラブは、確実になくなります・・・だから・・・今夜が勝負なんです」
また、キリは起き上がろうとした。

「僕はナンバー1ホストとして、しっかり出迎えないと」
だが、それを制した手があった。

「・・・シン君？」

「・・・わかったよ、こんなオレでよければ・・・手助けするぜ」

「・・・ありがとうございます」

キリはそう言っ、安心した笑みで、また気を失った。

「セイトくんってかわいい！お気に入りにしちゃうから！」

「え、はい、あ、ありがとうございます」

テンションの物凄く高いお姉さんに絡まれている羊。

「マナさんセイトが気に入ったみたいですね！どうです？ここでシヤンパンなんかは？」

「うん！追加追加！お父さんが今日は気前よくてお小遣いたくさんくれたからまだまだいけるよー！」

うん、オンオン殺す

静かに心の中でどうやって音恩をボコボコにしようか考えていた羊。だが、周りの様子が少しざわめき始めた。

「んにゃ？オンオン、周りが騒がしいけどどうしたの？」

「ああ、今日はたしかお嬢様が来るらしくて、多分今来たんでしょ？」

「へえー、どこのお嬢様？」

「ん？確か・・・如月財閥のお嬢様だったような」

「わお、かなりビックなお客さんね、このお店もかなり繁盛するでしょう？」

「うーん、かもね、まあ、オレにとって一番大切なお客様は・・・

マナさんですけどね」

「きゃー！！嘘でもその台詞嬉しい！」

うん、なんだかバカツプル同士みたいだな・・・にしても、お嬢様ねえ？

「すみません、オンオンさん、キリさんを見ませんでしたか？」

金髪のヒロと呼ばれていた男が音恩に聞いてきた。

「いや？・・・おい、まさかお嬢様が来たっていうのに・・・いないのか？」

「はい、なんとかナンバー2のユウさんと3のオキさんが相手をしていきますけど・・・お嬢様は二人ともタイプじゃないようでした・・・」

あれ？ユウは要弧でオキは臣のことだよな？・・・って、ナンバー2と3！？

どうりで見かけないわけだ……ナンバー2と3とは、やはり男でももてるって事だな。

そう思った羊は改めて要弧たちのすごさを実感した。

「おいおい、どうすんだよ？ここで失敗したら経営に響くだろ？」

「そうなんですよ……」

うわ、いきなり大変な事になっているな・・・どうするんだろ？

少し心配の色を見せる羊、だが、もうすぐもつと心配になる光景を見る事になるとは、思ってもいなかった。

「あら？　かつこいい子が来たわね」

羊に抱きついていたマナさんがふと、そんな事を言った。

「え？」

振り返る羊。

すると、そこには、黒いスーツに身を包んだ……狼がいた。

・ ・ ・ はあああああああああ！！！！！！？？？？？

顎が外れそうになるほど口をあける羊。

「すみません、お嬢様のお席はどちらに？」

ちよ！何言ってるのオレ！？それお前の台詞じゃないから！

啞然とする羊、だが、もう誰にも止める事はできないのであった。

タイプ24「その気になればナンバーワン」(後書き)

感想評価投票クリック! どんどんやってくれ!
登場人物への質問! どしどし送ってくれ!

『こんなキャラクターいたらおもしろくない?』

『コイツが主役の話、読んでみたいぜ』

『漫画化させてください!』

『アニメ化させてください!』

などのコメントも待ってます!

調子にのるな by 羊

タイプ25「愛と友情はイコールかもね」(前書き)

いやっほー、テスト撃沈！

どうする？どうなる？知った事か！

まあ、そんなこんなでバイト編終了です。

タイプ25「愛と友情はイコールかもね」

「鈴音ちゃん、欲しいものがあつたらすぐ用意するよ」
すずね

「鈴音さん……のどは渴いてない？……退屈してない？」

ホストナンバー2のユウ「要弧」と3のオキ「臣」が男装してお嬢様に営業スマイルを見せている。

「チーズケーキ一つ、あとダージリンの紅茶、ホットでね、あーあ、今すっごい退屈」

セミロングの茶髪ヘア、きれいなフリフリのドレス、多分ゴスロリ。

パツチリとした大きな目、そして小柄な体格。高校三年生。

そしてあつかましき全開のお嬢様、きんづい「如月鈴音」すずね

彼女は誰もが惚れてしまう要弧と臣に唯一惚れない稀な人種であった。

こんのワガママお嬢様が！すましている所がなんかムカつく！

早速キレ始めている要弧、笑顔がなんか黒い。

……めんどくさい

臣は既に諦めモードに入っている。

「私さあ、女形ホストってタイプじゃないの、あんた達二人とも美形だけど女形だから私の趣味じゃないのよ、他にいいのいないの？」

女形じゃなくて女だよ！……まあ、そんな事初めて言われるけどさあ

……なんか、嬉しく思っている自分が……情けない

二人は心に深い傷を負って真っ白になった。

てかキリはどうしたのよ、こういう時こそナンバー1としての出番でしょうが！

そんな事を思っている要弧、よもやキリ以上の力量と欠点を持ったホストが来る事など、思っているわけが無かった。

「あ、あの、ユウさん」

一人のホストが要弧に離しかける。

「なんだ？」

「・・・えつと、キリさんから・・・ピンチヒッターとして来た方だそうです」

「はあ？・・・誰だよ？」

「どうも！ザ・クールワイルドガイ！絶世のイケメン！シンです！」

真つ赤なバラを右手にかつこよく決める狼、次の瞬間バラのように真つ赤な血に染められるほど殴られた。

「な・に・し・て・ん・だ？」

「落ち着け、これは亡きナンバー1ホストキリの遺言で」

「死んでないよな？死んでいるわけ無いよな？」

要弧がそりやもう笑えるくらい怖い笑顔でこつちを睨んだ、多分今笑うと明日は無い。

「で？・・・何しに来たんだ？」

「いや、お嬢様のお相手でもしようかと」

「べ、べつにあんたがする必要ないでしょ！」

「なぜだね？私はナンバー1から頼まれたのだよ、残念だがそのヒコウセキを渡してもらおうか」

「ラピユタより上にある黄泉の国にソッコーで送ってやろうか？」

「すみませんでした」

「で？作戦は？」

「オレの甘いマスクと楽しいトークでイチコロさ」

「ゴツッ！！」

狼の後頭部に要弧のパンチがクリーンヒット、血しぶきが舞った。

「とにかく、素人のお前が出てきたって意味ねえよ、さっさと下が
つてろ」

「・・・悪いが、それはできない相談だな」

「・・・接客の仕方も満足にできないお前がでしゃばっても」

「悪いな、男同士の約束なんだ・・・破るに破れねえよ」

狼はそう言って真剣な目をして要弧を見た。

「・・・で、でも」

「大丈夫だ・・・オーナーとキリの大事な店を潰すようなマネだ
けはしない」

「いや・・・まあ、それもそうだけど」

「頼む・・・オレを信じてくれ」

「・・・仕方ないわね・・・し、信じているから」

「ありがとう・・・その気持ちに答えるためにも・・・」

「絶対にあのお嬢様を口説き落としてやるぜ！」

「やっぱあんた殺していい？」

まさか自分の事が好きな幼馴染を前にして他の女を口説くと宣言し
ている、などと、

狼はきつと夢どころか現実起きているってのに気付かないんだから
わかるわけ無いよなこの大ボケが！

「もういいわ、次のお店行く、クリス（執事）、車の用意を」

鈴音はそう言って立ち上がる。

「えっ・・・ま、まだ・・・ゆっくりしてってくださいよ」

臣が止めるが、鈴音はもう見向きすらない。

「他にいいお店あるかしら？」

「いい男なら、僕がいますよ、お嬢様」

狼がしつこくもバラを持って登場。

「残念だな、もう行かれてしまうのですか？」

自分の中では最高にかっこいいと思い込んでいる狼。

「どうか、僕と少しお話でも」

「ナルシストに用は無いわよ」

狼に10億のダメージ、周りの空気が凍りついた。

・・・お、おかしいなあ、かっこつけていたはずなのに・・・

狼が嫌な汗をかき始める。

・・・終わったな

要弧が呆れた気持ちと少し安心した気持ちの溜め息をついた。

・・・誰？

臣は狼だと気付いてないようだ、そもそもここに狼がいることさえ知らない。

・・・オレ・・・かっこ悪すぎだろ

羊が涙を隠しながら泣いていた。

「じゃ、帰らせてもらっわね」

鈴音は冷たい態度を崩さず店を出て行こうとした。

「ま、待ってくれ」

狼が必死に引きとめようと声をかける。

「なによ？まだ何かあるの？」

いらだちの混じった声、狼は今更ながら呼び止めた事に後悔したが、後には引けない。

「え、えっと・・・今後の参考のために、君のタイプを教えて欲しいなあゝなんて・・・」

「・・・知りたい？」

「いや別・・・はい！物凄く気になります！つかそのタイプになりきれようがんばりたいです！ハイ！」

珍しく空気をよんだ狼だった。

「私のタイプは・・・ワイルドでケンカが強く、でも女の子にはちよつと弱かったりする人で、それで鈍感な人が理想なの、この全てが揃ってないと好きになれないわ」

・・・え？・・・ちょ、それって・・・オレのことじゃねえええかああ！！

羊が心の中で叫んだ。

「・・・お前、結構変わった奴が好きなんだな、そんな奴どこにいるんだよ」

狼が真面目な顔をしてそう言った。

お前以外誰がいるんだよ！何！？わざと？わざとだよね！？

今、羊と読者の心のツツコミが重なった、と思う。

「ワイルドで見た目は怖いけど、意外な性格の人って、ギャップがあつていいでしょ？」

・
そついや、ギャップありすぎる人が俺の周りには多すぎる気が・・・

「ああ！要するに、強気な奴が実は人には滅多に見せない所があったりする、とかってやつか！それなら俺も納得だぜ！」

うおおい！！なんだよ納得って！

「あら、ナルシストにしては話がわかるじゃないのよ」

「当然だろ？好きなタイプについての討論なら任せろよ」

いや、なんだよ好きなタイプについての討論って？オレそんな事できたのかよ！？」

羊のツツコミをよそに、二人は別の意味で白熱する。

「あなた面白いわねナルシスト、名前はなんていうの？」

「ふつ、名前なんてナルシストでいいさ」

「本当、変わり者ね、いいわ・・・このお店、気にいった、今夜はもう時間だけど、また来るわ」

「そうか、それまでにあんたの気に入る男が現れるといいな」

「余計なお世話よ・・・じゃ、また今度」

そう言つて鈴音は店を出て行った。

「なんだ、あいつ意外といい奴だな、いや本当、タイプについてオレと対等に討論できる奴がいるとは、驚いたぜ」

「・・・つて、いつの間にかお客さんにしちゃったよこいつ」

「やべえ、オキさんやユウさんでも無理だったあのお嬢様を落とすとはな」

「いや、キリさんがピンチヒッターとして呼んだ男だぜ？オレはやる奴だと見抜いていたさ」

クラブ内がざわつき始める。

「ん？ん？ん？なんだ？このざわつきは？」

「狼、結構やるじゃん、お客さんとして落とすなんて」

要弧が褒め言葉をかける。

「・・・フツ、何言つてんだよ、あいつはただの客じゃねえ・・・友だ」

『ドカツ！』

要弧が思いつきり踵で狼の足の指を踏んだ。

「だああおがああああ！！！！」

「バカ！ あんな女と仲良くしないでよね！」

のた打ち回る狼をよそに要弧は怒りながら休憩室へ戻った。

・・・自業自得だよ、オレ・・・
羊は静かにそう思っていた。

翌日

「一時はどうなるかと思ったが、確かにバイト料は他と比べ物にならないほど高いな」

狼が素直に感想を述べる。

「・・・ねえ、どうしても引つかかる事があるんだけど」
「ん？どうしたんだよ？」

難しい顔をしている羊にそう聞く狼。

「・・・確かさあ、親父とお袋には記憶を偽造していたはずだろ？」
「・・・あ、確か骸骨がそんな事言ってたな」

二人の顔に表情が消える。

「うぎゃああああ！！ほんま堪忍かんにんやて！ゆるしてえな！！」

骸骨を熱湯の風呂に押し込む二人。

「ちよつと忘れてただけやん！！ちよつとしたミスやん！！」

「なあ羊、骨つて確かダシがとれる筈だよな？」

「うん、取れる取れる」

「んなあほな！取れるわけないでっしゃろ！！たすけてえー！！」
「！」

骸骨の叫び声が、どこまでもこだましていた・・・。

タイプ25「愛と友情はイコールかもね」（後書き）

感想評価随時募集！

キャラへの質問作者への質問募集。

アニメやマンガは程遠いので誰かイラスト描いていただけます？

描いてくれる人はぜひコメントをお願いします！

投票クリックもぜひクリック！

まあ、それよりも励ましのコメントが今一番欲しいです、いやあ、テスト嫌だね。

「ただいま作者はテストノイローゼのためテストの事ばかり気になっていきます、特に気にしないでください」

タイプ26「本気の狼」（前書き）

なんかふと狼がカツコ悪い事に気付いた。

ってことで深い理由はないがつかよくしてみようと思った。ただそれだけだ！

タイプ26「本気の狼」

どうも、みんなのアイドル羊です。

12月といえば完璧な冬ですね、寒いですが今年も例年以上に寒いです。

だってスカートなんだもん。

もうね、女の子の気持ちがわかんないよ、

なんでクソ寒いのに足出すのかな？

ズボンでいいよね？というかズボンがいい！

なのに制服はセーラーが規則？ハア？

おいおい、昔の話だがブルマー覚えてるか？

ド○ゴンボ○ルじゃねえよ、女子の着用していた短パンだよ。

あれなんで廃止されたか知ってる？

変質者の理性がとぶからだよ！（本当は知りませんby作者）

でさ、女性なんだからとりあえず節操は守ろうって事でさ、

無駄な露出は規制されはじめただろ？

だけどさ、根本的な足の露出をやめないと意味くない？

スカートって一歩間違えたら下着見えるよね？

そんな超危険な衣服でいいの？風が吹いてスカートめくれて『み、

見ないでよ！』ってか？

だったらズボンはけズボン！別にズボンでいいじゃん！？

学校側も『帰りは変出者に気をつけましょう』じゃなくてスカート

廃止しろ！

そうすりや変質者も激減するよ、絶対そうだ、間違いないな。

スカート反対！スカート廃止！スカートいらない！

「羊、頭の中での考え事は止めてくれ、全部オレの頭に響いてるん

だからさ」

狼がげんなりとした様子で羊に言った。

「だってクソ寒いもん、っーか寒いんだよ!」

「自が出てるぞ、女の子らしくなれ」

朝の登校はとりわけ寒い、その上女の子の装備なんだから、そりゃきつい。

「要弧はいいよな、ズボンで」

「あいつ寒がりだからな、スカート好きじゃないんだろ」

二人がのんきに会話をしていると、道の向こうから一人の少女が走ってきた。

だが狼は気付いていない。

「ドンツ!」 「うおっ!」 「うわっ!」

狼は勢いよく後ろに吹き飛び後頭部を電柱にぶつけ失神。

女の子の方は羊が受け止めた。

「あ、危ないわね! 前向いて歩きなさいよ!」

「ごめんね、ぶつかった馬鹿はもうこの世にいないよ?」

いや、不吉な事言っなよ羊。

「そ、それより放してよ! でないとやつらが来ちゃうじゃない!」

そう言ってもがく少女、だが、既に遅かったようだ。

明らかに暴走族としか思えない風体の男達がバイクにまたがり登場。うるさく音を鳴らしながら羊と少女を囲むようにバイクを止めた。

「やつべ、ちよつとかわいい子を捕まえようとしたら大物がつれたみたいだぜ」

「知ってるぜこいつ、あのお高く留まっている生意気な要弧の連れだろ? よく見かけるぜ」

「まじで?・・・こいつは使えるな、要弧たちには散々な目に合わせれているからな、お前を人質にして・・・奴隷にでもしてやるか」
明らかに下品で卑猥な顔の男がいやらしく笑っていた。

「っ、うわゝ、こんなに汚い顔の奴見た事ねえ」

羊がストレートに物を申した。

「こ、こいつ、自分の置かれている状況がわかってねえぞ絶対」

「いいさ・・・後で体に教え込んでやるよ」

暴走族は手を伸ばして羊の手を掴んだ。

「さわんじゃねえよゲスヤロオオオ!!!」

羊の得意技、空中回転蹴りが見事相手の側頭部に入った。

相手はものの見事気絶する。

「こ、こいつ、やっぱり要弧の近くにいただけあるな・・・強い」

「はっ、関係あるかよ」

一番ガタイの大きい男が羊の腕を掴む。

「無駄だつていつ!!!」

男は懐にあったスタンガンを羊に容赦なくさした。

力なく倒れる羊、少女が慌てて駆け寄るが、別の男に蹴り飛ばされた。

「お前はもういいぜ、さて、携帯あるだろ？出せ」

羊のバッグから携帯を出す体の大きいやつ、そして、それをもう一人に渡した。

「これで要弧たちを呼べるな」

男達は羊を担いでバイクにまたがり、また騒音を出しながら走り去って行った。

「ど、どうしよう」

取り残された少女は泣きながらへたり込んでいた。

「わ、私のせいだ、私のせいであのお姉ちゃんが・・・ごめんなさい、ごめんなさい!」

「謝る暇があったら・・・勇気を出して行動したらどうだ？」

少女が振り返ると、狼が立っていた。

「・・・誰？」

「おい！お前が一番にぶつかってきたんだろっが!」

「……え？……あ、ああ、そういえば」

え？オレただ存在薄いの？

「そ、それより！お姉ちゃんが！つ、連れて行かれちゃったんです！」

「え？・・・ああ、うん、あっそう」

「……はあ！？何でそんなに落ちているんですか！？」

いや、あいつオレだから大丈夫だろ？

「と、とりあず！早くしないと！なんか変なことするとか言ってたし！」

「へえ」

「よ、ようこそさんと呼ぶとかもいつてましたよ!？」

「へえー、あいつら壊滅するな」

「あ、あいつらつてもしかして見ていたんですか!？」

「うん、なんか入りづらかったし、バイクが邪魔だったし」

「.....でいい」

「え？」

少女が何かを呟いているようだ。狼が耳を傾けると。

[illegible]

少女が物凄い剣幕で狼を睨みながらそう言った。

「……いや、でも、大丈夫だって、あいつら強いし」

「そういう問題じゃないでしょ！女の子なんですよ！」

「……はあ、ま、行くだけ行つとくか」

狼はそう言って歩き出す。

「……で、どこ行けばいいんだ？」

「やっぱり最低です！あなた最低です！」

「だああ！もう！ちょっと待ってろ！まず相手はどここの暴走族だよ

「！」

「し！知らないんですか！？異化頭血いかすちですよ！雷のマークがあったでしょう！」

「知るか、とりあえずイカズチだな、携帯携帯」

狼は携帯を取り出すと誰かに電話をかけた。

『もしもし兄貴？どうしたの？』

「おう栗鼠だな、いやさあ、暴走族のイカズチって知ってるか？」

『うわあ、兄貴もとうとうヤバイやつらに目を付けられたね、そいつら女をさらってピーをする超危険な暴走族なのよ』

「・・・へ？」

『しかもメンバー全員が雷いかすちにちなんでスタンガンを所持しているのよ』

「・・・え？」

『しかも要弧さんをかなり欲しがっているみたいなのよ、絶対に要弧さんとかお姉ちゃんを近づけさせないでね、やられるから』

「・・・」

『そいつらの被害者ってみんな鬱になったり自殺したりしちゃうのよ、かなり甚大な被害を出している族なんだけどね、ちょっと強すぎるから警察も手が出ないのよ』

「・・・」

『兄貴も相手にするんなら友達を何人か連れて行ったほうがいいわよ』

「・・・そうか、アドバイスありがとうな、さすが不良の我が妹だぜ」

『どついたしまして、じゃ、気をつけてよ』
携帯をきる狼。

「・・・よし、死刑執行と行こうか」

明らかにさっきと違うオーラを出す。

「え？ちよ、どうしたの？」

「オレ以上に最低な集団を見つけちまってな、最低の称号はこのオレのものだ、最低なやつはオレひとりでいい……だから、オレよりも最低なあいつらをぶつ殺しに行くんだよ！」

「で、でも、場所は？」

「まあ、その前に傭兵ようへいを集める、イケメン崎とナンパ師と変態でいいよな？」

「え？なんかすごくやばそうな名前の人たちね」

「いや、こいつらのモットーは……『女を泣かす男を殺す』だ、いいモットーだろ、俺が今作った」

「ちよ、あなた大丈夫？なんかスイッチはいつてない？」

「安心しろ、死神モードに入っただけだ」

すごく心配になった少女だった。

タイプ26「本気の狼」（後書き）

暴走族って怖いよな、作者は見た事ないけど会ったらたぶん一番に逃げ出すキャラだぜ。

感想評価いつでも来てくれ！

キャラへの質問、作者への質問いつでも来てくれ！

とにかくコメントくれ！

イラスト描いてくれる人いたら拳手！

その他もろもろ、とにかく黙ってコメントだ！

タイプ27「女を笑顔にさせてこそ漢だろ！」（前書き）

・・・あれ？

作者は勢いに乗って大変なものを書いてしまったようです。

なにはともあれご覧あれ

タイプ27「女を笑顔にさせてこそ漢だろ！」

「「「な、なんだと！！！」」」

北崎と音恩としゅうが口をそろえて驚いた。

「いいモットーだな」

「『女を泣かすお前を殺す』か、ぴったりだな」

「おい音恩、今なんていった？」

「うまい！音恩に座布団一枚！」

早速漫才を始めている四人に少女はこれまでにないくらいの絶望感を感じていた。

「今の状況がわかっていているんですか！？知り合いの女性を暴走族に拉致されて犯されそうだっていうのに！」

「あ、きみきみ、この小説そう言った卑猥な表現はNGだから斜線を」

北崎は少女から熱いビンタを喰らった。

「とにかく！一刻の猶予もないんです！敵の居場所もわかりませんがとにかく探しましょう！」

「いや、待ってくれ、羊ちゃんが囚われの身でしかもいろんな意味でやばいって事はよくわかった、だが俺達には情報が少なすぎるし作戦もない、ただのケンカとは違う、族相手のケンカならそれはもう完璧な抗争だ！戦争なんだ！だからこそ、冷静かつ計画的に動くべきだ」

しゅうが珍しく正論を言った。

「そ、それもそうね、で、まずは何から話すの？」

「自己紹介だ、俺達は君が何者かも、なぜこの戦いに参加しているのかも知らない、だからそれを教えて欲しい」

しゅうがそう言うのと少女はわかったと言って自己紹介をしようとした。

「ちょっと待ってくれ、見ず知らずの相手に名前を聞く時は自分から名乗るのが礼儀だろ？ここは礼儀を尊重して俺達から自己紹介しようぜ」

音恩がどうでもいい事を言うが、少女は先に早く進みたいのでとりあえず黙っていた。

「よし、まずはこのオレ、古道修介、しゅうと呼んでくれ、スキルは『物体浮遊』だ」

「なんですかスキルって！？ふざけないでくださいよ！」

「オレは黒羽音恩、女の子のタイプは特にいとわない、スキルは『物体透視』だ」

「女の子のタイプなんて聞いてませんよ！しかも貴方までスキルとかわないでください！」

「僕は北崎淳、なぜか周りから名字で呼ばれる男だ、スキルは『鬼の耳』」

「名字で呼ばれるとかどうでもいいですよ！しかもスキルが鬼の耳ってなんですか！？」

「そして、ご存知、守多狼、スキルは『虎の爪』」

「狼って名前のくせにスキルは虎の爪っておかしいでしょう！！」

「さ、君の番だ」

「・・・葛城左京です、中学三年生です」

「・・・え？スキルは？」

「そんなものありませんよ！」

「馬鹿だな北崎、彼女には立派な、『言霊鉄砲』があるじゃないか」

「ああ！そっか」

和む四人、そしてブチギレる左京。

「とりあえず、異化頭地の溜まり場を探しましょうか」

左京はにこやかなかわいい笑みで頭にたんこぶを作った四人にそう

言った。

「というか待ってくれ、オレの知り合いに元暴走族の奴がいるんだ、そいつと連絡をしていいか？」

音恩が携帯を出しながらそう言った。

「あ、もしもし？ボブ？オレだよオレ、そうジョニー、あのさ、異化頭地の溜まり場って何処か知ってる？・・・あ、はいはい・・・ああ・・・なるほど・・・すみませんでした」

携帯をきる音恩。

「ツツコミは我慢するから、とりあえず何処かわかった？」

「あ？いや、今の間違い電話だった」

音恩は更に強烈な拳を喰らう事になった。

「もう！いい加減にしてよ！遊びじゃないのよ！・・・あんた達が手伝ってくれないんなら！私が一人で探す！！あのお姉ちゃんも！私が助けるんだから！！」

左京はそう言って走り出した。

「あんた達なんて！あの暴走族とかわからないわよ！最低な男達ね！」
左京は泣きながら走り去る、そして、四人はお互いの顔を見合った。

「最低だとさ？」

「まあ、そうかもね」

「あの子は一人で大丈夫なのかい？」

「ああ、俺達に付いて来て抗争に巻き込まれるよりは、よっぽどマシだろ」

狼は軽く笑いながらそう言った。

「さて・・・お前ら、殺す覚悟はできているか？」

「当然」

「もちろん」

「当たり前だろ？」

音恩と北崎としゅうが口々に答える。

「……じゃあ、死刑執行と行こうか」「」

港町の使われていない倉庫、42番倉庫

「おい、要弧たちに連絡はしたか？」

異化頭地のリーダー、雷門らいもんがタバコをくわえながら下っ端に聞いた。
「はい、要弧に臣、雫、奈絵美全員に電話して来るように連絡しました」

「それで？大切な人質の羊は？」

「イスに縛り付けていますよ、周りのやつらにも手は出さないように言っておきました」

「心配だな、あいつらは女を見るとすぐやりたがる、中学生にだって手を出す変態どもだからな、オレが直々に見張つとくか」

雷門が個室から出ると、広い倉庫内は面の悪い輩でうじゃうじゃしていた。

羊はその中央でイスにしばられている。

もう既に気がついていているようだ、それと、もうむさくるしい男達にちよっかいを出されているようだ。

「止めてよ！っか止めるよ！足さわんな！」

「気が強い女だな、だが、縛られているんだから、無抵抗だろ？」

「やべえ、こんなかわいいやつそうそういないぜ」

「ああ、要弧たちも後から来るらしいし、俺楽しみだわ」

「でもその前にちよつと悪戯を」

そう言った男は、羊に手を伸ばそうとした、だが、横から鋭い蹴りが入った。

男は派手に吹っ飛び、コンクリートの地面に倒れこむと、嘔吐した。

「誰が……手を出していいと言った？」

雷門が蹴り上げた足を元に戻しながら、ドスの聞いた声でそう言った。

「す、すみませんでした！」

他の二人が謝る、蹴られた男は気絶していて何も言わない。

「女に手を出すのは、要弧が着てからだ・・・あいつらの目の前で汚すんだよ、てめえらの遊び道具じゃねえ、わかったか」

ハスキーな声だが、確かな威圧感があった。

「さて、悪かったな譲ちゃん、つつても、あんたの人生はここで無茶苦茶になるけどな」

羊をみて、雷門はそう言った。

「・・・へえ、厳つい男や不細工な男のリーダーにしては、いい顔してるね、あんた」

羊が少し笑いながら言った。

その顔は、整えられたきれいな顔だった・・・左側にある火傷の後らしき部分を除いては。

黒い長髪は後ろ縛りされていて、冷たい男という印象だった。

「強気の女だな、だがそんなやつに限って、案外男と深い関係になった事がない」

「なに？モテない男の僻み？^{ひが}どんなにモテなくても、強く生きている男はたくさんいるのに、あんたは墮落者の一人って訳ね？」

「・・・ま、そんなもんだろ」

一切、動揺も怒りも見せなかった雷門の目は、本当に冷たかった。

「・・・で、要弧たちに因縁があるのは何で？好きだから？」

「好き？・・・いや、むしろ憎むべき相手さ」

雷門の表情に、初めて怒りがみえた。

「・・・まあ、あいつが幸せになるのが、どうも癪に触るからね、その幸せを、摘み取ってやろうかなと」

「・・・最低！」

「なんとでも言え」

雷門はそう言って、羊から目をそらした。

「さて、そろそろ、四人が来る頃なんじゃないか？」

雷門がそう言うと、倉庫の扉が、ゆっくりと動き始めた。

「きた・・・か？」

雷門は、驚いて目を疑った。

「悪いねえ、入るとき邪魔だったからさ、おたくの友達ボコボコにしちゃいましたあ」

狼達が、既に動けない見張りを蹴り飛ばして中へ入れる。

「うわゝ、汚いところに汚いやつらが揃ってるねゝ」

北崎がここぞとばかりにイケメンオーラを出した。

「全く、こんな所に女の子を連れ込むなんて、男の風上にも置けない連中だな」

音恩が珍しく本気で怒っている顔をした。

「おお！羊ちゃん大丈夫だった見たいだね、すぐ助けるから大丈夫だよゝ」

しゅうがのんきに手を振っていた。

「さて・・・お前ら最低なクズどもへの審判を下してやるよ・・・全員死刑！この決定に誰も異議なし！！！！！！」

狼が勢いよく突っ込む、それに続き、三人も走った。

「馬鹿が、たった四人で四十人を相手にするつもりか？・・・やっつけ」

雷門がそう言うと、下っ端どもも血気盛んに飛び込んだ。

音恩に三人の男が一度に襲い掛かってきた。

「知ってる？女の子の顔は観賞用、男の顔は、殴るためにある！！」
三人の顔面の鼻に向けて容赦なく拳を叩き込んだ。もちろん、悶絶する男達はろくに動けない。更に音恩はあごに蹴りを入れて三人に終止符を打った。

だが、今度は後ろから木刀で殴りかかってくる奴がいる。

音恩はそれを見切り、横に動いて裏拳を相手の右頬に叩き入れた。

「あ、ちなみにオレの顔も観賞用ね、女の子専用の」

しゅうに殴りかかる男、だが、しゅうはその拳を掴んで更に引き寄せた。

そして相手の力を利用して腹に膝蹴りをする。相手がひるんだところ、すかさず後頭部の髪の毛を掴み、鼻の中心へ手の力と足の勢いでまた膝蹴り。

すると相手は鼻が潰れ流血をした。そして泣いて許しを請う。

「ねえ、ところでさ、君は泣いて助けを求めた女の子を・・・助けたかい？」

「そ、それは・・・」

「残念、時間切れ、君の人生ここで終了ウウウ!!」
しゅうは髪の毛を掴んだまま地面に何回も頭をぶつけてやった。

北崎は二人の男に囲まれていた。

一人がバットで北崎の足を狙う、そしてもう一人は北崎の顔に殴りかかった。

「君達遅い」

北崎は足に向かってくるバットを逆に蹴って折ってしまった。

続いて殴りかかってきた相手の拳を掴んで握りつぶす。骨の折れた音と悲鳴がした。

「そういえば悲鳴を聞くと興奮するんだって？嫌がっている女の子を見ると喜んじゃうんだって？・・・だったらてめえら自分の体でそれだけの攻撃受けてみるよ？嫌がる自分でも見て喜んでるカスが」
もう一人の折れたバットを持っていた男には北崎の回し蹴りが入った。そして倒れたところを勢いに乗った足でかかと落としを決める。

狼の所には五人も男達が寄ってたかって襲ってきた、だが。

狼の無慈悲な拳は確実に敵のあごを粉碎していった。殴りかかって

きた腕は掴んで引き寄せる、そして肘の部分を見計らって曲がる逆方向に膝蹴りをしてその腕をへし折った。

後ろから羽交い絞めして来た奴には、肘鉄を腹に、そして手の力が抜けた所で振り返って鳩尾みぞおちに拳を叩き込む、更に首を掴んで片手で持ち上げた。

「どうだ？ 苦しいか？」

「が・・・い、いきがつ！」

「お前はいいよな？ オレが手を離せばすぐに息ができるようになる」
「が・・・つは！」

「でもな・・・お前らが自分達の欲の為に傷付けた女達はな！ 一生苦しむ傷をつけられたんだよ！ 一生取り戻せない幸せを奪ったんだよ！！ 生きているのが辛い人生にしちまったんだよ！！ わかってんのか！」

「・・・す・・・すみませ、がつは！・・・」

「てめえの気のない謝罪より、命を差し出して罪を償え」

「・・・げはっ！・・・あががが」

男は白目をむいて気絶した。

「・・・もういいか」

狼はその男を投げ飛ばした。

倉庫の床には、既に動けない男達の屍で、埋め尽くされていた。

「・・・やるじゃないか」

雷門だけが一人、笑いながら四人に拍手をしていた。

「おい、てめえがボスか？」

「・・・まあね、でも、もう辞めたよ」

狼の問いかけに、雷門はしれっと答えた。

「おいおい、俺達を見てビビったのか？ 腰抜けめ」

音恩がそう言くと、雷門はぞっとするような目で音恩を睨んだ。

「勘違いしない方がいいな、オレは裏切り者である要弧を連れ戻しに来た、ただそれだけだ」

「・・・は？」

狼が呆気にとられていると、パトカーのサイレンが聞こえた。

「どうやら中学生の小娘が呼んだようだな」

「左京か？」

しゅうが振り向くと、扉が開かれて、武装警官が入ってきた。

「またいつか、要弧をかけて戦おう、狼君」

雷門はそれだけ言っ、裏口へ走って行った。

「お、おい、追わなくていいのか？」

「・・・いいさ、今度会った時に」

「やつを死刑に処す」

狼はそれだけ言った。

「てか、助けに来るのが遅いんだよ！」

羊がようやく体が自由になった所で狼にくっついてかかった。

「仕方がないだろ、こんな場所にいたとは知らなかったからな」

「それで？・・・どうやって見つけたの？」

「それが・・・変な野郎に教えてもらっただよ」

「はあ？」

怪訝な顔をする羊、狼も納得いかない様子だ。

「・・・要弧とあのやろう、なんか関係があるみたいなんだな」

ポツリとつぶやいた狼、だが羊はもう聞いていなかった。

「羊ー！大丈夫！？」

雫の声がする、どうやら四人が今来たようだ。

羊が元氣よく返事をして四人に駆けていく。

要弧も涙目で羊に抱きついていて、本当に心配していたようだ。

「・・・あ、今日学校サボっちゃったな・・・まあいいか」

海に沈んでいく夕陽を見ながら、狼は思った。

・・・オレは羊が自分の分身である事を隠している・・・要弧、お前にも隠し事があるのか？

だが、そんな思いも、笑顔で喜んでいる要弧達を見たら・・・。

・・・まあいつか

タイプ27「女を笑顔にさせてこそ漢だろ！」（後書き）

感想評価募集！！

絵師さん募集！！

キャラへの質問締め切り間近！！（新しいアンケートを予定のため）
その他何かあればコメントを！

もちろん書籍化アニメ化漫画化どんとこい！

いいから勉強しろ作者by狼

タイプ28「クリスマススイブってなんだよ？」（前書き）

テストの所為でクリスマスが大嫌いになりそうです。
何はともあれ、ヒロイン視点Vr臣、行きます。

タイプ28「クリスマスイブってなんだよ？」

めっちゃ久しぶりに、ヒロイン視点、やります。

クリスマス・イヴ、これが正しい発音ね。（本当は知らないけど）クリスマスである12月25日前日の24日の事を言う。

クリスマスは元々イエス・キリストの降誕祭として冬至祭と融合したもの。

その前日という事で、イブ、つまり聖夜と言われるのが、明日である24日。

ちなみに今日の23日をクリスマスイブって言うらしいけど私は知らない。（これは本当）

そして・・・この冬の大イベントであるこの二日間・・・ある意味で・・・。

カップルの最も最もロマンチックになれるイベントなのよ！

！！

「全国の一人でクリスマスを送る人々へ・・・俺なんかテストだったんだぞ！！しかも一人だし！！それに比べりゃあんたら幸せもんだろ！！！！」以上作者の叫びでした。

臣は心の中でそう叫んでいた。てか臣だったんだ・・・。

やっぱり冬の朝は寒いなあ、私寒い嫌いなのに。かといって暑い方が好きって訳じゃないけどね、でもどうせなら寒い冬には暖かい風が吹いて暑い夏には冷たい風が吹けばいいのに、本当生きづらい世の中よね〜

「おはよう臣！」

「あ・・・雫、おはよう・・・」

「相変わらず口数少ないわねえ」

そ、そんな事ないよ、頭の中では言いたい事が一杯あるんだけど上手く言えてないだけなのよ、もしテレパシーが使えるようになつたら私お喋りキャラになるんだから、そ、そうすれば狼ともっとお話できるかな？クールとかミステリアスとか言われているけど本当は明るい子だつて気付いてくれるかな！？

「・・・・・・・・」

「おい、臣？・・・だめだ、上の空だ」

よもや上の空のように見える臣がただ単に自分の世界に入っているだけだとは、誰も気付かなかった。

教室

「ねえねえ！明日のクリスマスパーティーどこでする！？」

雫がいつものメンバーに元気よく聞く。

「去年は要弧の家だったよな？じゃあ今年は・・・臣の家か？」

狼がそう言つと、臣が滅多に見せない流し目をした。へ要するに彼女にとつての笑顔

「パーティー費用は全部狼持ちで」

「おい、金がなくてバイトをしていた人間にたかるな」

雫につっこむ狼、それを見てガッツポーズの羊。

雫と狼の仲もよくなつて来たわね！これでクリスマスパワーを使つて！

目を光らせて宙を睨む羊、物凄く不気味だ。

「そのパーティーに我々も」

いきなり北崎がひよっこり現れてそんな事を言った。

もちろん要弧と雫と臣と奈絵美と羊の5コンボアッパーを受けて昇天した。

「いいなあ狼は、美女達とクリスマスかよ・・・呪い殺していい？」
音恩が五寸釘と金づちを用意しながら言う。

「お前ら一応モテモテなんだろ？イケメンズはどこいったよ？」
狼が五寸釘を音恩の頭にブツさして言った。

「ぐおおおお！！！！の！ノロワレルウウ！！！！」

「いや！音恩君！それより血が！頭から血が出てるよ！？」

将騎が音恩を保健室に連れて行った。

「ったく、余分なやつらは来なくていいッてーの！」

要弧が溜め息をつきながら言う。

「幼少の頃よりカメラを片手に、あらゆる美女を撮ってきた、それゆえか・・・時たま人の秘密といえる一瞬をそのカメラに収めてしまふ時がある・・・要弧ちゃんたち、これに注目」

しゅうが一枚の写真を取り出した。

そこには一人の女子生徒を囲んでいる要弧、臣、奈絵美、雫、羊の姿が。

「決定的瞬間！狼くんが好きな女子生徒を拉致！？そして誘惑している！の図」

「「「「「うわああああ！！！！」」」」」

五人が一斉に写真に飛びつこうとするがしゅうが素早くしまう。

「もちろんだがこのネガは俺が大事に保管、そして現像した写真も百枚弱、パソコンにアップする用意も万全！逃げ場はないぜよ」

「さ、さすがだしゅう」

北崎がボロボロになりながら親指を立てる。

「ふっ、今回は西条高等ジョアンナ学校のある情報屋を雇ったからな！金はすげえかったがそれなりの対価を得る事ができたぜ！」

「おお！わかる人にはわかる身内ネタ！知らない人は『幽霊なのにキューピット気取り』を」

しゅうと北崎がよくわからない事を言っているのでスルー！。

何だかんだで例年よりより多くの人とパーティーをする破目になった一同。

その準備は例年通りに、開かれる家の人間と狼という事で・・・。

臣と狼は近くのスーパーマーケットに。

うわぁ、狼とはやくも一緒のチャンス！近づけるかな？近づけるかな？

心の中が有頂天のわりには表情がクールな臣。

「・・・さて、まずはパーティー用品だな」

「・・・うん」

「クラッカーは人数分だと10個でいいが・・・一人二つぐらいいるか？」

・・・クラッカー・・・狼とクラッカー・・・

「よし、クラッカー鳴らすぞ！」

「ちよつと狼、私クラッカーの音苦手だからあんまり近づけないでよ！」

「へえ、いつもクールな臣ちゃんも意外と怖がり？」

「だ、だって！怖いものは怖いんだもん！」

「ふん・・・てい！」

「ぱん！」

「ひゃあ！」

「ハハハッ！ごめんごめん・・・え？」

「ウツウツ・・・ばかぁ」

「あーもお、泣き虫だな・・・ま、そこがかわいいんだけどな」
「え？・・・」

「……いい！」

「おい、聞いているのか？」

「……なに？」

「いや……なにつて……いや、オレが適当に買つとくよ」
呆れる狼、それを見て少し反省する臣。

ダメだな、ちゃんと一緒に買い物しなきゃ！

今度は食品を見て回る二人。

「鶏肉の足は買つてあるし、ケーキもお菓子もあらかじめ買つておいた、後は急に増えた四人分の食料だが……フライドポテトももっと必要だし、ジュースももう三本ぐらいいるよな？後は……何かいると思うか？」

狼が臣に話をふる。

「……うん お菓子がもつと欲しいかな？」

「うんつて……何がいるんだ？」

「……だから…… お菓子がもつとあるほうがいいつて」

「……臣、心の中で言つても俺にはわからんぞ？」

「あ……ごめん……お菓子」

「ああ、なるほど、確かに必要だな」

「あと……サラダ……用の……」

「ああ、レタスもトマトもいるか」

「……あとは……いいと……思う」

「そうだな、じゃ、野菜コーナー行くか」

……やっぱり、狼との会話が一番楽だな……

鈍感のわりには臣との会話ができる狼、本当、都合のいい性格である。

帰り道

「やっべー、意外と荷物が多くなつたな」

狼が一人で四袋全部持っている。

「・・・私何も持っていないな、持ってもいいんだけどなあ、とい
うか持ちたいなあ」

「・・・じ、狼・・・あの」

「ん？どうした？」

「・・・も・・・も」

顔を真つ赤にさせて言おうとする臣、それを見て狼は。

「・・・ああ！そうか」

いきなりそう言つと荷物を地面に置いて、マフラーを取る。

「・・・え？」

「寒いんだろ？ホラ、これ首に巻いてろ」

マフラーをつけてくれる狼。

「・・・あつたかい

「じゃ、行くか」

「・・・うん」

狼がまた袋を持とうとすると、二つ、臣が自分から持った。

「ん？持ってくれるのか？」

「・・・うん」

「いいつて、荷物持ちがオレの仕事だろ？」

「・・・寒いから」

「は？」

「こうすれば、もっと・・・あつたかい」

臣が狼の空いた手を握った。

狼も若干赤くなる、だが、臣はとても満足そうだった。

全国のカップルへ、あつたかいクリスマススイブを

タイプ28「クリスマスイブってなんだよ？」（後書き）

なんて言つとも思つたかああああああ！！！！

狼「うわぁ、ヒステリック」

タイプ29「酒乱上戸」(前書き)

クリスマス〜って・・・今更だけど過ぎてるよ、うん、だからなんだよ？文句あつか？

すみません、ないです。 酔ってます。

タイプ29「酒乱上戸」

クリスマススイブ、到来。

本日は臣の家でパーティーを繰り広げます。

大勢ではちやめちやする予定なので、心臓の弱い方は根性で見てください。

「ウィーやろうぜウィー！」

音恩が真っ先にゲームをテレビにつなげる。

「家から持ってきたのかよ・・・意外と準備がいいじゃねえか」

狼がやる気満々でコントローラーリモコンを掴んだ。

「同時に8人プレイでミニゲームをするぜ！何回もゲームをしてドベだった人はバツゲームな！」

音恩がそう言うのとヒロイン達の目が光る。

「全く・・・自ら自分を追い込むとは・・・ナンパ野郎も男じゃねえか」

要弧が勝つ気満々でリモコンを握る。

「では、バツゲームは一生忠誠を誓うでどうだ？」

奈絵美も不敵な笑みを浮かべてメガネを取る。

「いや、それはいいが・・・お前らもし負けたらどうするんだよ？」

「・・・負ける？・・・そんなの・・・ありえない」

臣が並々ならぬ闘志を燃やす。

「・・・バ、バツゲームは狼に決めてもらおうぜ？なあ？」

北崎が狼に助けを求める。

「いいじゃない・・・命を懸けたバトル・・・そうでなくっちゃ」

雫がそりやもう輝かしいくらいの笑顔で言った。

「あ、僕はしませんから」

「私も」

将騎と羊はそうそうと戦いから抜け出す。

「……音恩、しゅう……もしかすると俺たち三人の中から死
人が出るかもしれないが……その時は、笑顔で見送ろうな」

北崎が涙を隠しながらそう言った。

「な、なに言ってるんだよ！うまくいけばあっちの誰かが負けて美
少女の奴隷が手に入るかもしれないんだぞ！ポジティブに行こうぜ
！」

「……音恩、お前……ドベフラグ立ったぞ」
しゅうがすつごく不吉な事を言った。

ゲーム結果

ドベ、音恩、しゅう、北崎、狼

「……同率ドベかよ……」

四人の男達の人生が決まった。

「次は飲み比べゲームしようぜ」

要弧がそう言っていると台所から臣が黒いコップを四つ持ってきた。

「じゃあ早速、下っ端四人、飲め」

要弧がすつごく嬉しそうな笑顔を見せた。

うわぁ、かわいいけどドス黒い笑顔だな

狼はいつもこういう笑顔を見るからいまいち好きになれないんだ
な……

性格悪すぎだろ、つーか要弧ちゃん絶対Sだよ、ドSだよきつ
と

……誰か助けて

音恩としゅうと北崎と狼が心の中で順番に感想を述べた。

「ほら、さっさと飲めよ」

要弧が相変わらず強制する。

「じゃ、じゃあオレこれ飲むよ」

音恩が適当に選んだコップの中身を飲んだ。

「な、なんだこれ？・・・」

次の瞬間、音恩はぶっ倒れた。

「ね！ねおおおおお！！！！！！」

「死んだのか！？死んじまったのか！？？」

「うわああああ！！やだああああ！！！！飲みたくない！！！！」

三人が恐怖に混乱し始める。

「さて、次は貴様だ変態」

「へ！変態じゃない！カメラ野郎と呼べ！」

それでいいのかお前は？

「お、落ち着いて考えてみれば音恩がハズレを引いたって事だろ？・・・だったら、あとは大丈夫だよな？」

しゅうがそう言ってコップに手を伸ばし、中身をのぞく。

「な、なんだろう・・・炭酸じゃないな、泡がない・・・み、水でありますように！」

しゅうはそう言ってそれを一気飲みした。

「うヴおればああああ！！！！」

しゅうは謎の奇声を上げてやはりぶっ倒れた。

「しゅうううううう！！！！」

「終わった・・・オレの人生終わったよ、確実に」

二人の精神は既に鬱に入っていた。

「さて、次は影薄、お前だな」

「ちくしょおおおお！！影薄じゃない！イケメン崎だ！」

とうとう嫌がっていた呼び名を肯定してしまった北崎。

「だ、大丈夫だって・・・恐らく四つの中で一つだけが何も無いあたりなんだよ・・・確立は二分の一、大丈夫だ、自分を信じる！」

北崎はそう言ってコップに手を伸ばし、飲んだ。

「・・・こ、これは！！！！！！」

北崎は白目をむいて結局ぶっ倒れた。

「イケメン崎・・・くっ、安らかに眠れ」

狼はそう言いつつ、黒いコップを見た。

「もし、四つのうち一つだけが何も無いあたりだとすれば、オレは何ともないだろう・・・だが、もし・・・全部はずれたら？」

「さあ、狼、後はお前だけだぞ」

「ああもう！かわいく言うな！恐怖が増える！」

要弧の右ストレートが狼の顔面に入った。

「と、とにかく・・・まあ、飲んでみるか・・・」

狼がコップを持って、口をつけた。

そして中身の液体を口に含む。

・・・ん！！！！

「ブーーーーー！！！！！」

狼は盛大にふき出した。

「あ！こら狼！吐くなよ！」

「馬鹿やろう！！これビールじゃねえか！！！」

狼が咳き込みながらそう言った。

「お、正解、ちなみにナンパ野郎はブランデーで変態がテキーラ、

影薄はウォッカだ」

ある意味で一番アルコールの低いビールを選んだ狼があたりだと言えた。

「てか未成年が酒飲んでいいわけねえだろうがああああ！！！！！」

「つかアルコールの取りすぎは死ぬからね？」

「つか未成年の飲酒は犯罪だからね？」

「つか約三名生死の境をさまよっているからね？」

「まあまあ、堅い事言うなよ、シャンパンぐらいならいいだろ？」

「いや、よくないから、絶対ダメだからな？」

「いや、みんなもう飲んでるぞ」

「・・・なあ、さつきからどうもかわいく振舞っているけどよ要

弧・・・お前まさか」

「うん？・・・飲んだよ」

こ、これはもしや・・・甘え上戸？

甘え上戸、なんか酒飲んで酔ってしまうと人に甘える性格になってしまう人の事を言う。

しかし、要弧の場合だと、ツンデレであるのだが、アルコールによりツンが取り除かれ、ただ今デレが開放されているのである。

「お、おい！まさか他に飲んだ奴がいるんじゃない？」

「じゅん」

早速、奈絵美がいつもと違う様子で寄って来る。

「うわ！なんで泣いているんだよ奈絵美！？」

「うっ・・・だって、だって・・・じんじゅん！」

「・・・もしや・・・泣き上戸！？」

泣き上戸、酔うと泣く人ね。

もちろん要するにデレが取り除かれ素が出てる状態。

「おいおいおいおい、めっちゃくちや面倒な事になりそうな予感が・・・」

「」

「狼・・・ねえ、狼」

今度は雫が声をかけてくる、もちろん顔は真っ赤。

「雫は何上戸だよ？怒り？笑い？」

「キスして」

・・・酔うと・・・キス魔・・・ですか？

「キスして」

顔を近づけてくる雫、当然焦る狼。

「ねえ、狼！」

「よし、ちよっと目をつぶってろ」

え？マジ？

「・・・うん」

雫が緊張しながら目を閉じる。

すると、誰かが唇にキスをする。

・・・狼・・・

感動に浸っている雫だが。

じゃ、頼んだ要弧

酔っている要弧にさせていた。つーかいろんな意味でひでえ。

「・・・こうなると・・・あと一人の・・・臣は一体？」

狼がそう言つと、いきなり臣が後ろから抱きついてきた。

「うおお！？お・・・臣か？」

「・・・狼キサマ・・・いつもいつも鈍感でいやがつてええ！！！！！！」

「ぎゃああああ！！！！い！怒り上戸かよおお！！！！」

首を閉められる狼、そして怒り狂っている臣。

「いっぺん死んでこおおいい！！！！」

「馬鹿やろう！毎回死んでいるわ！！」

「へらず口をおおお！！！！」

「ぐへええええええ・・・」

とうとう泡を吹いてぶっ倒れた。

「・・・さて、この騒ぎ、どうやって静める？」

「いや・・・無理ですよ羊さん」

羊と将騎は一番安全な所から見守っていた。

「本当に・・・騒がしいクリスマスなこと」

羊が溜め息をつきながら言った。

タイプ29「酒乱上戸」（後書き）

うん、これでクリスマス編終わりね。

文句は聞かないよ、後苦情も。

感想とクリスマスの嫌味なら受け付けてるよ。

あと新しいアンケートはベタにキャラ投票にするよ。
しっかり投票してね。

一位のキャラには特別なお話を作ってる。

うん、特に意味ないね。

感想評価まってます！

一年の最後だ、さあ締めるぜ

本日、大晦日なり。

一年の最後という日なのに、狼の家ではコタツを囲んで骸骨と羊と狼がまつたりとしていた。

「一年ももうすぐ終わるねえ」

「羊ちゃんものんびり屋さんやなく、来年は何年やったっけ？」

「たしか丑年だろ？」

「うしかあゝ、なんかパツとしない年ねえ」

コラ、丑年に失礼だろう。

「にしても・・・俺が二人になってからかなり経つよなあ？」

「そうそう、なんか懐かしいわね」

「いやゝホンマ、あんたらと出会った時はぎゃあぎゃあわめいてましたが、意外とうまくいってますやん」

「本当、一時はどうなるかと思ったがな・・・」

「でも私が現れたお陰でいい事もたくさんあったでしょ？」

狼が思い出してみる。

「・・・あつたか？」

「ええ！ほら！・・・友達増えたじゃん」

「あほな迷惑イケメンズに美少女後輩軍団、旧友のグラビアアイドルにバイトの上司や仲間、んでもってお嬢様、そして中学生の少女・・・ろくなお友達がいないな」

「・・・別に、むしろ悪いのお前じゃね？」

羊はすねた。

「まあ・・・例年よりは、楽しい一年だったかな・・・」

狼はそう言つて窓の外を見た。

「ああゝあ、雪が積もってきやがったな」

「え！？雪！私遊びに行く」

「・・・こいつも、俺にどんどん似てこなくなってきたな・・・」

それでも、笑顔の羊を見ると、自分も笑ってしまう狼だった。

要弧の家

こちらでは要弧と弟の辰来が仲良く年越しそば作りを・・・

「ああ！お姉ちゃん！鍋から火が吹いてるって！」

「わああ！あれ！？こ、これどうすればいいの！？」

「お姉ちゃん！そば入れるの早すぎ！どろどろに溶けちゃうよ！」

「う、うん、え、えっと、隠し味にマヨネーズ・・・」

「やめて！ゲテモノなんかで年越したくないよ！！」

「・・・ご、ごめんなさい」

要弧はあからさまに元気をなくして台所の隅に縮こまっていた。

「お、お姉ちゃん、ほら、元気出して、ね？」

「いいよ・・・辰来の方が料理できるでしょ・・・私ゲテモノしか作れないし」

そんな風にいじけていると、台所に母がやってきた。

「ったく、何しよぼくれているのよ？女々しいわね」

「お、お母さん、お姉ちゃんは女の子だからそれで合っているんだよ？」

くわえタバコで金髪ロングヘアのヤンママ登場。うわあ、無駄に美人。

「料理なんて慣れよ慣れ」

「そ、そうだよお姉ちゃん！やっていれば料理なんて慣れるよすぐに！」

「馬鹿、男に慣れさせるんだよ」

え？強制？

「お前らの父さんだって始めのころは涙流しながらおいしって食べてくれてたよ、ゲテモノを」

父さん・・・そんな苦勞があっただね

「・・・狼も・・・慣れさせれば・・・いいのね？」

変なスイッチが入った要弧。

「そうよ！男なんて一度味覚が壊れればこっちのものよ！」

「う、うん！私！がんばる！」

「・・・お姉ちゃん、たしか臣さんって、料理上手なんだってね？」

辰来が白い目で要弧を見た。

「現実を見てがんばろうね？」

「・・・はい」

とりあえず気を取り直す要弧であった。

雫の家

「もうすぐ年が終わりそうだって言うのに・・・なんであんながい
るわけ？」

「あ、おかまいなく」

なぜか雫の家にお邪魔している音恩。

「全く、家が近所だかなんだか知らないけど・・・女の子に家に遠
慮なく入るなんて最低ね」

「狼だったら快く入れてた？」

音恩は袋叩きにされた。

「じよ、冗談です・・・いやね、本当は狼の家で年越しの予定なん
だけど、どうせなら美少女と一緒にあいつの家に行ってやろうと、
というかぶつちゃけて言う俺がただたん雫ちゃんと一緒にしたい
だけ、というわけです」

「・・・はあ、そんなセリフ、狼以外からの男全員から言われた
わよ」

遠くを見る雫、それを見て苦笑いの音恩。

「・・・狼はどんな子がタイプなのかねえ？」

「はあ？」

「だってさ、あいつモテたい願望がある割には鈍感なのか過去のト
ラウマからか、君たち四人のマルわかりなラブコールに気づかない
からさあ」

「・・・なんでラブコール出してると気づいたのよ」

ああ、君たちもなかなかの鈍感なんだね

「とにかく、あいつは女の子を悲しませる行為を許すような男でもないし、いいやつなんだけど・・・どっか哀れなんだよなあ」

「あ、哀れって何よ」

「さあね」

音恩はそう言いながら、頭の中では別のことを思っていた。

・・・狼、お前って、誰を好きになるんだろうな？

「・・・ま、別にいつか」

「はあ？」

「で、雫ちゃん、今度俺とデートしな」

「しない、そして死ぬ」

雫のコブラツイストをもろに受けた音恩だった。

臣の家

「お姉ちゃん！お雑煮できた！？」

「・・・うん」

「どれどれ、ちよつと味見・・・うん！バツチシ！」

「・・・よかった」

妹の美緒が張り切って準備をしていた。

「さくて、これで狼さんもイチコロね！」

「・・・でも、クリスマスするとき・・・やっちゃったからな」

「大丈夫よ！どうせいつもの事じゃない！」

案外ひどいな美緒。

「大丈夫！基本は笑顔笑顔！」

「・・・う、うん」

そして臣の流し目、へだからこれは臣の笑顔なんだって

「うん！決まってる！」

うん、いろんな意味でね。

「さあ！大将首討ち取るわよ！」

「・・・お、おお」

すごい、見事に素でボケている丘姉妹でした。

奈絵美の家

「・・・ほら、これでケーキ完成だよ」

「ほう、オカマならではの特技だな」

奈絵美がメガネを光らせて慎を誉めた。

そして慎は少し怒りマークを出しながらクリームを奈絵美に飛ばした。

「うわ！なにをする！？」

「うりゃ！どうだ！あはは！鼻についてるよ」

「・・・きくさくま！てい！」

「うわ！ちょ！服についちゃうよ！」

「えい！これでもか！これでもか！」

クリームを掛け合う二人。

「ちよつと？二人してなにやってるの？」

すると二人の騒ぎに奈絵美の姉上が注意に来る。

「・・・え？なに？あ、あんたたち・・・」

「あ！お、お姉ちゃん！こ、これはだな・・・こいつが！」

「ええ！僕だけの所為にしないでよ！」

「全く・・・ちよつと写真とっていい？」

つてオイ！

「つーか何？あんた達大晦日にケーキって一体どんな神経しているのよ？」

お前は写真を激写しておいて何を言っている？

「い、いいじゃない、こんな所でしかいい所見せないんだから」

「ふん、ま、がんばってね・・・さて、この写真はどこに売ろうか」

お姉さん、あんた危険すぎるだろ？

「・・・やれやれ、とにかく、このクリームをどうにかしなきゃ」

「・・・慎、お前・・・けっこうその姿色っぱいな」

「奈絵美ちゃん、僕だって男の子だよ？君を見ていると理性がぶっ飛びそうだよ」

「なに？・・・じゃあ、この姿を狼に見せたらどうなるんだろうか？・・・もしかして」

「いや、狼だったらドン引きすると思う」
「・・・」

一瞬でも馬鹿なことを考えた事を悔やみ続ける奈絵美だった。

ちょうど夜も更けたころ。

「ああ、除夜の鐘が鳴ってる」

羊がのんきにそう言った。

「お姉ちゃんのほほんとしてるわね、そのまま寝ちゃうんじゃない？」

「おいおい、こいつは俺なんだぞ？そんなかわいいことするかよ」

「スー・・・」

「「オイ！」」

兄と妹のダブルツツコミが決まった。

「もうすぐ要弧達がくるんだぞ？気を引き締めろよ」

「いや、引き締めるといわれても」

『ピンポン』

「お、噂をすればだな」

狼はそう言ってお出迎えに行った。

・・・よし、今年の抱負は・・・狼と雫のカップルを作ること、これで決まりね！

羊は頭の中でそう思いながら、また寝てしまった。

この小説を読んでくださった皆様へ、
ぜひ！よいお年を！

by アツラ

一年の最後だ、さあ締めるぜ（後書き）

一年過ぎようが百年過ぎようがまだまだ続くんだから、応援よろしくお願いします！

タイプ30「要弧がイメチェン」(前書き)

新年早々、心機一転という事で、そんなお話。

タイプ30「要弧がイメチェン」

新年なり、新春なり、本日お正月日和なり。

つて事で狼と羊は家でごろごろしています。

「いや、要弧達は福袋を買ったため戦場に出向いているから平和だよ全く」

「む、狼と雫と一緒に福袋買いに行かせたかったのに・・・新年早々失敗とは」

「なんだ？何の話だ？」

「黙れ役立たず」

最近羊の言動が要弧達に似てきて危機感を覚えた狼。

くっそ、そもそもこいつはオレの分身だろ？オレとどこが似ているんだよ！

多分、変わり身の早い所が似ているかと。

やばいな・・・このまま行くと家の中に凶悪な美少女と一緒に住んでいる事になってしまう、それだとオレの身がいつまで持つかわからないし・・・何とかせねば

そして考え込む狼。

要弧達と一緒にいるから本来のかわいい美少女キャラの性格が崩れているんだよね？・・・って事はかわいい美少女キャラの性格の子と友達になれば・・・いい具合に影響されて凶悪化を止められるかもしれない・・・だが待て、オレの知り合いにそんな性格の女の子は・・・いや、女の子ではないが、男でなら！

狼はおもむろに携帯を取り出した。そして誰かにかける。

「おい、慎か？ちよつと家に来い」

『おや？大親友の狼くんじゃないか、あけましておめでとぅ、年賀状届いた？』

「ああ、ご丁寧にお前の振袖姿の写真がプリントされたあの年賀状なら残念ながら今年も届いたよ、正直捨てたい気持ちでいっぱいだが羊に引き取らせた」

『うゝん、2009年になっても苦労してるねえ』

「誰の所為だよ！」

『で？用件は？今女友達のみんなと買った福袋の中身を見せあいつこしているんだからよほどの用件じゃないと動けないなあ』

「・・・羊を好きなだけ着せ替え人形にしているから」

『仕方ないなあ、五分で着くから』

狼は羊に心の中で謝りながら携帯を閉じた。

「なに？誰に電話したの？」

「いや・・・ちよつと慎に、な」

「ふゝん」

三分後

慎がかわいい冬服を着て息を切らしながら玄関に入る。

「フッフ、意外と早く着いちゃったな・・・で、約束の方は覚えてるよね？」

「もちろんだ 羊には言っていないがな」

「もしも羊ちゃんができなかったら狼くんが着せ替え人形だからね、もちろん女装で」

「ちよ、嫌なこと言うな、オチがそうになったらどう責任を取ってくれる？」

「別に？案外女性読者の皆様は期待大かもしれないよ？」

「何の話をしているのよ？」

羊が怪しい目つきで二人を睨んだ。

「いや、何でもない、ま、上がれよ慎」

「おっじゃまっしまゝす」

二人はそのまま二階へ上がって狼の部屋に入って行った。

「……怪しい……」

羊が一人でそう呟く。

絶対になにかあるわね……。フフ、狼も隙だらけね、私が女になった事でどれだけ女の勘が鋭くなったと思っているの？……。もう鈍感馬鹿狼ではないのよ？……。といっても

「何しているか見当もつかないわね」

やはり鈍感はしっかりと受継がれていた。

正直骸骨がいたらあいつの力で探る事もできるけど……。あいつ天界の宴会だとかなんかで出かけているからねえ、ってか悪魔だから地獄なんじゃないの？

そう言いつつ、羊はどうにかして探りを入れようと二階へ向かった。

狼の部屋

「ふん……。羊ちゃんをかわいい性格にしたいと？」

「まあ、そういう事だ……」

「……。もしかして狼、羊ちゃんに気があるの？」

オレはナルシストじゃない、故に自分を好きになるわけがないだろ……。と言いたい所だが、それだと羊がオレの分身であるとはれる……。まあ適当に言い訳しとくか

「いや……。あいつはオレの従兄弟だろ？……。要弧達みたいに凶悪で最低な性格にはしたくないんだよ」

……。狼くん、それが鈍感ゆえの発言だとしても、最低すぎて殺意すら沸くよ

それもそうだ、誰もが慎と同意見であろう。

「・・・ねえ狼くん、君は本当に要弧ちゃん達が嫌いなの？」

「嫌いかどうか以前に俺が嫌われているし」

「わからないじゃん、そんな事」

「・・・今までの仕打ちを考えてみると・・・好かれていると勘違いする奴は異常だと思う」

あ、それ言われてみるとそうかも

「・・・まあ、でも、よくあるでしょ？好きな子をいじめたくなるっという」

「それは小学生までだろ、常識的に考えて」

「その言い方イラツと来るなあ　で、でも、ほら、要弧たちシャイだから」

「それはないな、注目浴びても微動だにしてないのが証拠だろ？常考」

「略すなよ・・・何か腹立つ　そ、そうだ！要弧達はツンデレでしょ？」

「ツンなんてかわいいレベルじゃないし、デレが無いだろ？jk」

「ぶち　・・・死んじゃえ」

狼は動けなくなるまでボコボコにされた。

やべえ、慎は意外と強いな・・・関節技が神だろ？

「ていうか狼、いつからパソコンにはまっているの？」

「いや・・・しゅうに影響されて変な口調がうつったんだよ」

「あ、なぐんだ、変態を駆除すればいいって事だね」

あ、だめだ、こいつも凶悪で最悪だ、しかもオカマ、たちわりい黒い笑みの慎に狼は見切りをつける事にした。

「で、羊ちゃんをかわいい性格にする方法だっけ？」

「いや、もう結構です」

丁寧にお断りしようとする狼、だが慎にはある考えがあった。

「いい方法があるよ・・・催眠術なんだけどさ」

「催眠術 de 変身！」

それは催眠術で性格を変えちゃおう！という、内気な君も！忘れん坊で困っている君も！素直になれなくて困っている君にも！そのコンプレックスを解消してくれる画期的な催眠療法なのである！ハ作者は適当な事を言ってます。

1 まずは口ウソクを用意して！アロマキャンドルね！甘い匂いのやつ！

2 その匂いを催眠術をかけたい人にかがせてね！

3 次が肝心！時間差があるけど部屋の温度を暖房で28度にしておいてね！結構暖かいつて思える温度でいいからね！そうしてかけたい人が眠そうになるまでまとう！ちなみに時間帯はいつでもいいよ！

4 そしていよいよコインの登場！もしくは話術が得意な人はそれでいっちゃえ！とにかく相手が眠そうな所を見極めて最低でも20回は理想の性格になるように命令してね！

5 わお！目覚めた瞬間に！その性格に変身できちゃった！

注：マネシナイデネ、ウソダカラネ！

「って方法なんだけど？」

「・・・それ、いただきだな！」

狼は見事に馬鹿を踏んだ。

「それじゃあ！オレこの部屋をセッティングするから口ウソク買って来い！」

「わかった、じゃあ準備ができしだい！すぐやろうね！」

二人は固い握手を交わして早速準備に入った。

一方、外で探りを入れようとドアに耳をつけていた羊。

「・・・だめね、全然聞こえない」

かなりのバカだ。

それでも耳をつけたままにしている羊は、慎にドアを開けられた瞬

間部屋の中へ倒れこんだ。

「ひゃあ！」

「・・・え？羊ちゃん？」

「・・・あ、あはは・・・さらば！」

羊は向かい側の自分の部屋に駆け込む。

「・・・ま、あの様子だと会話を聞いていたわけじゃなさそうだし・・・別にいいか」

慎はそう言ってロウソクを買いに行った。

準備が整い、狼はいよいよという顔をする。

「じゃあ慎、暗示役は任せた」

「うん、じゃあ羊ちゃんを呼んできてね」

そう言つて慎は雰囲気を出すために黒い布を顔に巻く。

意外と視界が見にくいなあ・・・でもまあ、人影ぐらいは識別できるね

狼の部屋は窓も締め切り、カーテンも引いてあり、唯一の光がアロマキャンドルの火のみ。

しかも甘い匂いが立ち込めており、もはや異世界のような神秘さすらあった。

狼は匂いが逃げないように素早く外へ出る。

そして羊の部屋にノックして入った。

「入るぞ〜？」

狼が部屋に入ると、羊はベッドの上でうつぶせになっていた。

「・・・羊？」

「・・・スー・・・スー」

うおおおおおい！寝ちゃってるよ！

狼は羊を起こそうと羊に呼びかけるが、なかなか起きない。

「やべ、はやくしねえとキャンドルが切れちゃうよ！」

狼はそう言つて急いでいた。

そんな時、守多家のドアをくぐる者が一人……。

「おい、狼、いないのか？」

福袋で手に入れた新しい服を身に付けて要弧登場。

そして軽い気持ちで玄関に入ってくる。

た、辰来もかわいいからイケると言ってたし……今年の抱負はかわいくなるだからな！狼を……め、メロメロに……いや！み、見返してやる！

心の葛藤中でも素直になれない要弧だった。

にしても……寝ているのか狼は？……そうだ、この際だから部屋まで突入して寝起きドッキリでもしてやろう……ん？……女物の靴……慎だな、私に勧めた限定5つの福袋の靴だ、一つは慎で後の四つは私達が買ったから間違いないわね……何しているんだろう？

要弧はとりあえず静かに二階へ上がった。

そして狼の部屋のドアに手をかける。そのままドアを開けた要弧は中へ入る。

……あれ？何か暗いわね？……それに甘ったるい匂い……普通不審に思えば部屋には入らないものだが、要弧は何の疑いも無いようだ。

「来た様だね？」

……慎？何やってるの？

「簡単な占いをしてあげるよ、そこに座って」

慎は視界が良く見えなくて要弧だと気付いていない。

要弧も相手が慎でよく占いをするので何の疑いも無く座る。

そして自分の部屋で熟睡の羊。

それを起こそうと冷たい濡れタオルを羊にかけて寝ぼけた羊のキックを受けて死にかける狼。

……なんか……眠くなってきた……

「あなたはかわいい性格の女の子になる、あなたはかわいい性格の女の子になる、あなたは」

十分後

「げ、ゲフツ・・・寝ぼけながらのキック十回、パンチ十回、目潰し二回、首絞めトータル3分、極めつけはヒジリスペシャル地獄の火車へ要するにジャイアントスイングで窓の外へダイブ・・・生きているオレが不思議なくらいだよ・・・もうあきらめよう」

狼はそう言つて体を引きずりながら自分の部屋に戻った。

ドアを何とか開けて中に入る。

「し・・・慎、もうあきらめよう、羊起きないし、痛いし、もういいよ、案外要弧たちにもかわいい所あるしさ、オレ的にはやっぱ今のままの羊でいいよ」

「・・・大丈夫？狼？」

「ん？要弧か、ああ、大丈夫だよ一応・・・はああああ！！！！」

狼がこの世の終わりを表現するかのような表情になる。

「ごめんなさい！ごめんなさい！要弧さんはめっちゃかわいいです！案外なんて言葉言つてすいません！！調子乗ってました！マジですみません！！」

狼が全身を恐怖で震わせながら土下座した。

「え！？今の羊ちゃんじゃないの！？」

慎がようやく間違いに気付く、そして黒い布を取つて要弧をみた。

「あ・・・よ、要弧ちゃん・・・」

「・・・クスクス、慎くん面白いかったこうしているね」

「・・・あれ？」

「そうですね！？こいつ仮装が好きなんですよ！こいつなら煮るなり焼くなり好きにしていいいので俺だけは助けてください！」

「おい、コラ、狼くん」

慎が軽く土下座している狼を蹴った。

「おおおおおおお願いします！！まだ死にたくない！！なんでも言う事聞きますからああああ！！！！」

「・・・変な狼、どうしたのよ？・・・もう、顔上げてよ」

「無理です！会わず顔がありません」

「ちよつと、いつまでこのやり取り続けるの？いい加減飽きたよ」
慎がもう一度狼を蹴る。

「バカ！お前要弧がかわいい口調で喋っているって事はめっちゃくちや怒っているって事だぞ！死ぬぞ！？一歩間違えりゃ死ぬぞ！！」

「怒ってないよ」

「・・・あれ？」

「怒ってないってば」

「・・・どうしたんだ？」

怪訝な顔で顔を上げた狼。

「なんで怒ってないっていう一言であっさり顔上げるの？」

「いや・・・要弧は嘘をつかない武士みたいな性格だから」
慎とそんなやり取りをしていると、要弧が話しかける。

「ねえねえ！この服、似合う？」

要弧が女の子らしい服を見せながら、かわいい笑顔で聞く。

「・・・も、もちろんですよ！めっちゃかわいい！」

「おい、なぜにお世辞を続ける？」

慎が狼につっこんだ、だが、要弧は嬉しそうに頬を紅くする。

「あ、ありがとう」

・・・どうしよう、要弧ちゃんにかけちゃったよ・・・
どうしよう・・・要弧が変になっちゃったよ・・・
慎と狼は大それた事をしてしまったとどこまでも反省していた。

「・・・えへ、狼にほめられちゃった」

この人はむしろ気楽になったようだ。

タイプ30「要弧がイメチェン」（後書き）

わぁ、すつごくかわいい要弧・・・いまいち馴染めない？
y 狼 b

狼くんの所為だからね？

b y 慎

さぁ、キャラ投票、待ってます。

感想評価は24時間365日受付中、休日、祝日、祭日も受け付けています！

タイプ31「やっぱり要弧なんだな」(前書き)

カップリング・・・成功なのかな？

タイプ31「やっぱり要弧なんだな」

「さて……ご説明を願おうか狼？」

羊が狼と慎を正座させて聞いた。

「……まあ、事故みたいなものかな？」

「そうそう、狼くんの言う通り予期せぬ事故だったんだよ」

「え？誰か事故に遭ったの？」

要弧が心配な顔をのぞかせた。

うん……君が事故に遭ったんだよ……

「全く……女の子らしくなる催眠術ねえ？」

「いや……まあ、出来心というか」

「なに？……まさかお前、私によからぬ思いがあるんじゃないだろうな？」

あるわけねえだろ……つつても、まさか凶暴化を止めてオレのプライベートライフを守るためにしましたなんて言ったら……いや、さすがに怒らねえよな？オレだし

「まさか……私の凶暴化を止めて自分のプライベートライフを守るためなんじゃないでしょうね？だとしたら……殺すよ？」

「ほんの興味本位です、本当調子乗っててすみません」

心を見透かされて焦る狼だった。

「でもまあ、催眠術なんだからあっさり解けるだろ？ほら、指をならせばさ？」

「……ごめん狼くん、僕指ならないんだ」

狼の視界がどんどん霞かすんでいった。

「じゃあ……催眠術は解けないの？」

「うん……なにか精神に強いフラッシュバックが起きない限り、

戻らない」

「・・・おい、どうにかする手立てはあるんだろうな？」

羊がめつちや怖い笑顔で慎に聞いた。

「いや、その、別にいいでしょ？かわいくなつた要弧ちゃんなんてめちやくちゃレアじゃん！多分今見逃せば一生見れないよ！うん！」

「・・・私のブチ切れモード見る？一生に一度しか見れないよ？・・・死んじゃうから」

あれえ？羊ちゃんってこんなに怖い子だったの？要弧ちゃんより怖いなあゝなんて

慎が涙目になりながらあまりの恐怖に失神した。

「・・・で？・・・どう責任取るんだ狼」

「・・・どうしましょう？」

「ねえ、殺していい？いいよね？てか私の手で葬っていいよね？」

「大丈夫だから！オレが付きつきりで守るから！ずっと！いや一生！死ぬまで一緒にいて守り続けるから！」

何気にかっこいい台詞をそんな所で使っているのか？

・・・え？いや、それは困る！！雫との恋はどうなるのよ！！！！

「べ、別に要弧にそこまでしなくても」

「え？・・・狼、今の・・・私に言ったの？」

要弧が紅くなる、そして羊が石になる。

「おお！絶対にお前から離れねえからな！」

そして空気も読めずに大胆発言の狼。

「・・・じゃあさ・・・明日、デートしたい」

「おお！デートでも新婚旅行でもどこへでも行くっぜ！」

既にやけくそモードの狼は焦点の合っていない目で強く断言した。

そして要弧と慎が帰った後、狼は羊に『死の制裁一步前、極上フルコース』という名の拷問を受けることとなった。

次の日の繁華街

要弧と狼が仲良く歩いてます。なんだかんだ言って微笑ましい絵です。

その後方に怪しい三人組がいます。羊と臣と音恩です。なんかすごく二人を睨んでます。

「・・・まさか・・・狼と・・・要弧が・・・付き合うなんて」

臣は露骨に黒いオーラを出してます。

「いや、でも驚いたな、あの要弧が天使の微笑で狼と公然の前でイチャイチャとは・・・なんか新鮮だし、お似合いだし、てかむしろこの物語にはそういったドキドキで甘い恋模様が今までなかったと思うんだが、どう思うお二人さ」

「・・・黙らないと、殺す・・・」

臣が涙目で後ろに業火を背負いながら音恩を黙らせた。

「てかナンパ野郎、あんた悔しくないの？」

「え？なんでオレが悔しがるの？」

「だって！誰も落とせなかった要弧をあつさり狼が！」

「いや、要弧はそりゃ美少女だけどさ、一途に狼が好きだったし、心に決めた奴がいる女の子を落とすのはオレのナンパ道に反するよ、それに・・・なんか要弧幸せそうだし、これでいいんじゃないのか？」

「・・・てめえ、んな事言ったら後の人はどうすりゃいいんだよ？」

「はい？」

羊が辛そうな顔で言う。それを見て、音恩は溜め息をつく。

「・・・まあ、狼も罪な男だけどさ・・・それってあんた達にも言

えることだろ？」

「はあ！なんで!？」

「おいおい・・・学校で毎日いくつラブレター捨てているんだい？」

「・・・それは」

「誰にだつて叶わぬ恋つてやつはあるんだよ・・・不条理だが、それは認めるしかないだろ?・・・でもよ、そうやって叶わぬ恋の上にできている幸せな恋つてさ、本当、幸せなものなんだよ。それを手に入れるよう、がんばるしかないんじゃないのか？」

「・・・お前に励まされても、意味ねえよ・・・けど、サンキュ」
羊がそう言ったら、音恩はピースをして笑った。

で、当の本人達は。

「ねえねえ！このぬいぐるみかわいいね！」

「・・・うん・・・そうだね」

「あ！この置物もきれい！」

「・・・そうだね」

「・・・もう、狼さつきからそればかり・・・もしかして楽しくない？」

「・・・いや、その・・・なんて言うか

「ねえ?狼？」

そう言つて顔を近づける要弧。

・・・緊張している事に気づいてくれないかなあ？

狼は顔を赤くして珍しく動揺していた。

ああ、昨日はつい勢いに乗つてデートを承諾したが・・・オレ
まともなデートなんてはじめてだよ・・・それに、まさか相手が要
弧だとは・・・まあ要弧とは幼馴染だし、嫌われているというよりは、
便利君として見られていると思つているからなあ・・・てか・
・・・なんで女の子らしくなつた瞬間オレの事が好きになつたんだ？

頭の中でいろいろ考える狼、それを見て、要弧はつまらない顔をした。

「狼、さっきからやつぱり上の空だよ？・・・狼が楽しんでなきや私も楽しくないな」

「わ、わりいわりい、そうだ！アイスクリーム買ってきてやるよ！ちよつと待つてて」

そう言つて狼は走つて行つてしまった。

行列に並ぶ狼、だが、頭の中では考え事でいっぱいだった。

要弧が今のままでいいかどうかと言つたら・・・やべえ、何とも言えない。かわいい要弧は今までのように凶暴じゃないし、オレはビクビクせずにすむ・・・それに、オレの事が好きと言つてくれるし、考えてみれば超美少女の彼女ができたつて事だよな？・・・

「でも・・・このままでいいわけ・・・無いよな」

催眠術で本当の要弧からかわいい要弧にした、それつて要するに今までの要弧じゃあ、ないつて事だろ・・・そんなの・・・いいわけねえだろ・・・

そう思いながら、狼はアイスクリームを買つて戻ってきた。

「待つたか？」

「ううん、大丈夫だよ」

二人は歩きながらアイスを食べる。

「・・・ねえ狼、昨日のあの台詞つて・・・告白？」

狼は電柱に顔をぶつけた。

「ぶふおお！・・・えつと・・・お前と一生一緒にいるつて言つたあの台詞か？」

『コクコク』

かわいく頷く要弧。

やべえ・・・かわいすぎるだろ・・・むしろ本当に要弧なのかど

うかが疑いたくなる位だ

「・・・あ、ああ」

「・・・じゃあさ・・・今度は、『好き』って言うって」

・・・何？この展開？あれ？お、おかしい、こんなの予想もしてなかったなんてレベルじゃねえぞ！ゆ、夢か？そうか！夢なんだよ！そうに違いない！

自分で自分を殴る狼。

・・・いてえ

「何しているの？」

不審がる要弧。

ああ・・・もう完璧普通の女の子だよこの子・・・もう・・・今までの要弧じゃねえのか・・・いつも強がって・・・いや、強いが普通に・・・それで、素直じゃなくて・・・いや、平然と命令を下して自己中心的だからある意味素直か・・・えっと・・・オレだけにタメ口で・・・あれ？・・・いや、でも・・・オレは・・・

そんな要弧と・・・ずっと・・・一緒にいたいんだよな・・・今までも、これからも・・・

「・・・好きだよ・・・今までの要弧が」

「・・・今までの？」

「・・・まあ、女の子らしさは乏しいけど・・・いつも堂々としていて、そこら辺の男はボコボコにして、いつもオレに不条理な命令ばっかして、そのわりにはオレのために真剣になったり、ちよつとかわいく浴衣着てみたり、所々変なスイッチが入ると変になる、そんな要弧と・・・オレはずっと一緒にいたいね」

そう言って狼は笑った。

そして、要弧は、少しキョトンとして固まる。

「・・・あれ?・・・要弧?・・・ようこ?」

「・・・女の子らしさが乏しくて悪かったわねえ?」

「・・・あれ?」

「いつも偉そうで?大男も一撃で倒して?いつも命令してくるうるさい奴?」

「言っていない言っていない」

「しかも・・・浴衣で超かわいく決めたのにちよつとしかかわいくなかったの?」

「・・・いや!めっちゃかわいかったよ!本当!」

「それで?・・・所々変なスイッチが入るって何よ?」

「え?だから・・・酒飲んだときとか、風呂でのぼせた時とか・・・あ」

「・・・なんでお風呂に入っただけでぼせた私を知ってるのかな?」

ムンクの叫びの如くしまったという顔になる狼。

かわってなぜか怒りゲージがマックスにきている要弧。

「じゅん・・・貴様には究極の制裁が必要のようね?」

後方にいる三人

「あれ?・・・要弧が狼をボコボコにしている?」

「うそ?・・・あちゃー、狼くん何かしちゃったみたいだね、折角の甘いデートものの数時間か・・・哀れな」

「・・・よかった。まだ、チャンスはある」

「・・・戻ったのかしら?・・・やった!チャンスはある!

羊も臣も喜んではいたが、

「死ね！死ね狼！恥かしい台詞を平然と言いやがって！」

「グハッ！げしゃ！・・・まあ、嘘は言っていないからいいだろう？・・・
ドグハ！」

「今までの台詞！絶対私以外に言うなよ！」

「ドルファ！・・・わ、わかったよ」

結構二人の距離は近づいたようです。

タイプ31「やっぱり要弧なんだな」（後書き）

さあて、次回から羊とか他のキャラの恋模様でも描くか！

そうそう、『ナイトで行こう！』という新小説書いたのでそっちもよろしく、結構見ている人が多くて嬉しいです。

あ、そうそう、これまだ完結じゃないから、別にダラダラしてないよ、ただもう狼の鈍感ぶりとハーレムぶりに作者が怒りを抑えきれなくなったからくつつけさせました、何か問題でも？

ああ・・・にしても、後の奴ら誰と結ばせようか？

行き会ったりばったりで毎日生きてます。

じゃあ！感想評価！後なんか『こんな話が見たい！』てのがあったら言ってね。

さあ！これからが始まりだ！（いろいろの、ね）

タイプ32「スリーS連合発足」(前書き)

雲を幸せにする・・・うん、できるのかな？

タイプ32「スリース連合発足」

最近、狼と要弧の仲がぐつと縮んだような気がする今日この頃・・・。
やつほ、羊だよ。最近の悩み事は雫がかわいくてしょうがない・・・。
うん、文句ある奴いる？

さて、皆さん。前回なんだかい感じになった狼と要弧、まあ一部の人には微笑ましいとの声もあったけど・・・これで本当にいいのでしょうか？

よくない事もあります、そう・・・雫を幸せにできないんです！！

「羊ちゃん、それは羊ちゃんのワガママやん」

骸骨が何かほざいてますけど無視しましょう。

いいですか？雫はこのメンバーのポジションで例えるなら、ヒロインなんですよ！

「もっと詳しく言ったら5人のうちの一番主人公と仲の悪いヒロインやでってバグハッ！」

骸骨のあごを粉碎しました、再生するまで黙っててもらいます。それと、はつきり言って主人公の分身である私が好きなんですから、どう考えても必然的に主人公も好きになるはずでしょう！これはマングというお約束です！

「黒魔術で分身と女体化した自分が出てきている時点では他には類を見ない設定やろ？」

再生早いなおい。まあいい、とにかく・・・。

「雫を、幸せに、しよう。名づけて『スリーS連合』を作ろうと思います」

羊が学校の誰も使っていない会議室で、そう決意を述べた。

「スリーS・・・服のサイズかと思ったよ、しかもかなり小さいな」

羊に捕まった北崎が静かにつつこんだ。

「ったく、よりによって影薄しか捕まえられなかったわ、不覚ね」

「にしても困ったなあ、僕は一応狼&要弧派なんだけどなあ」

「・・・そうそう、スリーS連合の掟、『雫を悲しませる者は死の制裁』ってのがあから、命懸けてね？」

羊のとびつきりのダークな笑顔に、北崎も吹っ切った爽やかな笑顔で返事をした。

「それで？・・・この骸骨さんはどなた？」

「はあ？オレは骸骨なんやから骸骨でええやん？何か問題でも？」

「・・・いえ、ナイデス」

「さあて！我ら三人で雫の幸せ作りを手助けするわよ！」

羊は張り切ってホワイトボードを出してきた。

「さ！まずは狼と要弧の間を引き離すための作戦を！」

「はい」

「よしきた影薄！」

「影薄か・・・イケメン崎のほうが断然いいな　とりあえず、要弧よりも雫のほうが良いという事を狼に気付かせればいいのでは？」

「ナイスアイディア！」

何でいきなり英語？

骸骨の奇怪な言動に北崎はついていけなかった。

「なるほど・・・雫でメロメロ作戦ってわけね、影薄もやるじゃない」

北崎はもはや心の中で口答えするのもあきらめる事にした。

「じゃあ！早速実戦！」

そう言って羊は出て行ってしまった。

20分後

「・・・ダメだった、雫が恥ずかしいからイヤだって・・・」

羊が真っ白になって帰ってきた。

「まあ、当然の結果だね。なんて頼んだの？」

「狼の前で悩殺ポーズしてきてって言った」

「それでやれる子かいな、しかもやったら狼はンドン引きやで？」

二人の正論に羊は更に真っ白になった。

「・・・どうすればいいの？」

「こういう時こそ・・・オレの出番だな」

北崎はそう言って雫の元へ向かった。

3分後

北崎が頭から血を流しながらたんこぶを10個以上作って帰ってきた。

「・・・し・・・し、死ぬ・・・雫マジギレしたよ」

「三分って・・・根性無いわね」

「三分近くサンドバツク状態だったんだぞ？少しはいたわってくれてもいいだろ？」

「なんで怒らせたんな？」

「・・・狼に、『私を好きにして』って言えば万事うまくいくとアドバイスした」

「すごいな、武士も真青な自決行為やわ」

骸骨が鼻で笑った。

「さて、次骸骨行きなさいよ」

「ええで、オレは魔法が使えるんやから絶対成功するに決まってるやん」

「そうね、だったら雫を操って告白なり色仕掛けなりしてきて」

「サーイエツサー！」

骸骨はそう言って外へ出て行った。

1
分後

「あかん、近づけれへん」

「……はあ！？なんでよ！」

羊がキレて骸骨を粉々にするまで殴る。北崎は今だ動けない状態なので黙ってみていた。

「し！仕方ないやろ！銀の十字架首にぶら下げているんやから！！」

「ただのシルバーアクセサリーでしょうが！！根性で何とかしなさい」

い根性で！！」

「無理やて、オレガリガリなんやから、骨のよつに、なんせ骨ですから．．．なぐんちゃって」

「さ、影薄、その粉片付けておいてね」

「はい」

北崎は骸骨の粉を丁寧にとって捨てた。

「さあ！次はどんな作戦で行く？」

「……仲間を集めていってきまうす」

北崎はそう言って仕方の無い笑顔で会議室を出て行った。

そして更なる犠牲者を連れて来るのであつた。

おまけ
質問回答コーナー！！！！！！

見習い様からの質問、全て羊がお答えします。

Q1 自然に女言葉を使う自分に違和感はない？

「うん、ないよ？もはや身も心も乙女だからね」

Q2 海に行つた際水着を着たりなど女物の服を着てどう思う？

「やっぱり初めて着た時は違和感あつたけど、もう慣れちゃった。でもスカートは苦手です」

Q3 要弧達のグループにいて狼に好意を持ったりした事は？

「そんなのあるわけ無いじゃないですか、殺意ならいつも持ってますけどね」

Q4 男に戻りたい？

「うん・・・そもそも戻る事ができるのかなあ？黒魔術だと副作用で結局私はそのまんまでもう一人男の羊が誕生するだけだもんなあ・・・まあ、戻れるなら・・・戻りたいかな？・・・でも、もう女の子に慣れちゃったし、これはこれでいいかも」

Q5 そもそも自分が元狼って覚えてる？

「・・・うん、お、覚えてたよ！・・・でも、正直忘れたい事柄かも。だって狼をいつも見ているけど鈍感で女心がわかつてないし、見ているイラストと来るし・・・なんで雫はあんな男がいいのよ？まあ私なんだけどね」

Q6 好きな食べ物は？

「前はカレーが好きだったけど・・・今は雫と同じホットケーキが好き」

Q7 好きな動物は？

「・・・猫かな？・・・雫を動物に例えると猫だから・・・」

Q8 最後に読者に一言お願いします。

「・・・私と雫のカップリングを許せる人がいたら挙手してください。あ、後スリース連合へ入りたい人はぜひ言ってね」

以上！！見習い様！ありがとうございます！！

そしてこれを見た人で、このキャラに質問したい！ってのがあったらどんどん質問してください！答えられる範囲で答えまくります！！

タイプ32「スリーS連合発足」(後書き)

羊がもはや新手の変態にしか見えなくなってきた気がする今日この頃・・・。

タイプ33「零パニック！」（前書き）

さあて！急展開と新展開炸裂！よかったな！零大人気だ、うん！

タイプ33「雲パニック！」

佐崎雲、学園の中で親友といえど？というアンケートで見事毎回一位に選ばれるほどの、男女別け隔てなく仲良くなれて、モテる美少女。

学級での評判も。

女子生徒A「明るくていい雰囲気作りしてくれるから大好き！」

女子生徒B「要弧ちゃんグループの中で羊ちゃんと同じくらい話やすくて楽しいよ！」

男子生徒V「・・・そうだな、一言で言うなら・・・女神」

男子生徒R「遠くからいつも見ているけどさ・・・それだけで、幸せなんだ」

男子生徒W「彼女と同じ空気が吸えて・・・僕は幸せです」

かなりの人気者。

そんな、友達としても接しやすくて親しくなれるキャラなのに・・・みんなが知らない、秘密があったのです・・・。

それは・・・。

「なあ雲・・・最近雲といると誰かの視線を感じるんだけど？」

要弧が校庭で寝転びながら雲にそう言った。

「・・・やっぱり？」

「・・・雲、ストーカーが増えたんなら狼にまた頼めばいいだろ？」

要弧が心配そうな顔でそう言うが、雲は首を横に振った。

「・・・実はね、ストーカーじゃなくて」

「しっずく！今度の土曜日どこに行く！？」

羊が笑顔を振りまきながら雲に走りよって行った。

「なあ羊、羊は何か視線を感じない？」

要弧が真剣な顔で羊に聞いた。

「視線？・・・そつか、また雲を狙った不埒なやからが」

「い、いや、だから違うのよ・・・その視線の正体は」

「楽しそうだね、僕も混ぜて」

音恩が爽やかな笑顔で三人に近づく、そしてリンチにあった。

「す、すびばでした・・・ただ、美女達の花園にぜひ入りたいと」

「もう一発殴っていいか？」

羊がそういいながら殴った。右頬に見事入ったように音恩はそのまま永眠した。

「で？視線がどうしたの？」

「うん・・・その視線の正体は」

「うん？みんないないと思ったらここにいたのか？」

「・・・なんでナンパ野郎の死骸がここに？・・・目障りだなあ、奈絵美と臣が音恩にけりを入れながら校庭の隅に捨てた。」

「ねえねえ、二人とも最近怪しい視線を感じない？」

羊が二人に聞くと、二人とも頷いた。

「確かに、監視に似たような視線を感じていた」

「・・・私も・・・気付いていた」

「それで？・・・その正体はなんなんだよ？」

「・・・もういい？誰も邪魔しない？・・・よし、それで・・・その正体は」

「おゝい、頼まれたお菓子買って来たぞ」

狼は雲に三発だけ殴られた。

「全く！次から次へと！もうちよつと来るなら一氣に来てよ！！」
「わ、悪かった 何でオレが謝るんだ？・・・にしてもいつもの雫
なら十発は殴るんだが？どうしたんだ？」

狼は若干特殊な方法で雫の異変に気付いたが、特に気にしなかった。

「・・・実は、ここ最近私をつけているのは・・・S Pなの」

いつものメンバーが固まった。

いつの間にか復活した音恩も固まっていた。

カメラでシャッターチャンスを狙って隠れていたしゅうも固まった。
たまたま通りかかっていた将騎もそれが聞こえて驚いていた。

北崎はスリース連合の副長官で忙しくてそこにはいなかった。うん、
どうでもいいか。

「・・・なにがスペシャルなんだ？」

狼が真面目な顔をしてボケた。

そして5人の美女に足蹴りにされた。

しゅうがオレも蹴つてと入ってきた。だが無視された。

「全く、雫になんでS Pが付くのよ？」

羊が困った様に言う。

「・・・私のお母さんの実家って・・・南字家みなじっていう名門家らしいのよ・・・だけどお母さんとお父さんがカケ落ちしたものだから、
ついこの間までは普通の家庭の女の子だったんだけどね」

「へえ、知らなかったな、雫ってお金持ちの家なんだ？」

要弧が目キラキラさせて聞いた。

「私の家というより母方の実家がそうなのよ」

「・・・いいな・・・お嬢様」

「そんないいものじゃないわよ、S Pがいたらのんびりする暇も無いんだから」

「だがいい事じゃないか、金は大切だぞ？金は」

「いいなあいいなあ、今度何かおごつて」

「おい音恩、それが男の言う事か？」

「黙ってる変態カメラマンが」

二人の男の熱いどうでもいいケンカが始まった。だが要弧がすぐに二人の脳天を蹴ってノックダウンさせた。

「とにかく、SPの人がいるけど、まあ特に気にしないでいいからね」

雫はそう言つて軽く流したのだつた。

帰り道

「すごいなあ！雫はやっぱりほかの子とは違うなあ」

羊が一人で勝手に舞い上がっていた。

「はあ……お前最近雫の事ばかりだな？好きなのか？」

「うん、好き。大好き」

「素晴らしいよ、その台詞がオレの時でも言えるといいね」

ふっふっふ、今ならマジで言えちゃうんだなこれが……

羊はそんな事を思いながら歩いていった。

すると、黒服の男が一人、後ろから近づいてきた。

男は別に慌てる様子もなく、狼の肩に手を置いた。

「すみませんが」

「……え？はい？……オレ！？オレ何もして無いぞ！」

拳動不審になる狼、そして他人のふりをする羊。

「ひでえ！お前本当に血も涙も無い女だな！」

「冗談冗談、で？何か用ですか？」

「いえ……私、南字家の専属SPの者です。今回は我々の観察により認められたあなた方、守多狼様、そして守多羊さま。あなた方を、雫様のご友人として、婚約披露宴に出席していただきたいのです」

「……ああ、こんにやく披露宴？おいしそうですね？」

狼は真面目な顔をしてそう言った。そして羊に足を踏まれた。

「あの・・・言っている意味がよくわからないんですが？」

「ここ一週間ほど、失礼ながら雫様の交友関係を調べさせていただきました。その結果、男性での常識的なご友人は狼様一人、そして女性での常識的なご友人は、羊様と奈絵美様のお二人が、我々の判断基準を満たしたので、ぜひ、雫様の婚約披露宴に出席していただくこと」

「・・・雫の婚約披露宴って・・・どういことですか？」

羊が珍しく怒った口調でそのSPに聞いた。

「・・・聞いておられませんでしたか・・・雫様は南字家のお嬢様として、葛木家のご子息と婚約する事となったのです」

二人の時間が、一瞬だけ、長く止まった。

羊はショックのあまり、目が虚ろになっている。そこで、狼が先に動いた。

「・・・すみませんね、ちょっとはじめて聞く話なんで・・・驚いちゃいましたよ。そうなんですか・・・雫が・・・結婚？」

「・・・ゆくゆくはそうなります」

「・・・それで？・・・披露宴っていつです？」

「・・・明後日です」

「わお、急だねえ・・・ま、本当ならもつと前から雫が言っていたんだろうけどな」

「丁度土曜日が披露宴です、どうかご出席願えますか？」

そんなの・・・嫌に決まってるだろ！！

羊はそう言おうとして、SPの男を睨んだ、だが、その男の目を見た瞬間、羊は止まった。

その男の目は、脅しの目だった。

変な言動や、軽はずみな態度をしたら・・・容赦なく、襲ってくるだろう。

ましてや・・・婚約披露宴を邪魔しようとする人間を見つけたら、すぐに抹殺する事になんら躊躇してはいないだろう。

羊は、恐怖で口を閉じてしまった。

「・・・・・・・・すみませんけど、話し合ってから決めていいですか？何せ急ですから」

狼は落ち着いた態度で、その男に言った。

「・・・・・・・・返事はいつただけますか？」

「そりゃ明日にでも」

「・・・・・・・・そうですか・・・・・・・・わかりました・・・・・・・・では、明日、雫様との最後の学校生活を、大切にしてくださいね」

男はそう言つて静かにさつて行つた。

「・・・・・・・・狼・・・・・・・・どうする？」

「・・・・・・・・おや？元オレのくせに弱気な態度の羊ちゃんですね？」

「・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・雫、行っちゃうの？」

「・・・・・・・・さあな・・・・・・・・それはあいつが決める事だろ？」

「・・・・・・・・嫌だ！そんなの！・・・・・・・・絶対おかしい！」

羊はそう言つて雫の家に走つて行つた。

雫の家の周りに、SPの男達はいなかった。

羊は意を決して、雫の家のインターホンを鳴らした。

少し時間が経つ、すると、女性の声がした。

「すみません、今出ますので」

その声は雫のお母さんの声だった。

「あら、羊ちゃん！いらつしゃい・・・・・・・・どうしたの？」

雫の母親は今にも泣きそうな羊を見て驚いた、だが、羊はなんでもないと言つて、雫に会いたいと言つた。

「いいわよ、さ、上がって頂戴」

雫の母親は、快く家の上げてくれた。

羊は雫の部屋の前に来た、そして、雫がいつもの様子で顔を出した。
「どうしたの羊？そんな顔して？何かあった？狼に襲われかけた？」
「・・・SPの人が・・・わけわかんないこと言ってた」

羊は途切れ途切れに言った。

「・・・雫が・・・婚約するって・・・その披露宴が土曜日だって・・・」

「・・・」

「うそ・・・だよ？・・・明日が・・・雫と最後の・・・学校生活なんて・・・そんなの」

「・・・ごめん」

雫は、そう言つて、涙を流しながら、笑った。

「・・・仕方ないのよ・・・でも、黙ってて、ごめん」

雫はそう言う。だが、羊は納得のいかない顔だった。

「・・・なんで、婚約なんか・・・」

「・・・おじいさんが、決めた事らしいの・・・南字家を助けられるのは、私だけみたいで」

「・・・なにそれ？どういうこと？」

「葛木家と親戚同士になつて、今ある財閥を守ろうとしているんだつて・・・すごいでしょ？・・・政略結婚よこれ？」

「・・・雫の意思は、無視してるわけ？」

「・・・仕方ないのよ、こんなチャンス、滅多に無いらしいし」

「なにそれ・・・おかしいよ！」

「・・・それでも、言う事聞かなきゃ・・・家族がバラバラになつちやうのよ」

「・・・え？」

「お父さんの今勤めている会社、南字家なら、簡単に買収できるのよ・・・それで、お父さんをいつでもクビにする事ができるのよ、しかもその後、強行手段でお母さんと私を南字家で引き取るんだっ

て・・・どう転んでも、私婚約させられるのよ・・・だったら、大人しくしていればいいのよ」

「そ、そんな・・・」

「・・・ごめんね、言っのが辛くて・・・今まで黙ってたの、明日が、最後なのにな」

雫は、いつの間にか、泣き止んでいた。でも、やはり表情は、悲しげだった。

「・・・ねえ、狼の・・・ことは・・・どうするの？」

「・・・諦める！・・・どうせ狼は私の事、好きでもないようだし、要弧にでも渡す！」

「・・・私、雫が好きなんだよ？・・・ずっと、一緒にいたいよ」

「・・・ごめんね」

羊は、暗くなり始めた夜道を、一人で寂しく歩いていた。

どうにかしたくても、どうする事もできなくて、羊は泣いていた。そこへ、人影が寄って来る、その人影は、狼だった。

「・・・大丈夫か？」

「・・・ヒック・・・大丈夫なわけ・・・ないじゃん・・・許せないよ！・・・雫を勝手に・・・連れて行くなんてさ！！」

羊の悲痛な台詞が、夜道に響いた。

「雫泣いてたよ！！・・・雫、悲しそうだっただよ！！・・・なんで、なんで！・・・雫がかわいそうだし・・・私も・・・悲しいよ・・・」

狼は黙って羊の言葉を聞いていた、そして、羊が落ち着くまで待っていた。

「・・・ねえ、狼・・・どうすればいいと思う？」

「・・・雫が・・・泣いていたんだろ？」

「・・・うん」

「雫が・・・悲しそうだったんだろ？」

「・・・うん」

「・・・お前も・・・そして俺達も・・・悲しいんだよ・・・だから」

羊が後ろを良く見ると、みんながいた。

要弧も、臣も、奈絵美も、慎も、北崎も、音恩も、しゅうも、将騎も、辰来も、美緒も、栗鼠も。

「雫を、助けられるのは・・・俺たちだけだろ？」

狼が笑顔で、羊の頭をなでてやった。

羊は、今だ涙を抑えなかったが、笑顔になる事が、できたのだった。

タイプ33「零パニック！」（後書き）

シリアスモード、次回もそうなるといいな。
感想評価待ってます！

キャラへの質問、キャラ投票待ってます！
あなたのコメントをぜひ！アツラまで！

タイプ34「栗パニック〜最後の日」(前書き)

「い・・・生きてる・・・生きてるぞおオオオ!!!!」

作者は本当に生きています。ダメじゃん。

タイプ34「零パニック」最後の日」

寒い朝、霜が降っているの、玄関先の草木は軽く白がかった。た。

零はマフラーを首に巻いて、玄関先まで見送ってくれた母を振り返る。

「いつてきまゝす」

「・・・ねえ、零・・・本当にいいの？」

母は辛そうな顔で大事な一人娘を見た。母の目には、涙が溜まっていた。

「嫌だったら言えばいいのよ、お母さんだって自分の信じた道を進んだの・・・その所為で零には迷惑かけちゃったけど、今ならまだ！」

「・・・大丈夫だから」

零は笑った。

零自身、もっとマシな言葉はなかったのかと内心後悔していたが、この言葉が精一杯のようだ。彼女もまた、溢れそうな涙を堪えていた。

「お母さんもお父さんも、ずっと私の親でいて欲しいの・・・それに、おじいちゃんにだって、迷惑かけるのは嫌だから・・・後悔はしてないよ」

無理やり笑顔を作った。

なにせ、今日が最後の・・・みんなと一緒にいられる日だから。

狼達と初めて出会ったのは中学校の入学式の時。

幼稚園の頃からの幼馴染である要弧と狼、そして小学校の時に奈絵美と臣に二人は出合った。

要するに、私がみんなの中で一番遅くに知り合ったのだ。

初めて要弧や狼を見た時は、何ともいえない滑稽さがあった。

要弧も臣も奈絵美も狼をいじめているようで、実はかまって欲しそうで。

そんな様子を見て、友達になりたいと思うのに時間は全くかからなかった。

私は恋の架け橋になってやろうと思った。特に要弧の。

理由は特別にあるわけではなかったが、強いて言うなら、要弧が一番良く墓穴を掘って狼と気まずい雰囲気になっていたからだ。見ていて助けたくなった。

そんな理由で、狼と要弧をくっ付けさせようと動こうとした。

だが、私は狼と顔をあわせる度に、カチンとくる悪態ばかりついていた。

それで狼が怒る様子がおもしろかった。いちいち面白い反応をしてくれた。

いつから、好きという感情が芽生え始めたのだろうか？

いつも悪態ばかりつく私なのに、なんだかんだ言って側にいつもいてくれたからだろうか？

いや、狼にそばにいないとかの概念なんか無い。

みんなと一緒にというのが、私達の中では、当たり前なのだ。

雫が学校の校門近くに来ると、後ろから誰かが抱きついてきた。

「雫！あはよ！」

「羊？・・・うん！おはよ！」

羊が笑顔で雫に挨拶をした。昨日は泣いていたが、もう吹っ切れたのだろう、雫はそう思った。

「ねえ！早速だけど今日学校サボって遊ぼう！」

「ええ！？・・・どうしたのよ急に？」

「急なのはお互い様でしょ？」

羊が自信満々な表情で雫にそう言った。

・・・お別れパーティーかぁ・・・ま、折角だし！

雫は胸の奥にある寂しさを確かに感じながらも、笑顔で羊に返事をした。

学校をサボって繁華街に来た。

平日の繁華街は初めてだが、休日よりは人が少ないといった程度なだけで、相変わらず人込みはひどいものだ。

「・・・もしかして、羊だけ？」

「うん、そうだよ？」

他にメンバーがいないことに、雫は内心がっかりしながらも羊と会話をしていた。

「ところで、何して遊びたいの？羊」

「うーん、それじゃあ、アクセサリー店なんか！」

制服で平日に堂々と遊ぶのも抵抗はあったが、慣れてしまえばどうという事は無い。

二人はいつもの様子で店を回っていた。新刊の漫画本に対して感想を言い合ったり、最近流行のクレープ店でお喋りをしながらクレー

プを食べる。

「……楽しそう」

「まあな、あいつらにはやっぱりああいった軽い感じの笑顔がお似合なんだろう？」

臣と要弧がこっそり二人をつけていた。

常にSPが見張っているためただ単に雫を連れて行くとしても、すぐに捕まるのは目に見えている。なので狼達はSPの処理をまず実行する事にした。

まず一番雫と仲が良く、更にSPの男達を油断させれる容姿の持ち主という事で羊が雫を連れまわす役をする。そして要弧と臣はホスト姿に変装して二人の後を付ける。もちろん二人はエサだ。SPは当然の如く怪しく見える要弧と臣の目の前に現れるはずだ。

そして、後ろで待機している男性陣にSPを退治させる……という作戦だ。

それに……もしSPを抑えなかったとしても、羊にすぐ連絡を入れて逃亡をしてもらう、足の速い二人ならSPを撒ける……後は運しだいね

要弧は緊張した面持ちで二人をつけていた。

羊と雫はCD店に入って行った。今の所変化は無い。要弧も臣も店内に入ろうと自動ドアに向かった。

「すみません……お待ちいただけますか？」

きたっ！！

要弧はさり気なくポケットの中の携帯に手を伸ばし、一斉送信のボタンを押した。あて先も内容もあらかじめ書いておいた、そして・

・メールは全員に送信された。

「・・・なんすか？」

要弧は振り返りながらそう言った。相手は案の定、SPらしきスーツの男。更にもう三人後ろに続いていた。

「先程から尾行しているだろう？それとも・・・付きまとっていると言ってやったほうが理解してくれるかな？」

脅しの目で静かに男は言った。プロの脅しは本物だった。要弧も臣も体が震えた。

「さつさと失せれば見逃してやるよ、水商売のガキども」

「ああ！？なんだよおっさん？俺らが何してるって？」

要弧は意を決して野次を飛ばす、臣も平然を装った態度ができた。

「俺らと話がしたいならもっと人気の無い場所にも行こうぜ？」

「・・・仕方ない、おい、お前が行け」

さすがにただのケンカでは四人とも付いて来るわけがなかった。だが、完全にこいつら四人を抑えなければならない。要弧は先に動いた。

偉そうに命令をしていた男の鳩尾みぞおちに、右の拳を叩き入れた。

奇襲は功をなして、恐らくリーダーであろう男は情けなく両膝を地面につけた。

もちろん要弧にしかできない芸当である。速さと慣れた打撃が必要だからだ。

「お！おい！」

「グ！ゴホッ！・・・先に手を出した事を・・・後悔させてやるよ」

冷静な口調でありながら四人の男達は明らかに怒りの形相で要弧を睨む。

そして四人は一斉に動き出した。要弧に目掛けて容赦なく攻撃を仕掛ける。

しかし、四人の男達の動きは途中で停止させられた。

それもそうだろう、彼らの背後には分散して尾行していた狼達がバツトを片手に立っているのだから。つまり頭を叩かれたのである。当然四人はあっけなく気絶して夢に旅立った。

「よし、意外と隙の多いやつらで助かったぜ」

音恩がそう言いながらSPの一人から携帯を拝借した。

「・・・葛木葵^{かつらぎあおい}・・・十中八九こいつが今回の横から美少女を何の苦労もなしに手に入れれるボンボンのム力つく男だな」

「音恩の怒りが痛いほど伝わる紹介だな」

しゅうがそう言いながら倒れているSP達を道の端っこに寄せた。

「さて・・・面倒なお相手の連絡先を手に入れたようなので・・・俺と・・・奈絵美に辰来、この三人で話をしに行く。後は羊と雫のデパートの監視を頼んだ」

狼はそう指示を出して音恩から受け取った携帯で、葛木葵に電話をかけた。

呼び出し音が数回鳴って、意外と早く、相手は電話に出た。

「どうしたの小田？まさかとは思うけど雫さんを逃がしちゃったの？」

「大丈夫ですよ、雫をたった一人でどこぞの金持ちに嫁入りさせないようにしっかり守っているの・・・どうぞご安心を」

「・・・へえ、ただの高校生だって聞いていたのに・・・プロのSP四人を抑えるほど強いなんて知らなかったなあ」

幼い感じのする声色だが、男には間違いないようだ。

「とりあえず、話がしたいですね。会って話をしましょうよ」

狼はさり気なく提案をする。そして返事はあっさりと返ってきた。

「いいよ！場所はセンタースカイビル。知ってるよね？港の近くだよ。じゃあ・・・待ってるから」

相手は子供のような印象の奴だった。だが、声と口調とは裏腹の、黒い部分が見え隠れした気もした。

いよいよ、狼達は雪の婚約者と会う事となった。

タイプ34「零パニック〜最後の日〜」(後書き)

消息不明だったATURAです。

なんか、もう、本当すみません。

初めの頃にコメントを下さった人達は今でも見ていてくださっているのでしょうか・・・。

あ、やべ。本編が妙にシリアスだからオレまでシリアスになっちゃまったよ。

感想・・・待ってます。

どう？シリアスっぽい？by作者

帰れ by羊

タイプ35「零パニック〜絶望の日々」(前書き)

一時的復活！まじすいません！！

タイプ35「零パニック―絶望の日―」

セントースカイビル

港の近くにそびえ立つガラス張りのビル。空の青と海の青と全く同じ色をしたそのビルの持ち主は、葛木葵。若干十七歳という若さで『葵菓子食品』の代表取締役。親は『葛木製菓』の創始者。ちなみにどちらの会社も今や一流企業の一つである。

「あ・・・あの、狼さん。今更なんですけど」

「どうした？」

ビルの前ですくんでいる辰来。だが狼も奈絵美も落ち着き払った態度だ。

「な、なんで僕達三人が話し合いのメンバーなんですか？」

「ああ、簡単な事だ。俺達を頭の良い順に並べて上から三人選べば・・・この三人になったわけだ」

「あ、頭の良い順？」

「もつと言えば、常識があつて冷静に物事を見れてすぐに感情的に成らないで相手を言いくるめれそんな知的キャラが、今ここにいる俺たちだ」

うわぁ・・・なんか不安要素も多々あるけど良いのかなぁ？

辰来は涙を流しながらうまく行くように神に祈りをささげていた。

音のしない自動ガラスドアを二つくぐると、バカみたいに広いピロティが広がる。

狼は何の迷いもなく、目先に見えた受付のプレートを見て、若い二人の女性が座る受付に向かった。すると、相手は制服を着た高校生が来たというのに、顔色を変えずあいさつをした。

「こんにちは、今日はどのようなご用件で？」

「明日婚約をするらしいここの社長に、話があつて来ました」

狼は穏やかな口調でありながら、言葉は食って掛かるような皮肉を使った。

「・・・雫様の御学友でございますね、お名前を教えてくださいませんか？」

「守多狼、言つたからには会わしてくれるよな？」

「ご安心を、葵様は元より会うつつもりだとおっしゃってました・・・では、案内いたします」

左側の髪の長い受付の女性が席を立ち、三人を案内した。

エレベーターで最上階まで上がる。最新のエレベーターは振動どころか音すらさせず上に向かつていた。

「なあ狼、相手は何を言うと思う？」

奈絵美がこつそりと狼に小声で話しかけた。

「そりゃあ、どう考えても・・・『婚約阻止なんてバカなマネ止めてくれない？』だろ」

「だよね・・・で？・・・何か策でもあるのか？」

「どうだろうな・・・まあ、正直まずは葵がどんな人物なのかを見てみたい」

「・・・まさか・・・良い奴だったら雫を任せるとか言つつもりか？」

「・・・奈絵美・・・普通の家庭に生まれた子と・・・そうじゃない家庭に生まれた子とは・・・全くの別もんなんだぞ？」

「・・・何の話だ？」

「人の上に立っている人間の世界は・・・拘束された世界でもあるって事だ」

真剣な表情の狼に、奈絵美は少し驚きつつも、嫌な顔をした。

「・・・そんな考えの狼は・・・嫌いだ」

そんな思いを片隅に、エレベーターは最上階に着いたのでその重い扉を開いた。

エレベーターを出れば、既にそこは社長室だった。

つまり最上階が全て社長の部屋らしい。あのバカみたいに広いピロティと同じくらい社長の部屋も広かった。

そんな部屋の前方に、なんとも着飾った立派な机がある。そしてその机に肘をつけてニコニコしている少年。なんとも古典的な社長室にはどうも似合わない少年だ。大きなぱちつとした目に小柄な体型。そして女の子のショートヘアをしている。

「ようこそ、僕の部屋へ・・・どう？飲み物は何かいる？」

「そんなのいるわけ！」

「コーラ」

「私はオレンジジュースで」

辰来が否定しようとしたら、二人が堂々と頼んでしまった。

「いやいやいや、何考えているんですか二人とも！」

「辰来はいらないのか？」

「いりませんよ！状況を見てください状況を！」

辰来がそうわめくが、特に二人は慌てなかった。

「・・・それで？社長さんよ・・・俺らの言い分聞いてくれるのか？」

狼が受付の女性が運んできたコーラを飲みながら聞いた。

「・・・立ちっぱなしにさせてごめんね。イスを用意しようか？」

「いや、結構だ。それより私達の話聞いてくれるのかと聞いている」

どうもはぐらかしてくる葵に、狼も奈絵美も鋭く話をつっこむ。
すると、葵はニコニコしていた表情を急に真剣にさせて、イスから

立ち上がった。

「え！？な、なにか怒りましたか！？」

辰来がビビるが、葵はそうじゃありませんよと軽く言った。

「あなた方の言い分はわかっています。雫さんの御学友、もとい、親友の皆様でしょう？・・・皆様は雫さんを大切にしていらっしゃる、だから・・・横から雫さんを奪うようにして連れ去ってしまう僕に、恨みもあるだろうし、雫さんを任せられるか心配なんですよ？・・・友は大切にすべきだと父から教えられてきました。ですから、あなた方の気持ちはよくわかります。ですが・・・僕は、雫さんを幸せにさせる自信があります・・・命を張って守る覚悟もあります。ですから・・・」

葵はゆっくりと狼達の前に来ると、いきなり土下座をした。

「どうか・・・僕に雫さんをください」

辰来も、奈絵美も、絶句した。

・・・め、めちゃくちゃ良い人だよ・・・どうするの？

・・・どうするの？・・・狼・・・

二人はもう、狼に頼るしかなかった。

しばらく、沈黙が流れる。その間も、葵は頭を下げたままで、三人も黙ったままだった。

「・・・狼さん？」

辰来が狼に声をかける。だが、狼は無表情のまま、じっと見ていた。

・・・迷っているんですね・・・そりゃ、迷いますよね・・・

辰来は狼の心中を察して、もうしばらく黙る事にした。

20分後

さ・・・さすがに、迷いすぎじゃないか狼？

奈絵美が心配して狼に小声で話しかける。

「お、おい・・・まだ、迷っているのか？」

「・・・ああ、今こいつの本当の覚悟ってやつを見ているんだ」
狼はわざと葵にも聞こえるぐらいの声で言った。

さらに10分後

葵が土下座しつつも震え始めてきた。おそらく足が痺れたと思われる。

・・・も、もう・・・いいんじゃないか？

奈絵美はむしろ葵がなんだかわいそうになつてきたので止めるように言おうとしたその時。

「ああああもう！！狼のいじわる！！」

急に葵がそんな台詞を叫んで土下座を止めた。

「「・・・え？」」

固まる二人。そして、狼だけは勝ち誇った笑みをしていた。

「はっ、ようやく本性を表したかこの腹黒小僧」

「・・・チツ・・・横にいるお二人さんのどちらかが止めてくれると思ったのに」

「残念だったな、お前の思い通りにさせないためにこの二人を選んだ。急なパニックには対応できない二人を、な」

「・・・ふーんだ！鈍感のくせに変に用意がよすぎるんだよ狼は！」

「・・・あれ？・・・お二人さんは知り合いなんですか？」

辰来が本当に急な展開についていけず困惑して聞いた。

「オレの両親がこの菓子食品の設立に協力したんだよ。その成功パーティーでこいつを知った」

「・・・なんで知っている事を黙っていたんだ？」

奈絵美が若干怖い顔になっているが狼は続ける。

「オレ一人だけがこいつの本性知っても意味無いだろ・・・何せこいつプロの腹黒ヤロウだから人を欺くのがうまくてよぉ・・・オレが下手に本性バラしてもそれを逆手に取られてお前ら二人の信用がこいつに傾けば、オレは孤立してチームはバラバラになって・・・全部パー」

「な、なんてあざとい奴なんだ・・・」

辰来がそう言っていると、葵はわざと悪そうな笑みを浮かべた。

「こわっ！」

辰来が本気でビビっている。

「まあ・・・本性も暴いた所で・・・葵くん？君の会社が設立して成功したのはどの誰のお陰だったか覚えてるか？」

「・・・まあ・・・狼くんの両親には確かにお世話になったね」

「うんうん、よくわかってるね・・・それを踏まえたうえで婚約破棄プリーズ」

「・・・ごめん、無・理」

かわいく言う葵。ちよっとドキツとする辰来。素直にかわいいと感じた奈絵美。

「こ・ろ・す」

めっちゃ怒ってる狼。

「だ〜か〜ら〜、今回の婚約は葛木家が決めた事じゃないんだよ」

「うるせえ！辞退しますって言えば全て丸く収まるんだよ！！」

「だから！今回は僕にその権利がないってことなの！」

「はあゝ？今や大企業の社長でありながら、しかもバックには両親の経営している更に巨大な企業がある超エレガント上流人が、なぐに言っただよ！」

「・・・その両親が経営している巨大な企業の危機を救った事のあゝる恩人が頼んでいるとしたら？」

葵は溜め息をつきながら言った。

「・・・なに？」

「だから、言わば南字のおじいちゃんに僕は僕の両親の恩人だから、その人からの頼みごとを聞かないわけにもいかないって事なの・・・悪いけど・・・僕にできることは・・・せめて雫ちゃんを悲しませないように、できるだけ幸せにする事なの」

「・・・マジかよ・・・ちくしょう・・・」

狼が絶望的な表情をする。

「・・・そんな」

辰来がその場にへたり込んでしまった。

葵も、辛そうな表情をする。

だが・・・まだ、諦めていない奴がいた・・・。

「・・・まだ・・・諦めるには、早すぎるぞ？」

奈絵美がそう言って、眼鏡を外した。

タイプ35「零パニック〜絶望の日々」(後書き)

あ、うん、がんばります！

タイプ36「暴パニック〜逃亡の日々」(前書き)

ひっさっしっぶっりっの更新、ヤホー

タイプ36「雲パニック」～逃亡の日～

ゲームセンター

無駄にBGMが大きいその場所に、雲と羊はいた。

ユーフォーキャッチャーを雲が真剣な表情でやっている。クレーンを上手く動かし、猫のぬいぐるみを取ろうとしていた。その横顔を、羊は嬉しそうに見ている。

「……よしっ！」

上手くいったのだろう。雲が歓喜の声を洩らし、猫のぬいぐるみが取り口に落ちてきた。

「すごい！雲って本当にユーフォーキャッチャー上手いよね！」

「まあねえ、ちよろいちよろい」

雲は満足げに、そのアニメチックなおとぼけ顔の猫のぬいぐるみを両腕で抱いた。

「……これ、羊との思い出にするね」

ふと、雲がそんな事を言った。それも、悲しそうなトーンで。

羊はその言葉を聞いて、確かな胸の痛みを感じた。

まるで、突き放されるのが当然のような。別れるのが、まるで決められた運命かのような。

羊はすぐに嫌な思いを頭からたたき出して、あえて平常でいようとした。

「まだ、雲と別れるつもりは無いよ。雲が、一人で辛い思いをするのもイヤ」

羊はそれだけを言って、沈んだ顔の雲に、笑顔に向けた。

「次は何する？どこ行く？何でも言って！」

「……そう……じゃあ……みんなに会いたい！」
「え？」

「……要弧たちに、会いたい」

純粹なその願いは、もちろん、後ろから付いて来ている要弧たちにも聞こえていた。

「……どうする？」

北崎があえて、要弧にそう声をかけた。

「……んだよ影薄。私達は雫を守るためにだなあ」

要弧が一瞬目を擦ってから、強がる口ぶりでそう言いかけた。だが、栗鼠が言い返した。

「護衛ならもうしましたよ。後は、雫さんの近くにいたら？」

要弧が、少し考える。そして、臣の方を見た。

「……どうする？臣」

「……私は……雫のそばに……いたい」

臣は、そう言って要弧の手をつかむ。

「……行こ？」

臣がそう言つと、要弧もゆっくり頷いた。そして、二人は雫の方へ駆け寄った。

その光景を、北崎達は嬉しそうに見ていた。

「仲、良いんだな」

しゅうが眼鏡を上げながら言う。

「そりやもう。家族で過ごした時間と同じ位の長さを、彼女達はあのグループで過ごしていたんだからね」

慎が微笑ましく見ている。そして、彼らは、覚悟をした。

「彼女達の悲しむ顔なんて、見たい奴はここにはいないんだから……。死ぬ気でやるしかないでしょ？」

慎の軽いもの言いに、ほかの全員が、強くうなずいた。

きつと、大人の目から見れば、自分達のしている事は所詮ワガママでしか無いだろう。

それでも、仲間を大切に作る気持ちが間違いだとは思ってない。しかも、結婚とか、自分が好きになる相手ぐらい、自分で決める権利はあるはずだと思う。

好きになる過程とか、ぶっちゃけ知らねえ。

それでも、誰かを好きになったかどうかぐらいはわかるつもりだから。

子供達の未来を作る手助けが大人のすることであって、未来自身を作るのは、きつと子供だと思う。

だから、見守っていて欲しい。

直接手を出すとかじゃなくて、口を出すのでもなく。ただ、見ていて欲しい。

それすらも、ワガママなのかな？

「雫！お前学校サボって何してんだよ！」

要弧が雫の後ろから声をかける。そしてビックリして振り返る雫。

「え！？ど！どうしたの二人とも！」

「・・・別に・・・気にする事は無い」

臣が笑ってそう言った。

「二人とも、スーツ姿だよ？」

羊が笑ってそう言うと、二人はしまったという表情になる。

だが、雫は全く気にすることなく、二人に言った。

「ねえ！公園に行こ！外の空気が吸いたくなっただ！」

四人は仲睦まじく、ゲームセンターを出た。

そして、北崎達もそれに続く。

その時、北崎に携帯が鳴った。

北崎はすぐに電話に出る、案の定、狼だった。

『イケメン崎、今葛木と話し終わった所だ』

「そうか、で？どうだった？」

『それが・・・更にややこしい事になってよお』

「まじかよ・・・で？どんな風にややこしく？」

『簡単に言つと・・・葛木側からは婚約破棄ができない、つまり・・・全て南字が決めた事らしい。これは状況が厳しくなった、少なくとも南字の連中に捕まると厄介だ。だから、絶対に雫と羊から目を離すなよ。わかったな？』

「わかったわかった、簡単すぎて話を聞いてないくらいだ」

『もう百回くらい言つてやろうか？』

「いや・・・十分覚えているから大丈夫だ・・・ところで、南字が黒幕とわかった所で、今後の作戦は？」

『そうだな・・・実は今こっちで奈絵美が作戦を考えたとようでさ、まあその為に今からオレ達はまた別の所へ移動するから』

「ほう・・・つまり、後は任せて逃げ続けろと？」

『まあそういう事だ、頼んだぞ？』

任せとけよ。北崎はそう言つて携帯を切った。

店内にはもう北崎しかいない。他の男性陣も外へ出たようだ。

北崎は特に慌てず外へ出た。そして、驚愕の光景に目を見張る。

通行人が怯えながら遠退いて行く。それもそうだろう。今しゅうと音恩がヤクザのような風体の男達にリンチされている。五人がかりで地面に倒れている二人を蹴り続けていたのだ。

隅では要弧と臣が倒れていた。目立った外相は無いのでリンチではなく眠らされたと思われる。北崎は逆上して五人の男達につきもつと走り出した。しかし、誰かに腕をつかまれた。

「なんだ！！」

北崎がそう怒鳴って、止めた人物を見た。

「私よ」

栗鼠だった。彼女は北崎の腕をつかんだまま、こっちに来てと言つた。

「バカ！しゅうと音恩が！」

「二人は雫とお姉ちゃんを逃がすためにわざと捕まったのよ！あんなが今出て行っても無駄よ！だから・・・だから、今戦えるあんたがいなくなったら、誰が雫を守れるのよ！」

栗鼠は顔を前に向けたまま走り出した。そして、何が起こったのかを手短に伝えた。

待ち伏せさせられていたらしい。ゲームセンターを出ると、明らかにガラの悪い男達が10人ほどいた。そのうちの二人がすぐに要弧と臣に飛びつき、布で口と鼻を押さえたらしい。そして二人はすぐに気を失った。暴力を振るわない所を見て、どうやら要弧も臣も女だとはれているようだ。そして雫と羊にも同じく眠らそうとした所で、しゅうと音恩が飛び出てきた。その間に将騎と慎と美緒が二人を連れて逃げ出した。しかし栗鼠だけが北崎を連れてくるため近くで身を潜めていて、今に至る。

「みんなはどこに逃げたんだ？」

「一応私の家に向かっているわ。そこになら骸骨もいるから」

「骸骨？・・・もしかして」

「え？あんた知ってるの？」

「・・・いや、まあ・・・一応ね」

二人はとにかく走って雫たちを追いかけた。

雫たち五人が必死に走って狼の家を目指していると、雫がポツリと言った。

「・・・ねえ、もしかして・・・みんな私の婚約を阻止しようとしてる？」

「え？今頃気付いたの？」

慎が走りながらも笑顔でそう言った。

「・・・もう・・・いいから」

雫はそう言って立ち止まった。

急に立ち止まったので雫以外の全員が派手にすっころんだ。

「あ……ごめんね」

「急に立ち止まらないでくださいよ！もう！ホラ急がなきゃ！」

将騎がそう言うが、雫はもう動くつもりは無いらしい。笑顔でこう言った。

「……ありがとう……みんなと一緒にいられて……楽しかったよ」

その清々（すがすが）しい笑顔は、悲しい表情にも見えた。

「変態やナンパ師……まあもとい、しゅうだったか音恩だったか、あいつらも……短い間だったけど、狼以外の男友達としては、いい奴らだったな。まさか、体張って守られるなんて……思ってもなかった。いつもはバカやっっているくせにね……。将騎、あんたもよくがんばってくれたよ。弱そうな感じのくせに、根性あるじゃん。陰薄は……ここにいないけど……。まあ、あいつも悪い奴じゃなかったよ。適当でごめんね。美緒ちゃん……臣を巻き込んでごめんね……。辰来くんにも謝らなきゃダメだな。でも……。もうできないかも。慎……。いい加減男らしくしろよ？……。でも、あんたが狼の次にできた初めての男友達なのよね？……。全然男っぽくなかったけどね」

雫は泣きながら、それでも、笑顔を絶やさずに言った。それを、全員が苦痛の表情で見ていた。

「……栗鼠ちゃんに臣に奈絵美も要弧も……。私の最高の友達だよ。みんながここにいないのは……。結構残念だけど……。思い出は……。大切にしているから。私がいなくなっても……。みんな、元気でいてよね。一番明るかった私がいなくなっただからって……。暗くなったりでもしたら……。承知しないんだから……。ねえ……。羊」

「・・・なに？」

羊は涙声で、返事をした。

「・・・みんなの事、お願いね・・・羊にだったら・・・任せられる！・・・だから、もういいよ？・・・私のことは諦めて」

「あきらめれない！」

羊は雫の手をつかんだ。

「あきらめられるわけ無いじゃん！絶対にあきらめないんだから！」
そう叫ぶ羊、その叫びに、他のメンバーが、奮い立った。

背後で男達の怒鳴り声が聞こえる。どうやら追いつかれたようだ。

雫が羊の手を振り解こうとする、だが、羊は強く握った。

「だめだよ羊、手を離して」

「はなさねえ！」

羊が強くそう言った。だが、男達は無慈悲にも、躊躇なく近づいてきた。

「・・・雫さん・・・僕、初めて誉められました。根性があるってふと、将騎がそんな事を言った。

「え？」

「いつもは・・・弱虫だと・・・根性なしと・・・臆病者と言われるてきて・・・北崎君達に、いつも助けてもらっていて・・・そんな情けない僕を・・・雫さんは・・・根性のあるやつだって・・・言ってくれた」

将騎は男達を睨みつけて、最後の言葉を言った。

「僕は、そんな雫さんの言葉を裏切りたくない！」

将騎が果敢にも一人の男に体当たりをした。

相手は大人の男なのに。自分より大きな体の相手に、将騎はありつたけの勇気を込めた。

相手は油断をしていたようだ、将騎の体当たりは見事に一人の男を押し倒し、気絶させた。

「逃げる！」

そう言ったのは慎だった。

「羊、雫を頼んだ・・・オレも、男として戦ってやるよ」

慎がそう言って、笑った。だが、その表情はいつものとは違う、男らしい表情だった。

「そ、そんな・・・私が今出れば丸く収まるのよ！だから」

「違いますよ雫さん」

美緒がすかさず言った。

「みんな、雫さんのために動いたんです・・・なのに・・・雫さんが捕まったら元もこうも無いでしょ・・・逃げてください」

「で、でも！できないよ！」

「甘ったれないくださいよ！臣姉もあなたのために体を張ったんです！その頑張りを無駄にするのなら！私は一生あなたを許しませんから！！」

美緒の激怒に、雫は何かを気付かされた。

そして、美緒がふつと笑う。

「みんなと一緒にいたい・・・それを、みんなが望んでいるんですよ」

美緒がそう言っていると、突如男が美緒の背後に立っていた。

「み！美緒ちゃん！」

雫がそう言っていると、美緒はようやく男に気付いたようだ。

「はは！おせえよ！このガキを放して欲しかったら！」

「そういう事は、捕まえてから言いなさいよ？」

美緒はすぐに男の足の指をかかとで踏みつけた。そして素早く痛がる男から離れる。

「私達は大丈夫ですよ、援軍もきたみたいですし」

美緒の目線の先には、将騎に殴りかかっていた男を殴り倒す北崎と栗鼠がいた。

「さ、行つて下さい」

「・・・ありがとう・・・みんな・・・本当にありがとう」

「・・・行くよ！」

羊が雫の手を取って、二人は走りだした。

タイプ36「栗パニック〜逃亡の日々」(後書き)

そろそろ、結末の時。

てか長え、早くギャグに戻りたい。

タイプ37「零パニック―迷走の日―」(前書き)

・・・あれ？

なんだこれ？書いてたら勝手にこうなっちゃった。
こりゃ伏線というよりも混乱を生むかもしれない。
まあ、いつか！

タイプ37「零パニック―迷走の日―」

結構長い間、私と零は走った。追っ手は多分もうこないと思う。

だつてあいつらがあんなにがんばっていたんだから、負けるはずがない。私はそう信じていた。だから、私は走るのを止めた。

「も・もう、大丈夫だよな？」

私は息を切らしながら零に声をかける。零もだいぶ走ったから苦しそうだ。

「・・・うん・・・平気」

でも、さつきと違って笑顔だから、私は安心した。

「にしても・・・だいぶ走っちゃったからぜんぜん知らない場所に来ちゃったね」

私は周りを見てそう言った。事実、私も零も知らない場所に、私たちは今いる。

「・・・歩こつか」

零がふとそんなことを口走った。そして、私が返事する前に歩き出す。

「・・・ねえ、羊・・・今狼は・・・私のために、動いてくれているのよね？」

確かに、男のほうのオレも、今ここにいるオレも、零のために動いているよ。

「そうだね」

「・・・私の婚約を一番初めに阻止しようって言ったのって・・・誰？」

民家が立ち並ぶ道路、今は車が一切通っていないので静かだ。だから、零の質問がよく聞こえる。でも、その質問は難しいな。だつて、みんなにとっては、言い出したのが『羊』^{ひつじ}だけど、実質的には『狼』^{じん}だもんね。でも、こんなややこしい話を今する必要はない、だから

私は正直に話した。

「・・・私だよ」

案の定、雫は少しがっかりした顔をする。本当は、狼が言い出したのと同じはずなのに。

正直、オレが二人になってから、いい事もたくさんあった。だが、その分、今まで知らなかった周りのことも、よく見えるようになった。それは、いい事だと思うけど・・・正直辛い。

「ねえ・・・狼って、やっぱり要弧のことが好きなのかな？それとも臣かな？奈絵美かもしれないしなあ」

「・・・また、難しい質問だね」

「え？」

「あ、いや、なんでもないよ」！

すっかり本音を言ってしまった。でも、やっぱりその質問は難しい。だって、男のほうのオレが好きな相手はぶっちゃけ知らない、まあ要弧の可能性が高いみたいだけどアイツ馬鹿だから親友でいるつもりかもしれないし・・・まあ、それでも、ただひとつ確かなのは・・・。

オレは雫が好きってことだな。

まあ、残念な事にオレは体が女なので、雫のことが好きだと言ったら変態に思われてしまう。

だからこそ、男のほうにがんばってもらいたいのだが・・・そううまくいなくて・・・。

「ねえ！一緒に住んでいるなら知っているでしょ！」

「え？・・・い、いや、アイツは馬鹿だから恋愛沙汰には弱くて、

「わからないな」

真剣に聞いてくる雫に、オレはとりあえず適当に答えた。だが、納得できない様子の雫は、また話をし始める。

「あんな鈍感な男のどこが好きなんだか・・・とか思ってるでしょ？」

正直、女になるまでは思わなかったことだな。

「やっぱり、顔が良いとか性格が良いとか以前に、女の子に対する態度と言うか、接する時の気配りっていうやつがああ馬鹿にはないのよ。別に女の子に興味がないっていう訳じゃないくせに、むしろモテたい願望は人一倍あるわよ、絶対」
その通りですね。

「なんていうか・・・男ってのは、女の子の前ではいいカッコ見せたいとか、カッコつけたいとか、優しく接していい印象をもたれたいとか・・・普通そう思うもんでしょ？・・・少なくとも、私たちに言い寄ってきた男たちは、わざわざ気に入られようと必死になっていたわ。でも・・・アイツには・・・それが無いのよ」

まだかろうじて明るい空を見上げながら、雫はつぶやく様に言った。

「カッコ付けが馬鹿らしいなんて思っている人もいるだろうけど・・・やっぱり、女の子にとっては、たとえただの見栄っ張りだとしても・・・かっこよく見えたらかっこいいものなのよ。でも・・・あの馬鹿は・・・好きな女の子がいたとしても、特別扱いしないのよ。普通に接するだけ。特別優しくするわけでもなく、好きな人の前だからってカッコつけようとも思わない。正直・・・それに気づいた時は・・・こいつは本物の馬鹿だって思ったわよ、でも」

「・・・あいつ、好きな人の傍を、絶対に離れないのよ」

正直、それは自分では気づかない点だった。だが、雫はそれがいい

と思っているらしい。

「特別扱いも何もしないけど・・・いつも一緒にいてあげる。それがいっつなりの好きの表現みたいなんだけど・・・そうなることやっぱい要弧が好きなのかなって思えてくるのよ。でも昔から一緒にいたわりには二人は付き合っている様子ないしさ、もう正直アイツは一体何なのよ！って、何度も考えたけどわからない、それでも・・・どんな時も一緒にいてくれるっていうあいつが、私にはかっこよく思えるのよ」

「・・・そっか」

オレはそれだけを言っただけで笑った。

要弧達もオレに対してそう思っているのだろうか？だとしたら、オレ自身今まで何にも考えてなかったから、つくづく自分が最低なやつだと実感した。

「・・・私、やっぱりまだ狼のことが好きみたい、諦めの悪い女だな」

「・・・いいんじゃない？私から見ると、雫が一番有利な立場だよ？」

「え？なんで？」

「・・・うゝん、今は教えなゝい」

「なにそれ？」

「ヒントは！・・・私が雫のこと、好きだから」

オレはとりあえず、言いたい事だけ言っただけでやめた。

雫は少しキョトンとしてから、馬鹿にするように笑った。

「そっか、まあ羊をメロメロ二できたんだから！鈍感狼なんてちょろい筈よね」

そんな事を言っただけで、雫は満足そうに笑った。オレもつられて笑顔になる。

知らない住宅街は、いつしか人通りが少しある西洋の商店街に変わっていた。

「人が少ないけど、おしゃれな商店街ね！こんな穴場があるなんて知らなかった！」

雫は若干有頂天になりながらお店を見ている。

アンティークショップから家具屋さん、はたまた洋服屋まで。多少レトロな感じの品物が多かったが、流行の服も売ってあったので特に違和感はない。

しかし、妙だ。なんだか日本にいる気がしない。

まるで別世界に来たかのような感触をオレは感じながらも、雫が楽しそうなのでいやな考えは排除することにした。

「ねえねえ！ここのお店面白そうじゃない！？」

雫がある店を見つけた。ショートウィンドウの向こうにはぬいぐるみがたくさん飾ってある。

「かわいいー！ちよつと入ってみようよ！」

「うん、いいよ」

オレは目を輝かせる雫に反論する気も起こさず、その店に入ろうとした。

「なんていうお店なのかな？」

オレは何気なく店先にある木製の看板に目をやった。

『マジックアイテムショップ』

ほほう、なかなか面白い名前の店だな。

オレはそれだけ思っで、雫に続いて店に入った。

店内

木のおいがほのかに漂う雰囲気の良い店内だ。こじんまりとしているが商品が結構並べられている。ぬいぐるみはお手製のようだ。一つ一つが違う生地と作り方なのが一目瞭然でわかる。しかもその他にはトランプだの地球儀だの鏡など、同じものが二つとない商品ばかりのようだ。

「すごい、玩具屋さんなのかな？」

雫は興味心身で商品を見ている。オレも珍しいものばかりなので目を奪われていた。

「お探し物でも？」

ふと、少女の声が聞こえる。

声のするほうを見ると、ツインテールの少女がレジのほうに立っていた。見た目からして年齢は小学生ほどだと思われる。だが口ぶりからすると、ここのお店の関係者だろう。オレはすぐに見に来ただけと言った。

「そう、気に入ったものが見つかるといいわね」

なんだか大人のような感じのしゃべり方だな。しかも、口元だけが笑っており、目が笑っていないかった。しかし美人な顔立ちなのでその表情が非常に似合っている。

「お父さんとお母さんが経営しているの？」

雫が店員の少女にそう聞いた。

「前まではね。二人とも今は隠居しているから私がオーナーなの」

おいおい、こんな子供に店任せるなんてどんな親だよ。

「ちなみに、私の名前はジェシカ。よろしくね」

「え？・・・うん、よろしく」

雫はよくわからずにそう言った。オレも正直変だと思った。いきなり自己紹介をするとは、しかも見た目は結構日本人っぽいのに外国人だったのか？

「なんだか二人は常連さんになってくれそうだから、つい名前を言っちゃった」

ほう、まあ異国文化ってやつだろう。雫もそれで納得したらしい。

「それにしても・・・普通の人間が来るなんて久しぶりね」

ジェシカはまるで独り言のようにそういった。そして、オレはそれをしかと聞いてしまった。

「え？」

「あら？・・・もしかして迷い込んできたとか？」

ジェシカが特に慌てる様子もなくそんな事を言う。しかし俺の頭は

混乱状態によってろくに考えることすらできなくなっていた。

そんな時、誰かがこの店に訪れた。

ドアが開いて、フードをかぶった人物が見えた。

「ジェシカちゃん、大鎌を引き取りにきたで〜」

聞き覚えのある関西弁。そしてフードを取ると・・・案の定骸骨の顔が・・・。

「・・・いやああああ!!!!」

雫が悲鳴を上げて、オレはため息をついた。

そう言えば・・・婚約とかどうなったよオイ？

タイプ37「雲パニック―迷走の日―」（後書き）

きたー！ま・さ・か・の！ファンタジー！！

あえて言おう！これは伏線だと！

そして真実を明かそう！オレは何も考えてないと！

ネタばれかも知れないけど、

雲は羊の正体を狼だとみやぶっちゃうから！

ふう、これぐらい言わないと読者の皆様は混乱するからね。

タイプ38「栗パニック〜終焉の日〜」(前書き)

多少駆け足気味じゃない？

何を言う、もはやぶつちやけ婚約だのなんだのはどうでもいい話なんだよ！もっと恐れるべき事態が起ころうとしてんじゃない！

まあ、正直これは作者にとっても予想がい

タイプ38「零パニック〜終焉の日〜」

羊と雫が謎の空間に入りこんでしまっている間に、狼達のほうでも進展がありまして。

さかのぼりますこと、羊と雫が逃げ出したあの時間帯、三人はある人物と連絡を取り、そしてそのまま……。

南字家の屋敷へと出向いているのです。

時代劇にでも出てきそうな古いその屋敷は、かなり年月が経っていると予想されるのに、瓦は今だ光っており、正門は堅くその扉を閉ざしていた。

「……あ、圧倒されますね」

辰来がまたもや弱気な態度になる。

だがそれも仕方ないだろう。屋敷全体はかなり広いのに、しっかりと塀をこしらえてあるので、中の様子など外からは到底見えないのである。もはやそれだけで脅威だろう。

「……お前ら二人に忠告しておく事がある」

狼はさすがで、こういった緊張する場面でも落ち着いていた。

「この屋敷に一步入ったが最後……必ず礼儀正しい態度でい続ける。失礼な事はもちろん、些細なミスだって許されはしない。本物のお偉いさんを相手にしているんだから……下手すれば社会的地位だって、もつと悪ければ日本国籍すら削除されるぞ！」

「ええええ！！？それ完璧消滅させられちゃうじゃないですか！」

辰来がすでに戦意消失した所で、奈絵美が口を開いた。

「シナリオは私の言った通りにしてくれれば多分上手く行くだろうが……正直完璧とは言い難い。だから緊急のアドリブは……狼、

頼んだぞ」

「大丈夫大丈夫、この案がうまく行かないわけが無いだろ？」

「……そうだといいたがな」

奈絵美は若干苦い面持ちだったが、三人はとにかく出陣する覚悟を決めた。

古い屋敷ではあるが、インターフォンはついている。狼は真っ直ぐにボタンを見て、ゆっくりと押した。

すると、スピーカーから声が聞こえてきた。

『どなたでしょうか？』

中年の男の声だ。声の感じからして物腰の柔らかい人柄だと思う。

「……雫さんの学友、守多狼です」

『……少々お待ちを』

声色が若干変わった。明らかに驚いているようだが、お引取りくださいと言われなかったので三人は安心した。

かくして、鉄でできた木の枠の堅い門が、重々しい音と共に開かれたのだった。

一番に出迎えてくれたのは、恐らくインターフォンで応答した人と思われる使用人だ。

着物を着た中年男性は慣れた様子で三人に挨拶をする。

「これはこれは、雫様がお世話になっております」

「いえ、こちらこそ。雫さんのような可憐な方と学友でいられるだけで誇りに思っていますよ」

正直こいつ誰だヨと辰来は、豹変した狼に突っ込みたかったが、そんな非常識な真似はできないので笑顔で流そうとする。

「ささ、こんな所で立ち話もなんでしょう。旦那様は雫様の勉学に励むお姿をきつと知りたいはずですので、是が非でもお会いしていただきます」

男性の人の良さそうな表情が、語尾を強くした瞬間、黒くなった。それをしかと見た辰来はすぐに帰りたい欲求に駆られた。

逃げ出したい、きつとここにいてはいけないのだ。そんな危険信号が頭の中で鳴り響いているというのに、辰来は心のどこかでわかっていた。

逃げる事は、できないという事を。

三人は広いお屋敷の廊下を歩いていった。

案内人は先程の男性に代わり、今度は若い女性だった。若いといっても高校生である三人と比べればかなり離れているだろうが、恐らく二十代後半、もしかすると三十代かもしれない。

そんなお姉さんも、旅館の人が着るような着物を身に着けていた。「こちらです」

ふと立ち止まったお姉さんはその場に正座をし、お連れしました、とだけ言った。

「入れ」

はつきりと聞き取れる洪い声が返ってきた。

その返事を聞いて、お姉さんは障子に手を添え、丁寧に開けた。

一面が畳で敷き詰められており、壁は質素なベージュ色で統一されていた。

そして上座にあぐらをかいている老人が一人、厳しい表情で目を伏せていた。

灰色の角刈り。ひげはそっているようだ。そして程よくあるシワ。

威厳に満ちた容姿である。

「失礼します」

狼が一礼をして室内へ入る。続けて二人も同じ行動をする。

そして、あぐらをかいている老人、つまりは雫の祖父の前に、正座をした。

「・・・守多か・・・父と母は元気かな？」

「ええ……相も変わらず仕事に追われております」

「そうか……今や有名企業の助言役……たしかアドバイザーなどという職だったかな。そんな企業にとっては知将とも呼べる親の息子が……落ちぶれかけているとはいえ、歴史ある我が南字家の企業を潰そうとするとは……一体どんな魂胆があるのだ？」

「ようやく伏せた目を狼に向ける雫の祖父。その目はもはや怒りに燃えているようにも見えた。」

「……別に、南字様の御社を潰そうとは一切思っていないせん。ただ……」

「雫を助きたい……とても言うのか？」

雫の祖父はまさに言おうと思った台詞を見事に当てた。

「……はい」

狼は平静を装っているが、きつと動揺はしているはずだ。時折見せる目の色が、言い表すことのできない緊張と重荷で濁_{にご}っていた。

「だとしたら、貴様はとんだ馬鹿者だとしか言えんな。親が上流階級の業界を渡り歩いているのだ、貴様にも上の人間の宿命を知っているはずだろう」

「……ええ、知っています。ですが、生まれた頃から上の人間としての教育を受けていたのならまだしも……雫は普通の生活をしてきました。いまさらこんな酷な世界に引きずり込むのはあんまりです」

「雫が犠牲にならねば……より多くの人間が、犠牲になるのだぞ」

雫の祖父がはつきりと言った。その台詞に、辰来は意味が理解できなかったようだ。

その表情を見たからか、雫の祖父ははつきりと説明をした。

「ワシが今雇っている社員の人数は一万人以上だ。つまり、このまま企業が潰れれば、一万人以上の社員が路頭に迷うことになる。もちろん働いている者の中には家族を養っている者もいる……わかっただろう、大勢の人間が生活苦になると、雫が、酷な世界と

はいえ上流階級の人間になると、どちらが幸せになれるのかが・
・」

辰来はようやく意味を理解して、そして表情を暗くした。

少なくとも、自分たちのわがままで多くの人間が生きる事すらできない状態になると聞かされて、平然としていられるわけがない。

「・・・ま、貴様はわかつていただろう、守多。まだまだ若造だからな、今回の行動は大目に見てやろう。聞けばそちらの学友の何人かをこちらが傷つけてしまったようだ。その者たちの怪我はこちらが責任もって面倒を見よう。だから、お前たちも帰りなさい。雫は・
・しばらくの間は会えないと思うが、死ぬわけではない、ただ、どうしても恨みたいのなら・
・わしを恨んでくれ・
・それだけだ」

「待つてください」

狼が話を終わらそうとした雫の祖父に向かって、はっきりとそう申し立てた。

「・・・なんだ」

雫の祖父は予想だになかった狼の台詞に、若干驚嘆する。

「・・・もしも、葛木家以外からの援助者がいたら・
・考え直してくださいるか」

「・・・なに？」

「如月財閥のお嬢様に相談したところ、南字家との企業合同化を承知していただきました。もうすぐ如月家からの使いも来るはずですよ」

「・・・き、如月家・
・いや、そんな・
・あんな巨大財閥が？」
面食らう雫の祖父。そして、三人はいつせいに頭を畳につけた。

「自分たちのわがままで多くの人に迷惑をかけたことは謝罪いたします。ですが・
・ですが！・
・僕らはまだ雫と一緒にいたいんです！・
・一緒にいたいという奴らがいるんです！・
・雫自

身が・・・一緒にいたがつているんです！・・・だから・・・考え直してくださいませんか！お願いします！」

狼が一思いに言い切った。それを見て、いつまでも驚いていた雫の祖父は・・・ふと、笑った。

時刻がだいぶ流れて夜になる。

だが、雫の祖父、隆久はまだあの部屋にいた。たかひさ

もう一人はスーツ姿の男だった。もちろん、狼たちはいない。

「以上が如月財閥からの要求と契約書類です。ご不明な点があれば」

「・・・いや、ない・・・ただ、一つ聞かせてくれるか？」

「はい？」

隆久は一拍置いて、静かに訊いた。

「・・・なぜ、彼らの願いを聞き入れたんだ？」

「・・・守多様たちの事ですか？」

「ああ・・・なぜ、彼らの言うことを？」

「・・・さあ、私にはわかりません。ですが御社との合同計画については、会長は以前から実行しようとしておりました。ですが幹部会の反対があつたもので・・・それを本日、お嬢様が幹部会を説得しましたから」

「・・・そうか・・・」

隆久はふと、雫の顔を思い出した。

そう、一度だけ・・・子供の頃、駆け落ちしてきた娘が孫を連れて遊びに来たのだった。

その時はそっけない態度をとっていたが、雫のあどけない表情は鮮明に今でも覚えている。

もしかすると、今回の婚約で、雫を束縛したかったのかも知れない。本当にわがままを言っていたのは自分なのかもしれない。

そう思うと、雫には、申し訳ないことをしたな

隆久はそう思いながら、もう雫には会わないように決めた。

「ご主人様、お嬢様がお見えですよ」

「ん？どこのお嬢様だ？」

「え、ですから・・・実夏（雫の母）様ですよ」

隆久は心臓が止まりかけた。

「な、なななな何だ！？今！？」

「とりあえず部屋にお通ししましたから会ってくださいよ」

そう言つて使用人はうれしそうな顔をして部屋の場所を伝える。

久しぶりに会う娘。雫のお母さんは緊張した面持ちで正座をしていた。

そして、意を決した隆久が中に入る。

「・・・何のようだ」

「・・・雫の婚約がなして・・・本当？」

常識的な問いかけだったので隆久は安心して答えた。

「ああ、本当だ・・・。雫には迷惑をかけた、本当に申し訳ない」
そう言つて隆久は頭を下げた。

「ほんと、雫はかわいそ、こんなに怖いおじいちゃんにいじめられたなんて」

こいつ・・・そのしゃべり方なんとかせんか！

いきなりふざける実夏みかだが、それはいつもの事なので隆久は特になんとも思わない。

「どうせなら雫本人に謝つてよ」

「・・・いや、それはできない」

隆久ははつきりと断言した。

「・・・なんで？」

「わしが雫と顔をあわせれる訳がないだろう。雫をこれ以上傷つけないためにも」

「お父さんが、何で雫を傷つけたか・・・わかる？」

実夏はふと、隆久にそんな問いかけをした。

「・・・婚約を決めたからだろ」

「・・・それはただの結果、問題は何でそんな事をしちゃったか・・・その答えは一つ！」

「今の雫を知らないからよ」

今度は実夏が断言した。

「今雫は幸せなのか、どんな事を考えているのか、悩みはあるのか、どんな感じで笑うのか・・・お父さんはまだまだ雫の知らないことといっぱいあるでしょ？」

「うん、まあ、そりやそうだろう？」

「だったら・・・知ったほうがいいんじゃない？・・・大切な孫のことを」

「・・・ああ・・・そうだな」

こんな気持ちになるのは久しぶりだ。

隆久はそんな事を思いながら、うれしそうに笑う娘をそっと見て、すぐに目を伏せてしまった。

タイプ38「零パニック〜終焉の日〜」(後書き)

ああ、数時間後にはまたアップするから。

零パニック！壮絶な始まりが今始る（前書き）

ははっ、タイトルがそのまんまだぜ。

雫パニック！壮絶な始まりが今始る

「ガイコツ！骨！人骨！お化け！いやああ！！！！ひーじーりいいい！！！」

雫がおかしくなってしまうたようだ。泣き叫びながら羊に抱きつき震えている。

「残念、悪魔やで」

骸骨がどうでもいい事を口走った。

てか羊ちゃん、何してんの？

いや、まあ、何か知らんが異世界に迷い込んだ

・・・？、何で男口調なん？

え？・・・き、気にしないでよ

骸骨とテレパシーをしていると雫がまたも騒ぎ始める。

「羊！なんで驚かないの！？怖くないの！？悪魔だよ！？骸骨だよ！？」

「大丈夫よ、きつと特殊メイクかマスクをした人だつてば」

・・・雫かわいいな

見事に言っている事と考えている事が違っているが、雫はそうなのかも、と思い始める。

「・・・あの、メイクなんですか？」

「何ゆつとんねん！正真正銘の骸骨や！見てみい！腕がこんなに細いわけあるかい！」

そう言つて骨しかない腕を見せる。ちなみに指も関節部分までしっかり見せられた。

「・・・ニギヤアアアアア！！」

まるで猫の鳴き声のような悲鳴を上げる雫。更にきつく羊に抱きついた。

「い、いたい！痛いよ！雫！爪が食い込んでるって！」

てめえええ！！骸骨！！お前空気読めよ！

いやや、なめられるんは嫌さかいな

てめえ、帰ったら覚えてろよ

「……とりあえずワテらが知り合いやてばれないようするべきやて

まあね……さて

「うわあゝ、本物の骸骨だあゝ、雫、逃げよう（棒読み）」
返事の代わりに全力で頭を縦に振る雫。

「どけゝ！このクソ骸骨が！」

羊が本気で骸骨を蹴ってバラバラにする。

「ゲフウ！羊ちゃん！ひどいわ！本気で蹴るなんて！」

「うるせえ！！誰だよてめえ！名前なんかしらねえだろっが！！」
羊はそう言って怒りながら、雫をつれて店を出て行った。

「ヒック……怖かったよゝ」

雫がようやく落ち着き始める。

「変なお店もあつたもんだね　骸骨マジで帰ったら殺す」

「……みんな、大丈夫かな……」

雫がふと、自分の現状を思い出して暗い声を出す。

「……大丈夫だよ！……狼なら、きつとやってくれる」

「……そうだね！」

雫はまだ辛そうだが、みんなががんばっているのだから、笑顔でいようとした。

「……あ」

ふと、雫がある事に気付く。

「……どうしよう！万引きしちゃった！」

「……は？」

「さっきの店の鏡を持ったまま出てきちゃった！！」

え？ちよ、どうすんの？……あ、いや。骸骨が払うか

その頃の骸骨

「あ、そうだセフ《骸骨の名前》さっきの子達は知り合いでしょ？」

「そうやでジャシカちゃん！それよりも今度食事に行こうな、美味い地獄店してんねんけど」

「『ラ・トゥールの鏡』の代金200万ジャンウJS払って」

「・・・ワッツ？」

戻ります。

「どうしよう！魂抜かれたり呪いがかかったりするかな！？」

「大丈夫だよ。たぶんあの悪魔が全部悪いから店員さんもあの悪魔に代金を払わせるって」

羊は適当にそう雫に言った。すると、羊の携帯になる。

「あ！きつと狼だよ！」

羊はそう言って携帯を開く。相手はやはり狼。すぐに羊は電話に出る。

「もしもし！どう！？」

『・・・万事成功！・・・婚約は無しになったし、南字企業の倒産も間逃れたぜ』

「・・・本当？・・・雫！やったよ！」

電話中にもかかわらず、羊は雫に抱きついた。

「え？・・・婚約しなくて・・・よくなったの？」

雫が驚いてその事実を信じれずにいる、だが・・・。

「本当だよ！これからも・・・ずっと！雫と一緒にいられるんだよ！」

羊が泣きながらそう言った。

本当に嬉しそうなその顔を見て、雫もようやく、安心して・・・喜んだ。

「ずっと！ずっと一緒だよね！」

「うん！・・・みんなと一緒にいれるんだよ！」

二人が涙で顔をぐしゃぐしゃにする。その泣きじゃくって喜ぶ声は電話の向こうの狼にも聞こえていた。

「・・・たく、電話の途中なのに・・・まあ、よかったな」

狼は今、要弧達が運ばれた病院にいた。

要弧と臣は睡眠薬で眠らされただけで特に問題はなかった。

あと音恩としゅうはあれだけのリンチを喰らった割には打撲とすり傷だけですんだ。

北崎や慎たちもヤクザの兄ちゃんどもを撃退して既にこの病院にいる。

「どうせ電話にはもう出ないだろうし、切っとくか」

狼はそう言って携帯を切った。

「これで・・・無事終わったんだな？」

奈絵美が安心して胸を撫で下ろす。

「全く、長い長い一日だったぜ」

狼がそう言って笑った。

だが、一日はまだ、そんなに簡単には終わってくれなかった。

道端で喜び合って泣き合っている二人。

そんな微笑ましい場面を無粋にも邪魔する存在など、

「羊ひどい顔しているよ、ほら！この手鏡で見てみてよ」

雫が先程のお店で万引きしてしまった鏡を見せる。

「あはは！そうだ・・・ね？」

その鏡には羊ではなく狼が映っていた。

涙でくしゃくしゃの顔、手の位置までもが今の羊と同じ位置にある。

「・・・・あゝ、あ、あああれ？」

「どうしたの？・・・・あ、これおもしろい説明書が書いてある」
手鏡の後ろに書いてある説明書を見つけた雫はそれを読み始めた。

「えっと・・・・この手鏡は相手の本当の姿を映す魔の鏡。魔法で化けた相手もこれですぐに見破れます。だって、おもしろい事が書かれているね！」

「やべえ、しやれになんねえ」

「え？なに？」

「うっん！なんでもないよ！」

これはヤバイ！ちょ！この大ピンチはあの中学生の時要弧の着替え中に部屋に入ってしまったあの時よりもヤバイ！！

今更何を思い出しているんだと言ってやりたいが、言葉通りそんな事をしている場合ではない。とりあえず羊はその鏡に映らないように最善の注意をした。

「ほら見てよ！二人で鏡に映ったら滑稽でしょ？・・・・あれ？」

「・・・・え？」

最善の注意をしようとした矢先に、雫はいつの間にか羊と一緒に自分達の姿を鏡で見ていた。

そう、狼に見えるその鏡で。

「・・・・は？」

雫が固まる。羊も固まる。空気が固まる。時が止まる。風が通らなくなる・・・・。

「・・・・狼？」

「・・・・・・・・えつと」

「・・・・・・・・狼？・・・・・・・・なの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

声にならない叫びというか、声が出せれるレベルじゃないというか。いままで女の子だと思っていた羊は実は狼で？

なんか一緒に学校生活をエンジョイしてきたわけで？

ある時は一緒に着替えていたり？お風呂に入ったりして？

悩み事とかも打ち明けたり狼が好きとか言ったり？

そういえば羊はしきりに私を好きって言うわよね？

それって何？狼としてだったの？友達ではなくて？

今回の騒動でも、涙を流して私を心配したの？

一緒にいたってずっと言っていたのは、好きだからなの？

つまり、姿形や性別は違えど・・・・・・・・狼はわたしが・・・・・・・・いや、羊は私の事が好きなの？

雫が理解に苦しむ。

羊が恐怖におののく。

病院

「全く、あいつらも今頃、喜びすぎて大変な事になってんじゃねえの？」

狼はこれから来る脅威など、微塵も感じていなかったのであった。

零パニック！壮絶な始まりが今始る（後書き）

究極展開に・・・笑え！

タイプ39「羊と羖」(前書き)

ははっ、タイトルが思いつかない。

タイプ39「羊と雫」

永い長い一生の中で、人はふとした瞬間巨大な秘密を所有する破目になる。

それは必ずしもいい事ではない、むしろ隠すべき事がすなわち秘密なのだから、

どんな親しい相手にも言えない事があるというのは、全く持って悲しい事だ。

でも、ぶっちゃけバレた時の方が恐ろしい事になるわけでして・
・・・。

「・・・へえ~~~~、そんな事があつたんだあ？」

雫が黒い笑みで羊と狼に言った。

場所は狼の部屋。時は婚約を阻止したあの感動的な日の次の日の夕方。

そして当事者の二人は土下座をしたまま頭すら上げない状態である。

「悪魔があのお店で出会った骸骨なのね?・・・そして羊の従兄弟役でもあつたと?」

「・・・はい」

「それでえ?他にこの事を知っているのは栗鼠ちゃんだけでえ?他のみんなは知らないとお?」

「・・・その通りです」

羊と狼が交互に返事をした。

「……まあ、何はともあれ騙していた事に変わりは無いから殴っていい？」

「ああ！男として当然だからな！さあ！好きなだけ羊を殴るがいいいや！……こいつは羊の皮を被った狼なんだよ！」

狼はありったけの力で雫の超ド級ストレートアッパーをくらった。正直あごが砕けかけた。

「全ての元凶は狼であって羊じゃないのよ？それとさっきの台詞、名前がややこしいから文字だけじゃあ勘違いされちゃうでしょ？」
狼には、もはや返事ができるあごなど持ち合わせてはいなかった。

「……まあ、他にも言いたい事はたくさんあるけど……今言いたい事は一つだけ……」

「狼……あんた私の事が好きなの？」

狭い部屋の中が、宇宙の一部であるかのごとく、静かになる。

「……ふあい？」

まだあごが治りきっていないので上手く喋れない様だ。仕方が無いので雫はもう一度アッパーをくらわし中和した。

「で？……私の事好きなの？」

「まずはなぜそんな質問をするのか、そこからお聞かせ願おうか？」
狼は空気を読めず二人に軽蔑の眼差しで見られた。狼は鬱になりかけた。

「……はあ……友達としてなら……命をかけてやってもいいと思っっているぜ」

「……わかった。好きじゃないのね」

そう言っただけはある意味吹っ切れたような表情をした。

しかし、うって変わって羊がいきなり慌て始めて……。

「俺は好きだ！」

顔を真っ赤にして羊は言う。

狼は状況が理解できていないようで首をかしげている。

雫は思考停止している。

数分間、沈黙が流れた。誰も喋らない部屋はまさに地獄よりも苦しく辛い場所であった。

「・・・まあ、これで分かった事があるわ・・・狼は私を恋愛対象として見ていないけど・・・羊は私が好きなのね・・・」

若干照れた様子を見せる雫。そしてまたもや微妙な空気が流れた。

何なんだこの空気の悪さは？・・・気まずいなんてレベルじゃねえぞ？

狼が目を伏せながら誰かが喋るのを待つ。すると、雫が口を開いた。

「じゃ、帰る」

「・・・・・・・・」

二人が目を丸くしていると、雫はさっさと立ち上がった。

「じゃあね」

「ちょ、ちょちょちょ、ちょーい！空気を悪くするだけ悪くしておいてそれかい！」

狼が去ろうとする雫の手をつかむ。

「離してよ！」

雫は狼の手をはたいた。同時に、怒りの表情を見せる。だが、その

目には、涙が溢れていた。

「……え？」

「……あんたの事！……狼の事好きだったんだから！！……真剣に！好きだったんだからね！！」

雫はそう言つて、部屋を出て行った。

狼はどうする事もできず、ただ立ち尽くしていた。そして、地べたに座っていた羊も固まる。

「……行っちゃったか」

狼は困つたように言った。

「……あゝあ……行っちゃったよ……どうすつかなあゝ」

どうもわざとらしい言動だった。それは、何かを伝えたい行動にも見えた。

「……羊、お前……好きなんだ？……雫が？」

「……なに？わざとらしいわね……知ってたでしょ？」

「……だが、雫がオレの事を好きだとは知らなかった」

「うっわー、すごい鈍感。もはやキングだね」

「……雫を追いかける権利のあるやつは、たった一人しかいない」

狼は急にそんな事を言い始めた。そして、羊は黙って聞いている。

「それは……雫を守ってやれる奴……というわけで……行つて来い」

「……なんだよ、結局人任せ？」

「いいや、自分の事は自分で責任を取る。だから、違いといったら……男か女かぐらいだろ？」

狼がそう言つと、羊は鼻で笑つて、立ち上がり、部屋を走つてでた。

雫は今あるモヤモヤとした気持ちを晴らす為に、全力で走ってい

た。

道行く人と肩をぶつけても、雫はかまわず走っている。嫌な顔や罵声を浴びせられても、雫には一切見えなかったし聞こえなかった。

これが失恋なんだ・・・と、雫は痛感していた。

正直大袈裟かも知れないが、叶わぬ恋だったと思う。

少なくとも、狼が私の事を好きではない事ぐらいわかっていたし、好きになるような事もしてこなかった。ただ・・・ただそれでも、いつか振り向いて貰えるかも知れない事を祈って。

今までさんざん私に告白してきた男達がいた。その全員がフラれたって言うのに、なんで落ち込んだ素振りを見せなかったのだろう。

雫はそんな事を思っていた。

ほとんどの男は、何で好きな相手に振り向いて貰えなかったのに、平気なんだろう？

数日後には別の女を作るし、気に入らなかったからといって私の陰口も叩く。

男はなぜそんなに恋や恋愛というものを軽く見ているのか。

はつきり言って、そんな奴らには、私の今の気持ちなんて絶対に伝わらないだろうな。

雫はそう思いながら、尚も走っていた。

しかし、涙でうるんだ視界はぼやけていたので、目の前に人がいる事もわからず、雫はとうとう誰かと正面衝突した。

後ろに飛ぶ雫、ぶつかった相手も派手にすっ飛んだ。

「どこ見て歩いてるのよ！しっかり前見るバカ！」

雫はいの一番にそう叫んだ。そしてすぐに立ち上がろうとするが、足に力が入らなかった。

とことん、自分が奈落の底にはまっている様な気がした。

そこからは、抜け出すこともできなくて。そのまま、沈んでしまい

そうな、そんな感覚。

雫は押し殺した声で泣いた。すると、誰かが腕をつかんで、雫を立ち上がらせた。

「……大丈夫？」

パツと見、狼だった。

声も、雰囲気も、大体のスタイルも。全てが狼と同じだった。

そんなそっくりさんの唯一違う所は、服装と長髪という二つぐらいだった。

「……なによ、あんた誰？」

「……えつと……まあ、その……わからない？」

「知らないわよあんたなんて、こっちは忙しいんだから後にしてよ」
「羊だよ」

「……は？」

雫はまじまじとその男を見た。だが、どう見ても男だ。

しかし、考えてもみれば、羊は元々男。つまり戻ったと考えられる。

「……なによ……女の狼なら殴らないであげたけど……男になっただてのなら遠慮なく殴らせてもらうわよ」

「……うん……いいよ」

羊は優しい笑みでそう言った。正直顔が狼なのでかなり不気味に見えた。

「それよりもさ、ここは人が多いから静かな場所にいい？」

羊はそう言って雫の手を取り、公園に向かった。

すでに日は消えかけている薄暗い公園。

そこで二人はベンチに座っていた。周りはわざとらしいほど静かだ。

「……骸骨に途中で会ったの？」

雫のその質問に、羊はそうだと云った。

「丁度家に出る瞬間に見つけたから、一時的にオレの性別を戻す魔法と雫の移動先へのテレポーテーションを頼んだ」

「・・・ふん・・・で、何で追いかけてきたの？」

「雫が好きだから」

羊の声は静かな公園に虚しく響くだけだった。

「・・・正直、意味がわからない」

雫は率直に心境を述べた。

「羊は元狼だったんでしょ？・・・その時は好きじゃなかったんだし、なんで女になった今、私を好きとか言つの？」

「・・・好きになったから好き・・・っていうのは論外かな？」

「そうね、意味不明だわ」

「手厳しい・・・まあ、確かに・・・狼の時は、オレは雫の気持ちを知らなかった。でも、なんて言つのかな・・・本当の雫を見たら・・・

・・・好きになった」

「・・・何それ？」

雫は不機嫌な声色でそう云った。

「あんたなんかには本当の私とかがわかったの？私の好意にすら気付かなかったくせに？その上鈍感で？拳句の果てはみんなに隠し事・・・そんなあんたに、何がわかるのよ！」

「仕方ないじゃん・・・みんな素直な性格じゃないからさ」

羊は怒られているという概念を持たず、サラッと云った。

「す、素直じゃないって」

「だってそうでしょ？・・・オレが鈍感なのは認めるけど、会う度に悪口を吹っかけたり、わざと迷惑を吹っかけてきたり、拳句の果ては婚約寸前になっても自分の気持ちを伝えてくれないシャイな乙女なんだから・・・少なくとも、男のオレには女心は見えなかった」正直に語る羊の表情は、どこまでも気楽な表情をしていた。それで

も、雫は仏頂面を止めない。

「本っ当！男って理解できない！そもそも男女平等とか口では言ってるけど！どうせ心の中では自分が上だって思っているんでしょ！？だから恋とかも特にショックじゃないし、多くの女と遊んでも平気なのよ！最低！」

「・・・オレは、雫たちを見て・・・自分が上だなんて思った事は一度もないよ？」

「・・・そ、それは」

「むしろ雫たちのほうが注文が多かった気がするなあ」

「うるさいわね！とにかく・・・もう、ほっといてよ」

「それはできない注文だな」

羊のその台詞の後、またしばらく沈黙が続いた。

雫は下をつつむいているが、羊は空を見上げている。

そんな対照的な二人を、月は見下ろしていた。

「・・・ねえ、羊は・・・いつ私を好きになったのよ？」

雫がポツリと言葉を洩らす。その言葉を、羊は受け止める。

「狼に向けていた瞳をみて、好きになった」

羊は思い出していた。狼の事、もとい自分を好きになっている女の子を見たあの時を。

素直になれなくて、意地を張ってしまつて、何度泣かせてしまったか分からない薄情な自分だが・・・。雫だけは守りたい。羊はそう思っていた。

「オレは鈍感で、気も利かなくて、不器用だけど・・・雫の側を離れたくない。今はそう思っているだけだよ」

羊は言いたい事を言った。伝えたい思いを伝えた。きつと、この思いは、羊にならなかつたら手に入らなかつただろう。狼のままじゃあ、こんなにも、雫を好きになる事はなかつただろう。ある意味、女になった事が、雫と出会ったための運命の道の一つのように感じる。

「・・・雫・・・好きだよ」

羊は視線を空から、隣にいる雫にゆつくりと向けた。

雫も、いつの間にか羊を見つめていた。そして、口を開く。

「・・・本当に、私の事好きなの？」

「・・・もちろん」

「私はワガママだからね、下僕同然になるわよ」

「それはもう慣れているよ」

「浮気は死刑に値するからね」

「も、もちろんだよ」

「結婚前提で告白しているわよね？私を幸せにできなかったら許さないんだから」

「・・・わかった」

「・・・あと、これだけは絶対に守ってよ・・・ずっと、そばにいて・・・」

真剣な表情の雫に、羊は同じく真剣な笑顔で言った。

「・・・ずっと、そばにいるよ」

雫が、ふと目を閉じる。顔は羊に向けたままだ。

羊は一瞬顔を赤くしたが、ゆつくりと顔を雫に近づけた。

ゆつくりと距離が縮まっていく。唇と唇がもうすぐ触れ合う。

時間はこれまたゆったりとのんびり流れている。だが、二人に慌てるという無粋な邪魔な感情はなかった。
あと少して、重なりそうになる。もはや間違いなくキスができるところまで行った……………のだが。

「ボワン！」

羊の性別が戻った……………。

雫が女になった羊をみて、自分がその場の勢いに乗ってしまっていた事に気付く。

「…………じゃあ、帰りましょう。送って」

「え？…………き、キスは？」

「女の子同士ではないから」

羊が明らかにショックを受ける。雫は明らかに照れているが、機嫌はよくなったようだ。

「ちくしょう！もっと早く決断していれば！何でさっさとしなかったんだよお！！」

愚痴を盛大にこぼす羊に、雫は愉快そうに笑って言った。

「ほーら、私の下僕になるんだから、早くしてよ！！」

雫のその輝く笑顔は、きつと今までで一番嬉しい笑顔に違いない。

タイプ39「羊と雲」(後書き)

決してレズではないでござる、の巻

うるせえよ by 羊

タイプ40「脇役達は短編でこそ目立つ！」（前書き）

要弧が最近よく狼といい感じな雰囲気を出している。

でも残念だったな！二人はまだ恋人同士じゃないんだぜ！！

いいのかそれで？

いいのさ！！！！

タイプ40「脇役達は短編でこそ目立つ！」

もうすぐはるですなえ

恋をいたしませんか？

「という訳で狼、春はナンパの季節だ。かわいい女の子を摘みに行こうじゃないか」

北崎がまるで音恩みたいな事を言った。

「というか、お前らにとっ
ちやオールシーズンナンパの季節じゃねえかよ」

「だが春は女の子も積極的にデートをしたがるのだよ。温かい陽気の中を男の子とデート、ロマンチックに弱い乙女ならもちろんの事、どんな女の子だろうと頬を染めない子はいないだろう！！」

「オレの知っている知人五名は一切そんな素振りを見せませんか？」

「ばかやろう！赤城君たちは別だ！ていうか女の子としてカウントするのはどうかと思う！」

北崎はどこからともなく飛んできたカバンを後頭部に叩き込まれた。気絶した北崎の代わりにしゅうが現れる。

「どうも、みんなのアイドルしゅうです！・・・さて、狼くん。実は女の子をナンパするというのは口実でね・・・僕らには調べなければならぬ事があるんだ」

「はあ？なんだよ調べるものって？」

「はあ……君は何か大切なものが無いような気がしないかい？」

「いや、別に、全然」

「音恩がいらないだろ音恩があゝゝ！！！！親友を忘れるなんてあんまりだよ狼くん！」

狼は心の中ではつきりと言った。親友じゃねえよ、と。

「実は音恩がリンチに遭ってからというもの……あいつ何だかオレ達と付き合いが悪くなってさ。一緒にナンパしなくなったし、ク

ラスでは女子にいつも話しかけているのに・・・最近上の空で全然ナンパをしないそうだよ。女子達はそんな音恩をみて気持ち悪いって苦情を言うんだ。かわいそうに、寂しいのだろう」

ナンパをしない音恩・・・確かに不気味だ

「そんなのナンパ野郎じゃねえ！あいつ実は死んだんじゃないの？」要弧がいつの間にか横から口を挟んできた。

「あとさあ、ここら辺に私のカバン無いか？さっきわざと投げたからさあ」

「正直だね・・・はい、北崎の後頭部にめり込んでたよ」

しゅうがカバンを要弧に渡した。

「ちなみにあいつが最近しょっちゅう寄っている場所があるんだ。オレの追跡能力も捨てたもんじゃないな」

できれば捨ててくれ

狼の切実な思いとは裏腹に、しゅうは自分の最低な能力に自信を持ち始めた。

「それで・・・あいつが寄っている場所なんだが・・・」

総合病院

「ここだ」

そこは丁度前回の婚約阻止騒動でお世話になった病院。

「最近、というより、退院した次の日からずっと通っているんだよ。もちろん怪我は治ったはずだし、ナンパそっちのけでここに来るのには理由があると思うんだけどなあ」

しゅうの疑問に要弧はスパッと回答をした。

「ナース目的に決まってるだろ？」

狼たち三人は無言で肯定した。

「まあ、ナース目的だしたら・・・わざわざナンパをやめる理由が分からないけど・・・恐らく、やつが恋をしているのは間違いない。という事で、早速調べてみようじゃないか！」

北崎が率先して病院へ入って行った。

「で？・・・まずはどうするんだ？」

「もちろん・・・聞き込みからやるべきだろ？」

しゅうがなぜかカメラを片手にナースに近づいて行った。

「よし、あいつの事は記憶上から抹殺しておこう。で？北崎、お前は どうするべきだと」

「へえ、足を骨折したんだ。なんなら僕が看病してあげようか？」

北崎は女子高校生の怪我人を口説いていた。

「よし。要弧、帰ろうぜ」

狼は額に怒りマークを出しながらも笑顔で帰ろうとした。

「ま、待てよ・・・その、もし・・・ナンパ野郎が本当にケガとかで通院してたりしたら、その・・・悪いからよ・・・それぐらいを調べてから帰ろうぜ？」

「・・・お前・・・いつからそんなに優しい性格になったんだ？」
要弧が『なんだと？』という怖い表情で狼を睨んだが、狼は気にせず看護師に話しかけた。

「すみませ〜ん。最近高校生のウザイ感じにかっこいい奴が来てませんか？」

「え？・・・ウザイかどうかはわからないけど・・・ネオくんっていう子なら来てるよ？」

優しいそうな男の看護師はそう言った。

「え？・・・まさか・・・マジでケガが深刻だとか？」

狼が一瞬緊張した面持ちになるが、看護師は笑って否定した。

「違う違う、お見舞いに来てくれるんだよ。ネオくんは優しい子で

ね、毎日学校帰りに寄ってくれるんだよ、あの子のために……」

「「あの子？」」

二人が声を合わせて言った。意外な気持ちやら、何となく信じられない気持ちでいっぱいだが、その親切な看護士さんに病室を聞いて、二人はそこへ向かう事にした。

507個別病室

狼と要弧はさすがに堂々と入室する勇気がなかったので、ドアに隙間を開けて覗く事にした。

室内では、中学生ほどの少女と、音恩が二人で会話をしていた。

「それでそれで？そのヨーコお姉ちゃんはジンお兄ちゃんをまたぶっ飛ばしたの？」

「そうそう、全く相も変わらずな夫婦漫才だろ？」

「でも二人ともやっぱり仲いいよね！いいな、私もヨーコお姉ちゃんみたいに仲のいい彼氏が欲しいな」

「おいおい、巴空^{みづ}は絶世の美少女だから彼氏なんてすぐにできるに決まってるだろ？」

「うーん、でも北崎のお兄ちゃんとかしゅうとかみたいな軽い男はきらい！やっぱり一途な方がいい！」

「ふう、まだまだ巴空は子供だな……。浮気つてのは男の甲斐性でなあ」

「言い訳カッコい悪い」

「ほう……言うようになったじゃないか。だがな、言い訳って、そんなに悪いもんばかりって訳じゃないんだぜ？」

「え？何で？」

「ふむふむ、それはな、ジンがヨーコ及びヒジリちゃん達に制裁を喰らわれそうになった時……」

二人が楽しそうに会話をしている。正直内容は自分たちの事だった

ので、狼は止めさせたい衝動をじつと我慢していた。そして、狼と要弧は隙間を閉めた。

ここで、音恩に向かって『このロリコンが！』とか、『子供にまで手を出すなんて・・・お前に見境というものは無いのか！』とか、言ってやりたいことはたくさんあるが・・・それを言うのは、あまりにも相応しくない。

大体、個人病棟に入院している子供というのは、はっきり言って思病気の子ばかりのはずだ。現に、先程覗いた病室の患者、巳空ちやんは、目に包帯を巻いていた。

どう考えても、目が見えないというのがすぐにわかる。

まだ幼い子供なのに、そんな彼女を、唯一笑顔にさせてあげられるのは・・・音恩だけ。

あの陽気さや、誰にでも軽く話しかけられる性格が、今の所、彼女を支えているものなのだろう。数多くの患者をみる看護師が、音恩をいい青年だと思うわけだ。

二人はそつと病室を離れた。

あそこは、巳空ちゃんと音恩の場所。何もそこへずかずかと入り込む事は無い。

むしろ、彼女の中にあるヨコお姉ちゃんとジンお兄ちゃんを崩さないためにも、二人はあえてこの事実を知らないでいようと思った。病院を出た玄関に、北崎としゅうがいた。

「・・・音恩は結構有名人名人みたいだな。この病院の看護師は全員彼の事を知っているらしい・・・まあ、それはつまり、あの女の子も有名という事だな」

北崎が独り言のようにそう言った。

「・・・事故・・・だってさ・・・小学生の時に入院してから三年・・・もう、中学二年生なのに・・・友達がいなかったんだ・・・それをあいつが前回入院して、偶然出会って、友達になったそうだ・・・」

・ いいねえ、あいつの空気よりも軽いその態度が・・・人の為になるなんて」

しゅうもそんな独り言を呟いたが、誰も反応しない。
それで良かったように、四人は病院を後にした。

いつか、彼女が・・・音恩の素顔を見れることを祈って。

タイプ40「脇役達は短編でこそ目立つ！」（後書き）

雫と羊は決定済みですよね？

奈絵美は慎と何だかよく一緒にいますよね？

・・・臣は！？

次回

作者、実は狼をもう一人増やそうかと思っていたのでござる、の巻

タイプ41「敬愛する姉のために・・・」(前書き)

辰来と美緒が意外と扱いやすいキャラなんだよ。

それ以上にしゅうの方が使いやすいのだがね。

タイプ41「敬愛する姉のために・・・」

「やつほ、臣姉のかわいい妹！美緒です！」

お父さんが最近私と臣姉を見てこう言っただけです。

「・・・臣を逆さから読むと・・・美緒じゃないか！」

困ったな、ボケられるには速すぎるんだと思います。」「作者は後日その事に気付きました。

まあどうでもいい話は置いて・・・臣姉の事なんですけど。

正直臣姉と狼さんのイチヤイチヤが少ないような気がするんです。

そりゃあ、夏休みの図書委員の仕事で一緒になったり、

臣姉のお弁当を狼さんが食べて誉めていたり、

クリスマス準備の時は一緒に買出しをして、マフラーイベントまでありましたけど・・・。

全部が噛ませ犬みたいに感じるのは私だけですか？」

「そ、それは一応無いと僕は思っただけ？」

辰来が困った表情で、演説をする美緒にそう言った。

場所は近所の公園。時は春風そよぐ春真盛りの昼。二人は写生大会に出かけているようだ。

ああ、あ、美緒ちゃんと二人つきりなのに・・・まさかお姉さんの話が出るとは

辰来が恋煩いで落胆しているが、美緒は御構い無しに臣の話をする。
「容姿端麗！黒髪美人！口数の少ないミステリアスな美女で！滅多に笑わないアイスマスク！でも意外な事にちよつとしたMっ気がある意外性たっぷりな！胸も結構あって！流し目最高で！泣き顔最強

の完璧なヒロインなのに！なんで！？なぜ狼さんは食いつかないの！？」

「・・・なんかそこまで無茶苦茶な性格だと引いちゃうんじゃない？」

「なに？辰来くん？女装写真ばらまくわよ？」

光の速さで辰来は土下座をした。

「うーん・・・キャラが弱いわけじゃないのに、何で臣姉は狼さんを落とせないのかしら？」

「そうだね・・・キャラは強いかもしれないけど・・・基本無口だからかな？」

辰来そう言いつつも、心の中では『狼さんが面倒な人だからじゃない？』と思っていた。

はつきり言おう、その通りだと。

「無口なのはステータスよ。最近はうるさい性格の女が多いから、男達は静かな女の子を逆に求めているのよ」

「・・・僕は美緒ちゃんみたいな明るくてよくしゃべる子は好きだけどな」

「え？なに？何か言った？」

「ううん、何も言っていないよ。　なんでこの台詞だけ聞こえないのかな？」

辰来は不条理な矛盾に涙したが、話は更に進む。

「そう言えば・・・辰来くんのお姉さんも狼さんを狙っているんじゃない？」

「う、うん、まあね・・・でもお姉ちゃんは・・・無駄にツンデレだし、男っぽいし、ていうか学生服着ちゃってるし、何かいつもメンチきってる顔しているし、腕っ節があるし、喧嘩上等主義だし、胸ないし、そもそも本人が一番弱気なわけで・・・あはは、今更ながら・・・美緒ちゃんのお姉さんなんかとじゃ勝負にならないね」

辰来は自分で言ってて悲しくなった。

「え・・・えつと・・・貧乳はステータスだって誰かが言ってたわよ」

「うん、多分、誰かの負け犬の遠吠えかと」
美緒はさすがに哀れだと思つて、辰来の肩を叩いて上げた。

だが、まさかそのダメダメな要弧が実は狼のヒロインの座に一番近いなどとは、二人とも夢にも思わなかった。

「まあ、恋愛つていうのは何が起こるのかわからないんだから！それに胸の大きさはじゃあ女は決まらないわよ！」

「そ、そうだよね！？」

少し元気を出し始めた辰来、だが。

「いや、やっぱり女は胸だろ」

どこからともなく、なぜかしゆうが現れた。

そして美緒の足の小指を狙ったかかと踏みくらった。すさまじい痛みのような。

「行き成り出て来てそのセクハラ発言は死刑に値しますよ？」

「だあおおああららら！！かわいい顔して結構非情だねええ！？」

転げまわるしゆう、しばらくしてようやく立ち上がった。

「ふう・・・まだまだお子様だねえ、君たちには女の魅力とは何かを・・・まだわかっていないようだ。キャラがどうか、胸の大きさだの・・・はつきり言つてそんな人それぞれだろ？要弧みたいな女性が好きな奴もいれば、臣みたい女性が好きな奴もいる・・・

ここで重要なのは・・・狼の好きな女のタイプだ・・・そこで質問だ。君達は今まで狼を見てきて、狼の好きなタイプがわかるかい？」

「えっと・・・狼さんが特に興味を示さなかったタイプの女の子を除外していけば、わかるはずですよね？」

辰来がそう言うと、早速二人は記憶を辿り始めた。

「まず、ツンデレの要弧さんはダメ、無口でミステリアス、大人しい子の臣姉もダメ、アイドル系の雫さんもダメ、眼鏡っ娘の奈絵美さんもダメ、ロリコンでもないし、グラビア系も好きではない、お嬢様系も違う・・・あれ？後何が残っているの？」

「・・・大人のお姉さんとか？」

「でも、狼さんは年上が好きでは無いらしいし・・・後は？」

「・・・もう無い気がする」

二人が困っていると、しゅうは不敵な笑みを浮かべて言った。

「君達はどうもアニメや小説の中のヒロインを視点に置き過ぎなんだよ、はっきり言えば君達のお姉さんみたいな女性はそう多くない、つまり珍しいんだ。それに興味を示さないって事は・・・狼の好きな女性のタイプは・・・ふ、ここまで言えばわかるだろ？」

「全然」

「だ〜か〜ら〜！・・・きつと従順なメイドみたいな子が好きなんだよ」

見事に的外れた答えをしゅうははじき出した。

正直そこまでの考察をしておきながら、普通はここで『普通の女の子がタイプじゃね？』と言うのが正解なのに。予想の斜め上どころか、異次元に飛ばすような発言をするしゅうは、やはり馬鹿だと感じさせられた。

「そうか！そうなんだ！ようし、今日帰ったらお姉ちゃんのためにメイド服を作ってあげよう！」

「ふふ、悪いけど辰来くん、このメイド勝負・・・圧倒的に臣姉の方が有利なのよ？料理！家事！掃除！その三拍子が完璧にできて！尚且つクールなメイドさん・・・これを完璧と言わず、なんと呼ぶのかしら？」

多分、普通のメイドさんかと。

「最近のメイド界では・・・あえて料理もできず、掃除もできず、

家事なんてもつての他！そんなギャップのあるメイドさんが注目を浴び始めているんだよ？・・・この勝負・・・まさに神のみぞ知る戦いだね！」

二人が熱い火花を散らす。それを見ていたしゅう。

二人とも・・・立派になったな。ワシから教える事はもう無い・・・存分に戦うのだ！

なんか仙人みたいな面影でかつこつけるしゅう。もはやこの三人を止められるものなどいないだろう。

そうだ、どうせなら雫を応援している羊ちゃんと奈絵美を応援する慎にもこの事を教えてあげよう！くつくつく、狼は一体誰を選ぶのか・・・こりゃあワクワクがとまらねえぞ！

しゅうは更に余計な事をして場を更に混乱させようとした。

次の日

しゅうの無残にもボコボコにされた死骸が学校の時計台に吊るされていた。

不思議な事に四着分のメイド服を着せられた状態で・・・。

タイプ41「敬愛する姉のために・・・」(後書き)

しゅうは学校をサボって中学生達の写生大会を見に来ていた。これは・・・本当のロリコンは奴かも知れぬ・・・。

タイプ42「もしもって事を考えて」(前書き)

結構時間経っちゃいましたが・・・昔のリクエストを今やっちゃおうと思います。うん、それだけ。

タイプ42「もしもって事を考えて」

『もしも・・・狼が分裂するのではなく性転換していたら・・・』
』

朝・・・目が覚めたら、何か新世界に目覚めた感覚に陥ってた。
オレの名前は守多狼、普通の高校生だ。

しかし・・・昨日まで男だったのに、本日より女性になってしまった高校生だ。

だが・・・まあ落ち着けよ。そんな事あるわけ無いだろう？

手術もなしに性転換ですか？おいおい、それはない。ははは。

オレの視界に入ってきているこの長い黒髪は、きつと昨日一気に毛根が刺激されたもんだから髪が伸びただけなんだ。全く、頭髪の神秘はなんて奥深いんだ。

そして若干低くなった身長、細くなった体のライン。ははっ、きつと成長期だからこうなったんだよ・・・いや、ちょっとその言い訳は苦しいかな？

そして・・・言にくいのが・・・なんか胸に胸があるという男としてはそれはどうよ的な変化だが・・・アレだ、たまたま脂肪がここに集まっただけだ。あれ？特に女性と変わらなくない？まあいいや。しかし・・・次の体の変化はどうしても言い訳ができない気がする。

オレのアレはどこいった・・・。

まあ、多分昨夜寝ている時にどっかに落としたんだろ、はは、オレもやっちゃんいけないドジ踏んじまったなあ・・・はははははははは

ははは。

[illegible]

やっぱり叫ばずにはいられませんでした。

「ついでに……栗鼠が極度のブラコンキャラだったら……」

どうしよう！？どうする！？ブラックジャックを呼んでくれ！！
オレは慌てふためきながら室内をあたふた走り回っていた。

「どうしたのお兄ちゃん!？」

すると・・・妹の栗鼠が下の階から声をかけてきた。やばい、これは妹に見られたら弁解の余地というか、誤解されちゃうって言うか・・・とにかく非常にヤバイ！

「な．．．なんでもないぜ！」

オレはがんばって低い声を出そうとしたが、女性特有の高い声からではやはり元の声は出せないでいた。すると、妹から衝撃的な台詞をぶつけられた。

「……なんで……女の人の声がするのかな？」

「ヤバイ、やっぱバレちゃった？」

「……お兄ちゃんを誘惑するお邪魔虫は……駆除しなきゃなあ」

あれ？何か・・・栗鼠の様子がおかしいぞ？

「私のお兄ちゃんに手を出さないでよ……待ってなさい……今

すぐあの世に」

栗鼠がゆつくりと階段を上り始めた。

オレの寿命もゆつくり縮み始めた。

って、おい！妹が兄を慕うのはいいけどお前絶対行き過ぎだろ！？

「お兄ちゃんも酷いなあ・・・私という妹がありながら・・・」

ええええ！？？妹がいたら彼女作っちゃいけないんですかああ！？
??

オレが恐怖におののいている間に、どうやら栗鼠はもう部屋の前まで来てしまったようだ。そしてゆつくりとドアを開ける。オレは腰をぬかして動けずにいた。

「・・・あら・・・お兄ちゃんはどこかなあ？」

めっさ怖い表情をする栗鼠を目の前にしてとうとうオレは声を出す事すらできず口をパクパクとただけで何も言えなかった。てかこのままだとオレ死んじゃうよ！誰かヘルプミー！！

「・・・不思議ね・・・あなた、お兄ちゃんとよく似ているじゃない・・・」

おお！さすが我が妹よ！オレの事をわかってくれるのか！？

「・・・私の奴隷になるって言うんなら・・・命だけは助けてあげるよ？」

「うおおおおおい！妹よ！お前は何を言っているんだ！？」

オレはあまりにも突っ込みをしたかったためとうとう声が出てしまった。いや、これはむしろ声が出せてよかったと思うべきか。

「え！・・・その突っ込みはまさしくお兄ちゃんのツツコミ・・・もしかして・・・お兄ちゃん？」

「・・・そうだよ・・・正真正銘、栗鼠のお兄ちゃんだよ」

その後、何とか栗鼠はオレの話を理解してくれた。

と言っても、俺自身分かっていない事が多すぎて、正直何の進展もないままだ。

「でも・・・どうしよう・・・お兄ちゃんが・・・お姉ちゃんにな

るなんて」

「そうだな・・・ただでさえ親がないのに、女だけで家にいるのは不安だもんな」

「それもあるけど・・・ただでさえ兄弟だからお兄ちゃんと結婚するのはちよつと難しいかなって思ってたのに・・・お姉ちゃんになつたら同性になつちやうじゃない！・・・でも！栗鼠！がんばつてお姉ちゃんとラブラブになれるようにがんば」

「ごめん！オレ用事あるから出て行くわ！」

オレは妹から逃れるために外へ脱出した。

街中に行く当てもなくとぼとぼと歩く。

ていうかマジでどうしよう。女になつちまうなんて・・・誰もこんな事信じてくれるわけねえし、て言うか学校とかどうするんだよ？先生になんて説明するんだ？

言いよつた無の不安に駆られて、オレはいつの間にか涙を流していた。どうやら女になつた所為で涙腺まで脆くなつたようだ。

「かゝのじよ！何か悲しい事でもあつたの？」

「・・・なんで貴様がいるんだ・・・音恩。

「寂しいんならオレが暖めてあげようか？」

「・・・結構です」

全く、不愉快なナンパ野郎に出会つちまつたな、ここはさつさと退散すべきだな。

「つれないな、一緒に遊ぼうよ！何でもおごるよ！」

「だからいいって言ってるだろ！」

「こわい・・・でもそんな所がかわいい」

殺してやろうか貴様。

「ね！ね！絶対楽しませてあげるからさ！行こうよ！」

「嫌だつて！ちょ！手を離せよ！」

しつこいな・・・いっちょ懲らしめてやろうか？

そう思つた矢先、誰かの足蹴りが音恩のあごにヒットした。

仰け反って倒れる音恩。その拍子に、誰かに手をつかまれた。

「こつちよ！」

「……要弧だ。」

大分走った後、公園についたので要弧はようやく足を止めた。

「大丈夫？ ああいうナンパは性質が悪いからね、これぐらいしないとダメだから」

「あ、ありがとう」

「いいって。そうだ、ジュース飲む？ 走ったから喉が渴いたでしょ？」

そう言っ要て要弧は自動販売機に向かい、コーラを二つ買った。

「ほら、どうぞ」

「あ……でも、お金が……」

「いいって、おごつて上げるよ」

そう言っ要て要弧は笑った。それにっられてオレも笑う。

「……なるほど……それだけ可愛かったらそりゃナンパされちやうよね」

「え？……そ、そんな事無いですよ」

「あゝ、その恥ずかしそうな顔もかわいいじゃん」

「か、からかわないでください」

何だかいい雰囲気だな。オレはそう思いつつも不思議といい心地だと思った。

「じゃあ、後は一人で帰れる？」

「はい、ありがとうございました」

「うん、気をつけてね」

要弧はそう言って帰って行った。そして……オレはいつの間にっ要弧に惚れて……

「・・・・・・・・はっ！・・・・・・・・夢・・・・か」

狼は異常なまでに寝汗をかいていた。

よほど恐ろしい夢でも見ていたのであろう。

「狼はん、どないしたん？怖い夢でもみたんか？」
骸骨がのんきに聞いて来た。そして、狼は答える。

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・非常に恐ろしい夢だった・・・・・・・・」

タイプ42「もしもって事を考えて」(後書き)

そういえばキャラ投票どうなったっけ？

多分狼が一番だと思う・・・。

はは、企画はよく考えてしなきゃだめだと学んだぜ。

タイプ43「作者語 元を見れば」(前書き)

ネタが無いからやったわけではない。

その証拠に本日は二つアップしただろ？

これはアレだ、ちょっとバッドストーリーな物語を読んで気分が悪くなったから反骨精神で持論を説いたんだよ！

ようするに作者の戯言だ。飛ばしてもなんら問題ない。そして自分で言うのもなんだがおもしろくないぞ！

タイプ43「作者語 元を見れば」

「・・・タイプパニックってどんなお話だっけ？」

このオレ、作者はそんなことをポツリと呟いた。

そして狼が不審な目で見てくる。なんだ？どうした？

「あんた・・・まさか収拾がつかなくなったか思っているんじゃないだろうな？」

「・・・おいおい、收拾つかせることなんて、それこそ簡単にできちまうだろ？オレはこの物語の方向性というかテーマが何だったかを思い出そうとしているんだよ」

「・・・あつたのか？テーマとか？」

「・・・なかったような気もする」

狼はやはりオレを見下した目で見てきた。まあいいか。

「こういう時はな、オレ自身がなぜ物語を書いているのかという原点に戻ればわかるんだよ」

「ほう？それで？その原点とは？」

時をさかのぼる事・・・小学校中学年のころだ。

オレの家は母上がとても厳しい人でな、オレは子供のころからあまりマンガを持っていなかった。それゆえか・・・オレはマンガがあまり好きなものとは思っていなかったのだよ。

・・・だが、あるマンガに出会って・・・オレは劇的に変わった・・・。

父は母上とは全くもって逆の性格だったので、とても甘やかしてくれる性格だった。

それで、ある日古本屋に寄ったとき・・・オレに好きなマンガを買ってやると言っただ。

オレはそれまでにどんなマンガがあるのかも知らないし、おもしろくて有名なマンガも知らない・・・そんなオレが、気まぐれで手に取ったマンガが・・・。

「・・・ドラえもんの大長編マンガだった・・・」

「・・・あ、ごめん、今笑う所だったか？」

まあ、滑稽かもしれないが・・・小学生のオレはドラえもんにはまった。

あのご都合主義の現実と非現実の混ざり合った世界。独特で、それぞれが輝いている登場人物。

そして物語のおもしろさといったら・・・小学生のオレは瞬間にドラえもん信者になった。

それから、オレは小学生高学年となる。

そのころには、多くのマンガも持っていたし、小説にも手を出していた。

これはもう立派な本好き、読書家とよく周りには言われたものだ。そして、オレはこのころに、また新たな世界に突入していた。

ドラえもんのパロディー小説・・・。

ネット内にそういったサイトが目白押しに存在していた。

オレは、有り余るドラえもん好きが抑えられず、うん、まあ書いた。

「まさか貴様が二次創作出身とはな・・・」

ちなみにドラえもん以外は書いた事が無い。オレってすごくね？

「なにが？」

狼がうるさいので、話を戻そう。

まあ、書いたきつかけなんて、皆様の予想通り・・・俺自身が楽しめたかったため、だ。

ドラえもん達をかつこよく動かしたい。

おもしろい、んでもって感動できる話を作りたい。

それ故、ドラえもんのパロディー小説では、ストーリーは別のアニメで登場人物をドラえもん達にしただけ、という物が多かったのだが、オレはストーリーをオリジナルにした小説をよく書いていた。正直・・・あのころは本当に楽しかった。

中学生時代、オレはまさにわが道を進んでいた。

ドラえもん好きを隠すつもりもなく、自由に生きていた。そして小説も、オレ自身が楽しむために書いていた。

だが、ある日、ふと変わった。

そうなったきつかけは、恐らく・・・バッドエンドの小説を読んだからだろうな。

特に、東野圭吾の作品にはすごい影響を受けた。

知らない人はいない、超有名な作者だ。オレは特別好きって訳ではないが、母上が大量に買って来たので読む事にした。

東野圭吾の作品は本当におもしろい。

読みたい気持ちを読者に与えるなんて芸当はなかなかできないものだ。

だがそんな不思議な物語を、あの人は作る事ができるのだ。

もはやオレが尊敬する人々、などと軽く言える人でもないが・・・彼の作品の中には、バッドエンドで終わる物語があった。

その物語は凄まじいものだった。

『殺人の門』『幻夜』

この二つの作品を知っている人は、まあ確かにハッピーエンドじゃないなとわかっていただけるだろう。

その二つの作品を読んだ事で、オレの小説にかける思いは変わった。今までは楽しめればいいと思っていたが、変わったのだよ。どんな風に変ったのかというと。

「読む人が、笑ってくれて、楽しんでくれて、なんか幸せな気持ちになれるハッピーエンドな物語を書きてえ」

そう思うようになったのだよ。

バッドエンドの物語を読んだ後、オレ自身、何だかスッキリとした気持ちがあつたからだ。

他の東野圭吾の作品で、ハッピーエンドで終わったものを読むと、簡単に言えば元気が出る。

おもしろかったぜ！そして感動だぜ！

そう思つて読み終わったこの気持ちは、やはり本を読んだ事によつて得られるものだろう。

だが、バッドエンドはそうではない。

どうも納得のいかない、不燃焼で、胸の痛い思いだけが残るのだ。

まあ、それがいいという人もいるだろう。

でも、笑えないだろ？ 幸せな気持ちになれたのか？

だからこそ、オレは自分の考えた物語で人を笑わせたい、楽しませたい、元気にさせたい。

そう思つて、今でも執筆をしているのだよ。

例えば、いじめを受けて不登校になった人がいるとしよう。

オレはその人を笑わせられる作品をかけているだろうか？

何も勇気を与えるほど素晴らしい作品を書いているわけではない、だがせめてその人が心を平穏にできるぐらいの笑う余裕を作ってほしいから、オレはおもしろい作品を書きたい。

なあ、オレの今書いているこの物語は、あなたを笑わせれていますか？

「よし、ネタ埋め成功」

「くさい台詞を延々と並べて最後にそれか？」

狼が盛大な溜め息と呆れた顔をした。

「いいじゃないか、オレの理想は物語で人を笑わす。それだけだ」

「・・・それがテーマって事か？」

「うん、まあそうだな」

会話はそこで止まった。

そしてオレは思った。

ここでオチを言わなきゃ笑わせれる作品じゃなくなっちゃうよね？

だがしかし、オチは無い。

次がんばろう！

タイプ43「作者語 元を見れば」（後書き）

学校で親友が事件で殺されて、なんかクラスの雰囲気が悪くなって成り行きでム力つく奴らにいじめられて精神状態がおかしくなった子の物語を読んで、正直やるせない気持ちで一杯になった。

しかもそのいじめの内容が酷かったね、どんな風かなんて書かないよ？オレの物語が汚れちゃうからね。

たださ、弱み握られているからとかでそのいじめを受ける主人公がどうかと思ったよ。現実にはたまたまひつぱたいてやりたいね。『のび太はいじめられっ子だけだな、一度もその状況に甘んじた事は無いぞ？あきらめた事も無いぞ？いつもそんな不条理な環境を抜け出そうと苦労してたんだぞ？ドラえもんがいろいろがいがそれがそれは変わらない事実だ。お前はどうかんだよ？誰かに助けも求めずに、必死にもならず、戦う気持ちも見せずに、いじめを享受してんじゃねえよ。いけないことを止めさせないお前にも、罰は下るんだからな』こう言ってやりたいね。

まあオレだったら突っかかって来た奴は丁重にフルボッコな。オレは優しくねえぞ？

タイプ44「まともなデートはいかがかな？」（前書き）

祝！50話目！！！！

祝え！宴のはじまりだああああ！！！！

タイプ44「まともなデートはいかがかな？」

「ねえ狼・・・頼みがあるんだけど・・・」

土曜日の夜。羊はポツンと食事中にそんな事を言った。

「ん？なんだ？」

「明日・・・デートするから留守番頼むね」

狼は盛大に味噌汁を噴出するのであった。

「話をまとめると・・・明日雫とデートをするって事だな。もちろん男になつて」

「そうよ。あ、付いて来たら殺すから」

「誰が好き好んで付いて行くかよバーカ わかってるって、当たり前だろ？」

狼は本音と建て前を間違えてしまった。

「とにかく、そんな訳でよろしくな」

「・・・ひゃい」

狼は口から血を流しながら返事をした。

そして、楽しい残酷な日、日曜日になるのであった。

朝、狼がのんびり起きて下の階にいます、もう既に誰もいなかった。

ああ、もう行ったんだな・・・まあ二人は相思相愛な訳だし、楽しんでくれればそれで十分だぜ

「ピンポン」

突然鳴り響くインターホン。狼は居留守を使おうと黙っている事にした。

「ドン！ドン！ドン！」

すると玄關のドアを激しく叩く音がした。

おいおい・・・ずいぶん荒々しい訪問者が来たもんだなあ？

「ドコッ！バコッ！ガッシャアアアアン！！」

ドアが破られたあああ？？？

狼が急な事態に腰を抜かしていると、侵入者はずかずかとリビングに近づいてきた。

「羊ちゃああああん！！！！狼が！！！！じんが雫と浮気してるうううううう！！！！」

「うつぐ・・・えつぐ・・・狼が・・・狼が・・・捨てられた・・・ひつぐ」

台詞だけでは一体誰なのか分からない程、この侵入者は気が動転しているようだ。

そしてリビングに入るドアをありったけの力でぶち開けて入ってきた。

「・・・何しているんだよ・・・要弧、臣・・・」

二人とも怒っているのやら泣いているのやら、と、素の状態全開で狼の前に出てきてしまったのであった。

「「・・・！！！！！！！！！！」」

二人は更に気が動転して戦闘状態に入った。そして狼を殴る蹴るわ蹴るわで・・・。

数分後

「・・・あれ？・・・オレいつの間にか起きたんだ？」

「よ、よう狼。お前、その・・・お、起きるの遅いぞバカ！」

「・・・おはよう・・・」

二人は平穩を装っているようで顔は火が出るくらい真っ赤だった。まあ狼はもちろん気付かないし、さっきの記憶は吹っ飛んだようだし。

「そーそれよりもよう！雫が！なんか狼とよく似たロン毛のやつと

デートしてたんだよ！」

「・・・雫・・・いつの間にあんなかつこいい彼氏を・・・抜け駆け・・・羨ましい」

めんどくせえ・・・よりによってこの二人に見つかるとはな・・・でもまあ、特に何もしないだろう

「と言うわけで狼、雫ばかりいい目見るのは癪だから私達を遊びに連れてけ！」

「遊びたい！・・・ねえ、いい？」

「えゝ、めんどくさい」

「なっ！狼てめえこっちは美女二人が遊んでやると言っているのに！」

要弧がまたキレて殴りかかろうとした所で、臣がそれを止める。

そして耳元でささやくように要弧に話した。

「毎回殴ってばかりだと・・・狼も行く気がしないよ・・・だから・・・ゴニョゴニョ」

「え？・・・そ、それはちょっと・・・恥ずかしい気が」

「いいから・・・ね！」

二人がなにやらコソコソ話しているのを一切気にせず朝ごはんを食べる狼。

そして二人は話が終わったので狼の目の前に立つ。

「ん？なんだなんだ？」

「・・・遊びに、行こうよ」「」

最高にかつこいい流し目をする二人。

正直ここで可愛い笑顔だの上目遣いだのを期待した諸君にはとりあえずごめんなさい、と、ザマーみそとだけ言っておこう。

で、そんな流し目を受けた狼は盛大な溜め息と疲れを感じながら言った。

「・・・期待を裏切ってくれてありがとう」

443

そんな格好なんか似合わないわよ！

・・・いいなあ・・・可愛いスカートにシャツ・・・小柄なその体型が・・・一番・・・羨ましい

けっ、まゝた要弧と臣目当てのナンパかよ。くそ！一度でいいから逆ナンされてえ！オレ一人の時にそうなってほしい！

三人はうんざりとした顔をわざとアピールするように、その女子高生達に見せつけた。

「ねえねえ！カラオケ行こ！」

「私犬塚愛の歌がめちゃくちゃ得意なんですよ！」

「あ、その端っこの地味な人は何か用事あるんですか？嫌そうな顔してますから帰っていいですよ」

しつこく言い寄ってくる女子高生達、でもやっぱり狼に対しての態度がおかしい。いや、合ってるか。

さすがにしつこいので要弧が断ろうと口を開く。

「悪いけど遊ぶつもり無いから他をあたっ」

「いいじゃないですか！ホラホラ！行きましようよ」

「一緒に来てくれなきゃここで大泣きますよ？お巡りさんが来るかも？」

「ほら！あなたもこっちに来て！」

「・・・え？・・・いや、だから」

要弧と臣が腕をつかまれて引つ張られる。もちろん狼には誰も寄り付かない。

「い、いい加減に」

要弧が真剣に怒ろうとした時、要弧と臣は後ろから誰かに引き寄せられた。

「いい加減にしてくれないか？オレ達今デート中だから」

狼が要弧と臣をしつかりと抱き寄せてそう言った。

え？じ・・・狼？

わ・・・え？・・・そ、そんないきなり・・・

二人が恥ずかしく顔を赤くさせる。

「え？・・・なに？もしかしてゲイ？」

「やだ・・・ホモカップルだった？」

「地味×イケメン・・・いいかも」

変な目でみられる三人 若干傍観者の一人は変態のようだが。
白けた視線を送るのは目の前の女子高生達だけではない。

通りすがりの通行人達も要弧や臣と狼を完璧に同性愛者と見ている
ようだ。

当然だが傷付いた二人は一気に冷めた表情をした。そして狼から離
れようとする。

「や、止めなよ・・・変態に思われてるぞ」

「・・・大丈夫・・・だから・・・早く・・・放して」

「・・・けっ、折角の休みだから遊びたいつつたお姫様はどこ
のどなたでしたっけ？」

狼は離れようとした二人を更に強く抱き寄せて、目の前の女子高生
達に言った。

「とつとと失せてくれるかなボケナスども。貴様らの濁った汚い目
じゃあこいつらを男だと誤解しても仕方ないだろうがなあ・・・は
つきり言ってテメエらよりも二人のほうがかわいい女の子なんだか
らな・・・わかったんなら二度と話しかけんなよ下品な無能どもが」

狼の久しぶりの怒りの形相が、女子高生三人組を睨んだ。

「ご、ごめんさーい！」

「ヤバイよ！早く行くよ！」

「・・・あの表情・・・かつこい」

三人は走って逃げ出す。そして周りの野次馬も、もう変な目で見てこなかった。

「・・・狼・・・」

「・・・ありがとうございます」

二人は真っ赤になって・・・嬉しそうな顔をした。

「じゃあ、買い物が続といくか」

狼があっさり二人から手を放して先に進んだ。

ええええ！？？ボーナスタイム（？）終了かよ！？

う・・・まだ・・・くっ付いていたかった・・・

二人が落胆していると、狼がふとある行動にでた。

「はぐれないように、な」

狼は要弧と臣の手をつかんで、手を握ってあげた。

「さて、お姫様をしっかりとエスコートしねえとな」

そう言っ二人の手を引いて歩き出す。

要弧も臣も顔を赤くするが、嬉しさに身を任せて、そのまま手を握る。

そして、同じく顔を赤くしている狼を間に挟んで、三人はデートを楽しむ事にした。

真っ赤で熱い三人を、太陽の日差しは、更に熱くするように照り付けていた。

タイプ45「よくわかんねえ時は笑え」(前書き)

なんかどんどんカオスな事になってきたな。

もはや何が何だかワケわかめ。あ、いつもの事が。

そつえばこれってラブコメなのかな？わっかんね。

タイプ45「よくわかんねえ時は笑え」

最近、学校で怪しい視線をよく感じる雫です。

朝、学校へ登校してきました。

狼と羊との関係は・・・まあ元同一人物同士ですけど、二人の秘密を知った割には、驚くぐらい普通に接してます。てかあいつらの変わり身の早さは何なの？順応力高すぎよ・・・。

何はともあれ、私の恋は・・・えっと、実ったのかな？

まあ・・・とりあえず、元狼の羊と・・・その、付き合ってます。でもねえ・・・やっぱり女の子だから・・・前途多難なのは目に見えてます。

とは言え、元々べったりな羊は更に私にべったりになったくらいで、本人は何も考えてないみたいだし。狼は完璧他人事だし。私がしっかりしなきゃいけないのねえ。

愚痴はこれくらいにして、話を戻します。

怪しい視線を感じるのはこれで何度目かしら？

陸上部のファンの子にストーカーされたり、SPが一時期付いていたり・・・。

あれ？何で私ばかり狙われているの？そんなに私って隙が多い？とにかく、私はこの事を相談しようと羊に話そうとする。

「ねえ羊・・・もしも・・・またストーカーみたいな視線を感じるって言ったらどうする？」

「大丈夫！今度こそ、そのストーカーを地獄に送ってあげるから！」
何となくわかっていたけど・・・話さないほうが良いみたいね。

若干、羊の性格が本当に狼の分身なのか疑いたいけど、別にいいか。

今度は狼に相談してみる。

「はは、気のせいだろ？」

こいつは役に立たない。わかっていたけどやっぱりムカつく。腹いせに殴つといた。

「はあ、丁度よく相談、ていうか命令できる奴隷はいないかな」

私がそんな事を口走つたら、廊下を歩いていたある人物が目に入つた。

「で？それが僕ってわけ？」

北崎は慣れた様子でそう言った。

「丁度良いパシリはあんたぐらいでしょ？よって奴隷にしまゝす」

彼女達のワガママに今まで狼君は一人で対処していたのか・・・くっ！なんて不憫な！

「いいだろう！我が親友の背負いし重荷を少しでも手助けできれば！」

「あんた早速失礼な事言ってるわね」

雫が北崎を足蹴りにする。

「で？その怪しい視線が誰なのか検討もつかないのか？」

「そうなのよ」

「ふむ、スリーS連合副長官としても、ここは見過ごせん・・・わかった、任してくれ」

北崎はそう言つて作戦を言った。

「まずはそういった視線をよく感じる場所を教えてくれ、出来れば時間もわかると尚よい、後はスリーS連合の同志達を総動員して調査をする。質問はあるか？」

「スリーS連合って何？」

雫が怪しい目で北崎を見た。

やばい！羊ちゃんからは雫にばれない様にと言われているのに！
・ここは、華麗に言い訳するしかないな

「そ、それはだな・・・スクールにある・・・スリルを・・・スルーする連合の事さ」

スルーじゃ意味無いだろ、とツツコミを入れる場所なのだが。

「・・・ふん、そんな団体があったのね」

雫は勉強が嫌いなので英語ができないんだ！はは！ありえねえ！

そんなこんなで数日後

「大体犯人の目星は付いた。調査の結果、写真部の女子多数と・・・
新手的FCファンクラブが関与している事がわかった・・・しかも・・・バックにはもつと強力な団体が見え隠れする。こつちも調査中に何人か襲われて奴らの餌食になった・・・これは最早もはやただのストーリーカーではない、多くの人間同士の利潤が交差した組同士の争いだ」

「ヤクザっぽい説明どうも。てかファンクラブ同士の争いって何よ？」

雫がオーバーに語る北崎を一蹴した。

「とりあえず、後は現行犯逮捕しかない・・・ふふ、定年前にこんなヤマに出くわすとはな、ここは一発、デカイ華でも咲かすか！」
北崎はノリノリで犯人逮捕に向かった。そして雫がうざかったという理由で殴つといた。

雫、教室前の廊下から窓の外を見ています。

そこから数メートル離れた所に、北崎警部（仮、がスタンバイして

いた。

「
・
・
・
視線！」

雫がいつものように視線を感じて北崎に合図を出した。

「犯人かくほおおおお!!!」

北崎の掛け声と共に、スリーS連合員がカメラを持った女子とスケッチブックを持つ女子達を確保した。

「ふ、これで終わりだ！百合教会！」

「は？・・・何教会？」

「え?・・・だから・・・『レズを崇拜し女の子の聖地を守る教団』の百合教会だよ。こいつらが黒幕さ。新手のFC『雫×羊』を創設して、『二人の仲を邪魔するものには死を』っていうモットーで最近巷を騒がせていたのさ。主な活動に『オリジナル同人誌作成』や『二人の写真集無断作成』そして『守護という名のストーリー』って所だな」

「
・
・
・
・
え
”
」

「ほら、これが押収した証拠品だ」

差し出された冊子。そしてタイトルが『しず×ひじ』。

表紙にはイラスト化された雫と羊が（ピー）。

「いやあああああああ！！！！！！」

雫の断末魔の叫び声。

「安心しろ！今日を持って百合教団は我らスリース連合が吸収した！これでもう大きな活動はできない！喜べ！我々の勝利だ！」

「わけわかんない事ぬかしてんじやねええええええええええ！！！」

雫は北崎を滅多打ちにした後、しばらく女性恐怖症に悩まされたことさ。

スリース連合本部室

百合教会元会長「北崎君、新しい創作物なんだけど」

北崎「ん？ああ、わかった。闇乙女市場に上手く流すさ」

「ありがと・・・ふふ、あなたもワルよね・・・私達を吸収して、布教活動を裏支援するなんて」

「これも戦略さ・・・こつちとしては軍資金が必要だから・・・スリース連合はもつと大きくなるべき団体だ・・・そしていつか・・・この学校で最も権力のある『赤城グループファンクラブズ』を超えてみせる・・・そして・・・本当の支配者になってやる」

北崎の不敵な笑みが、そこにはあった。

タイプ45「よくわかんねえ時は笑え」(後書き)

あ、言い忘れてた。

GLとかって言う単語が出てくるから。まあ所詮ギャグだからいいけど、『そんなの聞いてなよお!』とかかわいいこと言ってもこっちは聞く耳持たずだから。

はは!感想くれ!

そんなんじゃ来ないわよ! by 隼

タイプ46「レイン・ライブラリー」(前書き)

うは、めずらし！将騎が語りだぜ！

なんかギャグろうとしたらシリアスリやがった。
え？言っている意味がわからない？

要するに毎度同じく予想外ですって事さ！

タイプ46「レイン・ライブラリー」

僕は、いつも狼先輩の背中ばかりを見ていた。

初めて見たのが、桜の散る入学式の日。

あの日の、あの時の、あの場所での、あの一言が、

今でも、僕の、唯一の女の子らしい気持ちを、独占していた。

『しのめやたま
東雲夜珠』

高校一年生。ルックスは、短い黒髪に細身で長身。長く細いまつげと優しい眼。まなこ甘いマスクときれないな白い肌。

奴に惹かれない女性などいない、天使の生まれ変わり、御伽草紙の王子様。

数多くの通り名をもつ夜珠。しかし、奴を表すのにもっと的確な通り名があつた……。

それは……『第二の要弧』……。

暑い日が続く五月の終わり。もうすぐ梅雨という名の陰鬱な時期が来る。

でも、僕は梅雨が嫌いつてワケじゃないよ。雨の日にもいい事はあるからね。

どうも、メチャクチャ影が薄くてまさか語り手になれるとは思っていなかった将騎です。

え？誰かって？・・・全話読んだ人にならわかるでしょ？
北崎君とよく一緒にいる男子メンバーの一人だヨ。
さて・・・僕は北崎君達と違って背も低いし運動神経も無い。
だから部活は『文芸部』に所属してます。
どんな部活かって言うとな、本を読む部活なんだ。
うん、それだけ。ごめんね、おもしろくなくて。
でも、そんな部活に興味を持ってくれた後輩がいるんだよ。
名前は『東雲夜珠』ちゃん。すつごく背の高い女の子なんだ。
しかも凛々しい顔で即決即断、はつきりとした物言いが大和魂を感じさせるよ。

そんなかわいい後輩があるう事が僕に恋の相談をしてきました。

「先輩、さつきから黙ってそっぽ向いてますけど・・・迷惑ですか？」

「うっん！そんな事ないよ！」

図書室で座る僕と夜珠ちゃん。僕ら二人以外に人はいない。まあだから相談を持ちかけて来たんだと思うんだけどね。

「・・・えつと・・・それで・・・誰が好きなんだっけ？」

「ですから・・・狼先輩ですってば」

あちゃー。何度聞いても聞き間違いじゃないな。

この学校でジンといえば狼君しかいないからな。にしても・・・狼君はボーイッシュな子によくモテるね。

自分で言うのもなんだけど、自分がお姉さん系の人からよく好かれるの理由は、なんとなくわかるんだ。

ズバリ、たぶんキヤラの。

男のくせに小さくて、色白で、女の子っぽくて、敬語で、ヘタレ。

僕を好きになった人がよく上げる、僕を好きになった所。

でもね・・・僕にとっては、それは全部コンプレックスなんだ。

背の高い人が羨ましい。男らしい態度を取れる人が、かつこよくて羨ましい。

今でも、そう思う時がある。

話がズレたね。とにかく、どこを好きになったのか聞いてみよう。

「先輩を好きになった理由ですか？・・・僕を見ても・・・変な目で見なかったからです。入学式の日・・・男っぽい容姿なのに、セーラー服でしたから・・・。それで、同じ学年の子には話しかけて・・・そんな時、狼先輩が・・・話しかけてくれたんです」

右も左もわからなくて。

不安でいっぱい。周りの人が、自分を変な目で見ているようで・・・。

そんな疑心暗鬼な中・・・先輩が、話しかけてくれた。

『どうした？新入生だろ？道にでも迷ったか？』

『・・・え？あ、はい・・・その、今からどうすれば・・・』

『新クラスに向かうんだが・・・クラス別表はあつちに掲示されているぞ』

『あ、ありがとうございます』

普通に接してくれた先輩に、ここに来て初めての安堵を感じた。そして、駆け出した私の背中に、先輩は言ってくれた。

『入学、おめでとう。これからよろしくな』

その言葉で、生まれて初めての、トキメキが、僕の胸にはじけた。

「い、以上が・・・好きになった経緯です」
顔を赤くして、夜珠ちゃんは言った。

それにしても、僕という一人称の女の子が本当にいるとは。
そして、相変わらずな狼君の無責任な行動。まあ、いい事をして
いるんだけどね。

狼君は、世間で言う鈍感な男だ。身近にいる女の子の恋心に気付い
てあげれない、そんなある意味最低な男だ。
でも、彼は・・・いい人だから。
優しくて、差別をしない人だから。

相手の、中身まで見てくれる。そんな人間だ。

そうか・・・だから、コンプレックスを持っている人が、彼の周り
には集まるのか。

一見、要弧さん達も、北崎君達も、人気者で悠々自適な学校生活を
送っているように思われているかもしれないけど、案外そうでもな
い。

みんなと同じ普通の人間なのに、特別視されて、特別扱いをされて、
時には差別もある。

自分のコンプレックスも、他人からは無責任で重宝される。
そうになると、いつも息が詰る生活になる。

自由な学校生活や、気楽に話し合える友達がいなくなる。

そんな生活が、楽しいわけが無い。

芸能界とかならいうざ知らず、僕は普通の学生だ。アイドルのお仕事にはまだ早い。

そんな、疲れ切った僕らを、落ち着かせてくれるのは、狼君だ。

彼は、アイドルでもないし、人気者ってわけじゃない。

一般人からのイメージじゃあ、地味らしい。

でも、人気者である僕らから見たら、彼が輝いて見えた。

ルックスは、同じくらいなのに、なぜ、彼は人気者じゃないんだろう。

彼は何で悠々自適に学校生活を送れているんだろう。

それは、口では簡単に説明できない。

ただ、最も近い答えを言うならば……。

狼君は……普通の人だから……。

あれ？何か特に誉め言葉でもなんでもないような？

「そ、それで将騎先輩……狼先輩は……その、す、すす、好きな人とか」

夜珠ちゃん……。君も人気者でありながら、狼を好きになった人間の一人。

でも、残念だけど……。狼にはもう、好きな相手がいる。

これは僕の予想だけど。というか、客観的に見た結果なんだけど……。

狼君は、きつとあの人と一緒になるんだと思う。

だから……。君に入れる余地は無い……。

ごめんね。でも、無理に希望を持たせるなんて事の方が、僕にはできない。

狼君が結局誰を好きになるかなんて、第三者が決めれるわけ無いし、答えがわかるわけも無い。

「・・・狼君には、もう好きな人がいるんだ・・・残念だけど・・・」

初恋が終わる時ほど、辛い時は無い。

その証拠に、夜珠ちゃんはショックを隠しきれない様子だ。

雲行きが怪しくなつて、すぐに雨が降ってきた。

このタイミングで見る雨は、さすがに嫌な気持ちがある。

僕一人だけの図書室は、妙に静かで、雨の音だけが聞こえた。

ねえ、狼君。

君は、普通の人に好かれて追いかけることは無いだろうけど、

僕らみたいな人気者には好かれて、追いかけているんだよ？

でも、愛し合えるのは一人ずつのみ、だから・・・、

多くの人を泣かせる代わりに、愛する人一人を、しっかり守ってね。

きつと、それが、恋に傷付いた者達への、唯一の傷薬だと思うから。

雨は、思ったよりも短く、最終下校時には晴れていた。

タイミングよく現れた虹に、僕は笑顔を向けて、図書室を出た。

タイプ46「レイン・ライブラリー」(後書き)

感想、待ってるよ。 by 将騎

恋理論、求む。 by 作者

帰れ。 by 羊

タイプ47」「ここにでーっ思い出そう」「(前書き)

手抜きではないでござる!!決して手抜きではござらん!!!!

タイプ47「こころで一つ思い出そう」

ここまで来て・・・言うのもなんだが・・・。

登場人物がわからなくなってきたらしい・・・。

このキャラはいったい誰なの？みたいなキャラがいるらしい。

つまりはレギュラーキャラがはつきりとわからない、そういう事だ。

いいだろう、ここまで来てまさかの登場人物紹介だ！

守多狼 かみだじん

高校二年生

言わずと知れた我らの主人公。性格は言わずと知れて鈍感。てか今更紹介するほどの奴でもないよね？・・・とりあえず、キメ台詞だけでも。

「・・・よし、死刑執行と行こうか」

赤城要弧 あかしろ ようこ

高校二年生

まずは幼馴染ヒロイン。その性格、ツンデレ。素直になれない男勝りな子。だが私生活ではドン引きするぐらい乙女な子。料理とかはダメで自分自身女としての魅力が無い事に気付いている。狼との仲も親友ポジションと思っている。まあ事実そんなもん。え？タイプ30（31話では告白めいたシーンがあるだって？・・・残念、『好き』と『愛してる』では意味が違うのだヨ。それと何かうやむやになった。正直すまん。じゃあキメ台詞。

「じゅん……貴様には究極の制裁が必要のようね？」

守多羊 かみだひじり

高校二年生

このストーリーのキーワード、性転換によって生まれた第二の狼。性格は徐々に変わっていき今では若干変態キャラ。雫の事ばかり考えているのだが、男に戻る気があるのかはわからない。いや、もしかすると自分が男だという事をもう忘れている可能性がある。ちなみに読者の声で結構多かったのが『狼と羊の絡みが見たい』……え？なにそれ？……キメ台詞。

「一度でも女を軽く扱ったような男に、しずくは渡さない！」

佐崎雫 さいざきしずく

高校二年生

お次は犬猿の中であるヒロイン、雫。性格は要弧と似ているがそれよりも性質が悪く。意地っ張りと言った感じ。そんな訳で初期の頃は狼も雫が苦手だったという。しかし！彼女の魅力に気付いた羊はベタ惚れ。そんな訳で新たな苦勞が課せられる雫でした。よし、キメ台詞。

「ほくら、私の下僕になるんだから、早くしてよ！」

岡臣 おかおみ

高校二年生

クールな無口ヒロイン。しかし料理はできるし家庭科スキルはヒロインの中でダントツ。しかも女性としての魅力は誰よりも高い正統派ヒロイン。しかし無口なのは単なる口下手なだけだったり、Mっ娘という一歩間違えばドン引きされる性格を持っている。でも健気なのは事実。一途に狼を追いかける様子は正直作者としても心が痛い。やっぱり狼を増やすしかないかな・・・え？いや、なんでもないよ！さあキメ台詞キメ台詞！

「こうすれば、もっと・・・あつたかい」

鳥居奈絵美 とりい なえみ

高校二年生

頭脳明晰メガネヒロイン。でもメガネをよく取ります。得意技はメガネを握りつぶす事。結構いいキャラなのになぜ影が薄いんだろう？だれかファンになってあげてください。てかよく考えたら奈絵美だけヒロイン視点の話を書いていない・・・よく狼と共同作業をする割には恋の進展が一番期待できない可哀相な子。でも慎とよく一緒にしているのでそれでがんばってください！え？何をだつて？・・・さあ？・・・いけ！キメ台詞！

「・・・ありがとう」

鈴木慎 すずきしん

高校二年生

主人公の助言役、ニューハーフ美少年の慎くんだよ！こいつも濃いキャラの割りに空気ですね。いまいち活躍の場が無いからか？しかしコイツ意外とくさい台詞をよく言っているんだけどな。奈絵美の恋の応援をする理由は、彼女の目が本気で恋する乙女だったから・

・・・だそうです。キメ台詞は。

「・・・素直な自分を出さない子に、なびく男なんて・・・カスばかりだぜ？」

骸骨 ガイコッ

悪魔

悪魔とかを登場させる時、普通は美形キャラなのに何でコイツだけリアル骨なの？なんて聞かないでね。俺的にそのほうが面白そうだと思うただけなんだ。そしてエセ大阪弁と時々英語、もちろんウケ狙いさ！こいつは笑いを取るために生まれたキャラなんだ！・・・でも、結構人気ある。なぜだ？・・・キメ台詞どうぞ。

「何ゆつとんねん！正真正銘の骸骨や！見てみい！腕がこんなに細いわけあるかい！」

北崎淳 きたざあつし

高校二年生

ギャグ要員のリーダー。初期ではモテモテのキャラだったが、最近変わった。スリース連合の副長官の仕事に目覚めてぶっちゃけよからぬ事をたくらんでいる。狼の事は前世からの戦友だと思いつくほど親友意識を持っている。ちなみに俊敏性と握力がヤバイ。ではキメ台詞。

「そういえば悲鳴を聞くと興奮するんだって？嫌がつている女の子を見ると喜んじゃうんだって？・・・だったらてめえら自分の体でそれだけの攻撃受けてみるよ？嫌がる自分でも見て喜ん

でろカスが」

黒羽音恩 くろはねお

高校二年生

ナンパ師と言われる程軽い男。もちろんギャグ要員のエース。雫の事をマジで好きなようだが、もちろん羊に先を越されました。でも意外と男らしい部分もあるようで？キメ台詞！

「誰にだって叶わぬ恋ってやつはあるんだよ・・・不条理だが、それは認めるしかないだろ？・・・でもよ、そうやって叶わぬ恋の上にできている幸せな恋ってさ、本当、幸せなものなんだよ。それを手に入れられるよう、がんばるしかないんじゃないのか？」

古道修介 いこうじゅうけい

高校二年生

元祖変態キャラ。ギャグ要員の重鎮。皆からは「しゅう」と呼ばれている。カメラを放さないメガネキャラ。こいつほど最強の変体キャラはいないと思う。んでキメ台詞。

「ねえ、ところでさ、君は泣いて助けを求めた女の子を・・・助けたかい？」

大和将騎 おおわしょうき

高校二年生

この物語の中で一番の常識人。ギャグ要員の中の突っ込み担当。そして苦勞人。しかし案の定影が薄い。やはり登場回数が少ないからか？性格は基本ヘタレだが、根は優しいので他人の気持ちを裏切る事を絶対にしない強い男の子。それではキメ台詞！

「僕は、そんな雫さんの言葉を裏切りたくない！」

守多栗鼠^{かみだりす}

中学三年生

狼の妹。学校にもろくに行かない放浪癖のある不良。しかしイベントがあると必ず現れる。基本兄である狼の事を馬鹿にしてはいるが、やはり兄として大切に思っているようだ。その代わりいつも仕事優先の両親の事は大嫌いである。要弧たちとも仲が良く程よい位置にいるキャラクター。よし、キメ台詞を！

「今戦えるあんたがいなくなったら、誰が雫を守るのよ！」

赤城辰来^{あかしろ たつき}

中学三年生

要弧の弟。容姿は姉と違って女の子っぽい、しかし断じてオカマではない。姉の事はからかいつつも尊敬していて大切にしている。実は、なんて言わなくてもわかると思うが、美緒の事が好き。彼の恋路が上手く行くよう祈っててください。これがキメ台詞。

「・・・僕は美緒ちゃんみたいな明るくてよくしゃべる

子は好きだけどな」

おか
みお
岡美緒

中学三年生

臣の妹。姉を素直に尊敬している。一見常識人にも見えるが意外とはっちゃけている。しかし鋭い観察眼と冷静な態度ができるハイスペックな妹さん。それじゃあキメ台詞！

「甘ったれないくださいよ！臣姉もあなたのために体を張ったんです！その頑張りを無駄にするのなら！私は一生あなたを許しませんから！！」

以上がレギヤラーメンバーだ！
いいか？覚えましたか？こいつらちよくちよく現れるから覚えててよ！

タイプ47「ここに一つ思い出そう」(後書き)

まだ聞きたい事があればコメントしてね。

タイプ48「プロジェクト・プロフェッショナルX」(前書き)

今回ほど何を書いているのかよくわからなくなったお話は無いと思う。

タイプ48「プロジェクト・プロフェッショナルX」

とある日曜日の夜。

「狼、テレビ見ようぜ!」

羊が唐突にそんな事を言った。

「はあ? オレには日曜映画劇場の『ルーキーっす』を見るという使命が」

「実は雫とか要弧、後影薄野郎がテレビに出るのよ。見ても損はないと思うよ?」

「・・・ふむ。で? 何の番組?」

「プロジェクト・プロフェッショナルX」^{エックス}若き挑戦者たち」

説明しよう。プロジェクト・プロフェッショナルX」^{エックス}若き挑戦者たち、とは、未成年の子供達の未知への挑戦と苦悩をカメラ班が取材し、彼らの勇姿を追いかけるドキュメンタリー番組である。ナビゲーターは津久野柴アキヒサ。平均視聴率は20%と、正統派ノンフィクション番組としてだけでなく、現状の子供社会に鋭いメスを加える内容が、老若男女問わず多大な人気を獲得している番組である。

「・・・へえ・・・あいつらなんかしてたっけ?」

「・・・まあ・・・みればわかるよ」

二人はソファーに座って、目の前の液晶テレビに目を向けた。そして、番組はオープニングに入る。

「プロジェクト・プロフェッショナルX!!」

今、高校生達の間では、ある組織が急増していた。

それは、学園のアイドルを愛する組織……『ファンクラブ』

芸能人ではなく、同じ学生の子を愛し尊敬する学生が増えたのはなぜだろうか？

そして、広大な空間を身近なものにしたインターネット、そこにも……ファンクラブはある。

今宵は、全国的に名高い『ヨーコス・ファンクラブズ』

女性のための、女性による、女性同士の愛を守る『百合教会』

天使の生まれ変わりと言われている夜珠さんを愛し敬う『夜珠様賛美倶楽部』

そして、今劇的な急成長を遂げる期待の新星『スリーS連合』

この、四大学生組織の代表の彼らと、アイドルたちの生活を、カメラは追います。

真つ暗な背景に、スポットライトが一つ、舞台にいる男の真上で光っていた。

「今宵もこの番組のお供をしますのは、この私アキヒサであります。さて、テレビの向こう側にいるアイドルには、直接会うチャンスや、話をするチャンスもございません。それでも、多くの人がテレビの向こう側にいるアイドルを日夜追いかけています。しかし、今日、こんにち

テレビの向こう側ではない、アイドルを追いかける若者が急増してきました。まずはこのVTRをご覧ください」

場面はうつて変わって、昼間の学校。

『この学校では、日本で展開されている四大学生組織のトップが多く通っています。そして、本日はその組織の内、『百合教会』の幹部学生とコンタクトを取り、取材に来ました。待ち合わせは校門前、丁度、今待ち合わせの時間になりました。』

「こんにちは」

『時間通りに来てくれた彼女、『美浦園花^{みづらそのか}さんは、百合教会の幹部学生です。今日は彼女に、ファンクラブとは何かを、教えてもらいます』

『場所は教室。今は普通の学生としての時間を過ごしています。それでは、彼女にいくつか質問をしてみましょう』

Q 百合教会とは、具体的にどんな組織なのか？

「そうですね。女の子の聖地を守る活動っていうのがセオリーなんですけど、基本は創作活動ですね。同人誌の作成や販売をしています。それと、気に入ったカップリングの観察もよくしています。後は基本、女の子アイドルの追っかけとマネージメントです」

Q 規模はどれくらい？

「本部教会はもちろんここですけど、支部教会なら多い所で一県に20は組織されてます。前回の教会総合の時の情報では、協会員人数2万人突破だそうです」

Q メンバーは全員女の子？

「いいえ？現に百合教会の会長は男性ですよ。我々は男女問わず、

女性の愛を守るため、神のご加護を受けた者ですから」

Q 教会って事は宗教関係？

「違いますよ。ただ女性の聖地という事で、神聖な場なので神秘的にただで、神を崇めているわけではありません」

Q 他の四大学生組織について知っている事は？

「『スリース連合』は最近で来たばかりですけど、私達百合教会を吸収したりして、怪物的に急成長してますね。トップの人間は長官って言っらしいですけど・・・その詳細は不明です。その代わり、表立って活躍しているのは、副長官の北崎氏ですね。ヨーコス・ファンクラブズは、言わずと知れた要弧グループのファンクラブですよ。ただ、組織がとてつもなく大きいって事は分かるんですけど・・・詳細は一切不明ですね。一応代表取締役は・・・確か・・・鈴木・慎・・・そう！鈴木氏のはずですよ！・・・夜珠様賛美倶楽部も、比較的新しい組織ですね。その上所属メンバーはホトンド後輩たち・・・あ、でも最近部長が代わったらしいですよ・・・確か、夜珠ちゃんの信頼できる先輩って事で・・・将騎君だったかな。大和氏がその倶楽部の長おさですよ」

『質問もこれぐらいにして、いよいよ放課後です。園花さんは早速教会の本部室へ入るようです』

「・・・すみません。本部の場所は知られたくないので、カメラはご遠慮願います」

『残念ながら、カメラでの撮影を断られました。本部の場所は明かしたくないようです』

美術室

「ここはたまに使わせてもらっ、言わば臨時室です。ほら、あそこ

にアイドルがいます」

『いよいよ彼らのアイデンティティーである、アイドルの登場です』

『グラウンドでテニスをしている、一際輝く女の子・・・ボーイツシユな感じが爽やかな美少女、彼女の名前はヨーコ、本人からの承諾は得ていないので仮名とします。そしてテニスの相手は、長髪のこれまた光り輝く美少女、名前はオミ<仮。彼女達のテニスの試合に、園花さんは食い入って見つめています』

Q GLについて、どう思いますか。

「・・・私は、男の子にもときめくので、自分が当人になる事はまづ無いのですが・・・女の子同士という禁断の恋に・・・すごく、憧れみたいなものがあるんです」

Q 同性愛差別については？

「・・・理解できないのは、仕方の無いことかもしれません。自分でも、おかしいと思う時があります・・・でも、そんな内気な思いを、この百合教会は・・・仲間がいるという心強いものをくれたんです。だから・・・私は、自分に正直で自由になろうって、思っただんです」

Q BLはどう思いますか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・うん、まあ」

映像がスタジオに戻る。

「このように・・・今学生の間では、身近なアイドルを敬愛するファンクラブが増えています。特に大きい組織では、アイドルは複数いるようです。では、本日のゲストを紹介します。一人目は、ヨーズ・ファンクラブズ代表取締役の鈴木慎さんです」

「どうも、鈴木慎です」

「いやあ、てつきり男性かと思ったら美しいお嬢さんですね」

「ありがとうございます」

「それでは、まず・・・あなたの組織について説明していただけますか？」

「そうですね・・・ヨーコグループという学園アイドルのグループがいるんですけど、そのうちの一人でも好きになれば入れる組織でしてね、特別表立った行動は取っていないんですよ。ただ彼女達について仲間で話し合ったりするぐらいなんですよ。何せ平穩を愛する彼女達の前で下手に騒げませんから」

「意外ですね。しかし日本最大の学生組織のはずですが？」

「組織が大きいつていっても、人数が多いってだけです。ただ中にはイベントを自主開催したりストーカー行為を働いたり・・・まあ、そういった人間を捕まえたりするメンバーもいますね。正直肥大しすぎた組織なので、上の人間も手も足もでないと云ったところですよ」

「そうですか、学生のうちからそういった組織の局面に向かい合っているとは・・・苦労してますね」

「でも、我々のモットーは憧れを語る、ですから。どちらかというと巨大コミュニティを作ろうつてというのが当初の目的だったんですけどね・・・」

「そうだったのですか・・・では、次のゲストをお呼びします。VTRでも名前が出た、スリース連合、副長官の北崎淳くんです」

「どうも、北崎敦です」

「では早速、あなたの組織についての説明を」

「はい。我々も、本来ならヨーコズ・クラブズに吸収されているはずの組織でした。それは、我々のアイドルというのが、ヨーコグループの一人だからです。しかし、正体は明かせませんが、我が連合の長官は別途で組織を立ち上げる決断を下したのです。そして、我々が行う事は・・・アイドルを・・・幸せにする事・・・」

「・・・なるほど。しかし、幸せにするというのは難しいのでは？」
「もちろん、容易な事ではありません。それ故、連合員には厳しい規律を守らせています。それを守った上で・・・我々を幸せにくれたアイドルに・・・夢を・・・贈りたいのです」
「・・・素晴らしい・・・この私^{わたし}津久野柴アキヒサ、久々に感銘を受けました・・・夢をくれたアイドルに・・・恩返し・・・今までもらう事ばかりを考えていた人には考えさせられるメッセージですね・・・今の学生社会で、なぜ学園アイドルのファンクラブが増しているのか・・・何となく判った気がします。最近の若者の考えが・・・今まではもらう事ばかり考えていた時代から・・・恩返しする時代になったという事ですネ・・・」

「ファンクラブ・・・純粹に人を敬愛する気持ちで募った仲間の集合体。彼らは・・・何を思っただけからも、アイドルのために身をつくすのか・・・その答えを今日、判った気がします・・・それでは皆様・・・本日はここまで」

テロップとエンディングテーマ

「・・・」
「・・・」

狼と羊は無言でテレビを見つめることしかできなかった。

タイプ48「プロジェクト・プロフェッショナルX」(後書き)

ドキュメンタリーって結構おもしろいよね？

タイプ49「男達の聖戦」(前書き)

さあて！長編に入りますぞ！

タイプ49「男達の聖戦」

要弧が憎い……。

オレよりもあんな男を選んだあいつが憎い。

要弧がオレの物になってくれないのなら……。

誰のものにもしないために、消すしかない。

一人の男が、そんな事を思いながら、夜闇に紛れて不敵に笑っていた。

その側にはあのいつの日か羊をさらった男、雷門がいた。

「おい、雷門。襲ったカップルは今どうしている？」

場所は港の倉庫。どうもここにはろくでもない連中が良く集まる傾向にある。

「男の方は拷問で遊ばれている、女の方でも遊ぼうと思ったんだが……一人のバカが、奴等が怖いなどとぼざいて逃がしやがった……仕方が無いからそいつも拷問を受けてもらっている」

「はっ！女遊びをトラウマにさせるくらい恐ろしい奴らだったのか？」

「さあな……。ただ、そう言った真面目気取りは嫌いだ……。うざっつてえ」

「その通り……。そういう奴らは一度地獄を見せないと大人しくならないからな……」

二人はそんな話をしながら、夜空を見上げた。

夜空はよどんでいて、月が見えなかった。

「おつはよー！」

羊が元氣にあいさつをする。

「相変わらず無駄に元氣だなおい」

狼が眠そうな顔で文句を言いながら教室の席に着く。

そこである事に気付いた・・・要弧たちがいないことに。

「なんだ？あのうるさいあいづらがいないなんて珍しい。明日雪でも降るか？」

「・・・なんか・・・嫌な予感がする」

羊が珍しくそんな事を言うので、狼も若干怪訝な顔をした。

「・・・狼くん・・・ちよつといいかい」

今度は慎が、ワケありな様子で狼に話しかけた。

「どうした？何かあったか？」

「・・・この張り紙・・・見なかったの？」

そう言つて慎が差し出した一枚の紙。そこには、写真と文章が載っていた。

『要弧、並びにその仲間の女子に告ぐ。報復はもうすぐだ。楽しみにしてる』

そして、その側の写真には、無残にも暴行を加えられた男子の写真があった。

「・・・この制服・・・うちの学校だな」

「そんな当たり前なこと言わないでよ・・・今彼女達は校長室に呼ばれてる。羊ちゃんもすぐに行つてよ」

「なにそれ？・・・まるで私達が悪者みたいね」

「その通りなんじゃない？」

羊の台詞の後、誰かがそう言った。

羊が驚いて言つた本人をみると、クラスの女子だった。

「ちょっと可愛くて人気があるからって、男をたぶらかしたからこんな事になったのよ」

「・・・なにそれ？たぶらかした覚えなんか無いけど？」

「・・・まあ、あなたは関係ないでしょうけど・・・要弧は、こちら辺の族とよくいざこざを起こしていたのよ。そいつらがとうとう怒ったのよ。お陰でこっちはいい迷惑なんだから」

「悪いのは族でしょ？要弧は悪くない」

「要因作りも立派な犯罪だと思うけど？」

「そ、そんなのひどい！」

「そこまでだ。羊、さっさと校長室に行け」

狼が不機嫌な声を上げて羊に注意した。羊は意外な表情をして、仕方がないという素振りで教室を出て行った。

「・・・なんでそんな事を言ったんだ？」

狼はふと、その女子に聞いた。

「と、当然よ。こっちの身が危ないんだから！ああ言えば転校してくれるでしょ？」

「・・・その顔でよく嘘がつけるぜ。お前らが要弧ラブなのは知ってるんだぞ？」

狼がそう言つと、クラス全員の顔に緊張が走った。

「・・・狼、あなただつて知っているでしょ？羊は前回、族に捕まつて危ない目に合ったのよ？・・・また、そんな事があつたら・・・私達だつて、悲しいのよ」

「・・・だから・・・守るために突き放すのか？」

狼がそう言つと、その女子は、胸をはって言った。

「そうよ・・・要弧たちは私達のアイドル・・・誰にも壊させないし不幸になんてさせない」

「……どつから沸いてくるのかね？その精神は……。でもよ
お……。これって、逃げれるレベルか？」

「……。わからない。でも、これは立派な傷害事件よ。警察が黙っ
ているわけ無いわよ」

「こんなことを平気でする族が簡単に警察に捕まると思うか？どつ
ちにしろ前回オレが潰した族の奴らは留置になっただけですぐに出
てきた……。つまり逮捕なんてありえない。やつらは残念な事に未
成年だからな、ケンカで済まされるんだよ」

「そんな……。それって、女子相手でも……。ただのケンカ？」

「若さゆえの過ち、なんて台詞でハイさようなら、だろうな」

「……。最低！」

「そんなもんだよ。お前らが知らないだけで、未成年の不良たちは
もつとえげつない事をしているもんさ、でも法はそれをあえて許す
事になっている。どう？理不尽だろ？」

「じゃあどうすればいいのよ！」

「戦うしかないんじゃない？」

狼はあっさりとそう言った。

「何も相手は大人でもなけりや化け物でも無い。オレ達と同じ人間
だぞ？……。そして子供だ……。ケンカで済まされるってんなら、
おおいにケンカしてやろうじゃないの」

「……。でも」

「逃げるのは簡単だよな？でも悪い奴らはそういう風に逃げる奴を
追いかけたくなるんだよ。どうせケンカだ。なら、やり返すっての
も、ありだろ。大人がなんと言おうと、間違っている奴を許したま
んまっつてのは、それは間違いのままだ。それをそのまま見過ごせば、
見過ごしたあんた達も、悪い奴だぞ？」

狼の長い台詞の後、しばらく静寂が流れた。

そして、狼はそれを見てから、立ち上がり、教室を出ようとした。

「今日は早退するよ。先生にも伝えといてくれ」
それだけを言つて、狼は教室を出た。

「待つてよ」

すぐに、誰かが狼の後についてきた。慎だ。

「行き成り過ぎない？敵陣に乗り込むなんてさ？」

「ケンカにやる時とかそんなもん無いだろ？」

「・・・他に仲間呼ぶ？」

「・・・あのバカ三人衆を呼ぶか」

狼がふとそう言つと、誰かが丁度階段から降りてきて、二人の前に立った。

「オレをお呼びかな？」

北崎だった。

「タイミングよく現れるな？」

「張り紙を見れば、君が行動を起こす事ぐらい、予期できるって」
北崎は笑つてそう言つた。

「おつと、俺も忘れないでくれよ？」

今度は音恩が、横の教室から出てきた。

「待つていたんだよ。別に今その会話が聞こえたから慌てたわけじゃないぞ？全然予想だにしなかったわけじゃないからな。オレは覚えてここに来る事を知つてだな」

「もういい。戦つてくれるだけで十分だ」

音恩の言い訳を遮断して、狼は先に行こうとした。

「おいおい、僕を忘れちゃ困るよ？」

今度はしゅうが、外の窓から入ってきた。

「ちよつと待て、どうやって来たんだ？ここ3階だろ？」

「気にする事じゃない・・・それよりも・・・行き先はわかってい

るのか？」

「・・・なあに、そこら辺フラ付いてりゃあ、招待してくれるさ」
狼はそう言って、不敵な笑みを浮かべた。

五人がそれぞれ、下駄箱で靴をはき、外へ出た。

「さて・・・死刑執行といきますか」

その頃、要弧たちは校長室での話を終えて、教室に戻っていた。

「転校をして欲しい・・・か」

奈絵美が校長直々に言われた台詞を復唱していた。

「・・・たく、バカな社会のゴミどもの所為で遠くに行く羽目になるとはな」

要弧がうんざりした表情でそう言った。

「・・・仕方ない・・・ボコそう・・・」

臣がめっっちゃ普通に怖い事を言った。

「無茶言わないの！ 一歩間違えれば人生破滅よ・・・過剰防衛とかして」

殺す気ですか？

「てか私の場合、思いっきり巻き込まれているような？ 転校しなくてもよくない？」

羊が虚しい独り言を心の中で呟いた。

「・・・狼も、転校してくんないかな？」

要弧がボソツと、羊にだけ聞こえる声で言った。

「・・・まあ、その必要が無いように、もうあいつも動いているだろうな」

羊の読み通り、すでに狼達は動き出していたのであった。

タイプ49「男達の聖戦」(後書き)

こんな時になんだけど、最終回をするか続編にするかアンケートをとってもいい？

いや、まあ、作者が聞くことじゃないのはわかってるけど、ちょっとした興味さ。

なげえなげえと友人から言われているので。

そんな訳で！アンケート！回答よろしく！

タイプ50「男達の聖戦Ⅱ」（前書き）

だ、だいぶ話が重くなってきた・・・。

残念ながらシリアスストーリーぶっちぎりで進み中だ、よって形ながらだが12禁とさせていただく。

ちよっとお子様には悲惨すぎる気がするから。

大丈夫！これ乗り越えたらギャグの嵐だぜ！

タイプ50「男達の聖戦Ⅱ」

平日の繁華街。

時刻は11時とあつて、人通りの多くは大人たちである。

その中に、学校をサボったらしき女子高校生たちの姿があつた。

「うーん！ やっぱりかつたるい学校なんて行くもんじゃないわ」

「ところでどう？ 初めて学校をサボった感想は？」

「え？・・・うん、結構・・・いいかも」

三人の女子はそんな会話をしながら、学校をから開放された自由を満喫していた。

「で、でも・・・確か、私達の学校の生徒ばかりが狙われた拉致事件が起きているらしいけど・・・大丈夫かな？」

「だーいじょうぶだって！ 太陽も昇っている明るい時間に、そんなさらわれたりするわけ無いわよ」

「・・・そ、そうだよね」

「それよりも！ 早くユニクロスイこ！ かわいい服があるのよ！」

三人ははしゃぎながら、今日という日を楽しもうと、心を踊らせていた。

「なあ・・・あの女ども・・・要弧のいる学校と同じやつらだろ？」

「お！ かわいい顔ばかりじゃん！・・・前の女は誰かが逃がしちまったからな・・・三人もいれば、遊べるし、要弧たちへのいい宣伝になるな」

ロクでもない者達が、よからぬ考えを口にしながら、三人を見ていた。

「なあ北崎・・・こんな繁華街にいたら警察に補導されるぞ？オレ達は今制服なんだから」

「まあまあ、正直ここしか不良のいそうな所は無いんだから。補導されそうになったら走ればいいじゃないか」

五人は特に緊張感も持たず、よもや不良集団相手に戦いに行くのが嘘のような空気であった。

「でもさあ・・・さすがに無計画にも程があるんじゃない？」

慎がそう言つと、しゅうがすかさず答えた。

「こちらがわかつている事は、残念ながら何も無い。でも、こちら辺でブラブラする様な不良なら、何か知っているはずだろ？まずは情報をつかまねばな！」

「簡単に言ってくれるぜ。正直こんな明るい時間に不良が通りに現れる確立は低い気がするな、ゲーセンとか溜まり場ならわかるんだが」

狼がそんな事を言っている時、音恩が遠くで何かを見つけたようだ。
「おお！チラリと一瞬だけ遠くに見えたのは、一年生の水島さんか？大人しくて茶道部期待の新人といわれている彼女が学校をサボるなんて、意外と大胆な子だなあ」

「お前そのスキルは確実に変態である証拠だぞ？」

狼の罵倒を聞き流しながら、音恩はついでに気になる事を口走った。

「しかし、お店ではなく裏路地に入って行ったのは何でだ？」

一瞬、五人全員が嫌な予感を察知した。

そして、何も言わず、五人は一気にダッシュをして、音恩の指した方向へ向かった。

「大人しく付いてこれば悪いようにはしねえからさ・・・静かにしてろよ？」

「お・・・お願いです・・・見逃して・・・ください・・・」

あの女子高生三人組、うち一人の今日初めてサボリをした水島さん、
たちが、よからぬ連中に囲まれて、暗い裏路地にいた。

「いいじゃん？どうせ学校サボってここに来たって事はさあ、俺ら
と遊びたいんだろ？」

「ち、違うわよ！」

「ツチ・・・うるさい女だな・・・でも、そんな奴を無理やりヤル
のも嫌いじゃないけどな」

「け！警察呼ぶわよ！」

「今呼べる状態か？呼べるもんなら呼んで見ろよ？」

五人の不良たちがあざけ笑いながら、三人の持ち物を奪った。

「携帯はここで壊させてもらっぜ、下手に警察呼ばれたらじつくり
楽しめないからな」

「なんだつたら服だつてここに置いて行っっていいんだぞ？ぎやはは
は！」

男の下品な笑いが、三人を更に恐怖の顔に染めていった。

「んじゃ、連れて行くとしますか」

「オツケ、社会のグズ共五名様をあの世へお送り差し上げますよ」

音恩の陽気な台詞と共に、狼と北崎が二人の不良を殴り飛ばし、気
絶させた。

「ああ？んだよ？だれ？」

「そんな事どうでもいいでしょ？」

慎が笑顔でスキンヘッドの男の前に立って言った。

「女か、丁度いい。この男達を黙らせたらお前も連れていっ！」
喋り途中の男のあごに、慎は強烈なアッパーをくらわせた。思いつ
きり舌をかんだ男は、口から血を流しながら、後ろに仰け反る。

「息くせえよお前」

慎はそれだけを言っつて、ニツコリと笑った。

「やべえ！あいつらだ！雷門のチームを潰した奴ら！」

「はっ！だったら逃げるしかねえな！こいつで！」

残りの男二人は急にナイフを懐から取り出し、女子高生の一人に目掛けて刺してきた。

「きゃあああ！」

背中を斜めに切りつけられた。

「みよちゃん！！」

水島が走って駆け寄ろうとした時、もう一人の男に捕まえられた。

「てめえは人質だよ！」

「オイお前ら！女一人が重症でこっちには人質がいるんだから・・・追いかけるなよ？」

二人は慣れた様子で、水島をさらい、裏路地の奥へ消えていった。

「くそ！あいつら！」

「みよ！！しっかりしてよ！！どうしよう・・・血が、血が止まないよ！！」

もう一人の女子高生が泣き叫びながらパニックになっている。

「慎、お前その子の応急処置をしてくれ。止血のための布なら俺らの制服を使えばいい」

狼はそう言ってワイシャツを脱いで、慎に渡した。

「携帯で救急車はオレが呼ぼう」

北崎が既に番号を打ち込んで、コールを待っていた。

「オレは大人を呼んでくる。ついでに近くの薬局屋によって医学知識のあるやつも引つ張って来る」

しゅうが言うや否や走り去って行った。

「じゃあ、俺らはどうする？」

音恩が狼にそう言っていると、狼は当然のように答えた。

「ここで転がっている奴らから情報を聞き出すに決まってるだろ？後、水島を助ける必要がある。警察や救急車が来たら・・・慎、お前が対応してくれ」

「え？僕が残らなくてももう一人女の子がいるでしょ？」

「彼女に落ち着いて状況を説明する余裕があるように見えるか？それに、こいつらが吐いた情報をお前に伝えるから、警察にもすぐ伝えてくれ・・・俺らはその間に・・・せめて水島だけでも助ける」
狼の説明の後、一人の不良がうめき声を上げた。

「・・・え？・・・し！死んでるのかそいつ！？」

目の前で倒れている女子を見て、そいつは青ざめたようだ。しかも、もう一人の女子も血まみれで泣いており、慎が手を真つ赤にしなから、制服を背中傷に押さえつけて、止血していた。

「う、嘘だろ・・・あいつら・・・殺しまで平気ですか？・・・」

「恐怖でおののくそいつに、音恩が近づいて、襟首をつかみ持ち上げた。」

「さあて？立派な罪である傷害罪を犯した君はぶっちゃけ犯罪者だ、正直今ここで貴様を冗談抜きで殺したってオレには正当防衛で間逃れる事ができる。死を選ぶか罪を償うか、どっちを選ぶ？」

「ま、待ってくれ！お、オレは女遊びができるからって聞いたから付いて行ってただけで！ま、まさか殺しをするような連中だとは思ってなかったんだよ！い、今までの女に対して犯してきた罪は償うけど、こ、この事件には無関係だ！」

「んな事聞いてんじゃねえよ！！てめえのいい訳なんざ聞いている暇もねえ！罪を償いたいんならさっさと貴様らの陣地でも基地でもなんでもいいから言え！！」

音恩がその男を後ろの壁に思いつきり叩きつけてそう言った。

「あ、あいつらが向かった場所は・・・多分、港倉庫の3番倉庫だが・・・もしかすると、あんたらに襲撃される事を危惧すれば・・・いくらでも変更をと思う・・・変更先までは、さすがの俺もわかんねえ・・・本当だ！信じてくれ！」

「・・・くそ！・・・前回結構暴れたから・・・場所を代える可

能性が高いと見たほうがいいな・・・これで、振り出しか」

音恩がおもむろに手を放し、その男は地面に倒れこんだ。

「おい！薬剤師のおっさんだが、応急処置をしてくれるそうだ」

しゅうが意外と早く戻ってきてくれた。そして、その隣に、メガネをかけた中年男性が息を切らして走ってきた。

「彼女がナイフで切られた子だね？」

慎が真つ赤な手になりながらも止血している様子を見て、男性は息を飲んだ。

「彼女の容体は・・・呼吸も・・・しているな。脈は・・・多少弱くなってる・・・多量出血の恐れがある。今はシヨックで気を失っているようだ・・・とにかく、私には包帯を巻く程度の知識しかないが、せめて完璧な止血だけでもしよう。君達二人に、協力して欲しいんだが」

男性は慎ともう一人の女子にそう言った。

「わかりました。お手伝いします」

「・・・わ、私も、できるだけだけの事はする」

「ありがとう。なに、きつと助かるから・・・気をしっかり持つんだぞ」

三人は早速応急処置にかかった。

「薬剤師さん、応急処置をしながらでもいいから、傷の程度と本人の容体、それとどんな処置をしたか教えて欲しいんだが」

北崎が冷静に早口で重要事項を聞いた。そして帰ってきた返答を一字一句間違えず伝える。

「警察への連絡もしておいた。暴走族の名前はわからないが、雷門って奴が関与しているのは間違いないと伝えたら、すぐに非常線を張ってくれたよ」

しゅうが言い終わった後、遠くの方でパトカーのサイレンの音がした。

「やばいな・・・警察に『保護』という名の『拘束』をくらう前に、行こう」

狼はそう言つて、音恩たちと共に去ろうとした時、情報を喋った男が口を開いた。

「ま、待つてくれ……オレが、あいつらの居場所を突き止める」

男が、声を震わせながら、そんな事を言った。

「……信用ならんな、大人しく警察に捕まつてろ」

「……頼む……償いをさせてくれ……携帯で、仲間に無事に逃げれたと言つて……あいつらの居場所を聞き出すから……頼む」

「おい！てめえ裏切るのかよ！」

もう一人の不良がそうわめいた。だが、男はそれにこう答えた。

「……オレは、ヘッドである辻風^{つじかぜ}さんに……どうしようもないクズだった時、仲間として迎え入れてくれた……あの頃の辻風さんはよお……ケンカ三昧ではあつたし、女遊びも派手だったけどよお……今みたいに……狂いはじめたのは……確かに、あの要弧の所為だ……だから、行き過ぎた犯罪にも手を染め始めたのを、オレは黙つてみてたけどよお……殺しだけは……何があつても許せねえよ……だから……頼む」

「……そんな正義ぶつた気持ちがあつたんなら、もうちょいマシな道歩めたんじゃないかねえのか？」

「……母子家庭で……唯一の兄弟である妹を……殺されたら……こつちだつてマシな道を歩む気持ちなんて……起きるわけねえだろ」

「……」

場の空気が濁った時、とうとうパトカーが裏路地の前に止まり、警察官が下りて来た。

「おい、狼……さつさへ行こうぜ」しゅうがそう急かした。

「頼む……オレが……変な行動を起こしたら……殺してもいいから」

「・・・よし、てめえを今から利用する」

狼はそう言つて、その男に肩を貸した。

「おい！そいつは事実口くでもない奴だ！今更償いとかしたって仕切れねえんだよ！」

「・・・だから、利用するつて言つてるだろ」

音恩の反対を押し切り、狼はその男を連れ出す。

「お、おい！君達！」

だが、既に警察は路地に入つてきていた。

「・・・行け狼、ここはオレが止める」

北崎が立ち止まつて警官と対峙すると、その前に、警官はある二人に抑えられていた。

あの、不良の二人だった。

「お・・・お前ら」

北崎が驚いていると、その不良たちは嫌そうな顔で言った。

「てめえのためじゃねえよ・・・あいつの、そつすけ聡介のためだよ」

「・・・いひいな・・・ひよひよは・・・おりえりやりりや」

「お前は舌を嚙んで喋れないんだから黙つてろよ！」

北崎はその二人に笑顔を向けてから、走り去ろうとした、そして、その去り際に、

「お前らの事は、殺そうつて思うぐらいな価値だったけど・・・フルボッコで許してやるよ」

時刻は、とうとうお昼過ぎとなった。

タイプ51「男達の聖戦三」(前書き)

非常にドロドロして参りました。

でもせめて！ここで馬鹿みたいにテンションあげてなきや！！負け
だと思っ！！

タイプ51「男達の聖戦三」

人が寄り付かなくなった廃工場、そこに、水島をさらった奴らと、その他の不良たちが揃っていた。

「意外だな、天下無敵にも思えるヘッド達が狼とかいう奴が来るって言っただけでここまで移動するなんて・・・そんなに相手は強いのか？」

外で見張りをしていた男達が会話を始めた。

「さあな、とりあえず俺らが集団で襲い掛かっても勝てなかった相手だし・・・けっ、今思い出しても胸糞悪い。女を襲ったからどうのこうの・・・どうでもいいじゃねえか、んなこたあよお」

・・・ふん、下劣な奴だな・・・このチームも、そんなクソどもが集まり始めて、前みたいな気分のいいもんじゃなくなってきたな・・・

「別に逃げたわけじゃねえよ」

そこで声を出したのが、あの雷門だった。

「ら、雷門さん・・・こちらは異常ありませんよ」

「そうか。それと、お前は辻風が負け犬みたいな事を言ったが・・・それは違うぞ」

後から入ってきた風情で偉そうにすんなよ？辻風さんが負け犬なワケねえだろ？

この男は心の中でそんな悪態を付きながらも、口では謝っておいた。「俺らの標的は要弧であってあの男共じゃない。それに、どうやら無駄に正義気取りなやつらみたいだし、あえて俺らを見つけることもできずに、精々悔しがらせばそれでいい。そして、あいつらが守りたい要弧たちを傷つければ、それでいいんだよ」

・・・胸糞悪い

男はそれだけを思つて、見張りの続きをした。

「おい！聡介のやつ逃げて来れたみたいだぜ！あいつらのうち一人を隙を見て脚にナイフ突き立てたんだとよ！あいつも根性あるじゃねえか！」

中でそんな事を言う声が聞こえた。

「・・・ケンカに出刃もつてくんや・・・殴り合つてこそそのもんだろうがよ・・・」

そんな声も、一切出さないまま、男はただ、突っ立っているだけだった。

「うまくいきました。やつらは山中にある廃工場にいます」

「・・・そうか」

狼はそう言つて、早速向かう事にした。

「おい狼、コイツどうするんだよ？誰が警察に届けるんだ？」

「・・・そいつはもう用無しだ、自首するなり帰るなり好きにしろ」

「ばっ！なに言つてんだよ！正気かお前！」

音恩がとうとう我慢できなくなつて狼に掴みかかった。

「狼！お前さつきからコイツに対して甘くないか！？こいつは最低な奴なんだよ！女で遊んで、それで傷つけているようなゲスヤロウなんだよ！妹が死んだとか言ってるけどコイツに同情する価値はねえ！むしろこんな最悪な兄を持った妹さんに同情するってんならわかるけどな！」

「・・・こいつの名前は聡介・・・多分、名字は『は原田』だろ？」

「はあ？」

音恩が怪訝な顔を見ると、聡介は驚いたように、そうだ、と言つた。

「・・・オレの妹の栗鼠が・・・コイツの妹と友達だった・・・不良少女同士だな」

聡介の驚いた顔と、北崎達の沈黙で、場は静かになった。

人っ子一人いない河原の近くで、五人は突っ立っていた。

「・・・栗鼠が、ある晩・・・泣いて帰つて来た時がある。そ

れでどうしたと聞いたら、久しぶりに会おうとした友達が、死んでいた、と答えた。しかも、酷い事に犯された後で・・・犯人は、都内ナンバーワン進学校のエリート生徒だ・・・そいつが言う事には、夜中ほつき歩いている不良女だったから、やつてもかまわないと思っただけ・・・。とんだ偏見だな、頭いいくせに狂ってるんじゃないかと思ったよ」

「本当に不良少女だったんなら・・・別によかったさ」

聡介はふと、そんな事を言った。

「・・・あいつは、働きっぱなしの母さんに、甘えたかったんだよ。だから、不良ぶって、かまってもらいたがっていた・・・。ただ、ただそれだけなんだよ！あんたらが親にかまってももらえるように！あいつもかまってもらいたかったんだよ！・・・なのに・・・そのエリートは、妹を不良だと決め付けて襲った。泣き喚く妹を無理やり犯して！拳句に殺しやがった！決め付けただけで！・・・あいつは・・・本当は・・・不良でも、なんでも・・・なかったんだよ・・・」

涙声で、聡介は自分の無念を叫んでいた。

「・・・それでも、許されるわけねえだろ！てめえは結局その狂ったエリート野郎と同じ事してんじゃねえか！」

「その後母さんも死んだように抜け殻になって！自殺したんだよ！・・・オレだって・・・狂うしかなかったんだよ！最低な奴になって！本当の不良になって！表面だけ良いぶっている奴らを不幸に陥れたいんだよ！」

音恩と聡介が言い合っていると、狼がふいに静かにしろと言った。

「・・・お前が狂いたくなるのもわかる。栗鼠だって、オレの両親が仕事ばかりだから、あいつなりの反抗の仕方、不良ぶっているんだ・・・だから、お前の妹を壊された悔いはよくわかる・・・でもな、だからと言ってお前がした事を誰も許しはしねえよ・・・でも・・・もう目が覚めたってんなら・・・やるべきことやって来い」

また、静かな時間が流れる。

そして、聡介はおもむろに立ち上がり、わかったとだけ言った。

「・・・自分がやってきたことに、今は後悔している・・・だから警察に行くさ・・・だが、今の俺たちのチーム『火行火』^{びあんか}の奴らが、そんな大人しい連中だと思うなよ・・・ヘッドがおかしくなつてから、マジでキチガイな奴らが集まってきたからな・・・死んでも恨むなよ・・・」

よろよと歩く聡介に、しゅうが声をかけた。

「一応聞くけど・・・なんであんたの所のヘッドさんは要弧にキレてるわけ？教えてくれるかい？」

「ああ・・・そりゃあ・・・うちのヘッドは精神病もちでな・・・まあ、要は狂っているんだが・・・要弧がその気もないくせに優しい顔したもんだから・・・きれいに言えば恋煩いみたいなもんだ・・・本当、そんなもんだつたらいいのにな・・・」

「はあ？何だよそれ？キチガイがそろいもそろって迷惑極まりないな」

音恩の台詞に、聡介はそうだなとだけ言って、歩いて去っていった。
「・・・なあ狼、お前・・・さっきの話で相手にかわいそうとかそんな情を」

「持つわけねえだろ？相手は男なんだから手を抜くつもりはない」
音恩は如何わしい表情で狼を見たが、結局何も言わなかった。

「っていうか、お前こそあいつらに対して敵意むき出しすぎだろ？」
「・・・当たり前だろ・・・弱い人間で遊ぶ奴をオレは・・・絶対に許さない」

狼が音恩からよからぬ感情を感じて、すこし戸惑う顔をした。

だが、そんな気持ちを抱えつつも、一同は敵陣に向かって歩みを進めた。

「……水島さんが・捕まっただの？」

慎から携帯で呼び出された雫と臣と奈絵美は、今病室前で慎からの説明を受けていた。

「みよちゃんは一命を取り留めたから大丈夫だけど……水島さんはいまだ安否わからずつてところだね」

「そ！それよりも！そんな危険な奴らのところに狼たちは向かって
いるのか！」

奈絵美が焦った様子でそう聞くと、慎はうなずいた。

「……すぐに……連れ戻さなきゃ」

臣が走って出て行くこうとするのを、慎が止める。

「君たちが行くほうがもっと無茶だろ！狼たちの事なら大丈夫だ・

・だから、大人しく待っていなきゃ」

「そんな事してる場合じゃないわよ！」

雫が苛立った感情を表に出して叫んだ。

「あいつらが危ないんなら……首輪をつけてでも連れ戻さなきゃ、
その女の子よりひどい目にあうかもしれないのよ！」

「でも、敵の場所もわからないじゃあ、追うことはできない。それどころか、君たちを守るために彼らは動いているのに、その君たちが下手に動いて敵に捕まったらどうするの？」

「だからって！」

すでに雫は我慢できないようで、慎が手を掴んでいなければ走り去ろうとする勢いである。

「だからこそ……悪いけど、君たちに集まってもらった理由は・
・こうするためなんだ」

慎がふとそんなことを言うと、奈絵美と臣と雫が、相次いで気を失ったように、その場に倒れた。そして寝息を立てている。

「お手数をかけましたね骸骨さん」

「お安い御用や」

姿を消していた骸骨がふと現れた。

「それよりも……要弧ちゃんと羊ちゃんは？」

「ちなみに、慎は骸骨の存在は知っていますが、羊と狼が同一人物だということは知りません」

慎のその台詞の後、骸骨は非常に言いにくそうなようで、少し黙っていた。

「……どうしました？」

「……要弧ちゃんと羊ちゃんは……今ものすごい速さで狼はんの後追つとるで。たぶんバイクやろな……」

「……は？」

慎が青ざめた表情になる。

「すぐに私たちも追いましょー！」

「警察の事情聴取は？」

「そんなもの知りませんよ！」

慎が近くの看護婦に三人を頼むと、走って外に出た。

「ていうか要弧ちゃんは場所知っているんですか!？」

「まあ相手が要弧と因縁あるみたいやし……そうになると、要弧自身にも身に覚えがあるんとちゃう？」

「ああもー！ややこしくなる前に止めなきゃ！何か乗り物あります？」

「オレが人型になってバイクばくるさかい、ちょっと待ってて」

骸骨はそう言って一瞬で人型になり、たまたまそこにあつたバイクを見つける。

「メットは慎はんが付けとき、オレは平気やから」

「それよりも、キーもないのにどうするんですか？」

「平気へーき、こん時のための魔術やろ？」

骸骨は軽く詠唱をすると、バイクはエンジン音を上げて、いつでも動けるようになっていた。

「じゃあ行くでー！」

「そ、それよりも気になるんですけど……瞬間移動はできないん

ですか？」

「できるで？ただし、固定の場所だけやけどな。せやから俺ら二人で移動しても、二人はバイクで走っているんさかい、捕まえるんは無理やで？」

「じゃ、じゃあ、このバイクごと移動すれば？」

「残念、昔のオレならできたんやけど、今は低俗の召還死神。魔力が足らんねん」

「そ、それじゃあ・・・今言つのは場違いかもしれませんが・・・なんで、そこまでして狼君たちに手を貸すんですか？」

「・・・時間が惜しいわ。出るで」

骸骨は勢いよくアクセルを踏んでバイクを飛ばす。

「・・・ただの、召還された死神だからですか？」

「・・・ちやう・・・もつと、はるか昔の約束を・・・守るためや」

二人の会話はそこでできて、バイクは要弧たちの後を追うようにして、スピードをどんどん上げていった。

時刻は、気づけば二時過ぎであつた。

タイプ51「男達の聖戦Ⅲ」(後書き)

伏線回収中なのに新たな伏線張るってどうよ？

タイプ52「男達の聖戦四」(前書き)

どんどんふざけられないくらいに重い話になってきた。
それでもこの物語は、止める事が出来ない。

タイプ52「男達の聖戦四」

火行火が隠れている山中への道を、二人乗りをしたバイクが一台疾走している。

要弧と羊だ。要弧がバイクの運転免許を持っていたようだ。

二人がこの行動に走ったのは、数分前にかかってきた慎の電話がきっかけだった。

病院に来てほしい、という話を聞いた要弧が、血相を変えてバイクの用意をしたのである。

そこで、偶然一緒だった羊が、無理やりついてきたのだ。

「・・・羊、この前みたいに捕まるかもしれないんだぞ？」

「・・・まあ、前はどうかになったし、今回もどうかになるでしょう」

「どうにもならない相手だから言ってるんだけど？」

「・・・ねえ要弧・・・あいては、一体何なの？・・・キチガイな熱狂ファン？」

「・・・元・・・親友よ」

よかった・・・元彼って言うのかと思ってたぜ・・・

心では軽口をたたけた羊だが、要弧の真剣な顔の手前、何も言えなかった。

「・・・それで？・・・狼も知らない要弧の親友って・・・どんな人？」

「知ってるわよ・・・狼も・・・」

羊は、一瞬凍りついた。

なぜなら、全くもって自分には、今の敵に見覚えがなかったからだ。

「・・・じ、狼も・・・知ってるって？」

「そうだよ・・・恐ろしい凶悪な暴走族を作ったのも・・・自分

の部下に、あえて女を襲わせるのも……そして、羊が見たつて言うあの雷門に命令をしているのも……私を、不器用ながらも、愛してくれているのも……間違いなく、彼女……いや、今は完璧男だったわね……」

「……え？」

羊は一瞬だけ、遙か昔の記憶が甦った感覚に陥った。
そう……それは、要弧と狼と、もう一人の幼馴染……。

「……まさか……あいつ?……」

羊の声は、バイクの激しい轟き音にかき消された。

一方、同じ方向に進むバイクが、要弧たちを追いかけていた……。

そう、慎と骸骨だ。

二人は急いで彼女たちに追いつこうとしていたが、慎は、相変わらず先程の質問を続けていた。

「……遙か昔の約束って……なんです？」

「忘れたわ」

骸骨が、いつものお惚け調子で返した。

「……遙か昔だなんて言ってますけど……案外、僕らが小学生の時の話なんじゃないんですか？」

「何の話や？」

「……今まで、僕は狼くんと要弧ちゃんの傍にずっといました。でも……それは友達として……本当にずっと傍にいてる人間のことは、幼馴染って言ってますよ……その点、狼くんと要弧ちゃんとは本当にいい幼馴染です……そう……僕の記憶が正しければ……もう一人……彼らの幼馴染がいたはずなんです」

「あ、赤信号や」

「……知ってます？……僕は、彼らと出会うまでは、友達が誰もいない孤独な人間だったんですよ？……他人に対して会話をするのが苦手だった僕は、自分を変えるという方法を考えました……それが僕のニューハーフの始まりですよ……最初は男の癖に、っていういじめが本当に多かった……まあ小学校高学年の話ですし、変な目で見られるのは当然ですね……結局、僕は自分を変えられるどころか……危うく見失うところでしたよ……って！！骸骨さん信号！！？」

「キイイイイイイイイイ！！！！！！」

赤信号を無視してぶつちぎった骸骨、その所為であわや衝突事故が起きそうであった。

「な……何考えているんですか！？」

「お前こそ何考えているんや？べらべら余計なことゆーて」

「余計ですか……これでも、最後は狼くん達が助けてくれたという感動のオチがあっただんですけどねえ？」

「そんなもん聞かんでもわかるわ！そんな話今必要ないやろ？」

「・・・まあ・・・僕の話はいらなないとしても・・・ここからが大切な話なんです」

そう言つて慎は、ゆっくりと話した。

「狼くんが言つてたんですよ・・・僕に似た幼馴染がいるから・・・つてね」

バイクは相変わらず颯爽と走っている。

だが、うるさいバイクと対照的に、二人の間には沈黙が流れていた。そして、それを破つたのは骸骨だった。

「・・・それ、要弧ちゃんやろ？」

「この期に及んでおふざけですか？いい加減にしましょうね？」

「しゃーないやん、オレやて知らんねん。だれやそのもう一人の幼馴染て？」

「まだ言い逃れるつもりですか？」

「だーかーら！オレは何も知らん！」

「知らないはありますがありません。あなたは悪魔なんでしょう？だったらその得意の魔法で調べればすぐでしょう？」

「何を調べたらええのかわからへ〜ん」

「こはやかわ はるかぜ小早川春風・・・あなたの本当の主は、この人だ」

急に、骸骨はバイクを止めた。

そして、バイクのエンジンを止める。すると、驚くぐらい静かな空間が現れた。

「・・・何で知ってんねん？」

骸骨が、まるで、犯罪の証拠を叩きつけられた犯人のように、疲弊

した声を上げる。

「……中学へ上がったときです。僕はどうしても……狼くん達の幼馴染という女の子に会ってみたかった。僕と同じというその言葉の意味を……軽く受け止めていましたからね。きっと、それこそ要弧ちゃんと同じ感じの、男装が趣味みたいな女の子だ……そう思っていました……でも、彼らの幼稚園を調べて、小学校低学年の時の担任だった先生にまで話を聞きに行つて……知つてしまったんです……」

まだ青空がいつぱいの空を見上げながら、骸骨は静かに聞いていた。そして、慎は最も重要な部分を、話した。

「狼くん、要弧ちゃん、そして春風ちゃん……彼らは当時、誰もが認める仲良し三人組であり……また、誰もが、異質だと感じた三人組だった……春風ちゃんは……性同一性障害の子供……つまり、本気で自分を男だと思っている女の子だったんです」

慎のそのセリフのあと、骸骨は、ゆつくりと間をおいてから、聞いた。

「……なぜ、春風がオレの主^{あるじ}つてわかつたん？」

「勘ですかね？……少なくとも、あなたが特殊な思いで、彼らの近くにいたのはわかりましたけどね。さあ……行きましょうか……彼女の元へ」

「いや……もう、春風は男や」

「ほう？……そうですか、でも……もう、取り返しはつきません。あなたがどんな約束を三人と交わしたのか、当時の三人はどうだったのか、なぜ春風ちゃんは狂っているのか。何一つわからない僕にも、わかることがあります……それは、このままそいつらを

見過ごせねえってことだ」

慎がそう言つと、骸骨も頷いて、またエンジンをかけた。

そして、その間にももう・・・狼たちは、火行火にアジトに着いていたのであった。

タイプ52「男達の聖戦四」(後書き)

すみません。

本当にすみません。

次回、重要な告知をさせていただきます。

タイプ53「男達の聖戦五」(前書き)

真っ黒クロクロ。マジでおつも重^{おも}く。

あのギャグの軽快ハツラツ学園コメディーのタイプパニックはいずこへ？

あ、重大発表はあとがきで。

タイプ53「男達の聖戦五」

「・・・皆がない？・・・」

例のごとく置いてけぼりを食らった将騎くん。今は学校で大人しく授業を受けています。

「にしても・・・いきなり自習になったし・・・すごいやな予感がする・・・」

もちろん、先生方は大怪我を負った生徒や、未だ拉致されている生徒。そして暴走族を追いかけていった数人の生徒などなど、問題が起きまくっているのです。その対処に走っています。

「・・・ふむ・・・心配だ」

将騎はうすうす狼たちの身に何かが起こったのを感じていた。

だが・・・あえて待っていることにした。

追いかけても、自分が役に立たないのは目に見えている。

だから・・・帰りを待ってあげよう。

帰る場所が、仲間のいる場所がある事を、証明し続けてあげよう。

その場にいてあげるだけで、誰かを助けることも、可能なのだから。

「・・・早く帰ってきてよね」

さびれた工場。周りにはうつそうと木々が生い茂り。工場の排水の嫌な臭いが立ち込めていた。元は何の工場だったのかもわからないくらいに、荒れ果てたその場所は、まさに世間の嫌われ者たちがアジトとして使うには申し分ない場所であった。

「いよいよ着いたな・・・そして嫌ほど多い見張りの数・・・10人くらいいるぞ？」

北崎が茂みに身を隠しながら、同じく身を隠している狼達にそう言った。

「めんどくせーな！正々堂々正面突破！これがシンプルでカッコいい！だろ！？」

「音恩、少し黙ろうか？」

北崎がさすがにふざけている場合じゃないだろ、と言わんばかりの視線を音恩に送った。

「そういえばさあ・・・警察にここの場所教えなくていいのか？ぶっちゃけここ知ってるのオレらだけだぞ？多分」

しゅうはそんな事を言っているが、狼は反応もせず、ただジッと工場を見ていた。

「・・・狼？」

「・・・あ？・・・え？すまん、なんだ？」

「いや、だからさあ、敵の親玉と君との間には何があったのか聞いてんだよ」

「そうそう、さっきから上の空で話を聞いてなかったのか？」

「ああ、悪かった。なに、何があったとか、そういうものじゃなくて、あいつとは・・・って！・・・何のことだよ」

狼が危うくしゅうと北崎の連係プレーで重要な事を喋りそうになったが、のどまで出たそのセリフを抑えてしまった。

「バレバレだって、君が何かを隠していることくらい・・・何せ音恩へのツツコミはほとんど僕がやったからね。いつもは君の鋭いツツコミがあるはずなんだが」

「漫才の調子で相手の心読むなよ・・・」

狼がまた上の空になって、工場を見つめた。

「・・・なんだよ？話せないことか？」

音恩が声色を変えて狼に質問をした。どうやら隠し事をされているのが気に入らないらしい。

「・・・話してもいいが・・・確証がない。オレの思い過ごしの可能性がある。それでもいいなら話すぜ？」

「辻風が実は知り合いでしたってやつか？」

しゅうがひょうきんな調子でそう言ったが、狼からの否定がなかった。

「・・・は？マジで？」

「いや、だから・・・偶然、昔の幼馴染も・・・あだ名を辻風と名乗っていた奴がいたからさ・・・」

狼の上の空な状態から、辛そうな表情と、なぜか、どこか懐かしむ雰囲気漂っていた。

「・・・まさか・・・な」

「はっ！知り合いだとしても、やってる事が酷過ぎやしないか？狼、お前は人を見る目がねえよ。うん、絶対そうだ」

しゅうがそんなふざけた調子でケタケタ笑っていたら、ふと、音恩が真剣な顔で狼を睨んでいた。

「・・・なんだ？・・・別に手を抜くつもりはないから安心しろよ？」

「いや・・・今のお前のその様子じゃあ・・・手を抜きまくりそうだぜ」

「何だそりゃ？オレは別に相手が誰だろうと気にしねえって」

「・・・なあ・・・狼、お前ってつくづく変な奴だよな」

音恩がいきなり変な発言をした。

その突拍子もない質問に、全員が固まる。

「・・・は？」

ようやく狼が口をあけて、その一語を発するが、音恩は気にせず話を続けた。

「お前はあれだよな、要弧たちとかを友達としてしか見てないよな？」

「何だよ急に？はい？意味がわからない」

「いやいや、お前は確かに近年まれに見る鈍感やローなのは確かだ。そこに嘘偽りはないと思う・・・でも、やっぱおかしいんだよ。」

「何がおかしいって・・・あんな美女達に囲まれて、なぜお前は誰にも惚れないんだ？」

「・・・は？」

相変わらず、情けない返答しか出来ない狼。そして質問の意味を理解できない北崎達。

だが、音恩だけは、何かを掴んでいたようだ。

「相手の好意に気づかないのは、鈍感だから仕方がないとしても・・・彼女たちをお前は一度でも恋愛対象としてみたのか？いや、見てたらもう付き合っているはずだよな・・・それとも一つ。かつて一度だけ見たお前と要弧のデート。ぶっちゃけ傍から見たら結構いい感じに出来ていたあのデートだがよぉ・・・お前はろくに要弧を見れなかったし、初デートでドキドキというより・・・愛情のない、ただ、美少女と一緒にいて恥ずかしい・・・そんな感情しか見れなかった気がする・・・あの後すぐにもとの二人に戻ったから、特に気にしなかったけど・・・結局お前らは交際を始めたわけじゃねえしさ・・・お前、要するに彼女たちはただの『親友』であって、『女の子』としては眼中にないんじゃないのか？」

「それがどうしたよ」

狼が何となく音恩の言いたい事を理解し始めて、そして怒気のこもった返事をした。

「なんだよ音恩、今更そんな事聞いてどうするんだよ？」

「知りたいから聞いたんだよ。狼は日ごろから女がほしいとか言ってたが、それなのに彼女たちを一切見ていなかった。親友だからど

うとか、それを加味した上でも・・・おかし過ぎやしないか？オレは一時期お前がゲイなのでは？と真剣に心配していたぜ」

「で？オレは結局、要弧たちを親友としてみていた。それで終わらる？さつさと侵入方法を考えようぜ？」

「待てよ。まだ重要な話をしてねえよ。ハッキリ言うが、要弧たちを恋愛対象としてみなかったお前は、結構異常だと思う。面と向かって告白とまでは行かずとも、心のどこかでは愛しているところがあつたかもしれない・・・だが、お前にはそれが全くないと見受けられる」

「だから！それがどうしたんだよ！今はどうでもいいだろうがよ！」

「お前・・・まだ誰かに未練があるんだろ？」

音恩のそのセリフに、しゅうも北崎も怪訝な表情を浮かべる。だが、狼だけは、目を見開いて、驚嘆していた。

「さつきから上の空だったが、お前は何かを見ていたんだろ？そしてここに来ていきなりクールダウン。ボコボコ二するぜ、死刑執行だ、とかの威勢はどこいったよ？」

「・・・うるせえよ」

「どう見たって・・・今のお前、過去の何かにとらわれているぞ？・・・オレは相手の心理状態を見透かせる。だからお前の今の気持ちが無となくわかった」

「うるせえよ」

「全てはオレの推論だが・・・お前は、好きな奴を未だ引きずっているから・・・要弧たちも好きになれなかったんだろ？」

「うるせえ！ヘタな推理は今はいらん！・・・もう黙ってるよ」

「お、おい、さつきから声が大きすぎるぞ・・・気づかれたらどうするんだよ？」

しゅうが青い顔をして言うが、二人の会話の火は消せなかった。

「狼・・・オレは・・・ただチャラチャラしているだけの奴とか、服装がだらしないとか・・・その程度の不良には、何の思いも抱いてねえが・・・実害を出すような・・・マジでカス以下の存在の不良は・・・殺したいほど憎い・・・その理由がわかるか？」

「・・・なんだよ？」

「そいつらは人を傷つけるしか脳のないカスばかりだからだ。他人の痛みも知らず、自分が楽しんで、楽しもうとして、自分の欲望を満たす事しか考えてねえ・・・そんな奴らが、ウザくて仕方ないんだよ。必死に毎日を生きている人間を、そいつらはあざ笑っているように・・・それならまだしも・・・迷惑すらかけてくる・・・真面目に生きている奴を馬鹿にして！不真面目な自分達をカツコいいとか思っているやがる！・・・そんな奴らが、オレと同じ人間でただで、吐きそうなくらい、気分がクソ悪いんだよ。いいか狼・・・オレは、許されるんなら・・・あの工場にいる腐った奴らを殺してえ・・・それぐらいキレているんだよ。確かに、オレ自身へ、何かしたわけではないが・・・やつらがヘラヘラと笑っていることが、一番許せねえんだよ。いいか・・・お前の知り合いなんかは知らねえけど・・・辻風ってやろうは・・・絶対、生易しい殺し方はしてやんねえ」

音恩から発する禍々しいオーラに、狼は何かを悟ったように、哀れな視線を、音恩に送った。

「・・・音恩・・・今のお前の目は・・・その腐った奴らと同じ色をしてるぞ」

音恩は、無表情になった瞬間、右拳で狼を殴り飛ばした。

すると、茂みから飛び出してしまう狼。そのまま、見張りの一人と衝突した。

「バカ！なにかんがえ」

「狼、久々にオレはキレちまったよ。責任とって殴られてくれ」

北崎が止めるのも聞かず。音恩は開襟シャツを脱いで、柄シャツになった。

「冗談じゃねえ・・・音恩、お前は本当のクズ野郎とそうでない奴の境目もわかんねえのか？だったらオレが教えてやるよ。お前みたいな甘ちゃんには温室育ちだからな、野生とは何かを教えてやるよ」
狼も平然と立ち上がる。衝突した見張りは気絶していた。

そして、他の見張りも、ばつちりと二人の姿を見つけた。

しかし、二人は見張りになど目を向けず、お互いに睨みあっていた。
「ば・・・馬鹿だろ？・・・まあいい！さっさとリンチにしてやるぜ！」

「殴られるのはそっちのほうだよバーカ！」

早速、見張りたちがわらわらと襲ってきた・・・が。

「「邪魔だよ」」

狼と音恩は容赦ない拳を、襲ってきた奴らの顔面なりあごなりに叩き込んだ。

そして、二人は一気に走り出し、二人でケンカを始めた。

襲い掛かった奴らは、立つ力もなく、地面に突っ伏し、眠ることになった。

タイプ53「男達の聖戦五」(後書き)

最終回、迎えさせます。

偉そうに続けるなんて言って申し訳ございませんでした。
軽率な行動が売りの私ですが、さすがに考えもなしに動きすぎました。本当にすみません。

というわけで、クライマックスまで、どうぞ激走を見届けていただけるとうれしいです。

タイプ54「男達の聖戦六」(前書き)

どうせ最終章に入ったんだし、じっくりゆっくりいかせてもらいます。

更新が遅いのはいつもの事です。

タイプ54「男達の聖戦六」

人ごみが多い中華街を、一人の男がフラフラと歩いていた。

聡介だ。

彼は警察署へ自首しに行こうと、その重い足取りで歩いていた。よくよく考えてもみれば、復讐したいあのエリート野郎は少年院に
いるはずだ。

経歴にだって傷はついたし、身内からも、世間からも白い目で見られるはずだ。

エリートから一転、ホームレスよりも下の人間になった。

復讐したい相手は・・・もう、消えたも同然じゃないか・・・。

それでも、ついさっきまでのオレは、そんな簡単な事にも気づかなかった。

後悔、そればかりが今、この胸にある。

もし、母親が生きていたら、情けなさ過ぎて、会わせる顔なんてなかっただろう。

いや・・・もしかすると、もっとオレ自身がしっかりしていれば・・・
・母親の自殺くらいは止められたのかもしれない。

結局、オレは一体何をしていたんだか・・・。

被害者だったはずが、今では警察のお世話になる身じゃないか。

もはや言い訳どころか、自分が狂った理由すらわからなくなってきた。

聡介はそう思つて、ふと、死にたい衝動に駆られた。
今死ねば、楽になれるのだろうか？

幼い頃離婚した父の今の居場所など知らない。母がオレと妹を女手一つで育ててきた。

今だって、一応孤児院の施設に登録はしていたが、不良グループに入ってから、一度もその施設に行っていない。

その上、不良グループからも抜けるのだから、事実上今の聡介に、居場所はない。

「・・・卑怯だが・・・オレはもう・・・疲れたよ」

そんな言葉が不意に出て、警察署に向かつていた足は、急遽方向を変え、自分の死に場所を求めて歩き出したのだった。

海の崖から落ちる。

呆然とだが、聡介はそんな自殺方法を思いついた。

多分楽だし、ヘタに死体を残したって、誰も引き取りやしない。

だったら、海に身投げでもすれば、運良く事が運べば、死んだ事すら気づかれずにすむ。

ただ、オレをワザと逃がしてくれた仲間や、狼の正しい選択をしろという言葉を見捨てる事だけが、唯一の心残りだ。

だが・・・もう、楽になったっていいだろう。

妹も母親も守れなかったうえに、散々他人を傷つけてきたオレは、裁判にでもなりやあ多くの罪状が下される。

日本じゃあ死刑にはなれなくても、海外じゃあじじいになるまで出られないだろう。

まさに、矛盾だな。海外じゃあ死刑宣告同然なのに、日本じゃあほんの数年だ。

こんな罰程度じゃあ、被害者達も納得がいかなさう。

それは、オレが良くわかっている。

死んだ報告が出来ないのは残念だが、二度と被害者達の目の前には

現れないんだから、それはそれで多少なりとも罪滅ぼしになるはずだ。

そう思うと、心が軽くなった聡介は、何か吹っ切れた思いで、足取りが軽くなった気がした。

死に行くというのに、心が軽い。

そんな奇妙な感じを受け入れつつ、聡介は歩いていた。

「どーも！お久しぶりです！」

急に、声をかけられた。

聡介はその少女の声に身に覚えがなかったが、もしかして被害者なのかとも思い、恐る恐る振り返った。

「覚えてます？ユリナの親友栗鼠ですよ！」

ラフに着こなした制服。どこからどう見ても不良少女なのに、本当の不良でない事が、聡介にはわかった。そして、彼女が妹の友人である事も思い出した。

「ああ・・・栗鼠ちゃんか・・・どーも」

葬式で会った以来だ。本気で泣きじゃくっていた彼女を、聡介は良く覚えていた。

「丁度良かった！さ！こつち来て下さい！」

栗鼠は強引に聡介の腕を掴み、引っ張った。

「え？ちよ、ま、まって」

聡介は引っ張られるまま、栗鼠の後を歩くしかなかった。

連れて来られた場所は、近所の墓地だった。
ここが、どんな墓地か、聡介は良く知っている。

母と妹の墓のある、墓地だからだ。

「お兄さん全くここに来てないでしょ？お花や掃除、線香とか全部私がしたんですからね！」

「あ、ああ・・・ありがとうございます」

よりにもよって、死ぬ前にお墓参りとは。

そう思った聡介だが、たしかにお墓の手入れは全くしていなかったし、手を合わせる事もなかった。

一軒家を持っているわけでもないのに、もちろん仏壇もない。

今まで二人を忘れた日などなかったというのに、かなり罰当たりな事をしてきたのだと実感した聡介は、栗鼠に促されるまま、線香を焚き、手を合わせえた。

「・・・まだ、不良グループに入っているんですか？」

「・・・いや、もう止めたよ・・・というより、逃げてきただけかな？」

栗鼠はここ一帯の不良グループの情報を知っている、だから、栗鼠のその質問にも、聡介は特に驚かなかった。

「それで？真面目に生きる決心でも？」

「・・・はは、そいつは難しいな」

さすがに自殺の決意をしたなどと言えるわけがないので、あえて言葉を濁した。

「・・・高校は？」

「うーん・・・退学扱いだろうね」

「親戚とかは？」

「いないよ・・・さて、どうするか」

表面上では生きる決意があるように見せる聡介、だが、栗鼠はわかっていたようだ。

「こんな時に海を見に行つて、どうするつもりだったんですか？」

「・・・まあ・・・気分転換？」

「・・・繁華街で、女子高生が一人ナイフで切りつけられて、もう一人は連れ去られた。この事について知っている事は？」

「・・・その女子高生達が襲われている時、いたよ・・・何せ襲った人間の一人だから」

「じゃあ・・・向かうべきは警察署では？」

「・・・だよね・・・でも・・・最後のわがままで、海が見たかったんだよ」

「見るというより泳ぎたかったの間違いでは？」

どこことなく、栗鼠から怒りの感情が見えた。

語気も強くなり、相当怒っている事に気づく。

「・・・」

聡介は、何も言えなかった。

だから、栗鼠が口を開いた。

「今まで逃げていたくせに、また逃げるんですか」

「・・・そうだね。妹と母さんの死という悲しみと、どうしようもない狂気から、今まで散々逃げ回っていたね・・・そして、今回も、己の後悔から逃げようとしてる」

「・・・ユリナを本気で心配していて・・・夜中にもかかわらず、ナイトクラブに突入したお兄さんはどこに行ったんでしょね？」

「・・・本当、どこ行っちゃったんだろうね」

「・・・また、ユリナを泣かすんですか？」

「・・・もう、どうする事も出来ないからね」

「やる事もしていないのに？」

「・・・疲れたんだよ。ユリナが死んで、母さんも死んで、オレが独りぼっちになった時から・・・不良グループに入って、つかの間の休息に寄り掛かって・・・そして、どうする事も出来ない地点まで来た・・・もう・・・楽になったって・・・いいだろ」

憔悴しきった聡介の精神は、もはやどうする事も出来ない場所まできていた。

栗鼠はそれを十分わかった上で、もう一度口を開いた。

「とことんネガティブですね。少しは人生を樂觀視したらどうです

「……最悪な人生を送ってきたのだと思ったのなら、普通幸せになりたいって思いませんか？」

「でもね……ユリナも母さんも、もういないんだ……オレも、消えてもいいだろう」

「あなたは、ユリナやお母さんのために、生まれてきたんですか？」

聡介の耳に、はっと気づかせるセリフが聞こえた。

「あなたの人生は貴方の為のものですよ？自分が幸せになるために人生を歩むのが当然のことなのに……そんな事にも、あなたは気づかないんですか？」

聡介は、やっと何かを掴んだ気がした。

妹だって、母だって、幸せになろうとがんばっていたじゃないか。

誰もが、幸せになろうとしていたじゃないか。

オレが狂っている間、オレは自分の幸せのために動いていたのだろうか。

ただ何となく生きていたのではないか？

今さっきだって、幸せよりも死を選ぼうとしていたじゃないか。

散々多くの人を不幸にしてきた後悔を抱えたまま死ぬなんて、不幸もいいところだ。

今はただの人間だし、むしろ最悪な人間の部類だ。

だが、そんなオレでも、この後悔を、ただの後悔で終わらせない方

法を考えてみればいいじゃないか。

それがきつと、今のオレの、幸せにつながるんじゃないか？

「・・・・・・ははは・・・・・・はははははは！ポジティブな考えに変えた瞬間・・・・・・さっきまでの変な爽快感が消えて・・・・・・なんか、熱くなってきたよ・・・・・・栗鼠ちゃん・・・・・・ありがとう」

「どういたしまして。で？自首するなら同行しましょうか？」

「・・・・・・どうせなら、樂觀主義者として目覚めた記念に・・・・・・不良グループと手を完璧に切ろうと思う。だから・・・・・・ちよつと行ってくる！」

聡介はそう言つて走り出した。

先程までの足の軽さよりも、更に軽くなった足取りで、聡介はグループのアジトに向かった。

そして、栗鼠はお墓の前で、安堵のため息を吐いていた。

タイプ54「男達の聖戦六」(後書き)

あんたらも、悲観する前に樂觀視することを覚えるんだな。

我が偉大な恩師の名言。マジマジ。

小学校教諭にはあるまじきセリフだぜ！

タイプ55「男達の聖戦七」

寂れた工場の前で、狼と音恩は激しく殴り合っていた。

そして、その周りには幾人もの不良たちのうつ伏せになった姿があった。

北崎もしゅうもケンカには参加していたが、一番多く人間を気絶させたのは、間違いなくこの二人である。

どちらも腕や肩や頭から出血があるくせに、殴り合いの応酬は止まる気配を見せない。

「いい加減にしろよお前ら！」

北崎がそう叫びながら、狼の背後を取り抑える。同じ瞬間に、しゅうも音恩の背後に回って抑えた。

「捕まったら奴を先に助け出す！ そんな事もわかんねえのかよ！」

北崎のその主張に、ようやく二人は止まった。

「ゼエ、ハア、ゼエ、ハア……わ、悪かった」

「ゲハツ・・カッ・・ツハア、ハア、ハア・・・水島さんが・・・さきだよな」

音恩が薄ら笑いをして立ち上がった。

「フー、いい汗かいた」

「爽快に決めてんじゃねえ！」

北崎としゅうが半ば本気の拳でイタイ突っ込みを入れた。

「さて、本来の俺たちに戻れたところで。問題は突入方法だ」

「え？何を今更？」

狼の問題提起に、水を差す発言をした北崎。だが、その台詞もあながち間違っているではない。

「確かに・・・見張りと近くにいた不良どもはぶっ飛ばしたし・・・正面から入るしかないよなあ」

「それよりも、ここまで暴れておきながら敵の大將が出てこないってのも疑問だな。案外中で俺たちを迎え撃つ気なんじゃねえの？」

北崎としゅうがわいわい話しているうちに、なにやら扉を開ける音がした。

「おらあ！敵の大將はおそらく女！しかも狼がホの字の相手！きつと要弧と同じくらい！いや！それ以上の美人に違いない！その面を拝ませるやあああ！」

「何言ってんだてめえええええ!!！」

久しぶりとも言える狼のツツコミと共に、工場の正面である扉が開いた。

すると、案の定、中央にさらわれて、今は気絶している水島と、雷門、そして辻風らしき男がいた。

「女！どこ！？超美人な！ゲキマブな！」

音恩がはしぎながら見渡すが、どうやらいるのはこの三人だけのようだ。

「おかしいな……」

狼が率直に疑問の声を出した。

「ああ、お前が目当ての女がないな」

しゅうが久しぶりにボケたが、全員にスルーされた。

「手下全員どうしたんだよ？ 少なくとも30人程はいるはずだろ？」

「ああ．．．彼らには要弧たちを捕まえに行つたよ。エサとも言える君がここに来たんだからね。こつちに向かっている可能性も高いし、直に来るだろう．．．彼女達を連れてね」

雷門が丁寧に説明してくれる。だが、狼はあきらかに雷門は見えてい

なかった。

雷門の隣に立っている、金髪のショートヘアの男。

「・・・辻風・・・それとも、春風と呼ばうか？」

「・・・久しぶりだな・・・ゲスヤロウ」

強烈な威圧感が、その台詞から発せられていた。

北崎やしゅう、音恩までもが恐怖というものを察知し、背中に電気が走った。

だが、狼だけは、ただただ、目の前の辻風に、目を向けていた。

「何年ぶりだろうな？・・・中学校時代には一度要弧の目の前に現れたが・・・お前とは金輪際会いたくなかったからな・・・5年ほどか？」

「・・・そうだな、実質経っちゃいないが・・・5年だな」

「・・・で？・・・会ってみてどうだ？・・・この俺の変わりようを見て、少しは目が覚めたか？」

「・・・むしろ・・・あの頃の思い出がよみがえってきて・・・感傷に浸っちまいそうだよ」

「・・・つくづくウザッたい奴だな」

辻風が顔を曇らせた。

「まあ待ってろ。もうすぐ要弧たちがきたら、楽しいパーティーを開いてやるよ。お前達は観客だ。もつとも、最後には痛いツケが待っているがな・・・特に・・・狼、てめえは殺すから・・・精々数時間、楽しんでくれよ？」

「バカが！二対四で俺らが負けるかよ！」

しゅうが辻風に殴りかかって行く。早いその行動に、誰もが動けなと思った。

「相手の強さを見くびるとは、バカはそっちだな」

雷門がいつの間にかしゅうの前に立っており、そのまましゅうを蹴り上げた。

うめき声と共に仰け反るしゅうを、狼が受け止めた。

「何なら要弧たちが来る前に、お遊びでもしようか？ 雷門を倒せたら、昔の話をしてやるよ。そう・・・狼や要弧と・・・俺の・・・三人の昔話をよお」

辻風が不敵に笑い、雷門に『やりすぎるな』とだけ言った。

「だよ。手を抜いてやる。四人でかかってきな」

雷門が得意気になり、ボクシングのポーズをとった。

「いい情報をやるよ。高校生でありながらプロの世界でも注目されていた怪物ボクサー。しかしケン力が原因で健康体でありながら資格を剥奪された高校生を、聞いた事あるか？」

「ないな・・・でも、それがお前ってことか」

「そう・・・俺はプロにだって恐れられてた・・・しっかりよけねえと、マジで死ぬからな」

雷門はそう言いながら、軽いフットワークですばやく近づいて来た。「あちゃ・・・ボクサー崩れか・・・恐ろしく戦いにくい相手だ。俺が行く」

ふざけながら音恩が不用意に前に一步出る。そこへ、無慈悲なプローが炸裂した。

「バカ！ 音恩！？」

「おい！」

狼たちがあわてて声をかけるが、驚いたことに、音恩はすべて避けた。

「なっ！？」

「貴様のような物語のカマセ犬野郎に誰が負けるかああ！！！」
しゅうが先程やられたのを忘れているようだが、そんな事もお構いなしに音恩は雷門の鼻先に拳を叩き込んだ。

「ぐっ・・・」

少しよろめく雷門。そこを、三人は見逃さなかった。

「やれ！殴れ！リンチ！袋叩きだ！」

「てめえ！さつきはよくも蹴り飛ばしやがったな！てかボクサーの癖にケリ技強すぎなんだよ！つーかその顔についている火傷の後つて何だよ！ボクサーを止めた事とは無関係みたいじゃねえか！それ傷の意味ねえよ！」

「俺よりちよつと美形じゃねえかこのやろおおお！」

音恩、しゅう、北崎と、三人がよくわからない怒りをあらわにして雷門をボコボコにした。

そんな脇役たちを傍に、狼と辻風は対峙してお互いを睨み合っていた。

「……やっぱ変態の前には変態が集うもんなんだな」

「あいつらと一緒にしないでくれ。頼む」

「……まあいい……ケンカはこの数年間、鍛えに鍛えてきた。実際、その雷門にだって俺は勝てる。どうだ？ケンカしようぜ狼」

「……断る。……俺は、お前にしなければならぬ事がある」

「何だ？この期に及んで今更謝る気か？謝りたきゃ勝手にしろよ、分かっているとは思うが許さねえがな」

「……確かに……俺はお前に憎まれている。その憎む理由を理解している……だが、それを加味した上でも……お前は、多すぎるくらいの人たちに……迷惑をかけてきた」

「はっ！それがどうし」

「パンッ！」

狼の平手打ちが、辻風の頬に当たる。

その乾いた音は、北崎たちにも聞こえた。そして、静かだった工場を、また静かにさせた。

「これ以上・・・ハルを苦しませるような事はするな」

狼の声だけが、寂れた工場に聞こえていた。

タイプ55「男達の聖戦七」(後書き)

ごめん。前(後)がきのネタなくなつた。

タイプ56「男達の聖戦八」(前書き)

何か言っべきだろうか？

あ……更新停滞すみませんでした。

タイプ56「男達の聖戦八」

幼稚園の頃まではよかった。

男女の垣根たる言葉とは無縁な集団では、狼も要弧も春風も、三人ぐるみで遊ぶのに特に違和感など無い。

違和感が出始めたのは小学校に入ってからだ。

狼と要弧と春風の三人をはじめて見た人は、特になんとも思わないであろう光景だが。

性別を知っている人から見れば、春風という少女が異常だということを知る。

小学生は己の性を理解しているはずだ。

男なら男らしく、女なら女らしく。まあその境目とやらが細分化されてきた現代だが、春風をヤンチャとか、ちよつと男勝り………なんて、言葉で片付けることはできなかった。

男相手を同性と思い、女子相手を異性と思う。

そんな思考回路を持つ彼女を、医者は直ぐに『同一性障害』と診断した。

要は、女性として性を受けた彼女は、己を男性だと信じて疑っていないのだ。

バイクで疾走を続ける要弧たちを、同じくバイクで追っている骸骨と慎の間では、そんな小早川春風の事情を話していたのである。

「……………同一性障害……………」

慎の口調は重かった。自分と似ているところでも感じたのだろうか。いや、慎は自分が生まれ変わろうとしてやった女装が、いま自分を支えている要素になっている。

言わば、男でいると昔の馴染めなかった孤独の自分に戻りそうなの

で、その恐怖心をぬぐうための女装を慎はしている。

心の傷ゆえの女装をする慎と違い、春風は男装ぐらいでは納得がでないのだ。

簡単に言えば、慎は女装をするが、女性相手に恋をする。

だが、春風は、本来異性に好意を持たなければならぬのだが、生物学上同性の女性にしか、好意がもてないのだ。

無理に男を好きになれと言え、それは同性愛者になれ、と言っているのと同じ事になる。

あくまでも、春風本人にとっては、だが。

「……………オレが春風に召喚された頃は、悪魔ではのーて、死卿宰。しきょうざいつまり、死神のボスみたいなものやったんや。それが……………ちィとメンドーな事になってしもて……………」

死神のような見た目は昔の名残ということだ。

骸骨は力なく笑いながら、それでもスピードは緩ませない。

平日の昼過ぎとはいえ、いまだ働き時。車は少ないので悠々とバイクは進む。

「……………狼くん、要弧ちゃん、そして春風さん……………その三人とあなたと、一体どんな関係があつたんですか？」

「……………三人が呼び出したんや。このオレをな」

「……………春風さんの性を変えるためですか？」

「そないな簡単な話だったらよかつたんやけど……………ちやうねん」
骸骨は、さも懐かしそうな顔をした。

ところ変わって、こちら工場。

崩れボクサーだが何だかなカマセと馬鹿三匹は、狼と辻風のかもし出す雰囲気飲まれていた。

「おい、今猛烈に腹が立つたんだが？」

北崎が変な独り言を言うほかに、音はしない。

その代わり、狼と辻風の両者からは、目に見えないオーラが感じら

れた。

怒りか、悲しみか？後悔か、懺悔か？憎しみか、やるせなさか？
哀れみか、困惑か？リーチか、ツモか？押すか、引くか？

「おい、麻雀が入っているぞ？」

相変わらず北崎が茶々を入れる。

先に動いたのは辻風だ。鬼の形相かと見間違っくらい、怒りに燃えた表情を見せて狼に殴りかかる。

だが、狼には避けられそうに見えた。いや、避けれたはずだろう。なのに、狼は足どころか首すら動かさず、辻風の拳を、右頬で受け止めた。

狼は仰け反る。足も後ろへ何歩か退いたが、まだ立っていた。

「いい加減にしろよ？」

辻風が、一発決めたのにも拘らず、また一段と怒りの沸点を上げた。

「てめーのそんな偽善者としての態度はいらないんだよ。その余裕な態度も！いい人ぶってる演技も！全部うざいんだよ！」

さすがに狼を攻撃されて黙っているわけにはいかない。

そう思い、音恩が辻風に向かって足を踏み出す。

「邪魔だよ？来ないでほしいなあ？」

辻風が音恩を鋭く睨む。その目を、音恩は見たことが無かった。なのに、恐怖が全身を走る。まるで、コイツは危険だということを知っているかのように。

「……………なあ、お前ら女は好きか？」

辻風はふと、そんな変な質問をした。

「ああ！大好きだ！」

蹴られた割には元気に返すしゅう。

「……………」

さすがの即答に辻風は言葉を失ったようだが、気を取り直す。

「別に女たらしとかの話はしてねえぞ？ただ……………人を愛した場合、お前らは男と女、どっちを愛するか聞いてんだよ」

「女」

「女の子」

「めっちゃ可愛い女性」

「お、おれは少女」

三馬鹿かと思いきやこのボクサー、雷門は、非常に危険人物であることが判明した。

三馬鹿がさすがに少し引いている様子を見せながら、狼と辻風もさりげなく距離を置く。

「……………オレも、好きになるのは女の子だ」

辻風はものすごく恥ずかしそうに言った。

確かに、この空気の中で言うと、どうも緊張が出ない。

音恩は今なら辻風に近づけると分かっていたが、あえて待つて話を聞くことにした。

「オレは……………普通に、お前らが女子に対して持つような、好意を持っていただけだ。なのに……………なのに……………オレを理解してくれる奴は、誰もいなかった」

狼が、つらい顔を見せる。辻風は、いつの間にか拳が震えているくらい、強く手を握っていた。

え？モテナイってこと？

え？モテナイゆえの癖み？

モテナイ同士の狼くんが裏切った、だから怒っているんだね
総長、その気持ち。分かります

音恩、しゅう、北崎、雷門。こいつらは揃ってみんな馬鹿だった。いや、事情を知らないものにはそう思っても仕方がないのだろう。よもや、この辻風が、春風本人であり。どのような経緯で性転換をしたのか。

狼ですら理解しきれていないこの状況で、辻風は話を進めた。

「……………お前が嫌いだ、狼。だが……………お前はそれすら理解してないんだろ」

「ハル……………オレはっ、本当に悪かったと思っている！すまん！」

情緒不安定な辻風に、狼は己の誠意を伝えようと土下座をする。

顔を床に向けたとき、赤い血が、一粒落ちた。

口を切ったらしい。だが、狼は一切気にしていなかった。

「……………本当に悪かったって……………思ってる？」

辻風が、ゆらりゆらりと、狼に近づく。

狼は顔を上げて、はつきりと言う。

「ああ……………思ってる」

「……………本気で？」

「ああ……………」

辻風が狼の目の前まで来て、足を止めた。

だが、突っ立った時間は一瞬だけ。辻風はその一瞬の後、狼のあとを蹴り上げた。

「やつは最低だよてめえは！そうやって謝ればいいと思ってるだけなんだろう！」

また、辻風がヒステリックに叫ぶ。

そして、絶えず狼を足蹴りする。

頭部も、背中も、わき腹も……………。まるでサッカーボールの如く蹴り続ける辻風の顔は、冷徹な怒りの形相だった。

「最低なのはてめえなんだ！ぜんぶてめえが悪いんだ！お前が！おまえがああ！」

「てめえ！」

北崎が辻風を蹴り飛ばす。案外軽く吹っ飛んだ辻風は、工場内の床に倒れこむ。

「狼！何で戦わねえんだよ！」

北崎が狼に駆け寄る。後の二人は雷門を抑えていたため来れない。

北崎がゆっくり狼を起こすと、狼は息をするのも辛そうに目を閉じていた。

「し、死んでる」

「死んでねえよ」

狼の弱いツツコミに、北崎は心配の色を見せる。

「なあ、詳しく何があったか言ってくれよ」

「…………それは、ちよつとな」

「いいから言え！吐け！事実を話せ！あの辻風とか言うキチガイは誰で！？お前とどんな接点があったんだよ！」

「元、親友さ」

いつの間にか上体を起こし、顔だけをこちらに向けている辻風が、不敵に笑っていた。

「話してやるよ。どうせ要弧たちが来たらそんな昔話する気は無い。ここで全部話してやる」

辻風がそう言うと、また工場内に静寂が戻った。

そして、骸骨と辻風が、偶然にも同じタイミングで、話を始めた。

昔の纏れに纏れまくった、友と好きな人との関係の線。そして、三人の前に立ちはだかった、性別の壁の…………話を。

タイプ56「男達の聖戦八」(後書き)

ちくしょう！ギャグ成分が足りないぞおおお！！！！！！

タイプ57「男達の聖戦九」（前書き）

狼、要弧、春風達の過去が、今明かされる。

（かっこつけてみました。どう？）

タイプ57「男達の聖戦九」

インターネットの胡散臭いホームページのクリック如きで、オレの悩みが解消するわけが無い。

辻風……………いや、春風は画面を食い入るように見ながら頭の中でそう呟いた。

彼女はまだ児童施設でパソコンを触らせてもらえなかったため、学校のパソコンルームで端末をいじってる。

小学校三年生にしては、しっかりした少女。

そんなイメージを初見では持たされる。

はきはきとした物言いと、どこか堂々と強気な口調。

だが、見た目があまりにも少女らしさが出ていたため、よもや彼女が男気取りをしていたなどは、誰も見抜けないだろう。

いや、男気取りではない、彼女は自分を男だと思っているのだ。

だから、男に対しては同族という親近感があり、女に対しては、異性としての目を向けていた。

簡単に言えば、男子の輪に入るのを当然の事とし、女子とは距離を置いていたのだ。

そんな彼女が、周りから理解された環境にいられたわけがない。

同級生達や教師、他の親からも偏見の目で見られた。

だが、たった一つ運が良かったといえるのは、狼と要弧がいたことだろう。

男勝りで正義感の強い、絵に描いたような活発少女の要弧と、要弧に付いていくだけのおまけ感覚な狼。

だが、この二人の存在が、確実に春風の支えであつたのは聞かずとも分かる。

事実、周りから疎外されている春風にとって、二人は唯一の友であつた。

しかし、依然として現実の解決は進まない。

周りの目がどうこう以前に、そもそも春風は己の身体に多大なコンプレックスを抱いていた。

まあ男と思い込んでいるのに、体が女性のものであれば、言い知れぬ苦痛があるのは明白だ。

特に小学生の頃の同世代同士というのは『一緒』という同調をおこす傾向にある。

要するに他人のおもちゃを欲しがる子供のことである。

しかし、この問題の解決はなんとも困難であった。

想像には難くないことだが、問題の解決には手術、そう『性転換手術』が必要だ。

しかし、体が未発達な小学生がそんな大掛かりな手術を受けられるわけが無い。

医者でなくとも分かることだ。

だから、今はどうすることもできないというのが、現実であった。周りから異形を見るようなモノ珍しい目線を四六時中浴び続ける生活を受けた事があるだろうか？

それも小学生で、だ。

気安く話しかける者も居なければ、大人ですら一步引いた距離をとる。

不幸なことに、春風には親が居なかった。

孤児だ。平和な世では珍しい捨て子。

はつきりとした事は言えないが、この境遇が今の彼女を作った要因の一つだろう。

悲劇のヒロインと呼んでも差支えがない気もする彼女だが、本人はそこまでは悲観していない。

まあその理由が……。

「ここにいたか辻風」

ドアを開けて気軽に声をかけてきたこの男、狼の存在だ。

「おう。要弧はまだ部活？」

「うん。バスケやってる」

唯一の男同士の友……。少なくとも春風はそう思っていた。辻風という呼び名も、春風にとっては親友ゆえの特権だと思っているくらいだ。

まあこの男がどこまで理解しているかは不明だが。

「何見てんの？」

狼が顔を覗かせて画面を見ようとしたが、春風は直ぐに消してしまった。

「勝手に見んな」

「いかがわしいものでも見てたか？」

春風が狼の額にデコピンを決める。可愛い攻撃に見えるが、狼が転げまわっているところを見ると相当痛いようだ。

「これだからスケベオオカミは」

「いいんだよ。母さんが久しぶりに帰ってきた昨日、男はみんな欲望に忠実なオオカミだって」

「お前の母さんは本当に無責任な人だな。子供の前で変なこと教えるなよ」

春風がため息をつく。それを見て、狼は微笑する。

こんなやり取りでも、春風には幸せだと感じさせてくれる重要な日々であった。

普通に接し、言葉を交わし、笑いあう。

普通でない人生だった春風の中で、たった少しの平穏であった。

要弧と狼がいて、自分も居る。

これがいつしか春風は当たり前だと思っていた。

いや、これほど荒んだ不幸をいくつも味わったのだ、もういい加減いいんじゃないのか？

いい加減、幸せを掴んだっていいんじゃないのか？

だが、そんな切望は、残念ながら届かなかった。
そう、ほんの些細なきっかけで。

施設暮らしをしている春風。

基本親が出張中の狼。

そして普通の家の要弧。

この三人が出会ったきっかけは同じ幼稚園というものだ。

ドラマチックでもなければ、運命的でもない。

だが、出会い自体が簡素であっても、その後続く事象が運命的であれば、こんな出会いでもいきなり大きなことに思える。

それと同じで、この三人の仲が壊れたきっかけも、気づかないうちにできていたある溝によるものだった。

「……………好きな人は……………狼だよ」

春風自身にとって、要弧本人から明かされたこの台詞が、どれほど苦しいものなのか……………。

休日の、昼下がりの、しがない公園での、たった二人だけの会話での、この一言。

この一言が、春風の支えを取ってしまった。

要弧自身、精々（せいぜい）親友相手に明かした小さな事実のつもりでも、春風にとっては、唯一の友二人が消えていく未来が見えた。いや、ただの親友として見ていたならまだしも……………。

春風は要弧に好意を抱いていた。

異常かい？そりゃあ女の子同士じゃあね。

でも残念、春風は厳密に言えば女とは定義できない。

複雑だろ？友情の線に絡みついた好意の線は、こんな爆弾すら作ってしまうのさ。

しかも運が悪いのは、春風にとって、世界には要弧と狼しかいないってことだ。

わかるだろ？

友達といえるのがこの二人だけなんだよ。

裏切られた気になった。

春風は完全に、要弧や狼が憎くなった。

理由なんて言わずともなんとなく分かるだろ？

話せるのも、理解し合えたのも、春風にはこの二人しか居なかったんだ。

その二人の間に恋が芽生えたら？

春風は孤独になるだろ？

理解されない世界で、たった一人で生きて行けと？

どうだい？些細だろ？

本当に小さなことで、人間関係はこうまで周りを巻き込むんだよ。何が悪かったかねえ？

要弧が狼を好きになってしまったから？

それともそれを春風に言ってしまったからか？

春風が二人の仲を認めてあげないからか？

そもそも春風が同一性障害だからか？

だったらその要因の一つといえる春風を捨てた親は？

ていうか、春風を無視してきた周りの人間に、一切罪はないと言えるの？

春風に、もっと友達がいれば変わったんじゃないか？

変な暴走族も作らずにすんで、その暴走族に巻き込まれる子も出ずに済んだんじゃないか？

なあ？全部春風が悪いのか？

違っただろ？偏見を持っていた他の人間も悪いだろ？

たった一人に責任をかぶせるなよ？

完璧にそいつが一人で勝手に狂ったのか？

何もしないってのが……要因作りの一つになることだってあるんだぞ？

「なあ？あんたはどう思う？」

タイプ57「男達の聖戦九」（後書き）

なんか長え。もっとスマートにいきてえ。

だが、それと妥協は違うだろ？

（またまたかっこつけてみました）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3472e/>

ザ・タイプパニック

2010年10月8日23時14分発行